深江北町遺跡

第17次調査

埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

神戸市教育委員会

序

神戸市の東端に位置する東灘区の深江地区は、芦屋市と境を接し、古代より海陸の交通の要衝として栄えてきた地域です。

この地で発見された深江北町遺跡の調査から、奈良・平安時代に、都と大陸との交通の要地である北九州とを結ぶ古代のメインロード（山陽道）に設けられたターミナルである駅家（うまや）に関連する遺跡であるということが判ってきました。

当遺跡の中を走る阪神電車の住吉・芦屋間連続立体交差事業による、軌道敷部分の発掘調査を平成23～24年度と28年度に実施し、駅家または地方の役所に関わる貴重な資料が発見されました。木簡等の出土品は平成26年度に神戸市指定文化財に選ばれています。

また、平成23～24年度に調査した部分の報告書は既に刊行されており、調査成果をご覧いただくことができます。

今回の28年度実施の調査報告で阪神電車の立体交差事業にかかわる報告は完了しますが、これらの発掘調査によって得られた資料が市民の方々に広く周知されることを願ってやみません。

平成30年３月

神戸市教育委員会

例　　言

1．本書は神戸市東灘区深江北町１・２丁目地内に所在する深江北町遺跡第17次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は阪神本線住吉・芦屋間連続立体交差事業に伴うもので、神戸市教育委員会が阪神電気鉄道株式会社から委託を受けて現地調査を平成28年度に実施した。また平成28・29年度に出土品の整理作業・科学分析作業と報告書作成・刊行作業を実施した。
また、平成26年３月に刊行した深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書は当該事業（路線基礎幅の約2/3の範囲の調査）に係るものであり、あわせて参照いただきたい。

3．本書の作成は遺構の記述は調査担当者が行い、その他調査に関連するものは谷 正俊・中井（三井）菜加が担当した。Ⅱ章の各調査区出土の木製品・金属製品の解説は中村大介の教示を得て谷が執筆した。また編集は谷・中井が行った。

4．木簡および墨書土器の文字資料については独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所副所長（都城発掘調査部副部長・史料研究室室長兼務）渡辺晃宏氏・主任研究員 馬場 基氏・同 山本 崇氏・同 桑田訓也氏・研究員 山本祥隆氏・同室アソシエイトフェロー藤間温子氏に釈読・解説の作成にあたってご教示・ご指導をいただいた。なお、木簡および墨書土器の写真・赤外線写真は同研究所企画調整部写真室専門職員 中村一郎氏・同室技能補佐員 鎌倉 綾氏に撮影していただいた。

5．本書に掲載した出土木簡・木札の法量は、長さ・幅・厚さ（単位㎜）の順に記述する。また表記方法・記号・型式番号は『木簡研究』第39号木簡学会2017の凡例に従う。

6．遺跡が立地する地形の成立状況を知るために、前回の調査に引き続き増田富士雄氏（同志社大学理工学部）に調査期間中に現地にお越しいただき、現地調査の指針となる有益なご教示を頂戴した。

7．遺物の写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。

8．調査で出土した木製品の樹種同定、大型植物遺体同定の分析業務については、株式会社パレオ・ラボに委託した。本報告書にはその分析結果を掲載している。

9．本書に用いた方位・座標は平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。

10. 調査で出土した遺物および写真・図面等の記録類、分析資料については神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。

11. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/25000地形図「西宮」・神戸市発行の1/2500地形図「深江」「深江北」「青木」「本山」である。

12. 調査にあたって、神戸市住宅都市局、阪神電気鉄道株式会社、大成建設・戸田建設JVのご協力を得た。

目　次

序
例言
目次 …… i ～vi
Ⅰ．はじめに
　1．深江北町遺跡の立地と歴史的環境 ……1
　2．これまでの調査成果 ……5
　3．第17次調査の経緯と経過 ……6
Ⅱ．遺構と遺物
　1．第17次調査地付近の地形 …… 10
　2．第17次調査の検出遺構と出土遺物
　　B74区 …… 11
　　B75-A区 …… 15
　　B75-B区 …… 17
　　B76-A区 …… 19
　　B76-B区 …… 21
　　B77-A区 …… 23
　　B77-B区 …… 25
　　B77-C区 …… 27
　　B78区 …… 29
　　B79区 …… 35
　　B80-A区 …… 39
　　B80-B区 …… 45
　　B81-A区 …… 67
　　B81-B区 …… 71
　　B82-A区 …… 75
　　B82-B区 …… 79
　　B83-A区 …… 83
　　B83-B区 …… 87
　　P2区 …… 91
　　P3区 …… 93
　　P4区 …… 95
　　P5区 …… 97
　　P6区 …… 99
　　P7区 ……105
　　P8区 ……109
Ⅲ．古環境の調査と復元
　1．深江北町第17次調査出土の木製品の樹種同定 ……111
　2．深江北町遺跡第12・17次調査から出土した大型植物遺体 ……127
　　株式会社　パレオ・ラボ
Ⅳ．まとめ ……134

挿図・挿図写真・表目次

fig. 1　深江北町遺跡の位置 …… 1
fig. 2　深江北町遺跡周辺の主な遺跡 …… 4
fig. 3　深江北町遺跡調査一覧(表) …… 5
fig. 4　今回と既往の調査地 …… 6
fig. 5　深江北町遺跡第17次調査範囲 …… 7
fig. 6　人力掘削作業(写真) …… 9
fig. 7　出土遺物水洗作業(写真) …… 9
fig. 8　出土遺物接合作業(写真) …… 9
fig. 9　調査地地形概念図 …… 10
fig. 10　B74区位置図 …… 11
fig. 11　B74区東壁断面図 …… 11
fig. 12　B74区第１遺構面平面図 …… 12
fig. 13　B74区第２遺構面平面図 …… 12
fig. 14　B74区第１遺構面全景（東から・写真） …… 12
fig. 15　B74区第２遺構面全景（東から・写真） …… 13
fig. 16　B74区掘削作業（写真） …… 13
fig. 17　B74区完掘状況（東から・写真） …… 13
fig. 18　B74区出土緑釉陶器 …… 14
fig. 19　B74区出土土器 …… 14
fig. 20　B74区出土管状土錘 …… 14
fig. 21　第12次調査B74区出土墨書木札 …… 14
fig. 22　B75-A区位置図 …… 15
fig. 23　B75-A区東壁断面図 …… 15
fig. 24　B75-A区第１遺構面平面図 …… 16
fig. 25　B75-A区第２遺構面平面図 …… 16
fig. 26　B75-A区出土有溝土錘 …… 16
fig. 27　B75-A区出土土器 …… 16
fig. 28　B75-B区位置図 …… 17
fig. 29　B75-B区東壁断面図 …… 17
fig. 30　B75-B区出土木製品 …… 18
fig. 31　B75-B区出土土器 …… 18
fig. 32　B75-B区第１遺構面平面図 …… 18
fig. 33　B75-B区第２遺構面平面図 …… 18
fig. 34　B76-A区位置図 …… 19
fig. 35　B76-A区東壁断面図 …… 19
fig. 36　B76-A区第１遺構面平面図 …… 20
fig. 37　B76-A区第２遺構面平面図 …… 20
fig. 38　B76-A区出土土器 …… 20
fig. 39　B76-B区位置図 …… 21
fig. 40　B76-B区東壁断面図 …… 21
fig. 41　B76-B区第１遺構面平面図 …… 22
fig. 42　B76-B区第２遺構面平面図 …… 22
fig. 43　B76-B区出土土器 …… 22
fig. 44　B76-B区出土墨書土器 …… 22
fig. 45　B77-A区位置図 …… 23
fig. 46　B77-A区東壁断面図 …… 23
fig. 47　B77-A区第12・17次調査合成図 …… 24
fig. 48　B77-A区出土管状・有溝土錘 …… 24
fig. 49　B77-A区出土石鏃 …… 24
fig. 50　B77-A区出土土器 …… 24
fig. 51　B77-B区位置図 …… 25
fig. 52　B77-B区東壁断面図 …… 25
fig. 53　B77-B区遺構面平面図 …… 26
fig. 54　B77-B区第12・17次調査合成図 …… 26
fig. 55　B77-B区出土管状土錘 …… 26
fig. 56　B77-B区遺構面全景（東から・写真） …… 26
fig. 57　B77-Ｃ区位置図 …… 27
fig. 58　B77-Ｃ区東壁断面図 …… 27
fig. 59　B77-Ｃ区遺構面平面図 …… 28
fig. 60　B77-Ｃ区第12・17次調査合成図 …… 28
fig. 61　B77-Ｃ区出土土器 …… 28
fig. 62　B77-Ｃ区全景（東から・写真） …… 28
fig. 63　B78区位置図 …… 29
fig. 64　B78区東壁断面図 …… 29
fig. 65　B78区北壁（東半）断面図 …… 29
fig. 66　B78区自然木･木製品出土状況図 …… 30
fig. 67　B78区第12・17次調査合成図 …… 30
fig. 68　B78区出土土器（1） …… 31
fig. 69　B78区出土有孔・管状土錘 …… 32
fig. 70　B78区出土瓦 …… 32
fig. 71　B78区出土土器（2） …… 32
fig. 72　B78区出土墨書土器・転用硯 …… 33
fig. 73　B78区出土木製品 …… 34
fig. 74　B79区位置図 …… 35
fig. 75　B79区東壁断面図 …… 35
fig. 76　B79区第１遺構面平面図 …… 36
fig. 77　B79区第２遺構面平面図 …… 36
fig. 78　B79区第２遺構面全景（東から・写真） …… 36

fig. 79　B79区第３遺構面平面図 ……37
fig. 80　B79区柱穴・ピット断面図 ……37
fig. 81　B79区第12・17次調査合成図 ……37
fig. 82　B79区出土土器……38
fig. 83　B79区第３遺構面全景（東から・写真）……38
fig. 84　B80-A区位置図……39
fig. 85　B80-A区東壁断面図 ……39
fig. 86　B80-A区第１遺構面平面図……40
fig. 87　B80-A区柱穴・ピット断面図……40
fig. 88　B80-A区第12・17次調査合成図……40
fig. 89　B80-A区第２遺構面平面図……41
fig. 90　B80-A区出土弥生土器……41
fig. 91　B80-A区出土土錘 ……41
fig. 92　B80-A区出土土器、製塩土器……42
fig. 93　B80-A区出土瓦……43
fig. 94　B80-A区出土砥石 ……44
fig. 95　B80-A区出土木製品 ……44
fig. 96　B80-B区位置図 ……45
fig. 97　B80-B区東壁断面図……45
fig. 98　B80-B区湿地内杭・石材出土状況図 ……46
fig. 99　B80-B区谷状地形平面図 ……46
fig. 100　B80-B区出土土器（1）……47
fig. 101　B80-B区出土土器（2）……48
fig. 102　B80-B区出土土器（3）……49
fig. 103　B80-B区出土土器（4）……49
fig. 104　B80-B区出土土器（5）……50
fig. 105　B80-B区出土土器（6）……50
fig. 106　B80-B区出土土器（7）……50
fig. 107　B80-B区出土墨書土器（1） ……51
fig. 108　B80-B区出土墨書土器（2） ……52
fig. 109　B80-B区出土墨書土器（3） ……53
fig. 110　B80-B区出土墨書土器（4） ……54
fig. 111　B80-B区出土転用硯（1） ……54
fig. 112　B80-B区出土転用硯（2） ……55
fig. 113　B80-B区出土転用硯（3） ……56
fig. 114　B80-B区出土有溝土錘・蛸壺……57
fig. 115　B80-B区出土棒状・管状土錘……58
fig. 116　B80-B区出土瓦（1） ……59
fig. 117　B80-B区出土瓦（2） ……60
fig. 118　B80-B区出土土馬 ……60
fig. 119　B80-B区出土砥石 ……61
fig. 120　B80-B区出土木簡 ……63
fig. 121　B80-B区出土木製品（1） ……64
fig. 122　B80-B区出土木製品（2） ……65
fig. 123　B80-B区出土木製品（3） ……66
fig. 124　B80-B区出土金属製品……66
fig. 125　B81-A区位置図 ……67
fig. 126　B81-A区東壁断面図……67
fig. 127　B81-A区第１遺構面平面図 ……68
fig. 128　B81-A区第３遺構面平面図 ……68
fig. 129　B81-A区第２遺構面平面図 ……69
fig. 130　B81-A区第２遺構面　柱穴・ピット断面図……69
fig. 131　B81-A区第12・17次調査合成図 ……69
fig. 132　B81-A区出土土器……70
fig. 133　B81-A区出土土錘・蛸壺……70
fig. 134　B81-B区位置図……71
fig. 135　B81-B区東壁断面図 ……71
fig. 136　B81-B区第１遺構面平面図……72
fig. 137　B81-B区第１遺構面全景（西から・写真）……72
fig. 138　B81-B区第２遺構面平面図……73
fig. 139　B81-B区柱穴・ピット断面図……73
fig. 140　B81-B区第12・17次調査合成図 ……73
fig. 141　B81-B区出土土錘 ……74
fig. 142　B81-B区出土土器 ……74
fig. 143　B81-B区出土鞴羽口・瓦 ……74
fig. 144　B82-A区位置図 ……75
fig. 145　B82-A区東壁断面図 ……75
fig. 146　B82-A区第１遺構面平面図 ……76
fig. 147　B82-A区第３遺構面平面図 ……76
fig. 148　B82-A区第２遺構面平面図 ……77
fig. 149　B82-A区第２遺構面柱穴・ピット断面図 ……77
fig. 150　B82-A区第12・17次調査合成図 ……77
fig. 151　B82-A区出土土器……78
fig. 152　B82-A区出土土錘・蛸壺……78
fig. 153　B82-B区位置図……79
fig. 154　B82-B区東壁断面図 ……79
fig. 155　B82-B区第１遺構面平面図……80
fig. 156　B82-B区第３遺構面平面図……80
fig. 157　B82-B区第２遺構面平面図……81
fig. 158　B82-B区第２遺構面柱穴・ピット断面図……81
fig. 159　B82-B区第12・17次調査合成図 ……81
fig. 160　B82-B区出土土錘 ……82

fig. 161　B82-B区出土土器……82
fig. 162　B83-A区位置図……83
fig. 163　B83-A区東壁断面図……83
fig. 164　B83-A区第１遺構面平面図……84
fig. 165　B83-A区第１遺構面全景（西から・写真）……84
fig. 166　B83-A区出土土器……85
fig. 167　B83-A区出土転用硯……85
fig. 168　B83-A区出土瓦……85
fig. 169　B83-A区出土土錘・蛸壺……85
fig. 170　B83-A区出土木製品……86
fig. 171　B83-B区位置図……87
fig. 172　B83-B区東壁断面図……87
fig. 173　B83-B区第１遺構面平面図……88
fig. 174　B83-B区第２遺構面平面図……88
fig. 175　B83-B区出土土器……88
fig. 176　B83-B区出土墨書土器・硯……89
fig. 177　B83-B区出土管状土錘……90
fig. 178　B83-B区出土鞴羽口……90
fig. 179　B83-B区出土木製品……90
fig. 180　P２区位置図……91
fig. 181　P２区東壁断面図……91
fig. 182　P２区出土木製品……92
fig. 183　P２区出土転用硯……92
fig. 184　P２区第１遺構面平面図（左）・
第２遺構面平面図（右）……92
fig. 185　P３区位置図……93
fig. 186　P３区東壁断面図……93
fig. 187　P３区出土管状土錘……94
fig. 188　P３区第２遺構面平面図……94
fig. 189　P３区第２遺構面土坑・ピット断面図……94
fig. 190　P３区第３遺構面平面図……94
fig. 191　P４区位置図……95
fig. 192　P４区東壁断面図……95
fig. 193　P４区第３遺構面平面図……96
fig. 194　P４区出土土錘……96
fig. 195　P４区出土土器……96
fig. 196　P５区位置図……97
fig. 197　P５区東壁断面図……97
fig. 198　P５区出土土器……98
fig. 199　P５区第１遺構面平面図……98
fig. 200　P５区第３遺構面平面図……98
fig. 201　P５区第３遺構面土坑断面図……98
fig. 202　P６区位置図……99
fig. 203　P６区東壁断面図……99
fig. 204　P６区第１遺構面平面図……100
fig. 205　P６区第４遺構面平面図……100
fig. 206　P６区第６遺構面平面図……101
fig. 207　P６区第６遺構面SX01土器出土状況図……101
fig. 208　P６区第７遺構面平面図……101
fig. 209　P６区第７遺構面SK01土器出土状況図……101
fig. 210　P６区第７遺構面SX01土器出土状況図……101
fig. 211　P６区第６遺構面SX01土器出土状況
（北から・写真）……102
fig. 212　P６区第７遺構面SK01土器出土状況
（南東から・写真）……102
fig. 213　P６区出土土器……103
fig. 214　P６区出土転用硯……104
fig. 215　P６区出土土錘・泥面子……104
fig. 216　P６区出土木製品……104
fig. 217　P７区位置図……105
fig. 218　P７区東壁断面図……105
fig. 219　P７区第２遺構面平面図……106
fig. 220　P７区第２遺構面検出南北溝断面図……106
fig. 221　P７区第４遺構面平面図……106
fig. 222　P７区第５遺構面平面図……107
fig. 223　P７区第６遺構面平面図……107
fig. 224　P７区第６遺構面検出中に出土した甕出土状況
（南から・写真）……107
fig. 225　P７区出土有孔・管状土錘……108
fig. 226　P７区出土土器……108
fig. 227　P７区出土木製品……108
fig. 228　P８区位置図……109
fig. 229　P８区東壁（上）・南壁（下）断面図……109
fig. 230　P８区第２遺構面平面図……110
fig. 231　P８区第３遺構面平面図……110
fig. 232　器種分類ごとの樹種同定結果（表）……111
fig. 233　器種別の樹種同定結果（１）（表）……116
fig. 234　器種別の樹種同定結果（２）（表）……116
fig. 235　器種別の樹種同定結果（３）（表）……116
fig. 236　樹種同定結果一覧（１）（表）……117
fig. 237　樹種同定結果一覧（２）（表）……118
fig. 238　樹種同定結果一覧（３）（表）……119

fig. 239　樹種同定結果一覧（4）（表）…… 120
fig. 240　樹種同定結果一覧（5）（表）…… 121
fig. 241　樹種同定結果一覧（6）（表）…… 122
fig. 242　深江北町遺跡17次調査出土木質遺物の
光学顕微鏡写真（1）…… 123
fig. 243　深江北町遺跡17次調査出土木質遺物の
光学顕微鏡写真（2）…… 124
fig. 244　深江北町遺跡17次調査出土木質遺物の
光学顕微鏡写真（3）…… 125
fig. 245　深江北町遺跡17次調査出土木質遺物の
光学顕微鏡写真（4）…… 126
fig. 246　深江北町遺跡から出土した
大型植物遺体（表）…… 127
fig. 247　深江北町遺跡から出土した
炭化種実（表）…… 128
fig. 248　モモ核の大きさ（表）…… 129
fig. 249　オニグルミ核の大きさ（表）…… 130
fig. 250　メロン仲間種子の大きさ（表）…… 130
fig. 251　ヒョウタン仲間果実の大きさ（表）…… 130
fig. 252　深江北町遺跡から出土した
大型植物遺体（写真）…… 133

図版目次

カラー図版１
　第17次調査出土墨書土器・転用硯
カラー図版２
　１．第17次調査出土墨書土器
　２．第17次調査出土転用硯
カラー図版３
　第17次調査出土木製祭祀具
カラー図版４
　調査地全景（西から）
写真図版１
　１．B75-A区　第２遺構面（東から）
　２．B76-B区　第１遺構面全景（東から）
写真図版２
　１．B78区　遺構面全景（東から）
　２．B79区　第３遺構面全景（東から）
写真図版３
　１．B80-B区　第１遺構面全景（西から）
　２．B81-A区　第２遺構面全景（西から）
写真図版４
　１．B81-B区　第２遺構面全景（西から）
　２．B82-A区　第２遺構面全景（東から）
写真図版５
　１．B83-B区　第２遺構面全景（西から）
　２．P７区　第２遺構面全景（西から）
写真図版６
　B74区～B77-A区出土土器・陶器・土錘
写真図版７
　B78区出土土器・陶磁器・土錘
写真図版８
　B79区・B80-A区出土土器・土錘・蛸壺・石製品
写真図版９
　１．B80-A区出土瓦（表面）
　２．B80-A区出土瓦（裏面）
写真図版10
　B80-B区出土土器（１）
写真図版11
　B80-B区出土土器（２）
写真図版12
　B80-B区出土土器・土馬・砥石・金属製品
写真図版13
　B80-B区出土土器・陶磁器・陶硯
写真図版14
　B80-B区出土土錘・蛸壺・製塩土器
写真図版15
　B81-A区・B81-B区出土土器・土錘・蛸壺・鞴羽口
写真図版16
　B82-A区・B82-B区出土土器
写真図版17
　B82-B区・B83-A区・B83-B区出土土器・土錘・蛸壺・
　製塩土器・鞴羽口
写真図版18
　P４・P６・P７区出土土器
写真図版19
　第17次調査出土墨書土器（赤外線写真）
写真図版20
　第12・17次調査出土木簡・木札（赤外線写真）
写真図版21
　第17次調査出土木製品（１）
写真図版22
　第17次調査出土木製品（２）

Ⅰ．はじめに

1．深江北町遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

神戸市南東部から芦屋市にかけては六甲山系南麓に位置する。六甲山系は風化しやすい花崗岩で形成されており、山地から流れ出る小河川が狭隘な平野部に流れ落ちる部分には、洪水の度ごとに流出した土砂により、扇状地地形が卓越する。更に扇状地地形を流れ下った砂礫は、大阪湾に流れ込むが、湾を時計回りに巡る沿岸流に乗って東側に流され、数条の浜堤（砂堆）を海岸線と平行に形成する。

深江北町遺跡は、この様な沿岸流によって形成された浜堤と浜堤間の低湿地に存在する。神戸市域の東端に位置し、芦屋市と市境を接しているが、芦屋市域にも同じ時代の遺跡が存在している。芦屋市側は津知（つぢ）遺跡と称しているが、本来同一の遺跡と考えられる。

現在は海岸部の埋め立てが進み、海岸線からは約500～600m程離れているが、中世以前はすぐ南側に海浜が連なっていたものと推定される。数条の浜堤とその間の低地部分には水田が営まれ、葦等が生い茂る沼沢地となっていたことが古環境の各種分析により明らかとなっている。

遺跡の東側には芦屋川が流れており、過去に大きな氾濫を繰り返し、現在は天井川となっている。当遺跡もその影響を受けて、浜堤間の湿地が次第に埋積してゆき、中世頃には埋没して耕作地化していた状況が発掘調査によって確認された。

また、この付近を古代山陽道が通過していたことは、主に歴史地理学の分野から論及されてきたが、古代山陽道に付随する施設である「葦屋驛家」（あしやのうまや）が当遺跡の近辺に奈良～平安時代前半頃まで存在していたことが、近年の発掘調査資料の増加により窺えるようになってきた。

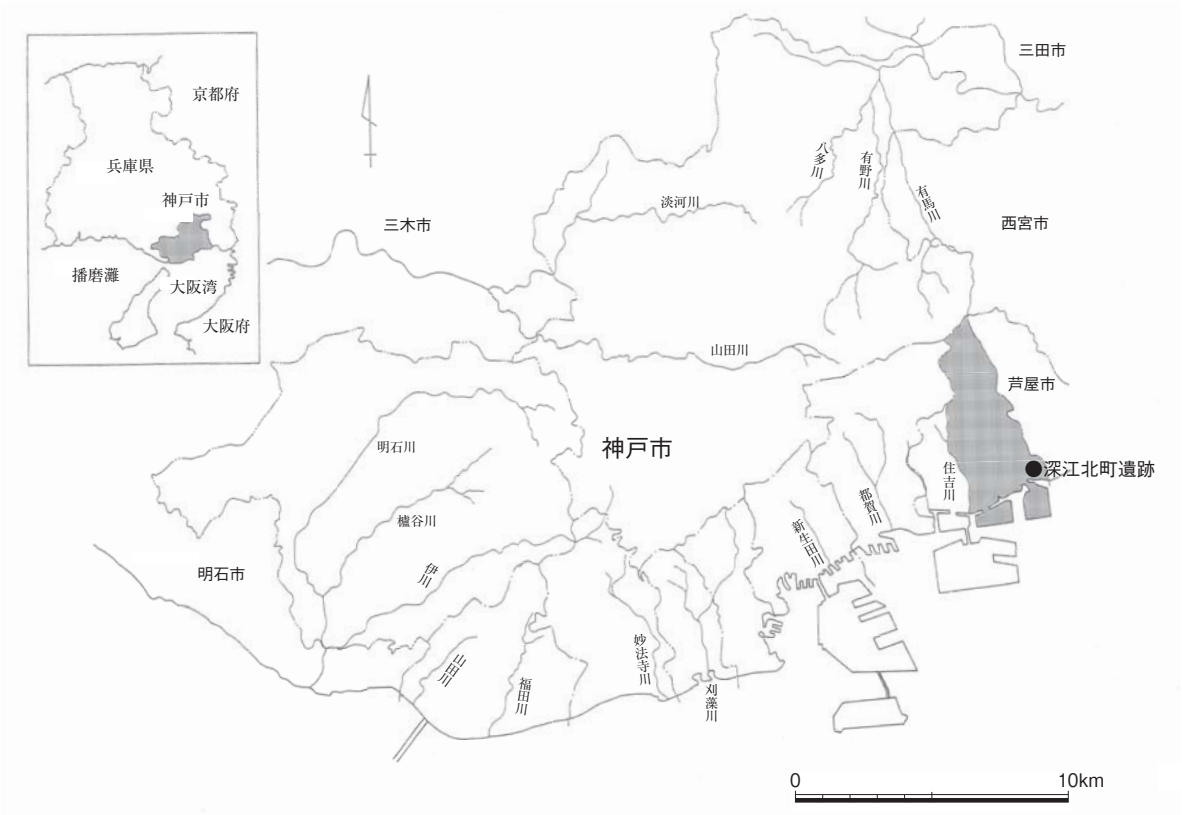


fig. 1　深江北町遺跡の位置

（2）遺跡の歴史的環境

以下に旧石器時代～奈良時代にかけての周辺の主な遺跡を掲げる。

なお、( ) 内の数字は深江北町遺跡周辺の主な遺跡地図に、[ ] 内の数字は参考文献に対応する。

①旧石器時代から縄文時代

六甲山南麓において、旧石器時代の遺構は未だ確認されていない。遺物としては、後期旧石器時代のナイフ形石器が神戸市内の本山遺跡(15)[1]、西岡本遺跡(20)[2]、滝ノ奥遺跡[3]、から、翼状剥片石器が芦屋市津知遺跡(5)[4]から発見されている。また、滝ノ奥遺跡では旧石器時代最末期と縄文時代早期の有茎尖頭器、縄文時代早期の土器も発見されており、一定期間の生活の場であったと推測されている[3][5]。

続く縄文時代は、早期の土器が本山遺跡から出土している[1]。また、前期の高山寺式に属する竪穴住居跡が西岡本遺跡[2]で発見されている。本庄町遺跡(4)では前期末から中期前半、後期初頭～前葉にかけての土器と、後期初頭の貯蔵穴が確認されている[6]。

②弥生時代

縄文時代末期から集落が継続している本山遺跡では、弥生時代前期初頭の土器、木製品が発見され、同時期における稲作集団の定着を示している[7][8]。以後本山遺跡が当該地域の拠点的集落として発展していく。前期では他に本庄町遺跡、北青木遺跡(2)や寺田遺跡(7)で集落が展開する。

中期は本山遺跡、北青木遺跡の他、森北町遺跡(6)や住吉宮町遺跡(21)でも集落が形成される。中期中頃になると東山遺跡(12)[9]、保久良神社遺跡(17)[10]、金鳥山遺跡(18)[11]、滝ノ奥遺跡、荒神山遺跡(19)[12]、芦屋市会下山遺跡[13]などの高地性集落が営まれる。周辺には森銅鐸、生駒銅鐸などの銅鐸の出土地が点在している。

後期になると郡家遺跡や芦屋市三条岡山遺跡(9)などで集落が形成される。深江北町遺跡(1)では古墳時代初頭まで円形周溝墓が造られた。また、魚崎中町遺跡(14)でも同時期の円形周溝墓が[14]、住吉宮町遺跡では方形周溝墓が確認されている。

③古墳時代

古墳時代前期、灘区の西求女塚古墳を初めとして前方後方墳である処女塚古墳[15]、前方後円墳である東求女塚古墳(24)[16]、同じく前方後円墳である扁保曾塚古墳(16)[17]の順に古墳が築造される。中期後半には前方後円墳である坊ヶ塚古墳(22)[18]と帆立貝形をした住吉東古墳(23)[19]を盟主墳とする住吉宮町古墳群の形成が始まる。古墳時代後期の古墳としては、郡家遺跡[20]、西岡本遺跡、岡本梅林古墳、生駒古墳、野寄群集墳などが知られている。

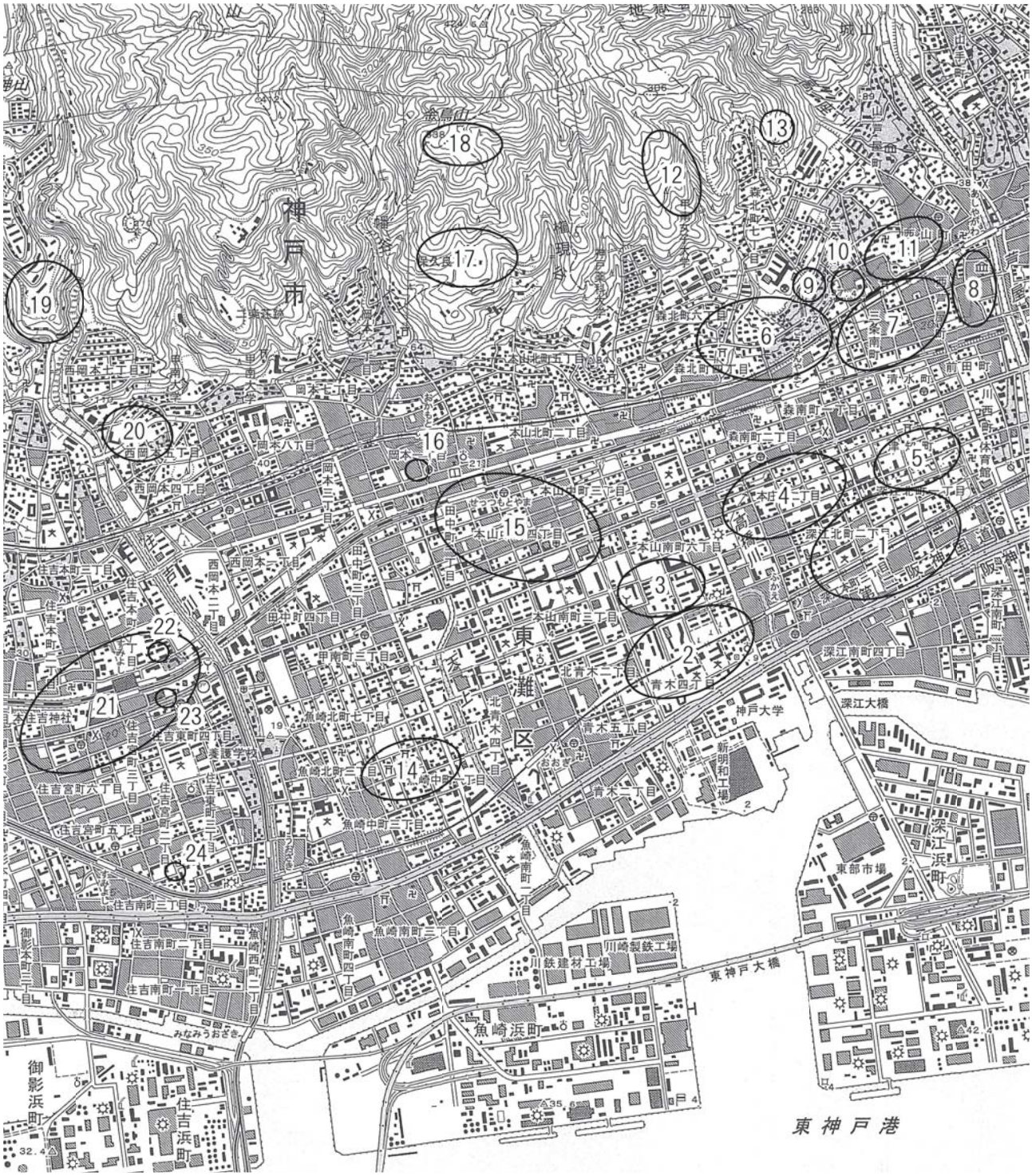
集落としては、弥生時代後期から継続している遺跡も多く、郡家遺跡・森北町遺跡・住吉宮町遺跡などがあげられる。古墳時代中期は芦屋市月若遺跡(8)で竪穴住居に付属した竈が発見され、滑石製模造品が多数出土している[21]。郡家遺跡城の前地区では韓式系土器が出土しており渡来系氏族との関連が示唆される[22]。また、森北町遺跡でも韓式系土器が出土している[23]。

④奈良時代・平安時代

律令制度が施行されると当該地域周辺は摂津国菟原郡に属するようになる。郡家遺跡を菟原郡衙の所在地と推定する説もある[24]。一方、芦屋市寺田遺跡では奈良時代の倉庫遺構と、郡司の等級を表す「大領」「小領」と書かれた墨書土器が発見されていることから、菟原郡の郡領氏族との関係が示唆されている。さらに寺田遺跡の近くには、「壬子年」という干支銘木簡が出土した三条九ノ坪遺跡(10)[25]と、白鳳期に創建された芦屋廃寺遺跡(11)も存在している[26]。

また、六甲山南麓を通る古代山陽道の葦屋驛家は、深江北町遺跡・芦屋市津知遺跡の付近に設けられたという説もあるが、未だ確定的な証拠がない。
そのほか、小路大町遺跡（3）では農耕祭祀が行われたと考えられる遺構が発見されており、馬鍬、ヒョウタンが出土している[27]。

［1］安田滋・藤井整「本山遺跡第20次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
［2］浅岡俊夫『西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会 2001
［3］黒田恭正・阿部敬生「滝ノ奥遺跡」『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
［4］和田秀寿「よみがえる津知の歴史Ⅱ（原始・古代編）―津知遺跡が語るもの―」
『なりひら 芦屋市立美術博物館VOL.17・'94/12』芦屋市立美術博物館1994
［5］森田稔「滝ノ奥遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1983
［6］別府洋二『兵庫県文化財調査報告第92冊　―郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書― 本庄町遺跡』
兵庫県教育委員会　1991
［7］安田滋「本山遺跡第17次調査」『平成７年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
［8］『「発掘された日本列島'97」地域展示 ひょうご復興の街から』神戸市教育委員会 1997
［9］宮本郁雄「本山町東山遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
［10］新修神戸市史編集委員会編「保久良神社遺跡」『新修神戸市史』歴史編Ⅰ自然・考古 1989
［11］新修神戸市史編集委員会編「金鳥山遺跡」『新修神戸市史』歴史編Ⅰ自然・考古 1989
［12］阿久津 久「荒神山遺跡調査概報」神戸市教育委員会1970
［13］村川行弘・石野博信・森岡秀人『増補 会下山遺跡』芦屋市教育委員会 1985
［14］岩田明広「神戸市東灘区魚崎中町遺跡（第３次調査）」神戸市教育委員会1996
［15］「史跡処女塚古墳」神戸市教育委員会1985
［16］渡辺伸行「東求女塚古墳」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1985
［17］梅原末治「武庫郡本山村マンバイのヘボソ塚古墳」
『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第二輯』兵庫県1925
［18］渡辺昇・高瀬一嘉『坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』兵庫県教育委員会1989
［19］丹治・東・須藤・橋詰「住吉宮町遺跡第９次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
［20］山口英正「郡家遺跡下山田地区第４次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
［21］森岡秀人・木南アツ子『芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―月若遺跡（第19地点）』芦屋市教育委員会 1995
［22］丸山潔「郡家遺跡城の前地区第23次調査」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』1989
丸山潔「郡家遺跡城の前地区第24次調査」『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』1990
石島三和「郡家遺跡 第83次調査」神戸市教育委員会 2008
［23］黒田恭正「森北町遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』1988
［24］「郡家大蔵遺跡」現地説明会資料 神戸市教育委員会 1979
［25］高瀬一嘉ほか『兵庫県文化財調査報告書第168冊
―被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書― 三条九ノ坪遺跡』兵庫県教育委員会
［26］「芦屋廃寺跡（第62地点）発掘調査」現地説明会資料 芦屋市教育委員会 1989
［27］井尻格「小路大町遺跡第４次調査報告書」神戸市教育委員会 2003



1. 深江北町遺跡　2. 北青木遺跡　3. 小路大町遺跡　4. 本庄町遺跡　5. 津知遺跡　6. 森北町遺跡　7. 寺田遺跡
8. 月若遺跡　9. 三条岡山遺跡　10. 三条九ノ坪遺跡　11. 芦屋廃寺遺跡　12. 東山遺跡　13. 会下山遺跡
14. 魚崎中町遺跡　15. 本山遺跡　16. 扁保曾塚古墳　17. 保久良神社遺跡　18. 金鳥山遺跡　19. 荒神山遺跡
20. 西岡本遺跡　21. 住吉宮町遺跡　22. 坊ヶ塚古墳　23. 住吉東古墳　24. 東求女塚古墳

fig. 2　深江北町遺跡周辺の主な遺跡

2. これまでの調査成果

深江北町遺跡では、古墳時代初頭の円形周溝墓群および土器棺墓（第３次）や飛鳥時代～平安時代までの竪穴住居・掘立柱建物（第２次・９次・12次）、古墳時代後期の祭祀場（第12次）等が確認されている。

出土遺物としては、奈良時代から平安時代の硯、青銅製帯金具（第２次・12次）、小型銅鏡（第２次）、瓦、墨書土器、木簡、一般の集落では出土しない、官衙（役所）的色彩の濃い遺物が多く出ていることが注目される。

さらに、「承和」の年号が入った米の支給伝票木簡、「九九八十一・八九七十二」と書かれた木簡（第９次）や葦屋驛長等宛に出されたと推定される命令木簡・東大寺大仏建立に関わる智識銭（寄付）の行為を表した可能性の高い天平19年の記年銘を持つ木簡（第12次）の出土や、「驛」（第８次）、「驛・（大）垣・北・大西・東・百」（第９次）、「大垣官」（第12次）等と墨書された土器が挙げられる。

また、浜堤周辺の湿地からは下駄や曲げ物等の生活用品の他、祭祀具として斎串や木製の形代（馬形・人形・舟形等）が多く見つかっている。祭祀具は奈良・平安時代の都城、官衙、またはその付近で出土することが多く、古代の役所の宗教儀式の中で使用されたものであるといわれている。これらの出土遺物は、山陽道に設置されたと文献に伝えられる「葦屋驛家」またはそれに関連する施設が、近辺に存在していたことを示唆するが、驛家の施設と断定できる明確な遺構はいまだ確認できていない。

また、各種土錘・蛸壺等の漁具が多く出土し、海との関わりが深い人々の集落でもあることが指摘されている。

遺構群が分布する浜堤の北側と東側の湿地には、古墳時代頃から水田が拓かれるが、東側を流れる芦屋川の氾濫の影響をしばしば受け、複数層の水田面が洪水砂に覆われる状況が確認されている（第１・11・13・14・15次）。

調査次数	調査年度	調査機関	調査面積	調査目的	調査内容
1	1984	兵庫県教育委員会	1950	県営住宅建設	奈良時代以降の水田、時期不明の土坑・杭列 弥生時代後期～平安時代後期の柱穴
2	1985	兵庫県教育委員会	605	県営住宅建設	弥生時代後期の溝、飛鳥時代の竪穴住居 奈良～平安時代初めの掘立柱建物
3	1986	兵庫県教育委員会	660	県営住宅建設	古墳時代初めの円形周溝墓群、土器棺墓
4	1987	神戸市教育委員会	50	共同住宅建設	古墳時代後期～鎌倉時代の落ち込み・ピット
5	1990	兵庫県教育委員会	1572	県営住宅建設	弥生時代後期の掘立柱建物・土坑、中世の掘立柱建物・土坑・水田
6	1993	神戸市教育委員会	50	共同住宅建設	古墳時代後期～中世の遺物包含層
7	1996	神戸市教育委員会	185	共同住宅建設	平安時代後半の土坑・溝・ピット
8	1999	神戸市教育委員会	220	共同住宅建設	古墳時代初めの溝・ピット、古墳時代後期～平安時代の柱穴・土坑・流路、「驛」の墨書土器
9	2000	神戸市教育委員会	2670	共同住宅建設	古墳時代初めの遺物包含層、奈良～平安時代初めの掘立柱建物・土坑・溝・流路、平安時代後期の掘立柱建物　木簡・墨書土器
10	2006	神戸市教育委員会	163	下水道移設	平安時代を主体とする土坑・溝・ピット・落ち込み
11	2006	神戸市教育委員会	200	共同住宅建設	平安時代の流路、転用材を利用した護岸施設
12	2011	神戸市教育委員会	1620	鉄道高架化工事	2014年報告書刊行済　本報告書に接続する部分の発掘調査 古墳時代初めの溝、古墳時代後期の祭祀跡、飛鳥時代の竪穴住居、奈良～平安時代の掘立柱建物、中・近世の犂溝、近世の集落を画する溝、木簡・墨書土器
13	2011	神戸市教育委員会	875	特別養護老人ホーム	古墳時代初め頃～平安時代の水田遺構
14	2012	神戸市教育委員会	364	鉄道高架化工事	2014年報告書刊行済　本報告書に接続する部分の発掘調査 奈良時代頃の水田遺構、古墳時代の流路、土器群、木簡・墨書土器
15	2012	神戸市教育委員会	900	共同住宅建設	古墳時代～中世の水田遺構
16	2013	神戸市教育委員会	20	個人住宅建設	古墳時代頃の落ち込み
17	2016	神戸市教育委員会	943	鉄道高架化工事	本報告書所収 奈良～平安時代の掘立柱建物、中・近世の犂溝、木簡・墨書土器、奈良時代頃の水田遺構、古墳時代の流路、土器群、

fig. 3　深江北町遺跡調査一覧

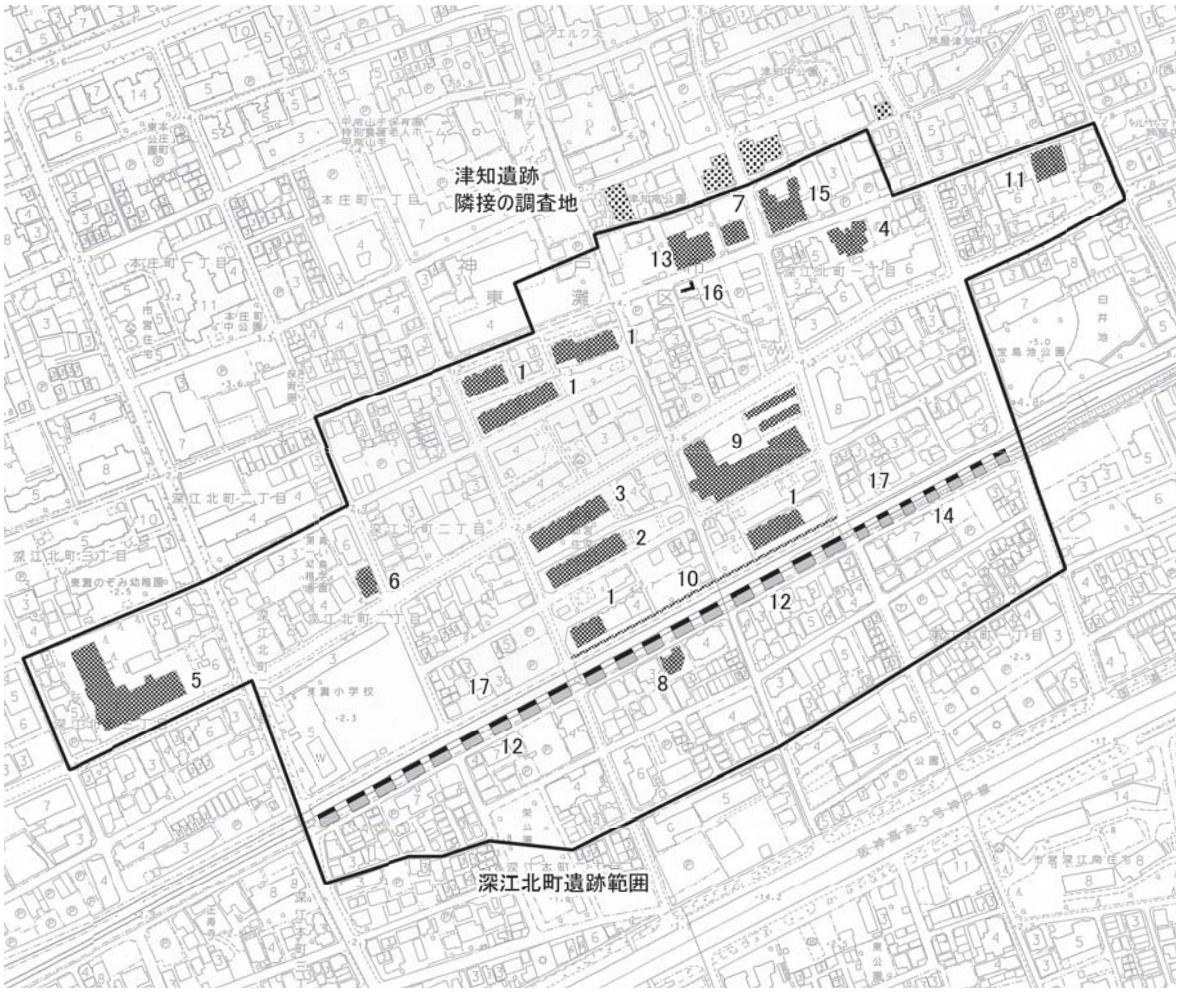


fig. 4　今回と既往の調査地(S=1/5000)

3．第17次調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

神戸市では踏切の解消と都市環境の改善を目的とし、阪神電気鉄道株式会社の協力を得て、阪神住吉駅から芦屋駅までの区間を連続的に高架化し、あわせて交差道路や側道の整備を行う連続立体交差事業を実施している。

既に魚崎駅より西側の区間は工事が完了し、それより東側の区間についての工事を進めるにあたって、当該工事範囲の一部が神戸市の周知の埋蔵文化財包蔵地である深江北町遺跡に該当することが事前調整協議の中で判明し、高架・橋梁基礎深度が埋蔵文化財に抵触するため、発掘調査が必要との結論に達した。

(2) 調査の経過

限定された路線敷内で、旅客輸送を続行しながら、安全に工事・発掘調査を進める方法として考えられたのが、上下線の高架化時期をずらす方法で、まず側道予定部分に上下仮線を造り、営業運転を続けながら下り線を高架化、その後上り線の高架部分を建設して合体するという工法が行われることとなった。

上記のような工法による作業の中で、下り線予定部分の発掘調査は、平成23年5月より平成24年8月まで、建設作業工程と予算の都合上の一時中断時期を交えながら実施した。この調査では、高架橋梁の基礎部分面積の約2/3にあたる1箇所あたり約90㎡（第12次調査）18箇所、

約41～54㎡（第14次調査）7箇所の合計25箇所をシートパイルで囲って調査する方法がとられた。電車が行き交う仮設線路の真横を約2mの深度まで掘削するため、頑丈な土留め工が施工され、四方が鉄板と鋼材に囲まれた状態で、酷暑・厳寒の中、調査を実施した。

第12次調査は谷　正俊・阿部　功・佐藤（井上）麻子が分担して調査を行い、第14次調査は谷　正俊が担当した。

上り線予定部分の発掘調査は、下り線の高架建設完了・営業運転開始後の平成28年4月11日から実施した。1箇所あたり約39～45㎡・18箇所、約22～27㎡・7箇所の合計25箇所を、前回と同様の工法で調査を実施した。

前回の下り線部分の調査（第12・14次調査）では浜堤と堤間湿地（ラグーン）が交錯するような状況で出現しており、隣接する調査区でも地形の様相が全く異なる場合があった。前回の調査では、浜堤上では古墳時代の祭祀跡、奈良～平安時代の集落跡、湿地内では同時期の土器、木製品・木片等が大量に出土した。

現地調査は、狭小な敷地内に掘削残土仮置き場を確保する都合上、3ブロックに分かれて、調査を実施した。B74区～B78区までとB82-A区を岡田健吾が、B79区～B81-B区・B82-B区～B83-B区までを谷正俊と中井菜加が、P2区～P8区は荒田敬介が調査を担当した。したがって調査区の調査の記述はそれぞれの担当者が行っている。

最後に調査区の呼称は、現地調査中に事業者側との意思の疎通を容易にするために、各橋台に工事番号として付している呼称名をそのまま調査区名とすることを、前回同様踏襲している。したがって第12・14次調査地と第17次調査地は隣接地ではあるが、同じ調査区名を使用していることを付言する。

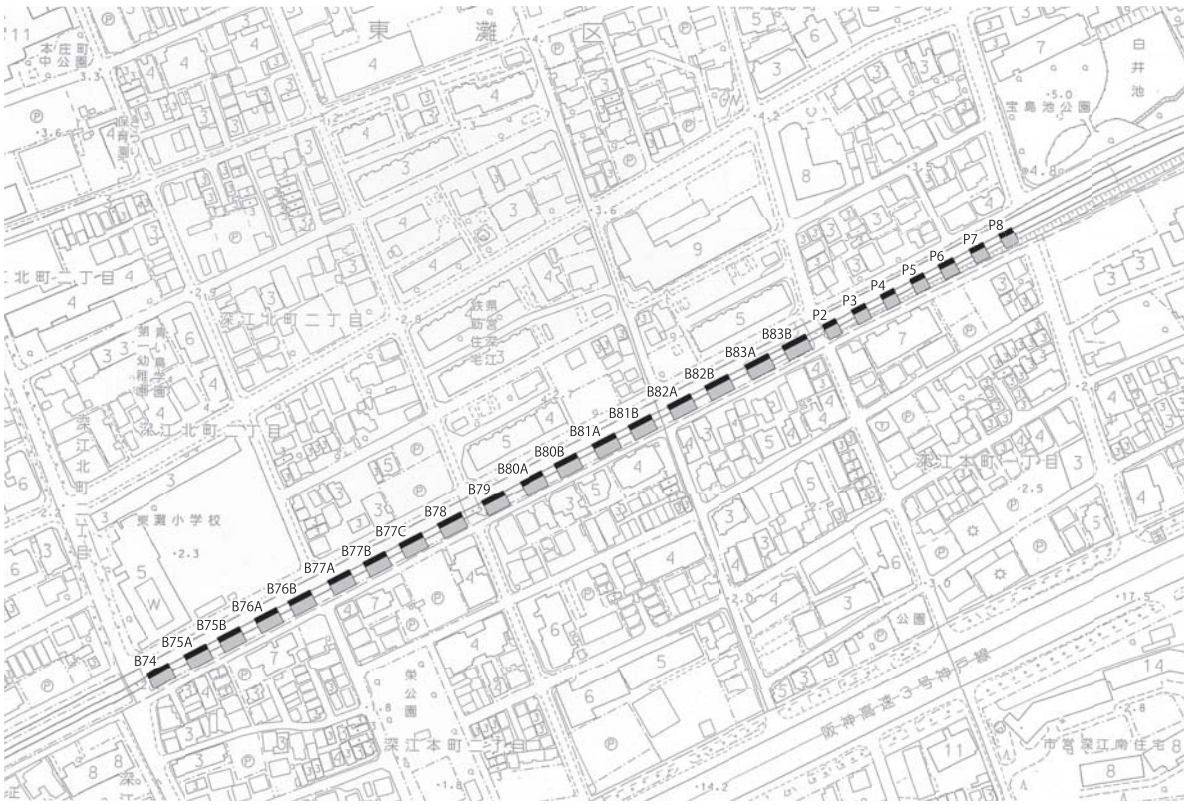


fig. 5　深江北町遺跡第17次調査範囲（黒塗り部分）

（3）調査組織（平成28・29年度）

第17次調査の現地発掘および整理、報告書刊行作業にあたって、神戸市教育委員会の体制は次の通りである。

神戸市文化財保護審議会　史跡・考古担当委員

黒崎　直（大阪府立弥生文化博物館館長）

菱田哲郎（京都府立大学文学部教授）

神戸市教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	日下　優
文化財課長	千種　浩
埋蔵文化財センター担当課長	安田　滋
埋蔵文化財係長	前田佳久
埋蔵文化財担当係長	松林宏典・（平成28・29年度）・斎木巌（平成28年度）・中村大介（平成29年度）
事務担当学芸員	山口英正・井上麻子（平成28・29年度） 池田　毅（平成28年度）・山田侑生（平成29年度）
調査担当学芸員	谷　正俊・荒田敬介・岡田健吾（平成29年４月より京都府教育委員会）・中井菜加
遺物整理担当学芸員	中谷　正（平成28年度）・谷　正俊（平成29年度）
保存科学担当学芸員	中村大介（平成28年度・29年度昇任）

（4）調査の進行状況

阪神電車の芦屋駅・深江駅間の連続立体交差事業に伴う、深江北町遺跡の調査進行状況は以下のとおりである。なお、第12・14次調査の詳細は既刊の報告書を参照していただきたい。

①第12次調査（下り線予定部分の調査）

現地調査：平成23年５月９日～平成24年２月17日

調査面積：約1620㎡（延べ調査面積3420㎡）

調査担当者：谷　正俊・阿部　功・井上麻子

②第14次調査（下り線予定部分の調査）

現地調査：平成24年４月４日～平成24年８月７日

調査面積：約364㎡（延べ調査面積約783㎡）

調査担当者：谷　正俊

③12・14次調査の出土品の整理・報告書の作成・刊行作業

平成23年度：大量の木片・木製品の水洗作業・土器類の水洗・マーキング・復元作業

平成24年度：出土土器類のマーキング・復元作業・一部実測作業・木製品の分類作業

平成25年度：土器類の復元作業・実測作業・遺構・遺物測量図のレイアウト・トレース作業・本文作成・出土遺物の撮影・原稿編集・報告書刊行（平成26年３月）

④第17次調査（上り線部分の調査）

現地調査：平成28年４月11日～平成28年10月14日

調査面積：約943㎡（延べ調査面積2333㎡）

調査担当者：谷　正俊・荒田敬介・岡田健吾・中井菜加

⑤第17次調査の出土品の整理・報告書の作成・刊行作業

平成28年度：木片・木製品の水洗・分類作業・土器類の水洗・マーキング・復元作業

平成29年度：出土土器類の復元作業・実測作業・木製品の実測作業・遺構・遺物測量図のレイアウト・トレース作業・本文作成・出土遺物の撮影・原稿編集・報告書刊行

fig. 6
人力掘削作業

fig. 7
出土遺物水洗作業

fig. 8
出土遺物接合作業

Ⅱ．遺構と遺物

1．第17次調査地付近の地形

今回の調査は前回の調査と同様に、深江北町遺跡を横断する形で実施した。しかし、浜堤と湿地が南北に出入りの幅があるため、僅か20mほど離れた調査区で様相が変化する部分もあった。なお、浜堤は時代に伴って変化するため、ここでは弥生時代後期以降の状況を説明する。

(1) B74区～B75-B区

この範囲は浜堤上に位置するがB75-B区東半部で湿地に変化する。今回の調査では浜堤上に、弥生時代後期頃の土坑や中・近世以降の遺構と、浜堤と湿地の境界付近にヒトの足跡が多数確認されている。

(2) B76-A区～B77-C区

B76-A区では西半分が湿地で、東側は浜堤となる地形である。そのまま3ブロックは浜堤が連続するが、顕著な遺構は認められない。B77-C区の東側で再び湿地に下がる。

(3) B78区～B80-B区

B78区は調査区全体が湿地にあたり、B79区では浜堤上、B80-A区は西側が浜堤上にあたり、奈良時代～鎌倉時代の柱穴・ピット・土坑等が確認される。B80-B区は今回の調査では全面が湿地となり、飛鳥～平安時代初め頃の大量の遺物（土器・木製品）が出土した。

(4) B81-A区～B83-A区

このあたりは安定した浜堤にあたり、古墳時代～平安時代頃までの遺構が集中する。B82-A・B区では土石流の堆積が見られる。この浜堤はB83-A区で、湿地に変化してゆく。

(5) B83-B区～P8区

B83-B区は湿地の分厚い堆積層が認められた。ここからP8区までは湿地層・土石流堆積層が連続している。湿地内には浅い土坑・ピット、水田畦畔やヒト・偶蹄類の足跡が残されている層が確認されている。また湿地内から古墳時代の土器がまとまって出土した個所もある。

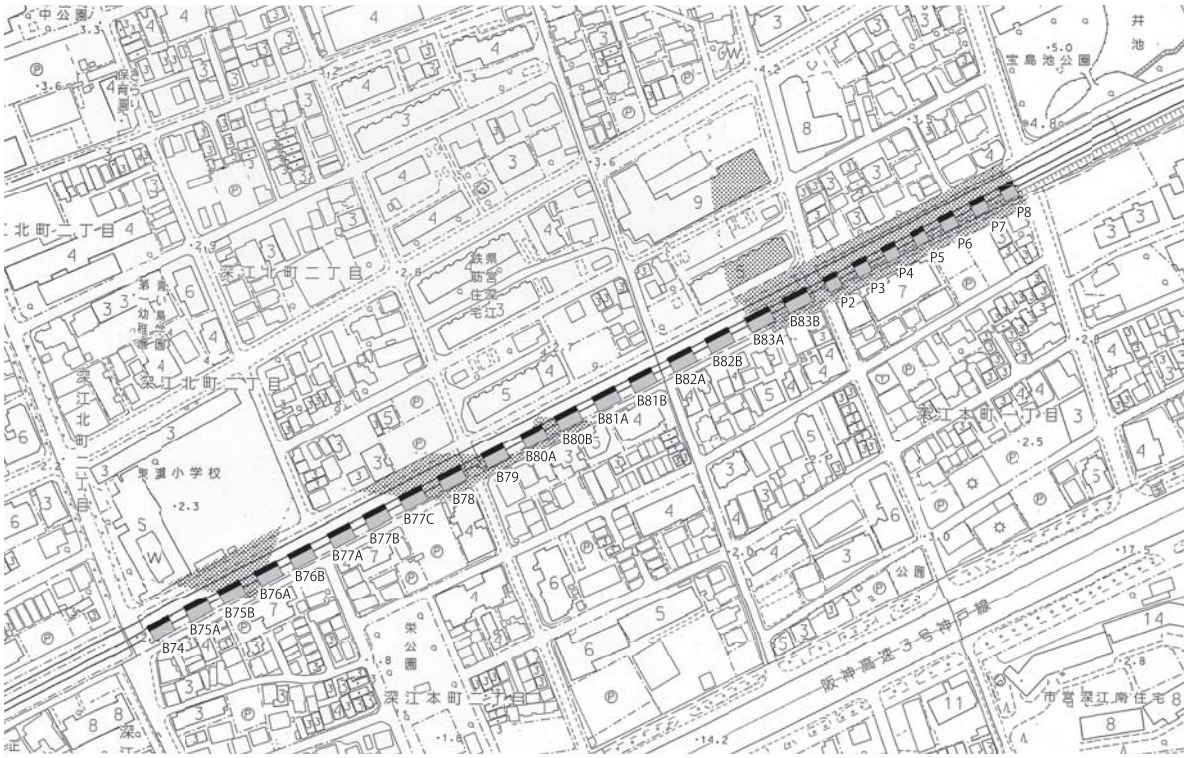


fig. 9　調査地地形概念図（網かけ部分は湿地）

2．第17次調査の検出遺構と出土遺物

B74区

立地

当該区は調査範囲の一番西側に当たり、安定した浜堤上に位置する。遺構面を２面検出した。

基本層序

盛土・耕作土の下の灰色粗砂～中砂面で遺構検出を行うと、南北方向の犂溝が検出される（第１遺構面）。その下層の黄褐色細砂～シルト層上面では、南北方向の浅い溝を数条検出した（第２遺構面）。またこの遺構面では、奈良～平安時代の土器、礫が散在して出土した。

第１遺構面（犂溝）

南北方向に走る複数の溝を検出した。各溝の幅は約0.2～0.6m、深さは約0.15mである。SD08は暗渠とみられ、拳大ほどの大きさの礫が詰められていた。礫をすべて取り除くと、溝の深さは約0.4mであった。

第２遺構面（複数の溝）

黄褐色細砂～シルト層上面で、南北方向に走る複数の溝を検出した。SD01の幅は約0.8m、深さは0.1mである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

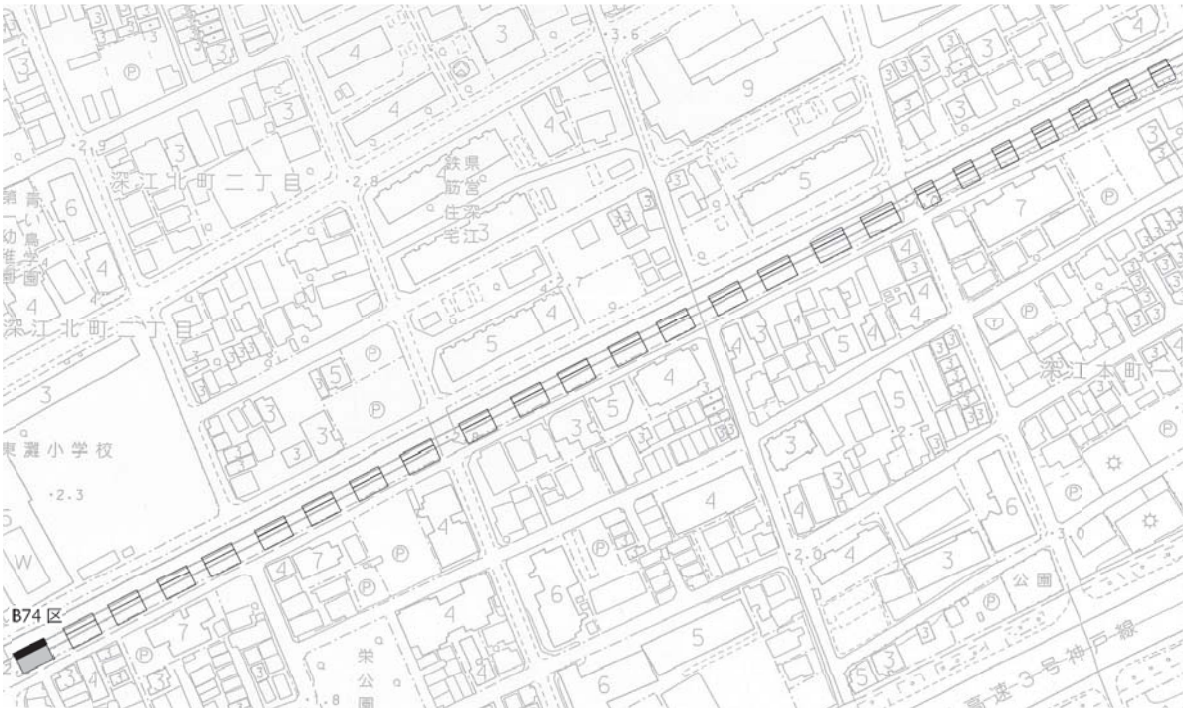


fig. 10　B74区位置図

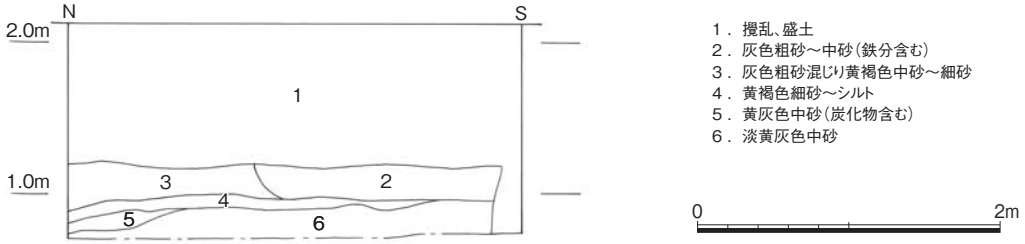


fig. 11　B74区東壁断面図

なお、この遺構面では、遺構には伴っていないが、須恵器や土師器、緑釉陶器の破片、拳大の円礫などが表面に散らばって出土する状況がみられた。

また、浜堤堆積砂上面では顕著な遺構は検出されなかった。

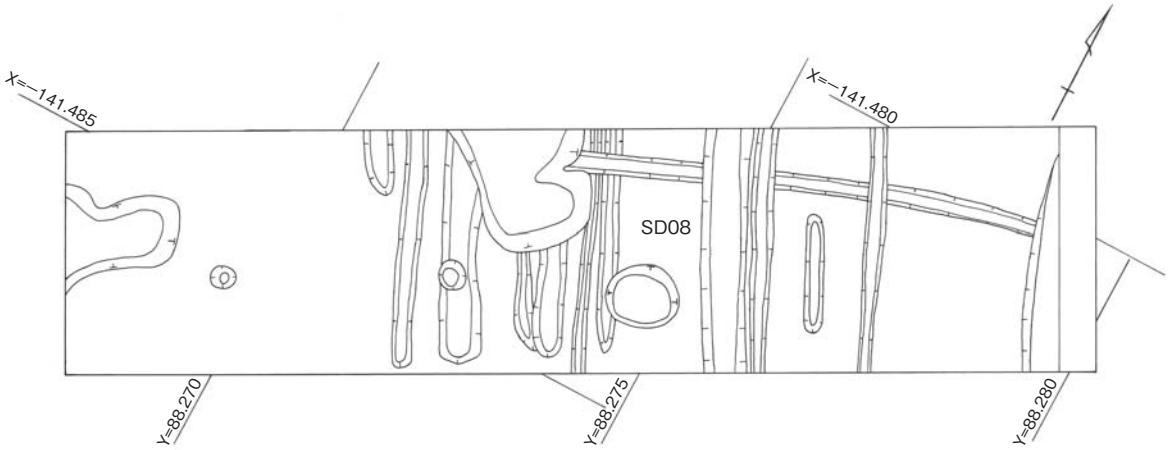


fig. 12　B74区第1遺構面平面図

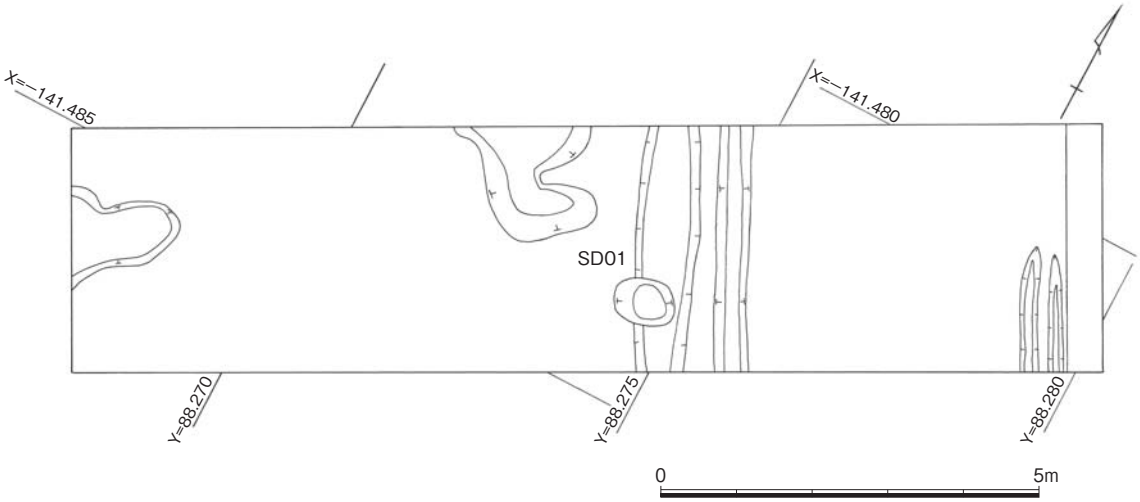


fig. 13　B74区第2遺構面平面図

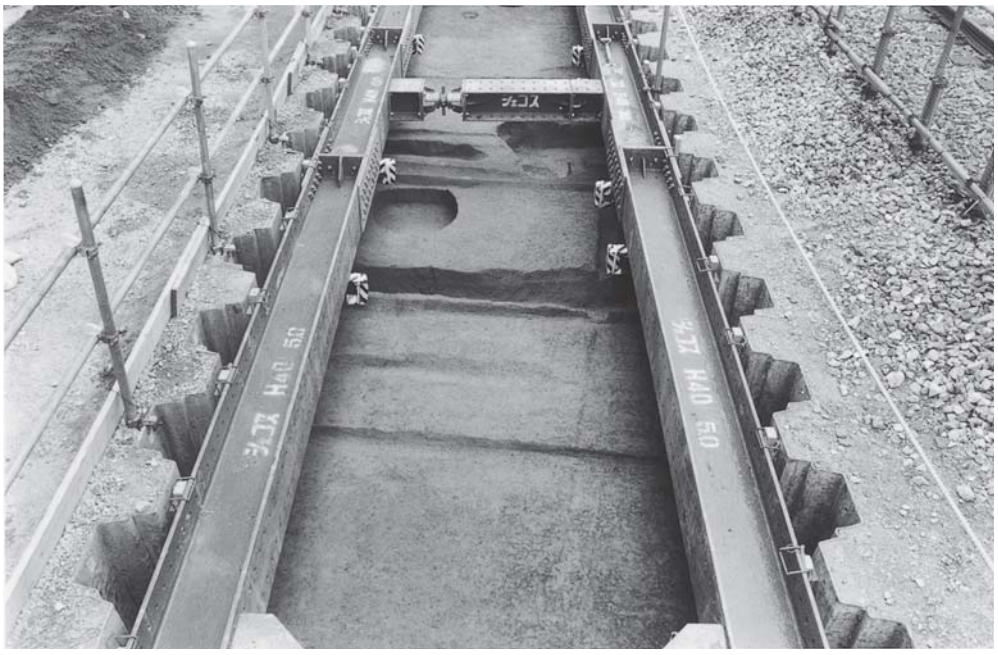


fig. 14
B74区第1遺構面
全景（東から）

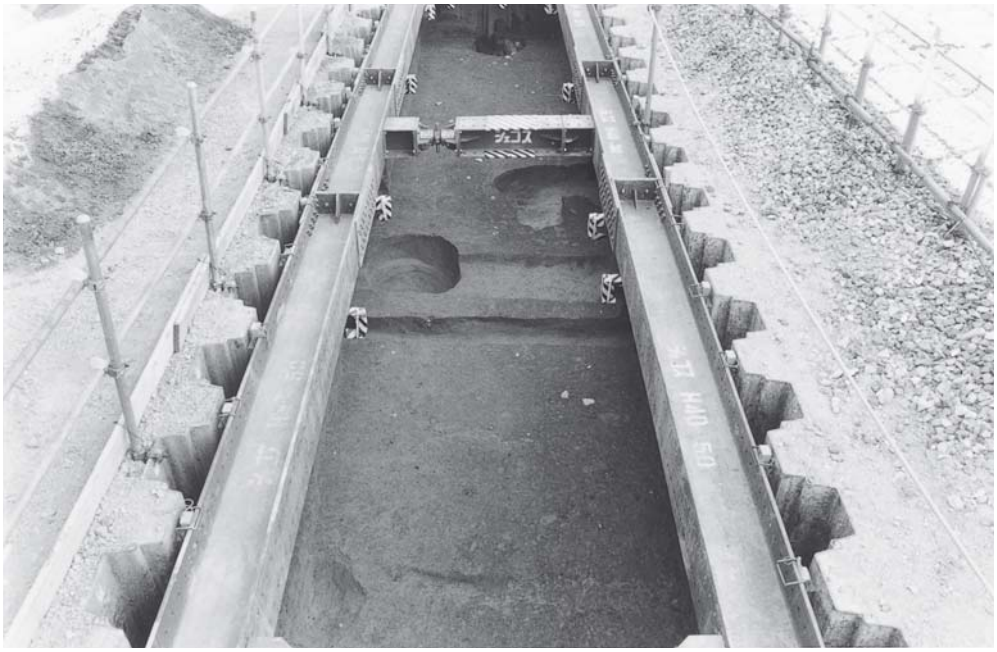


fig. 15
B74区第2遺構面
全景（東から）

fig. 16
B74区掘削作業

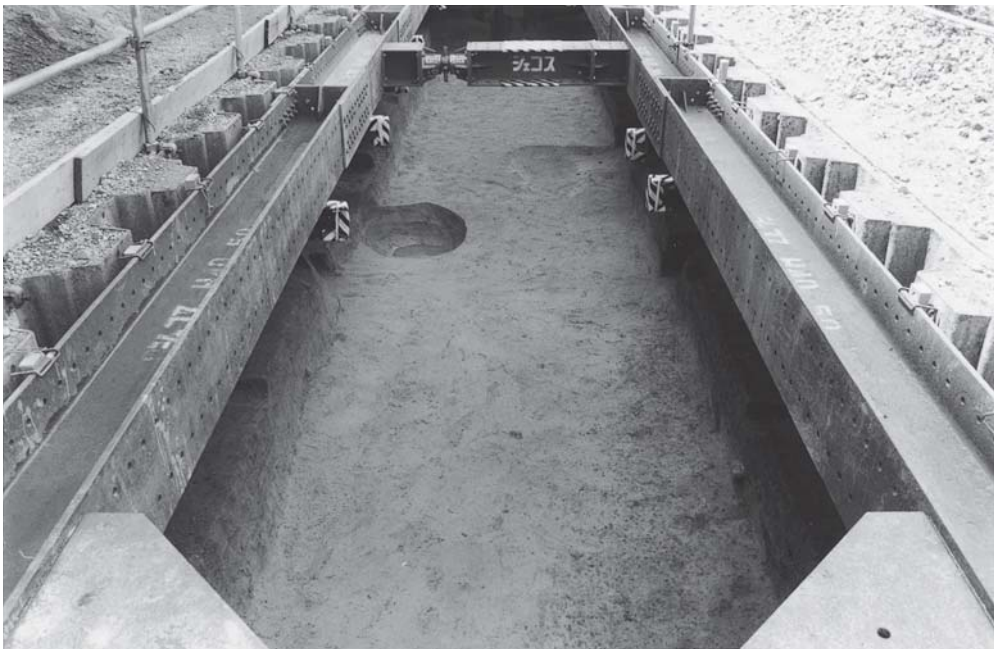


fig. 17
B74区完掘状況
（東から）

出土遺物

1は緑釉の壷または唾壷の胴部で、外面には漢字「春？」が陰刻され、その上に淡緑色の釉が掛っている。2は須恵器坏の底部で貼り付け高台を有する。いずれも黄褐色細砂～シルト層から出土している。3，4は土師質の管状土錘で、第1遺構面の溝・ピット出土である。

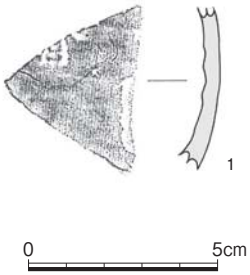


fig. 18　B74区出土緑釉陶器

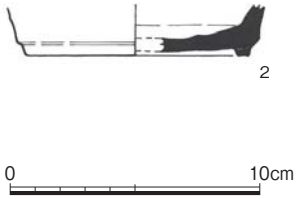


fig. 19　B74区出土土器

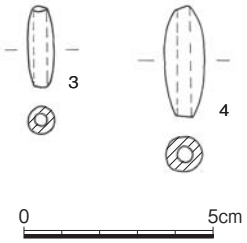


fig. 20　B74区出土管状土錘

第12次調査出土の木札

南側に接する第12次調査では東西方向に走る溝が確認された。この溝は、江戸時代の深江村居住域の北辺を区切る溝の可能性が高い。溝内からは、18～19世紀の陶磁器と共に木製品（「表面：御用　深江村　裏面：御用　庄や・年寄」と書かれた木札）が出土した。

この溝から出土した木片の整理を再度行ったところ、文字が墨書きされた木札（fig. 21・5）を確認したため、今回追加報告する。なお、この文字の判読および釈文・解説の作成にあたって、奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室のご教示とご指導を得た。

木札には「乙茂村佐右衛門」と判読できる（98×27×4　011）。上端粗い削り、下端および左辺削り、右辺削りか。表裏両面の整形は粗い。腐食が進み、木目が目立つ。樹種はスギである。

「乙茂村」（おともむら）は、近世では陸奥国閉伊郡と伊豆国三島郡に所在するが、本遺跡の近隣には確認できない。ただし、古代では近隣に「雄伴郡」（おともぐん）があったことが知られている。雄伴郡の名は9世紀半ばには消えたとみられるが、「雄伴」と「乙茂」の名称に何らかのつながりがあるならば、この木簡は「おとも」の地名が近世まで生きていたことを示す貴重な資料となり得る。

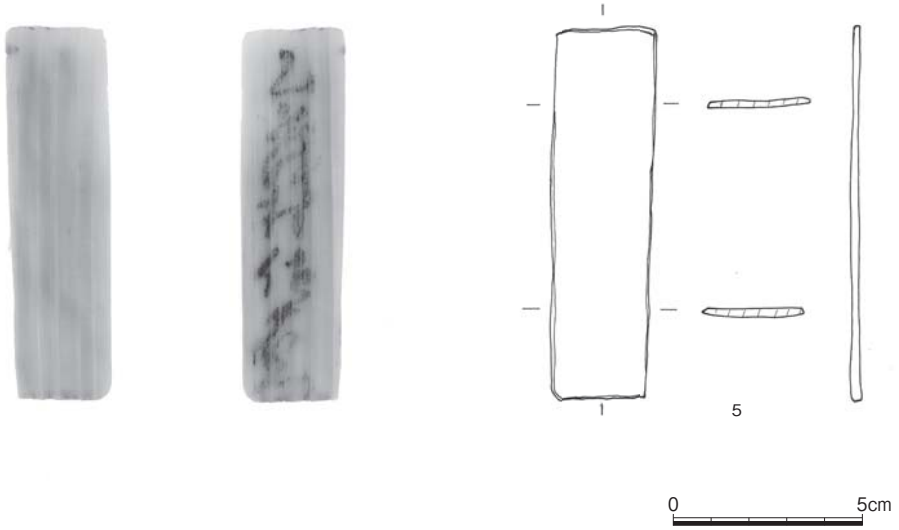


fig. 21　第12次調査B74区出土墨書木札

B75-A区

立地

当該区はB74区に引き続き、安定した浜堤上に位置する。遺構面を２面検出した。

基本層序

盛土層の下、近世の耕作土上面で南北方向の犂溝が数多く検出される（第１遺構面）。更に下げてゆくと、黄灰色中砂（浜堤堆積砂）上面で落ち込みや土坑が確認された（第２遺構面）。

第１遺構面（犂溝）

茶褐色中砂～細砂層上面で南北方向に走る多数の溝を検出した。各溝の幅は約0.2～0.4m、深さは0.1m以下である。SD01は幅1.2mを測る溝で、幕末頃の遺構であると考えられる。

第２遺構面（土坑・落ち込み）

黄灰色中砂（浜堤堆積砂）上面で遺構を検出した。SX01～SX04は不定形な落ち込みである。SK01は直径0.4m、深さ0.2mほどの土坑で、７の無頸壺が１点出土した。

出土遺物

６は土師質の有溝土錘で耕作土内出土、７はSK01出土の弥生時代中期末頃の無頸壺である。

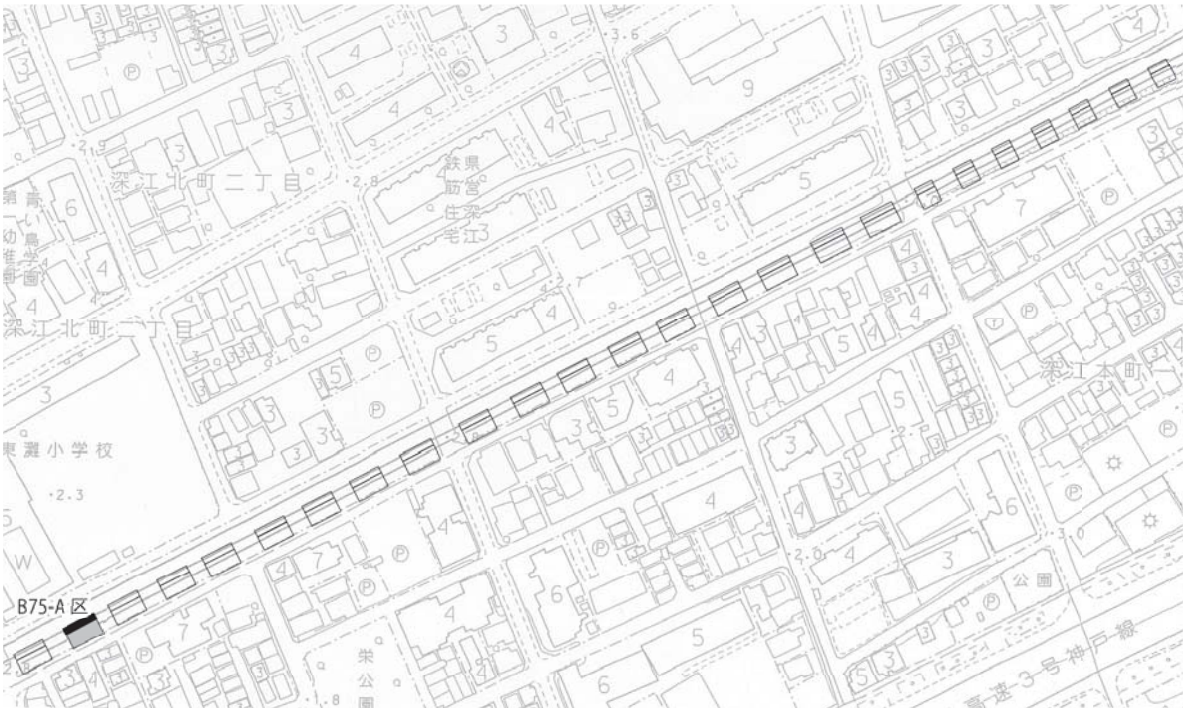


fig. 22　B75-A区位置図

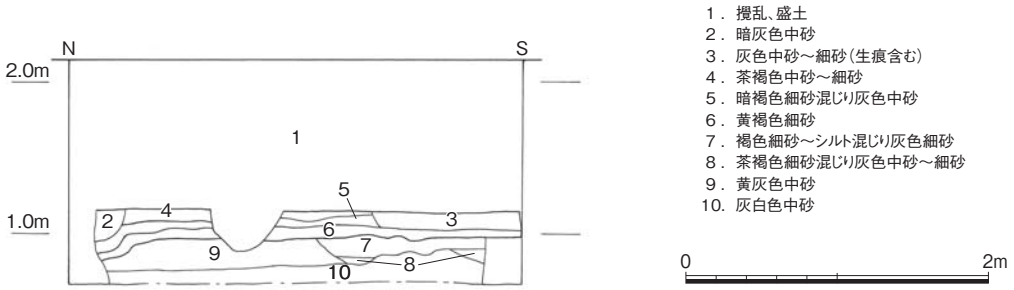


fig. 23　B75-A区東壁断面図

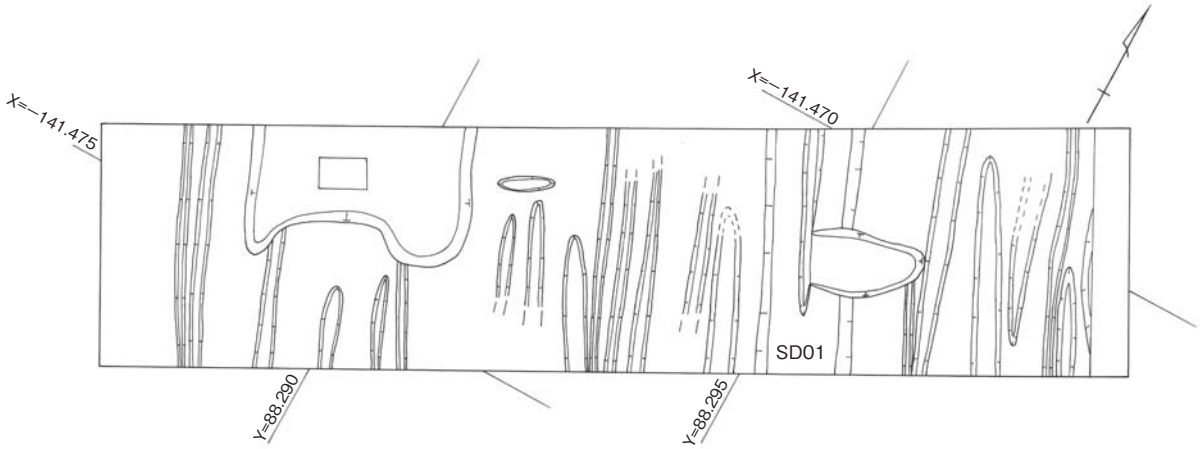


fig. 24　B75-A区第1遺構面平面図

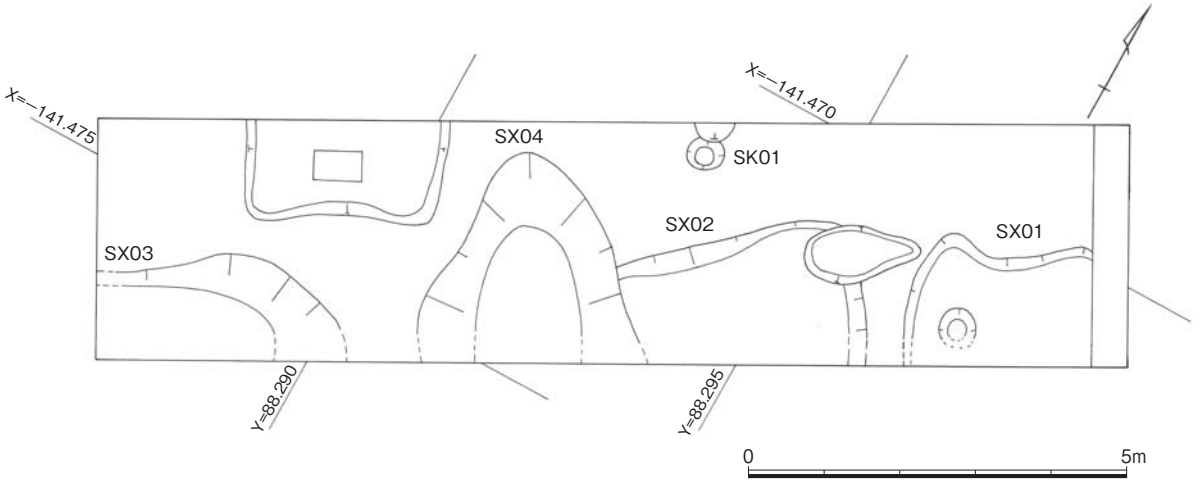


fig. 25　B75-A区第2遺構面平面図

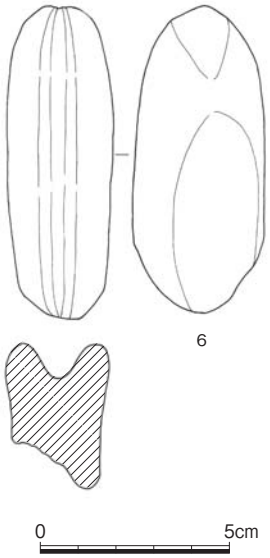


fig. 26
B75-A区出土有溝土錘

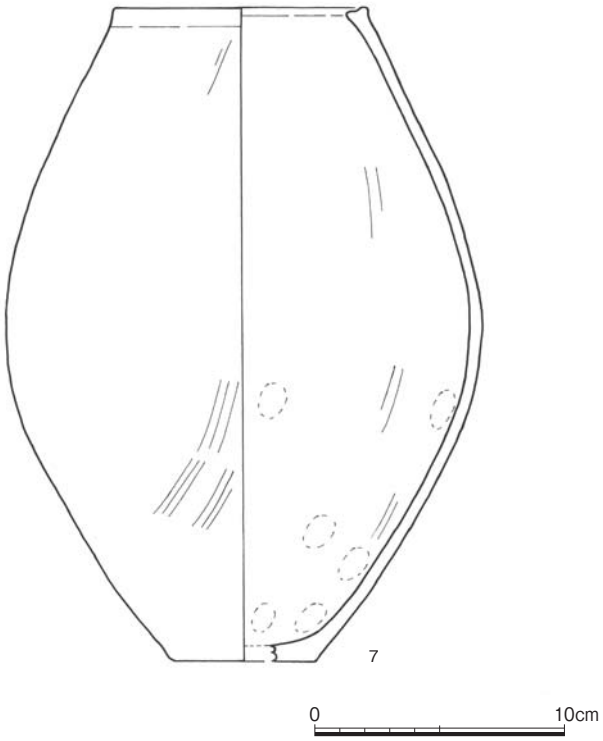


fig. 27　B75-A区出土土器

B75-B区

立地

当該区は浜堤から湿地への変換点にあたっており、西から東に傾斜した地形である。

基本層序

中近世の耕作土層の下は西側では浜堤堆積物、東側では湿地堆積物となる。

第1遺構面（犂溝）

褐灰色粗砂～中砂層上面で南北方向に走る溝を検出した。西端では浜堤堆積物が確認される。

第2遺構面（人の足跡）

上記の層の下は調査区西側では浜堤の上面が、東側では湿地の上面が現れる。浜堤と湿地の境界付近では、人の足跡が複数確認された。浜堤と湿地の境界の斜面では土器が出土した。

fig. 28　B75-B区位置図

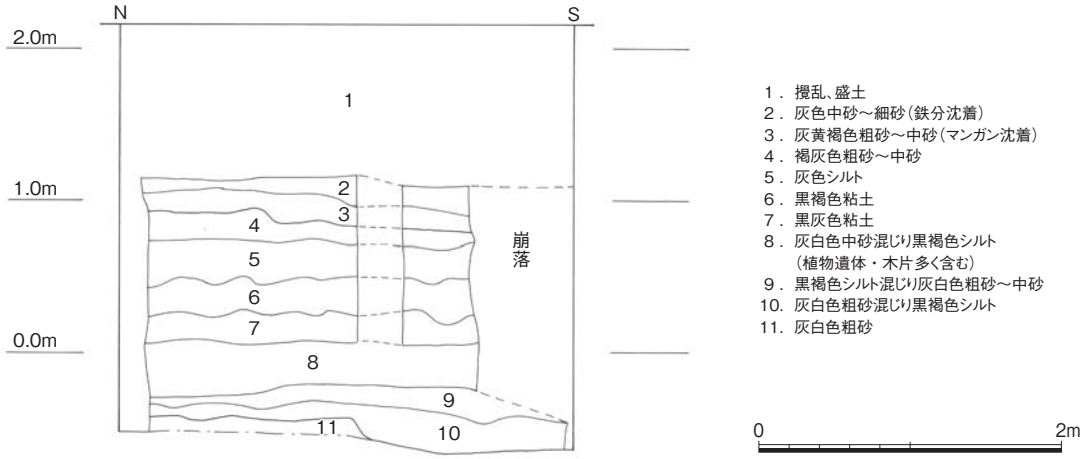


fig. 29　B75-B区東壁断面図

出土遺物

8は木製鋤の身の部分である。先端部は欠失しているが、着柄の突起部と四角い穴を彫り窪ませている。湿地堆積物の下層から出土した。9は須恵器坏、10～12は弥生時代末～古墳時代初めの土器である。11は焼成前に底部穿孔を施す。9は中世耕作土層、他は浜堤と湿地の境目から出土した。

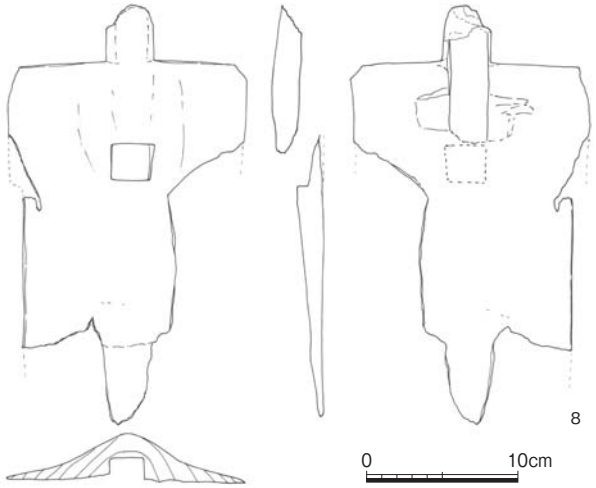


fig. 30　B75-B区出土木製品

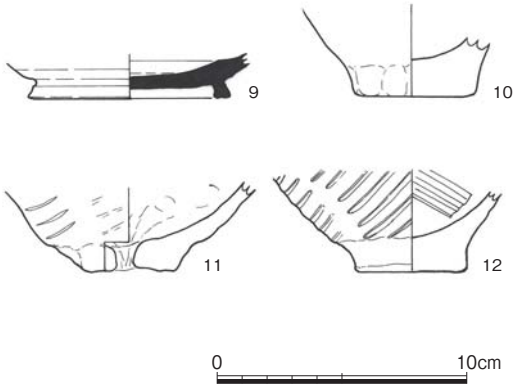


fig. 31　B75-B区出土土器

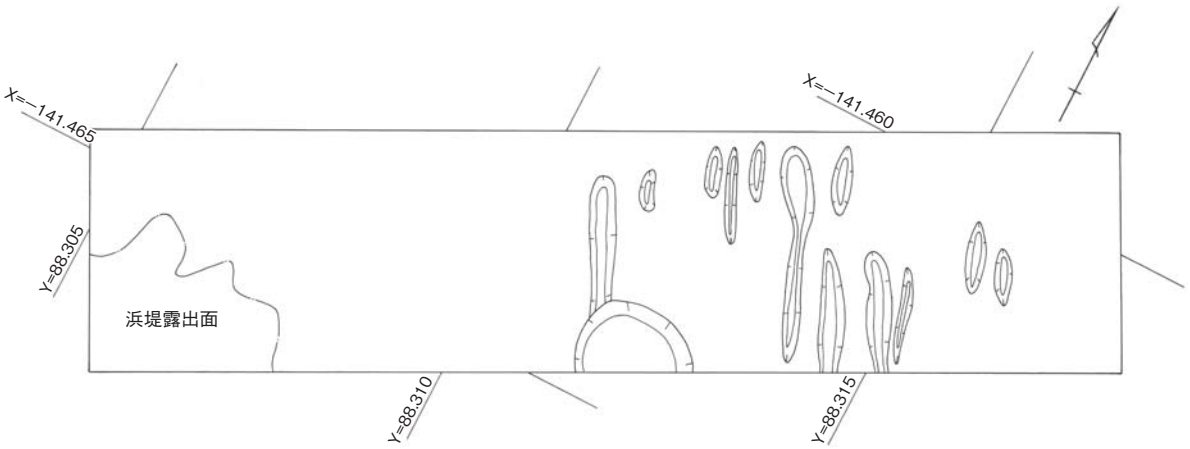


fig. 32　B75-B区第1遺構面平面図

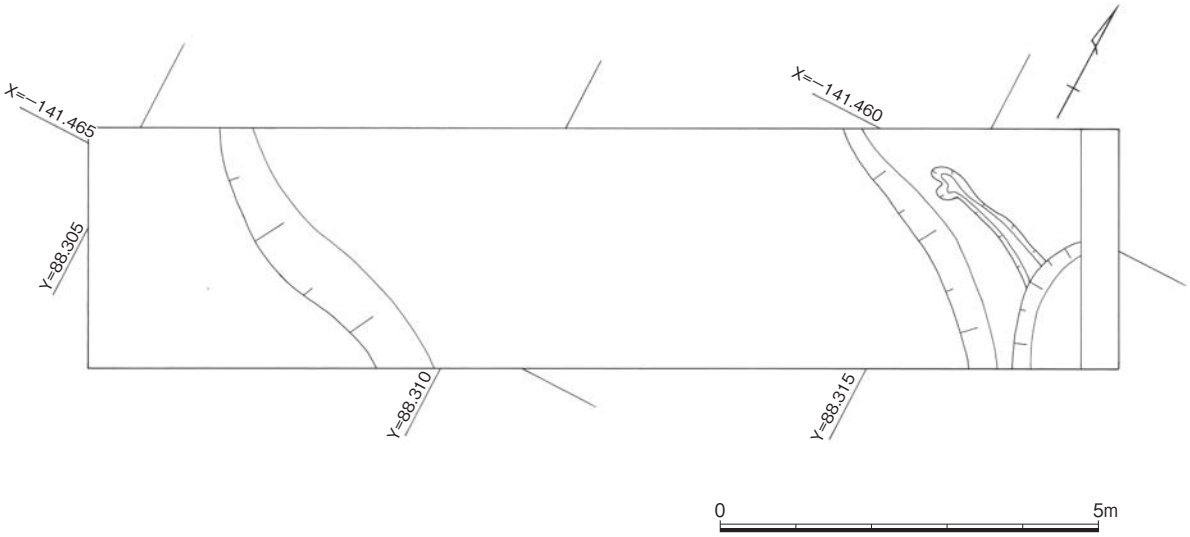


fig. 33　B75-B区第2遺構面平面図

B76-A区

立地

当該区は湿地から浜堤への変換点に当たり、東から西に落ち込んだ地形となっている。

基本層序

盛土下には近代耕作土、中・近世耕作土が堆積する。以下には東側では浜堤堆積物が、西側では湿地の堆積物が確認される。

第1遺構面（犂溝）

褐灰色粗砂～中砂上面で、南北方向に走る複数の溝を検出した。各溝の幅は約0.2～0.5m、深さは0.1m以下である。

第2遺構面（湿地と浜堤の境界の確認）

暗灰褐色中砂～細砂層を掘り下げた段階で、調査区東側では浜堤の上面が、西側では湿地の上面が現れる。上層では土師器や須恵器片が出土する。湿地をB75-B区の灰白色中砂混じり黒褐色シルト層相当層まで掘削したところ、弥生土器片が出土した。また、浜堤と湿地の境界の斜面部分でも弥生時代後期末頃の土器片が出土した。

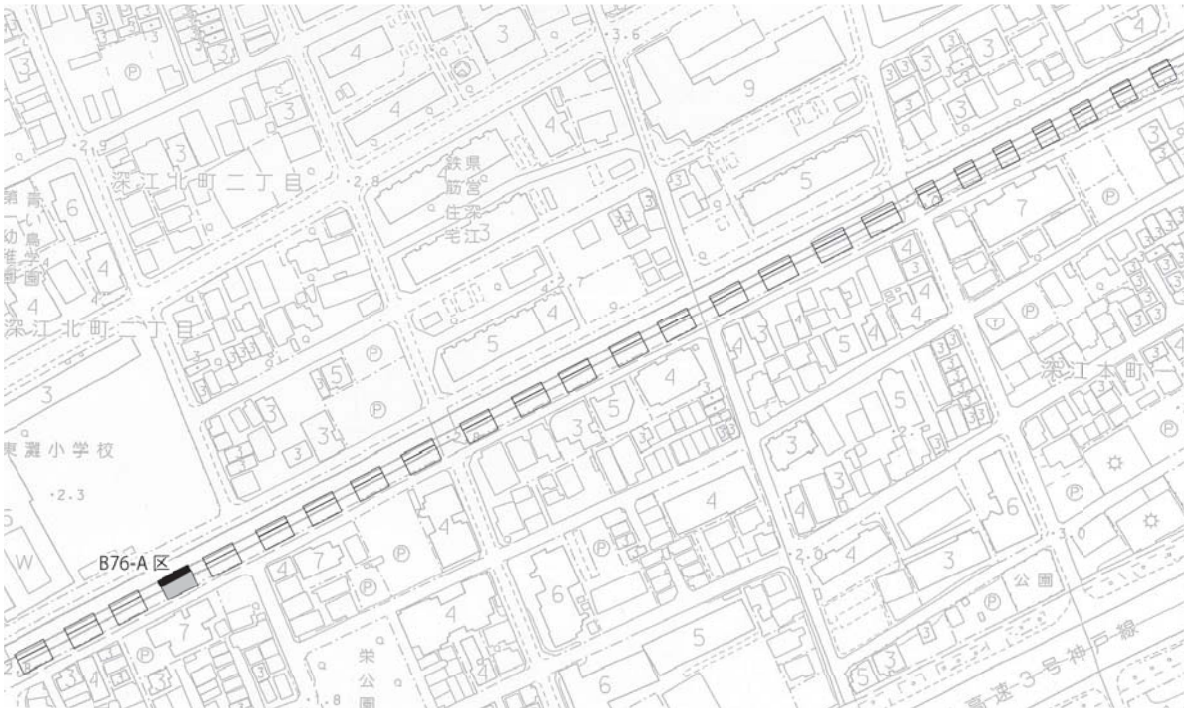


fig. 34　B76-A区位置図

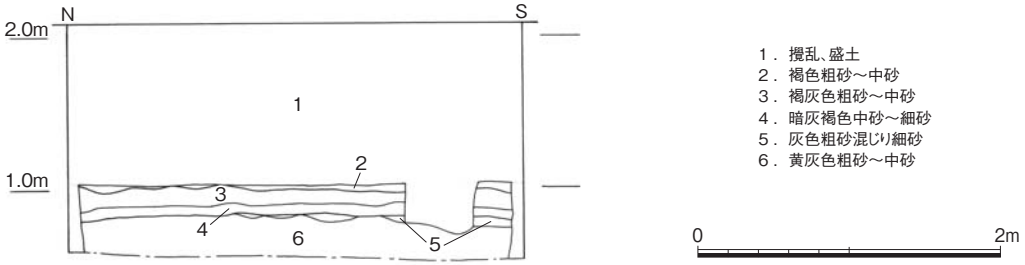


fig. 35　B76-A区東壁断面図

出土遺物

13は青磁皿で釉が厚く掛り、内面に放射状の文様を彫る。14，15は弥生時代～古墳時代初め頃の土器で、15は球形の胴部に内傾気味の口縁部を付ける。胴部下半部は右斜め上、上半部は水平なタタキ目を施す。13は中世耕作土、14は湿地下層、15は浜堤と湿地の境界で出土。

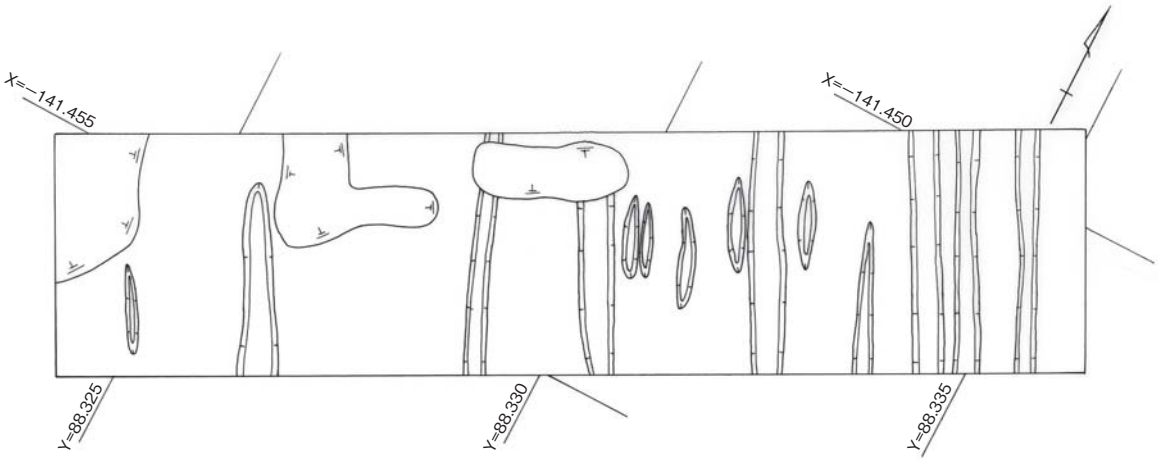


fig. 36　B76-A区第1遺構面平面図

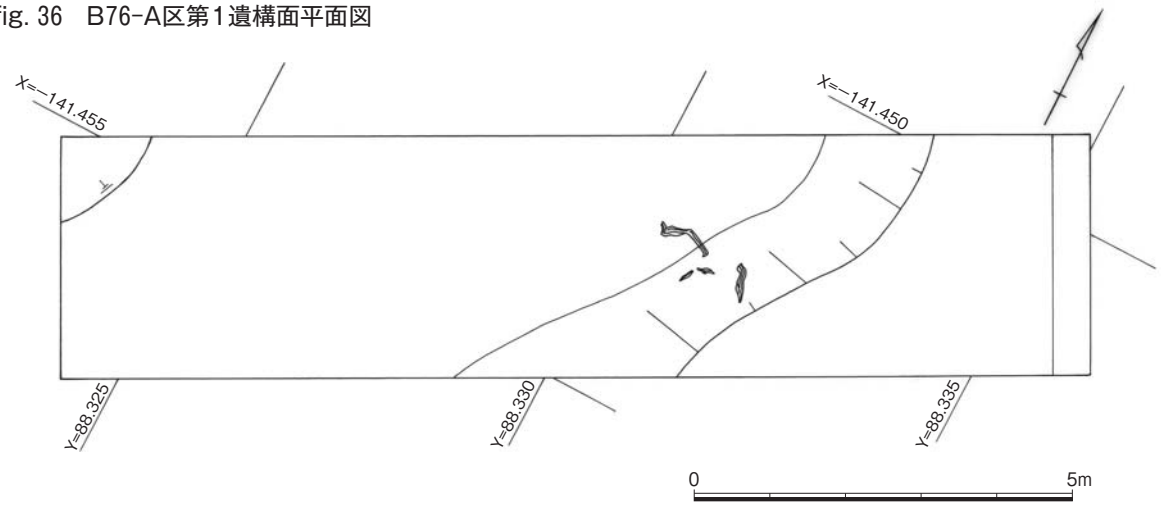


fig. 37　B76-A区第2遺構面平面図

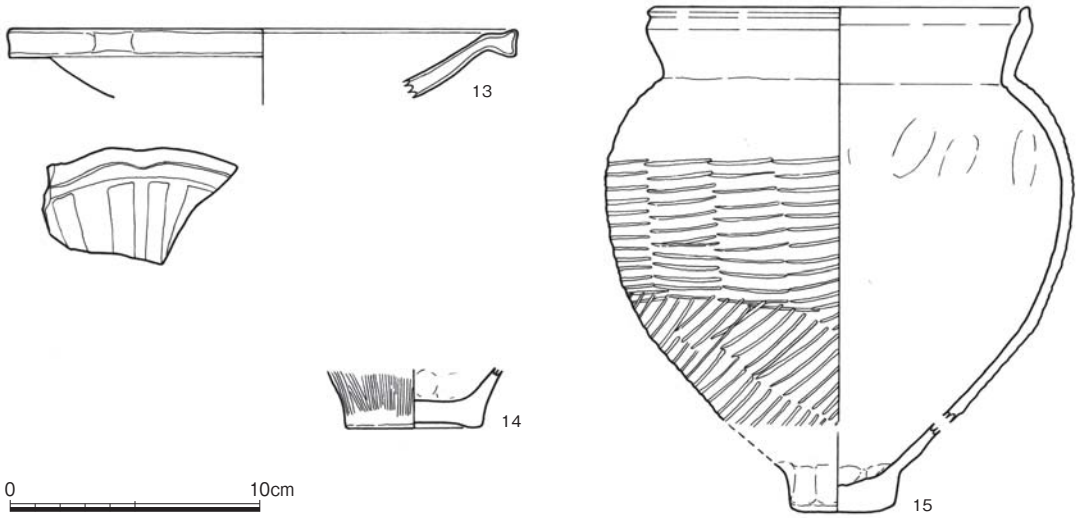


fig. 38　B76-A区出土土器

B76-B区

立地

当該区は浜堤の上に位置している。遺構面を２面検出した。

基本層序

盛土の下は中・近世の耕作土（暗灰色細砂・この上面が第１遺構面）となり、その下で浜堤の砂（黄灰白色粗砂）が現れる。この上面で流路を検出している（第２遺構面）。

第１遺構面（犂溝）

暗灰色細砂上面で、南北方向に走る多数の犂溝を検出した。各溝の幅は約0.2～0.7m、深さは0.1m以下で複数の溝が重複している。

第２遺構面（溝）

黄灰白色粗砂層（浜堤の砂）上面では、調査区西側において北西から南東に走る溝SD01を検出した。溝の幅は約0.7m、深さは約0.1mである。堆積土の状況から、自然流路であると考えられる。堆積土中からは少量の弥生時代の土器が出土したが、正確な年代は不明である。

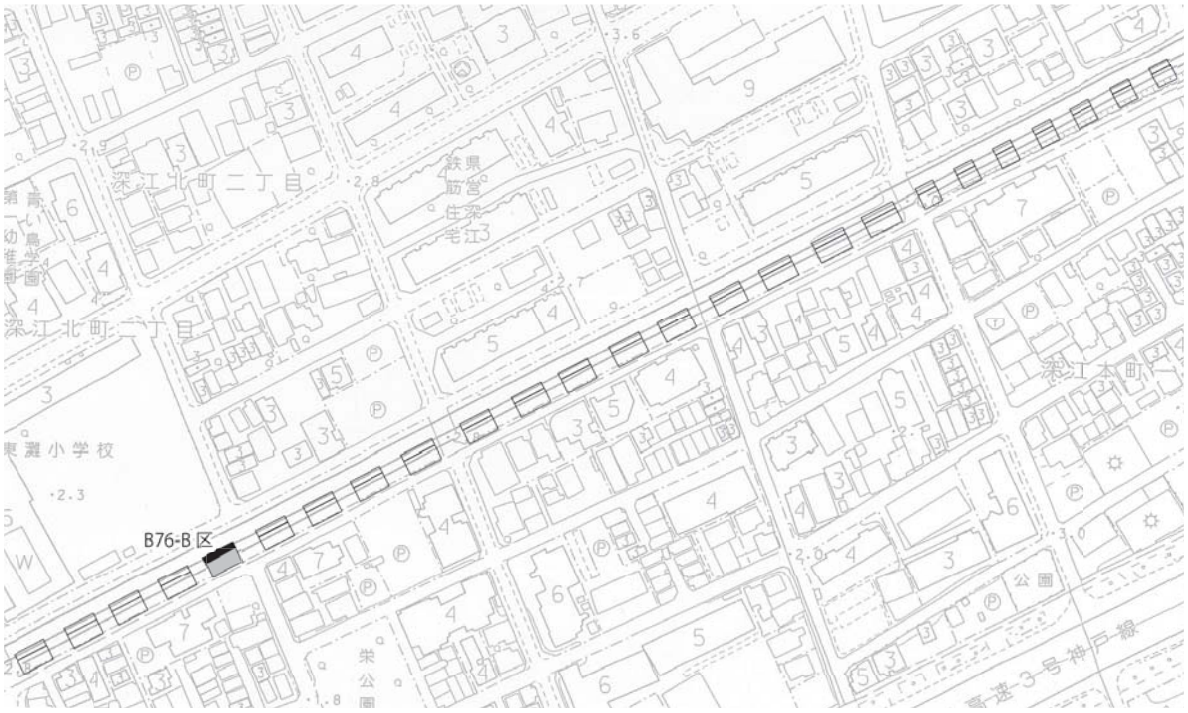


fig. 39　B76-B区位置図

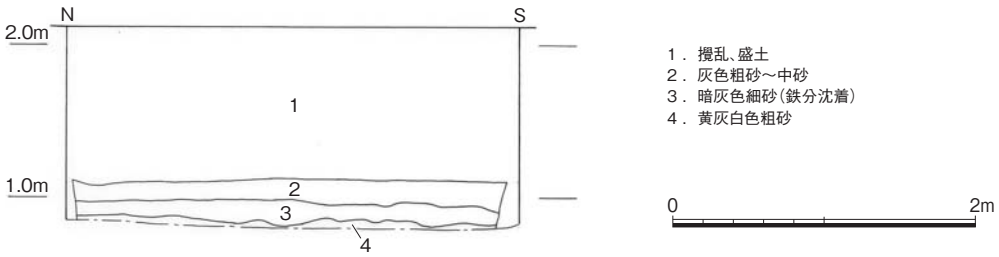


fig. 40　B76-B区東壁断面図

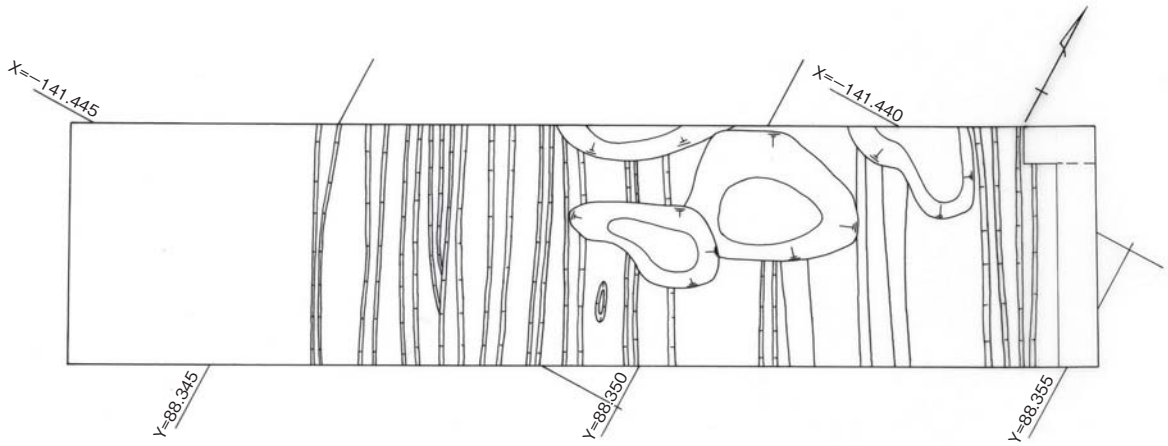


fig. 41　B76-B区第1遺構面平面図

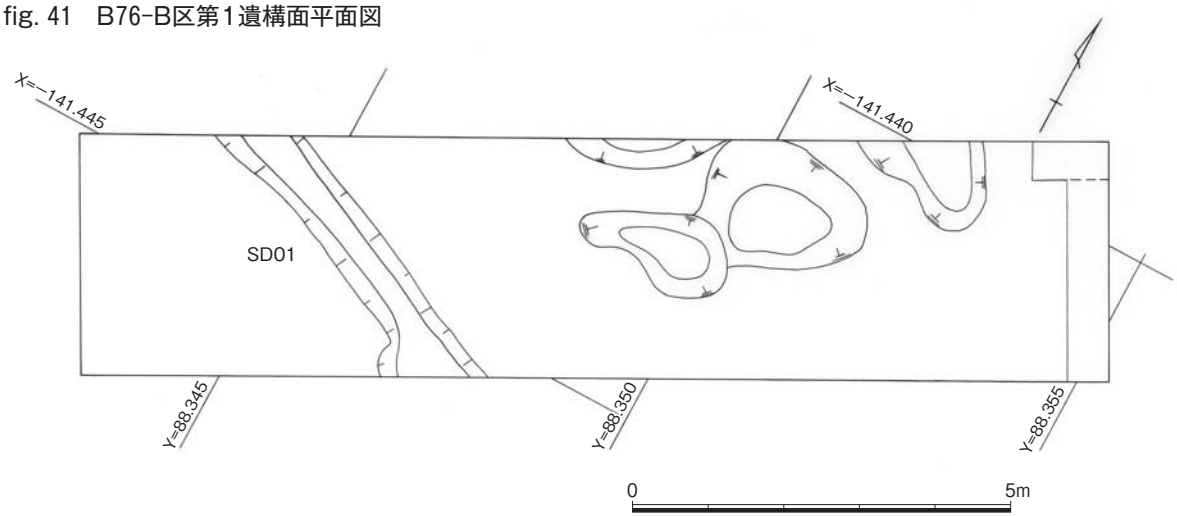


fig. 42　B76-B区第2遺構面平面図

出土遺物

16は須恵器の壷の底部から胴部で、平底の底部に直立する胴部を持つ。17は須恵器の鉢で、外側に開く高台を貼り付ける。

18は須恵器坏蓋の内面に墨書がわずかに残存するが、文字は不明である。いずれも中・近世耕作土である暗灰色細砂から出土した。

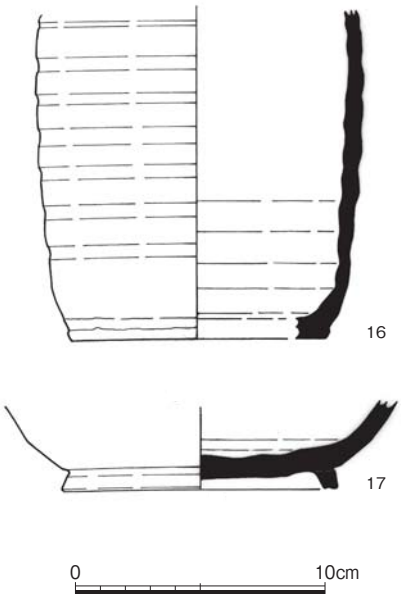


fig. 43　B76-B区出土土器

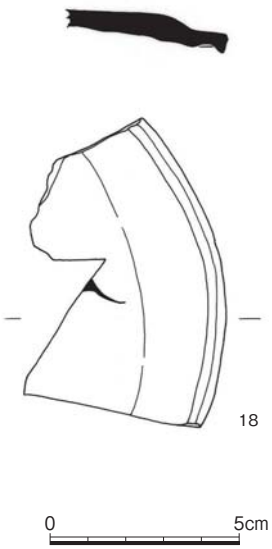


fig. 44
B76-B区出土墨書土器

B77-A区

立地

当該区においても浜堤が湿地を埋めてゆく過程が見られるが、浜堤は未発達である。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土層下には中・近世耕作土層（灰色粗砂混じり暗褐色粗砂～細砂・灰黄褐色中砂）が広がる。これらの下には奈良・平安時代の土器を含むシルト層（褐灰色細砂～シルト）が確認され、それ以下は黒褐色～黄灰色中砂（浜堤堆積層）となる。

遺構

当該区は浜堤の上に位置しているにもかかわらず、顕著な遺構は検出できなかった。前回の第12次調査では、潮の干満の影響を受けながら形成された東西方向の浅い流路１条を確認した。流路の堆積土はシルト主体であるが部分的には砂が混じった状態である。上層では古墳時代の須恵器、下層・底面では細片ではあるが古墳時代初頭頃の土器を含む。

今回の調査では奈良・平安時代の土器を含む褐灰色細砂～シルト層から石鏃が１点出土した。

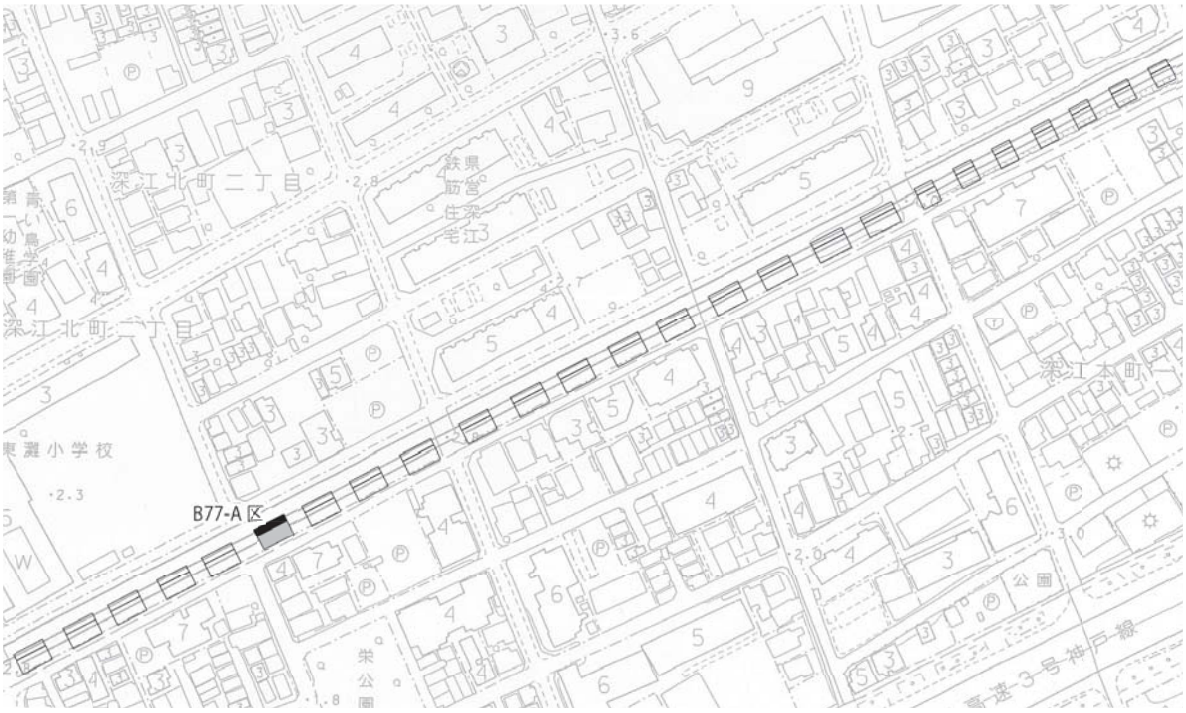


fig. 45　B77-A区位置図

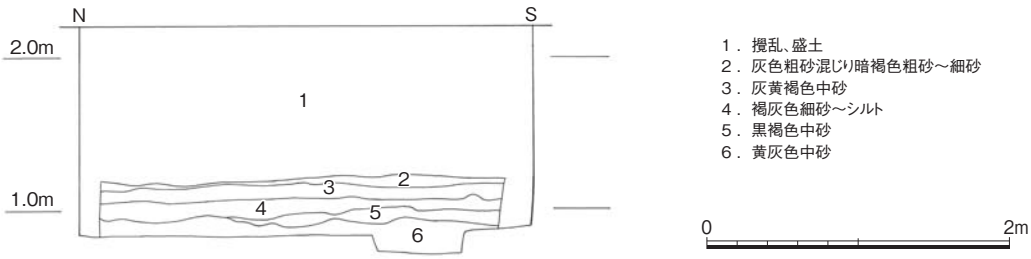


fig. 46　B77-A区東壁断面図

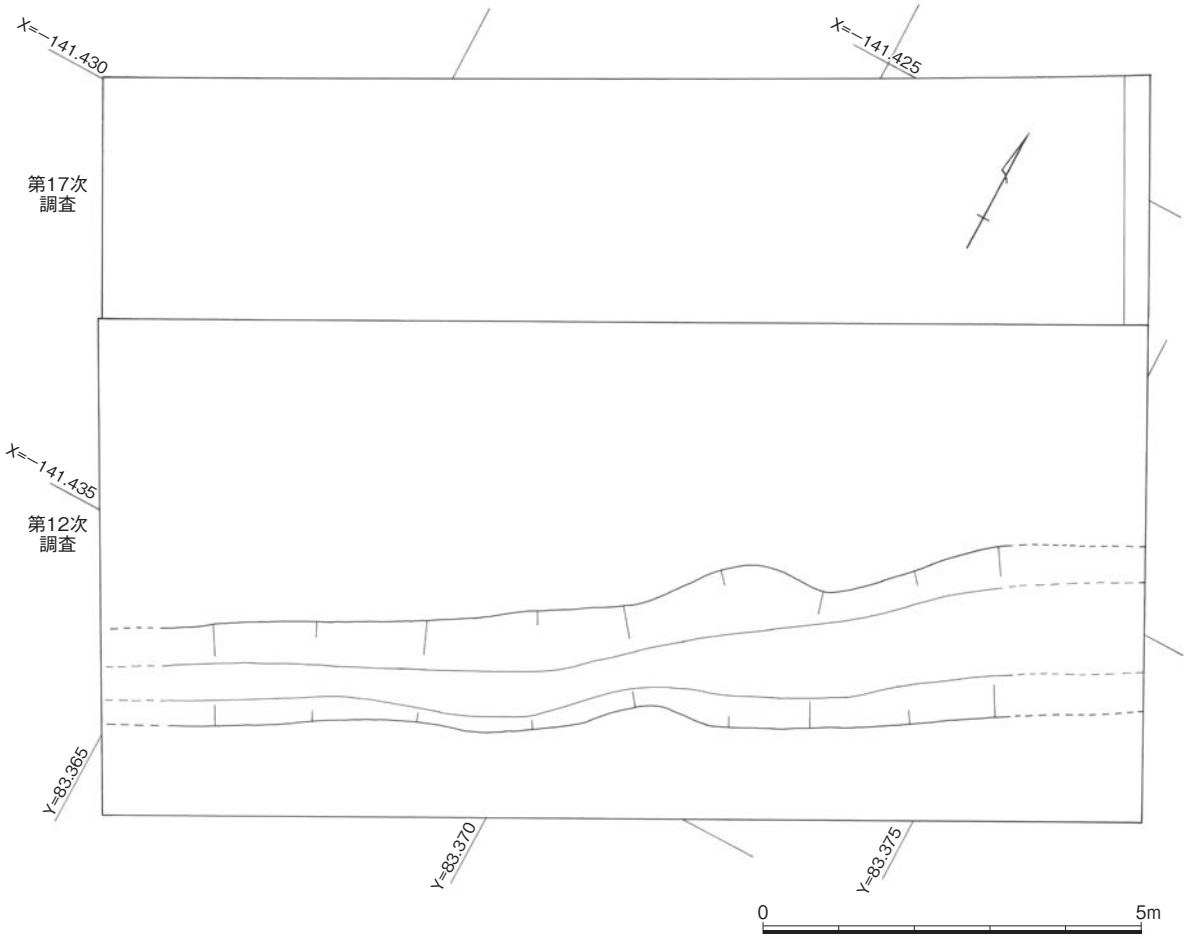


fig. 47　B77-A区第12・17次調査合成図

出土遺物

19は管状土錘、20は有溝土錘で、21はサヌカイト製の打製石鏃。22は須恵器壷で、底部は糸切り未調整。23は須恵器の坏蓋で内面に反りがある。24は高台付の須恵器坏。21は浜堤砂上面。その他は褐灰色細砂～シルト出土。

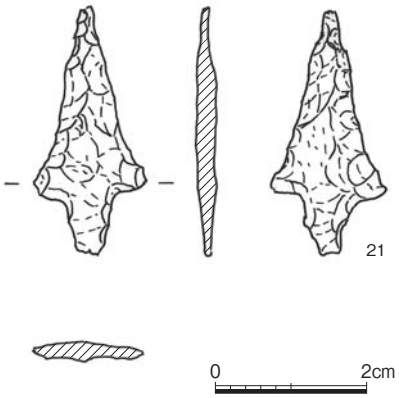


fig. 49　B77-A区出土石鏃

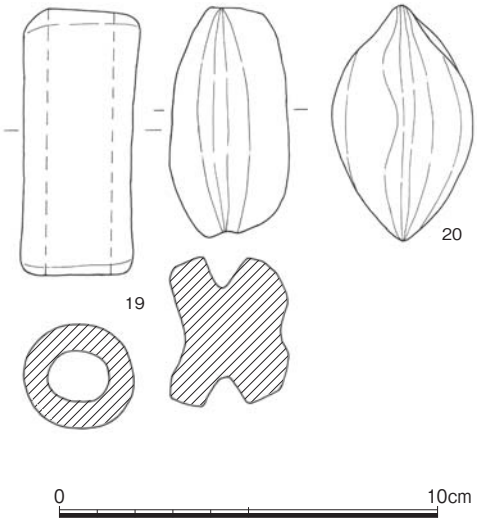


fig. 48　B77-A区出土管状・有溝土錘

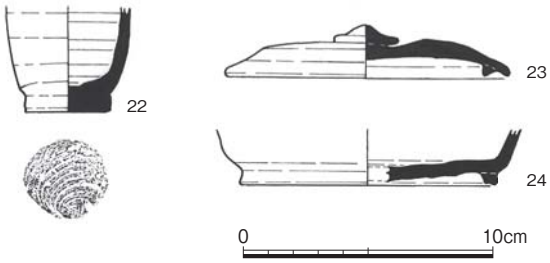


fig. 50　B77-A区出土土器

B77-B区

立地

当該区は浜堤の上に位置している。遺構面は1面確認された。

基本層序

分厚い盛土の下には中近世耕作土である灰褐色粗砂混じり黄褐色中砂～細砂・黄褐色シルト混じり灰色粗砂が堆積し、その下には炭化物を含む灰褐色粗砂が部分的に見られる。その下は黄灰色粗砂～中砂（浜堤の砂・遺構検出面）である。

遺構

黄灰色粗砂～中砂上面で、複数のピットを検出した。ピットの直径は約0.3～0.8m、深さは約0.1～0.2mである。遺構埋土からは土師器や須恵器の小片が出土した。また、この遺構面は全体にマンガンの沈着が認められる。

なお、南側に接した第12次調査では、この遺構面で東西方向の浅い流路が確認した。この流路は海水の干満の影響で形成されたものであり、下層では古墳時代初頭の土器・流木を含んでいた（fig. 54）。

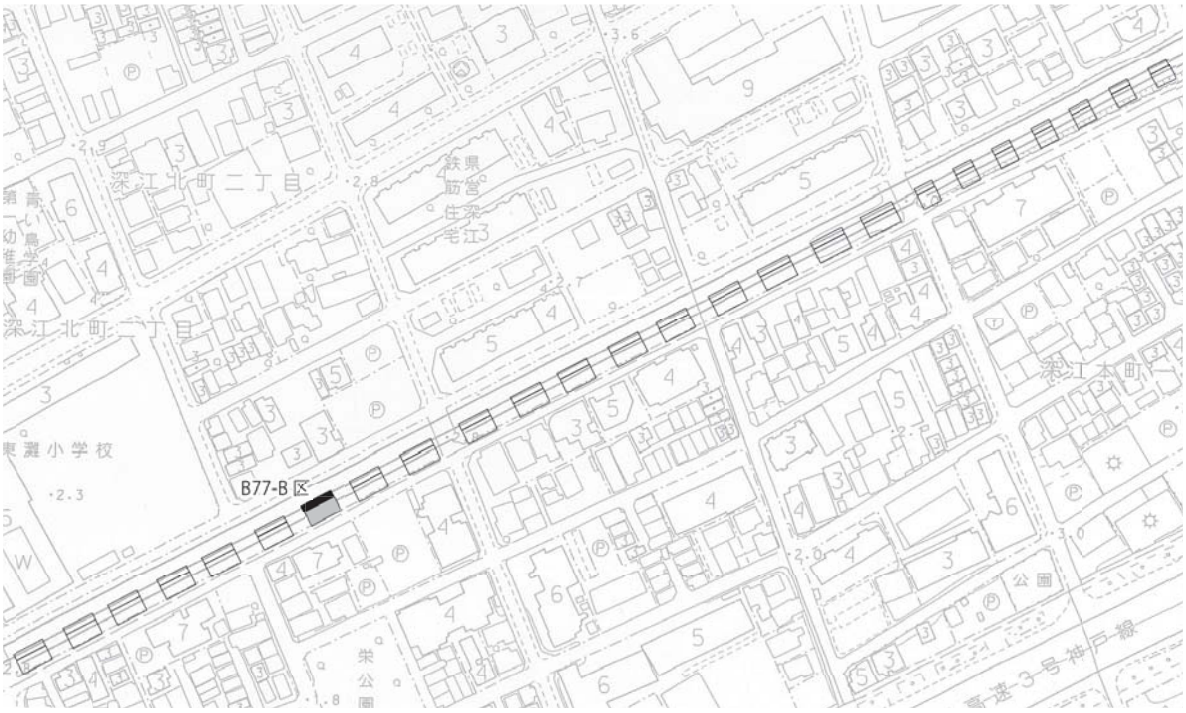


fig. 51　B77-B区位置図

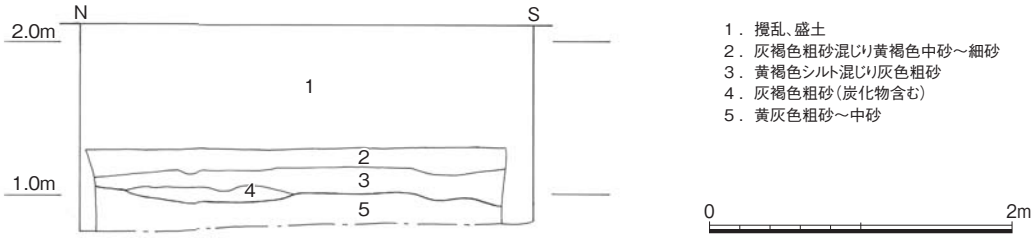


fig. 52　B77-B区東壁断面図

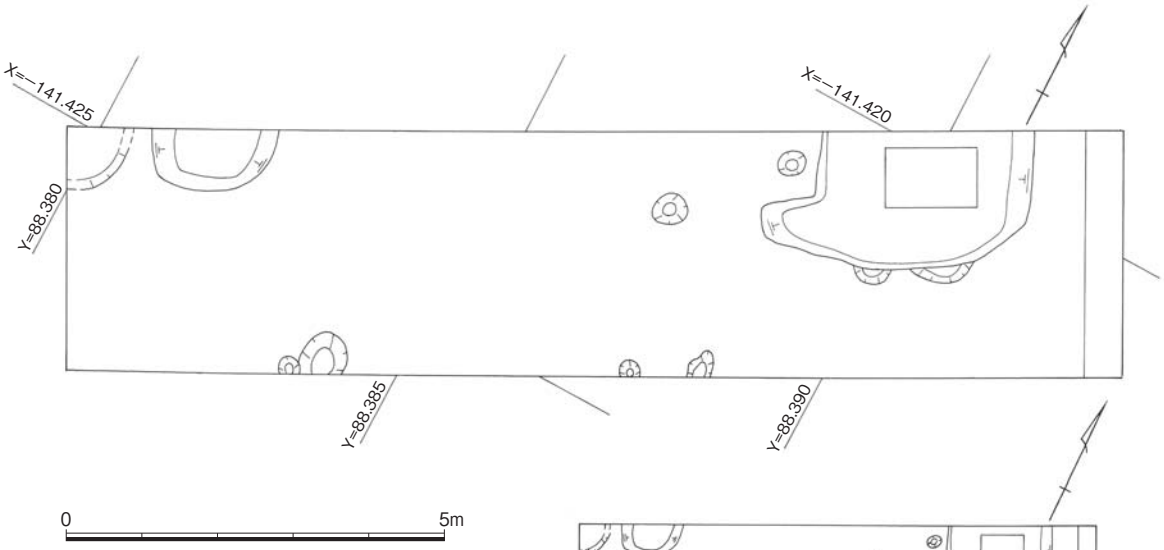


fig. 53　B77-B区遺構面平面図

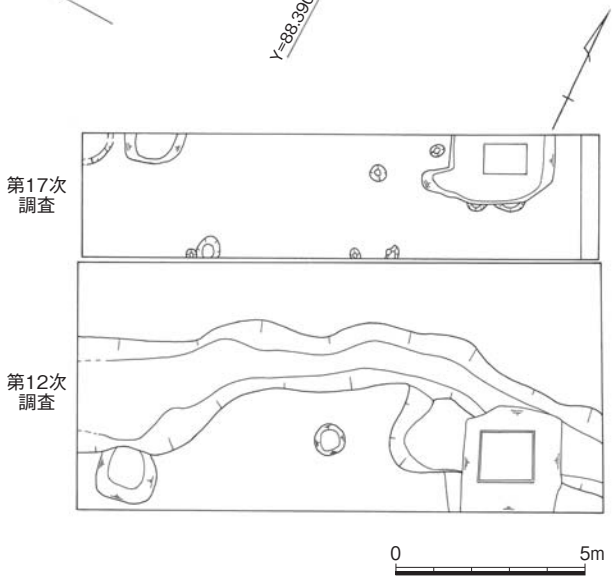


fig. 54　B77-B区第12・17次調査合成図

出土遺物

25の管状土錘は土師質で、一端を欠失している。中近世耕作土層出土。

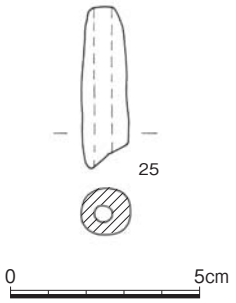


fig. 55
B77-B区出土管状土錘

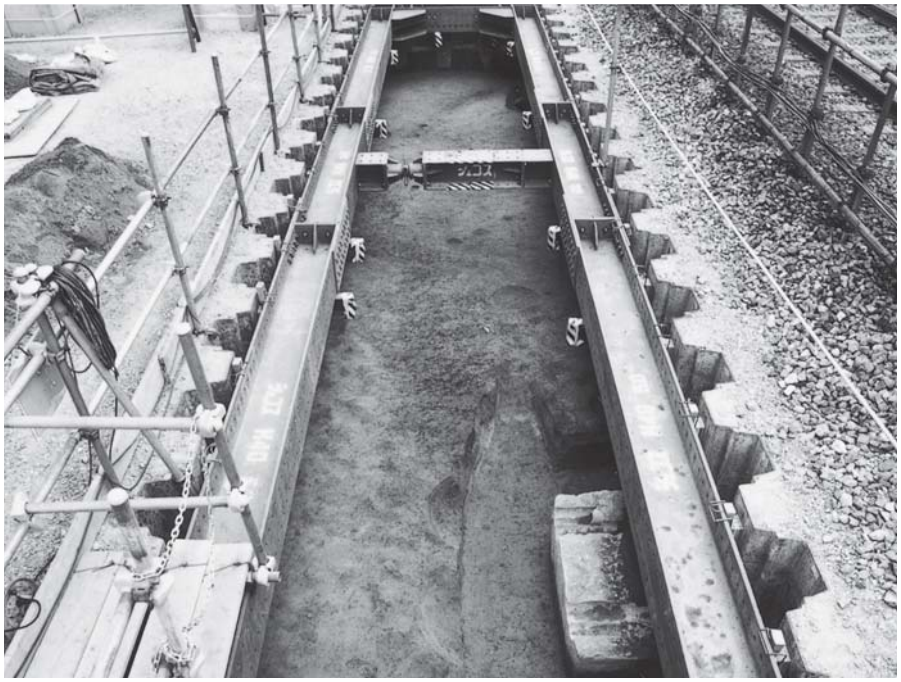


fig. 56　B77-B区遺構面全景（東から）

B77-C区

立地

当該区は浜堤から湿地への変換点に当たっており、西から東に向かって落ち込んでゆく地形となっている。

基本層序

阪神電車軌条設置時の分厚い盛土の下に、中近世耕作土（黄褐色細砂・暗褐色細砂）が残る。褐灰色粗砂層を除去すると、浜堤の堆積砂である灰色細砂～シルト層が現れ、西から東へ落ち込む地形を確認する。

浜堤と湿地の境界を確認

褐灰色粗砂層を掘り下げた段階で、調査区西側では浜堤の上面が、東側では湿地の上面が現れる。調査区範囲内では湿地の堆積は約0.2mの層厚であり、北東隅で少し落ち込んでいる。

湿地内堆積土である灰色細砂～シルト層にはほとんど遺物は含まれず、黒灰色シルト～粘土層の底部付近で弥生土器片が出土した。この落ち込みは第12次調査でも確認され、概ね今回の調査の落ち込み（浜堤と湿地の境界部分）と繋がる。

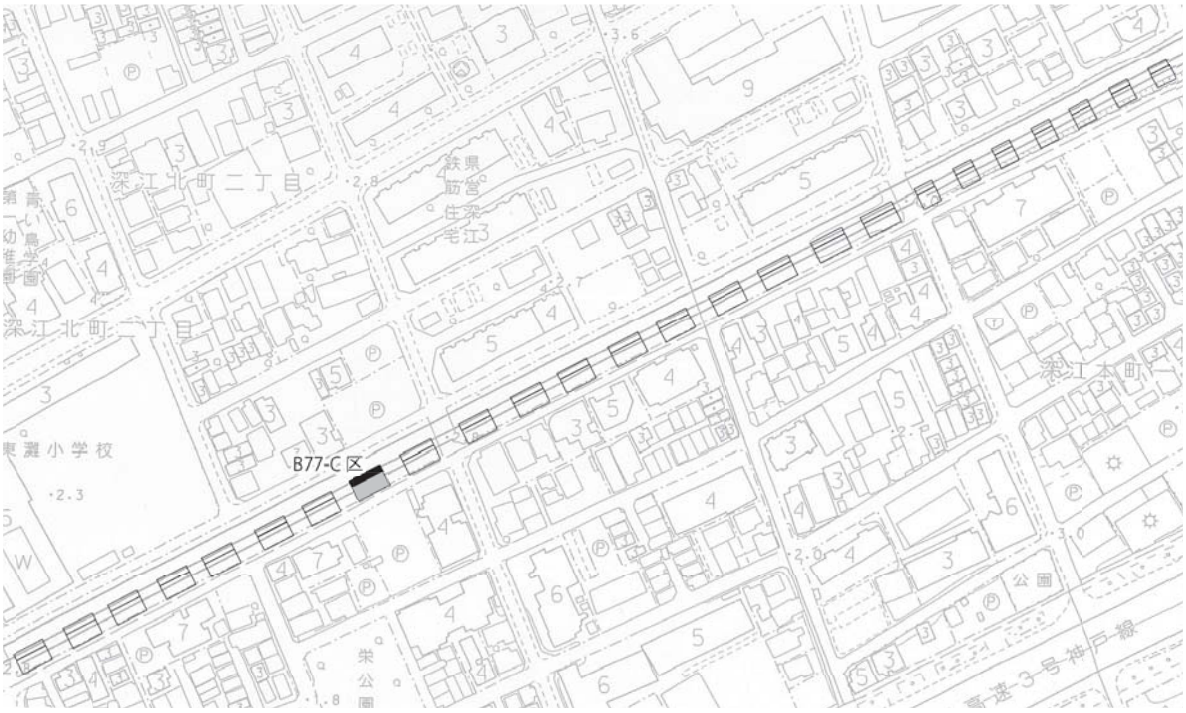


fig. 57　B77-C区位置図

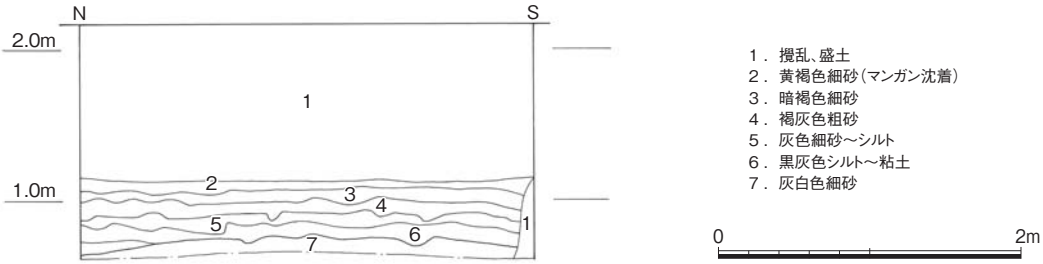


fig. 58　B77-C区東壁断面図

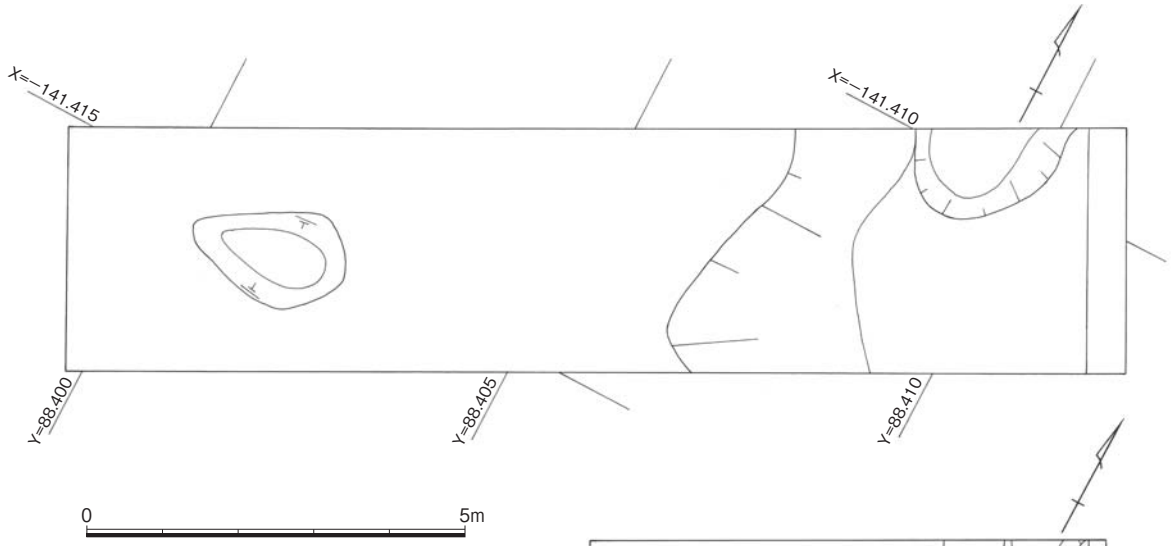


fig. 59　B77-C区遺構面平面図

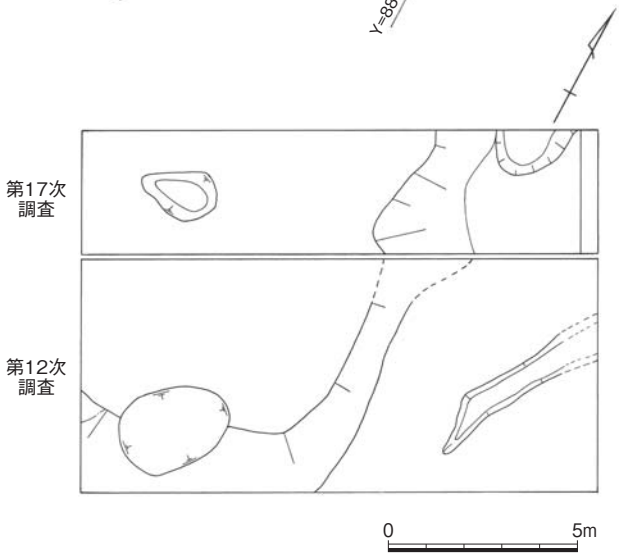


fig. 60　B77-C区第12・17次調査合成図

出土遺物

26は須恵器壷の口縁～頸部で、外反する端部を持つ。27は須恵器小壷の胴部～底部で肩部にあまり明瞭ではない稜を持つ。いずれも中近世耕作土（黄褐色細砂）出土である。

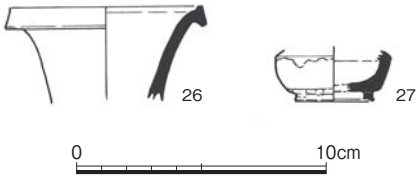


fig. 61　B77-C区出土土器

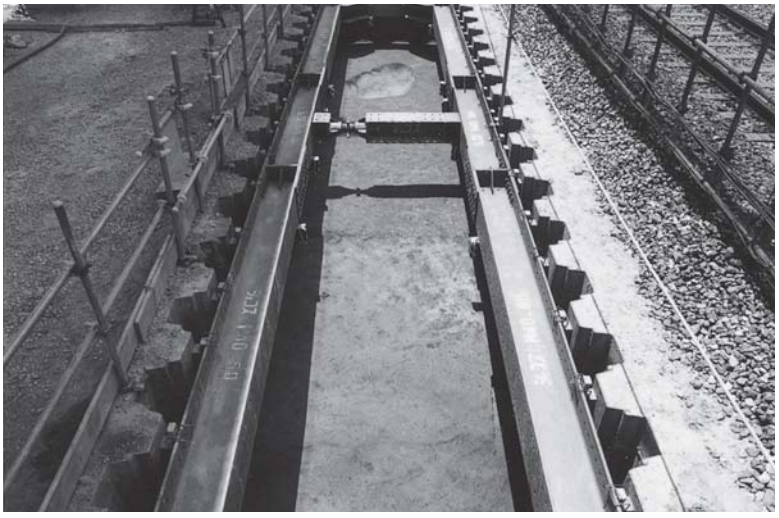


fig. 62
B77-C区全景
（東から）

B78区

立地

当該区は湿地から浜堤への変換点に当たっており、西から東に向かって高まってゆく地形となっている。この湿地はB77-C区の地形の変化と相対している。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土層、近世・中世の耕作土の下には、古墳時代～平安時代の土器を含む灰白色中砂混じり暗褐色中砂～細砂層が確認される。その下には湿地堆積物である黒灰色細砂～シルト層が厚く積もる。以下は灰色系のシルト～粗砂が堆積する。

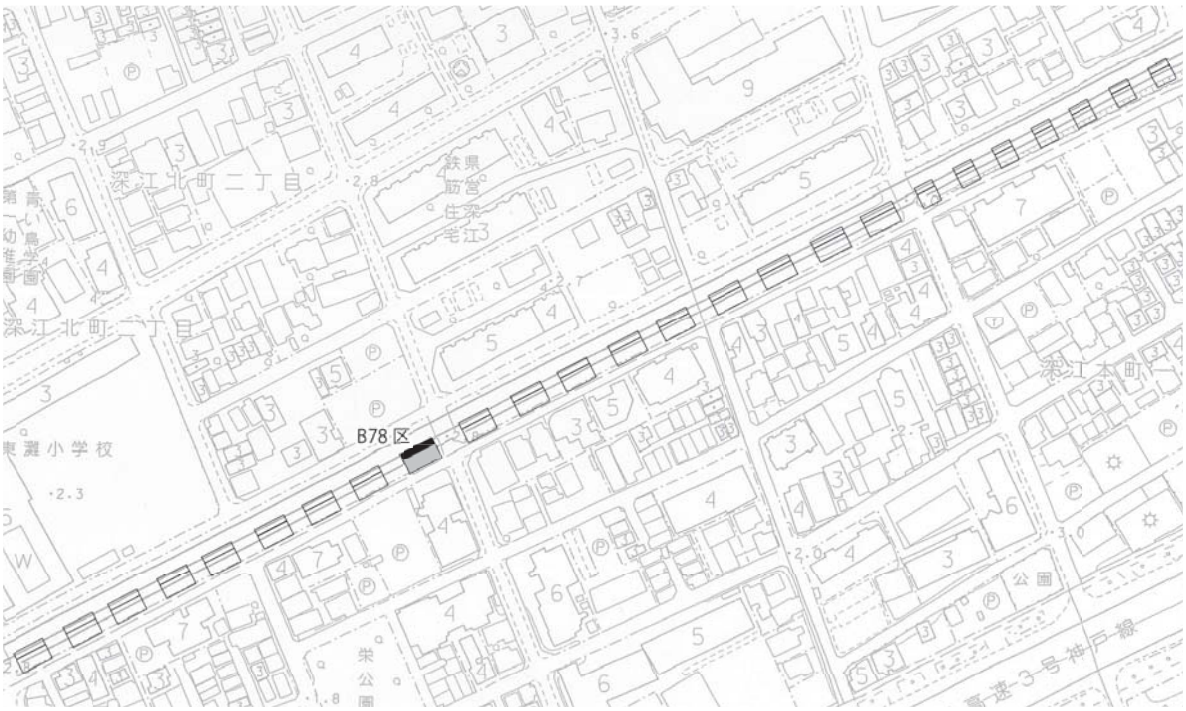


fig. 63　B78区位置図

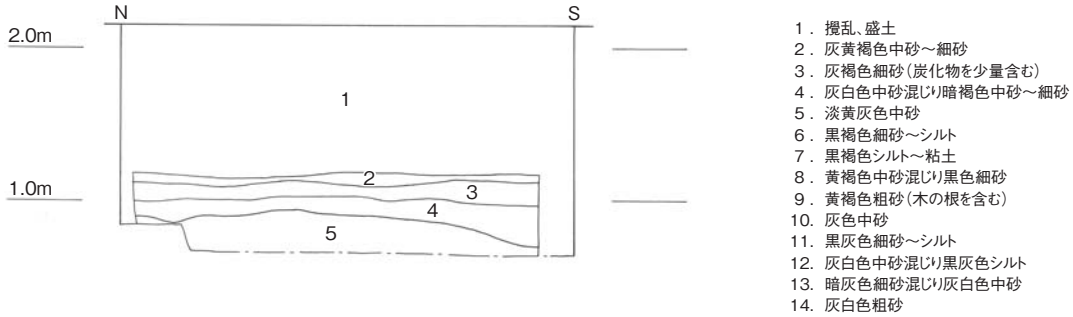


fig. 64　B78区東壁断面図

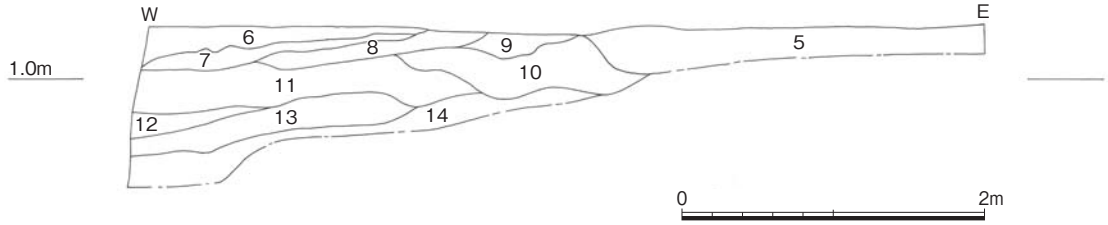


fig. 65　B78区北壁（東半）断面図

湿地と浜堤の境界を確認

灰白色中砂混じり暗褐色中砂～細砂層を掘り下げた段階で、調査区西側では湿地の上面が、東側では浜堤の上面が現れる。

湿地から浜堤へと変化する境界部分では、木の根が張っている状態で出土した。幹の部分は残存していなかったが、本来は調査区の北寄りに自生していたものと考えられる。また、調査区の西端でも木の根が出土しているほか、倒木などを数本確認した。

湿地の上層からは古墳時代の土師器や須恵器の破片が比較的多く出土している。中層では土器がほとんど出土しなくなり、代わりに植物遺体や自然木などが大量に発見されている。下層では古式土師器と木片が多く出土している。また底面付近では、残存状態の良い土器が数か所から出土し、特に調査区西端の落ち込みの底部からは完形に近い古墳時代前期（布留式土器）の甕が出土した。

第12次調査でも、同様の状態で湿地の中から大量の枝材や幹等が発見された。下層からは、幹が焼け焦げた状態の倒木や枝も出土している。それと同時に、棒状の木製品や槌の子の未成品、角材の先端を尖らせた建築部材と思われるものなどが古墳時代前期の土器とともに出土している。また、湿地の底面では、蛇行した流路状の落ち込みが確認されている。

出土遺物

①弥生土器・土師器

28，29，32は甕形土器で、球形の底部～胴部に、29，32は直線的な口縁部を持つ。32は明瞭な端面を作り出す。外面には胴部下半部は縦方向の刷毛目、上半部は横方向の刷毛目を施す。

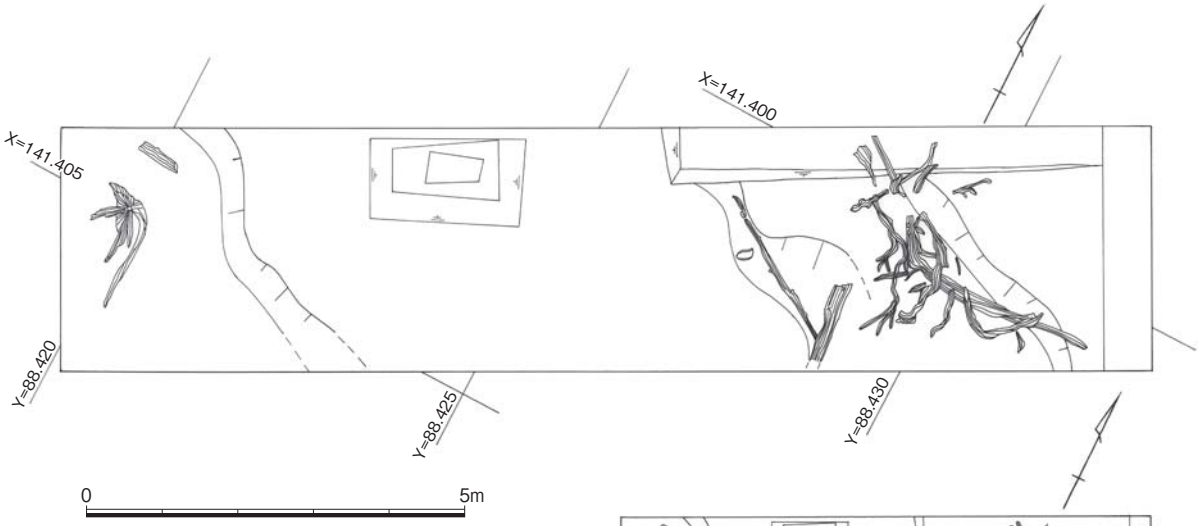


fig. 66　B78区自然木・木製品出土状況図

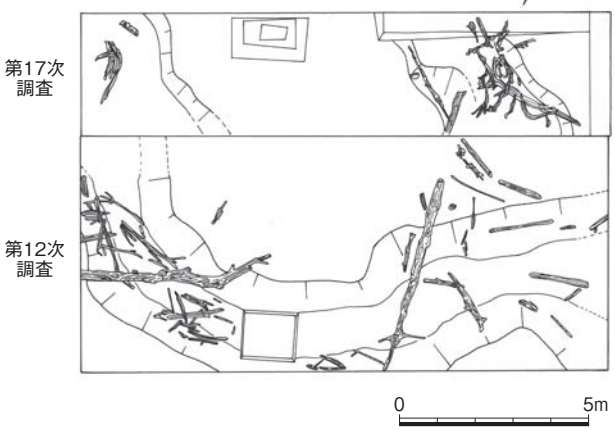


fig. 67　B78区第12・17次調査合成図

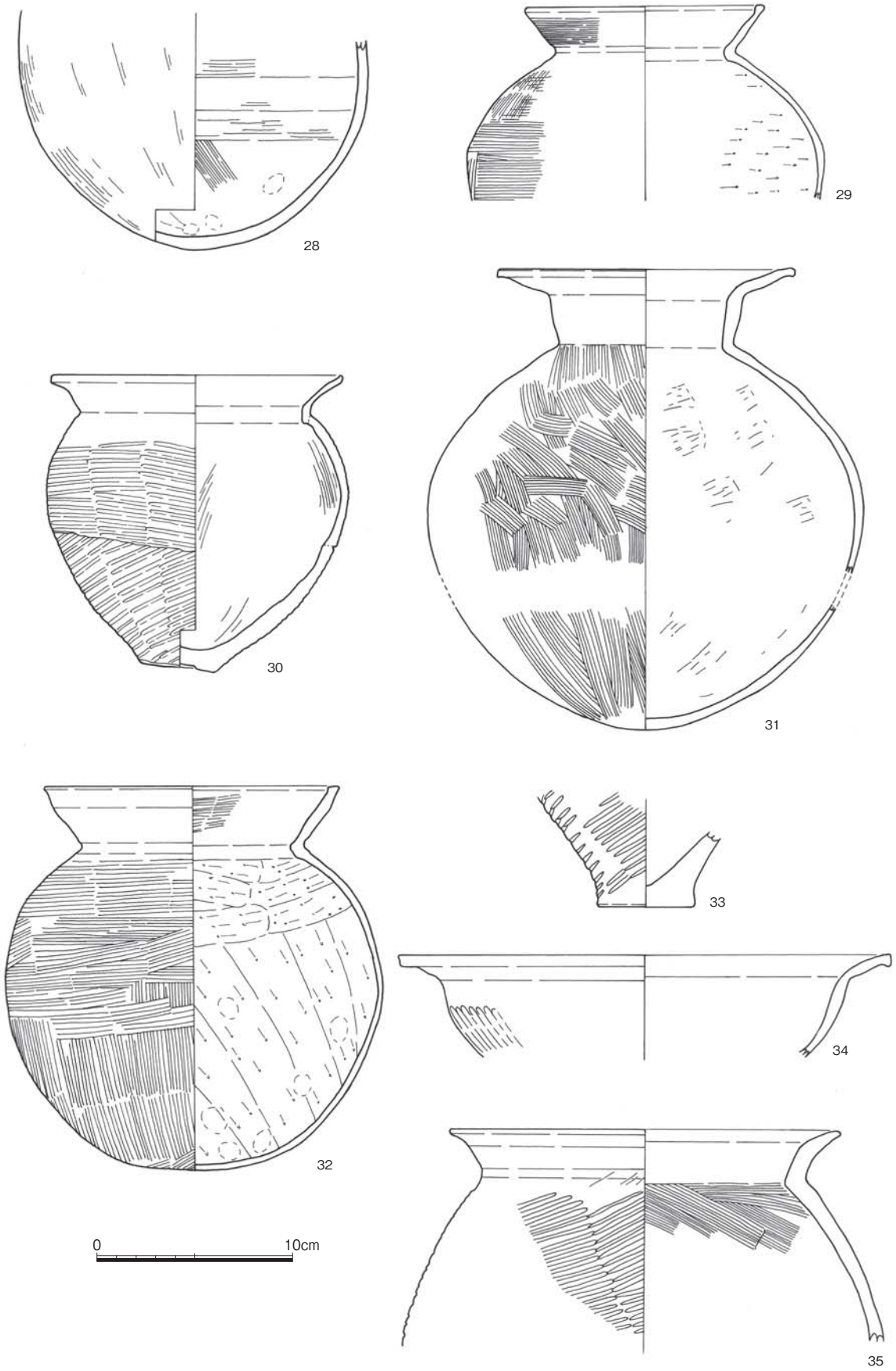


fig. 68　B78区出土土器（1）

内面はヘラ削りで器壁を薄く仕上げ(29, 32)、刷毛目で調整するもの(28)がある。

31は壷形土器で、球形の胴部に直立した頸部を持ち、屈曲して外反する口縁部を持つ。底部・胴部内外面共に刷毛目調整を行う。これらは古墳時代前期(布留式土器)のもので、湿地の下層から出土している。

30は甕形土器で、球形の胴部に外底面が窪む小さい底部を持つ。口縁部は外反する。底部には右上がり、胴部には平行なタタキ目を施す。内面は刷毛目とナデ調整を行う。古墳時代初頭(庄内式土器併行期)のものと思われる。浜堤と湿地の境界付近から出土した。

33は甕形土器の底部で、外面に右上がりのタタキ目を有する。底部は扁平。34は鉢形土器で、半球形の胴部に外反する口縁部を持つ。磨滅しているが外面にヘラ磨き痕が残る。これらは弥生時代後期のものと考えられる。いずれも湿地最下層から出土した。

35は甕型土器で、球形の胴部に内面に稜をもって屈曲する口縁部を持つ。胴部外面には右上がりのタタキ目、内面には刷毛目を施す。湿地底面から出土した。

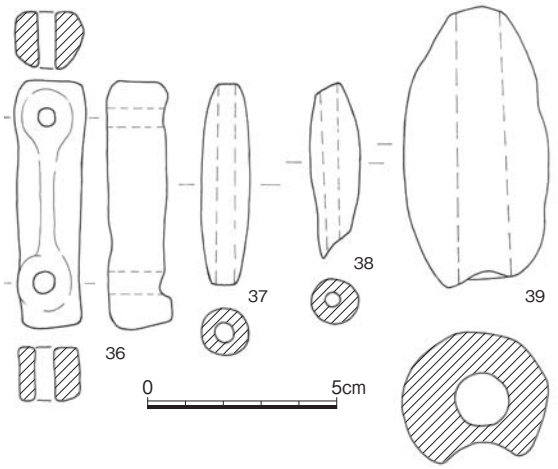


fig. 69　B78区出土有孔・管状土錘

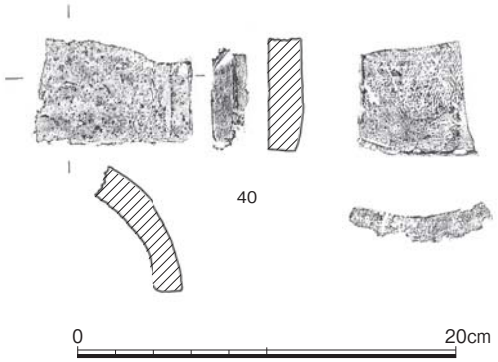


fig. 70　B78区出土瓦

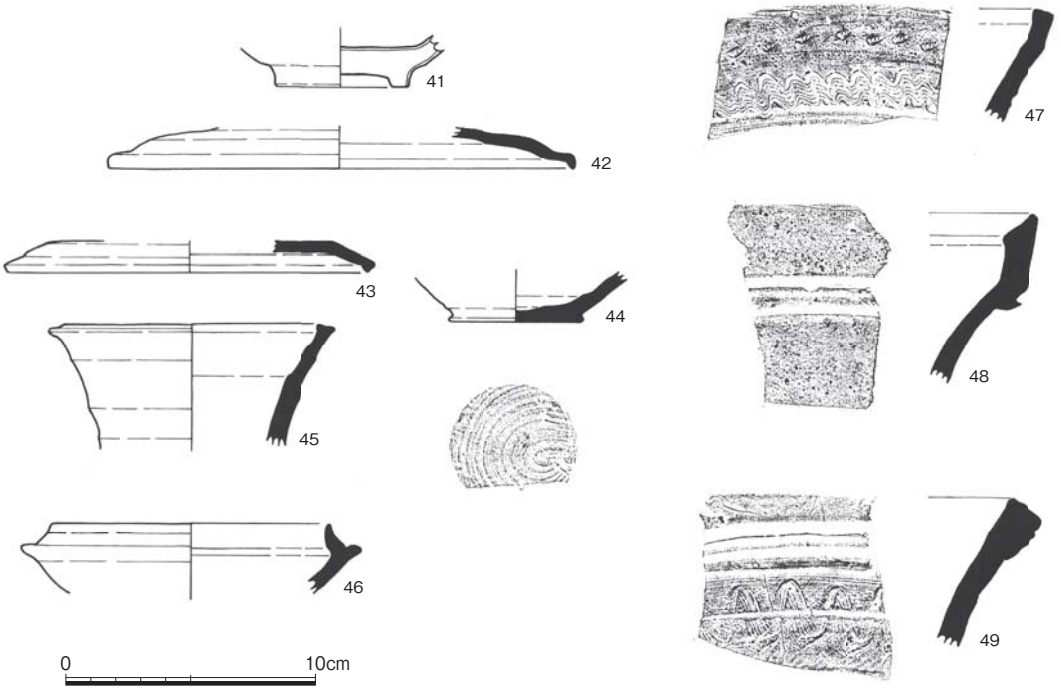


fig. 71　B78区出土土器(2)

②土錘

36は土師質の棒状有孔土錘、37，38，39は管状土錘で、丸い棒材に粘土を巻きつけ成形している。いずれも湿地直上層である灰白色中砂混じり暗褐色中砂～細砂層より出土。

③瓦

40は丸瓦の一部で、凸部にはヘラ削り、凹部には布目痕とヘラ削り痕が残る。焼成は瓦質。

④陶磁器・須恵器

41は青磁碗で分厚い高台部に厚く施釉する。内刳り、畳付部分は露胎である。中国龍泉窯系の碗である。中世耕作土から出土。42，43は須恵器坏蓋で、口縁部が内側にくの字に曲がるもの(42)、真直ぐのもの(43)がある。44は須恵器椀で、底部は糸切り底未調整。45は須恵器長頸壷の口縁部である。46は須恵器坏で短い立ち上がりを有する。47～49は須恵器甕の口縁部で頸部を列点文、波状文で加飾する。42～46は湿地の湿地直上層、47～49は湿地上層出土。

⑤ 墨書土器・転用硯

50は須恵器坏蓋内面に「大□」と墨書がある。周辺出土例からみて「大垣」である可能性が高い。51は坏蓋？の内面に「家」が墨書きされている。52は須恵器甕の胴部破片内面の湾曲を利用して、墨を磨った痕跡が残る。53は底部糸切りの皿の内面に薄い墨の痕跡がほぼ全面に残っている。これらはすべて湿地の上層で出土した。

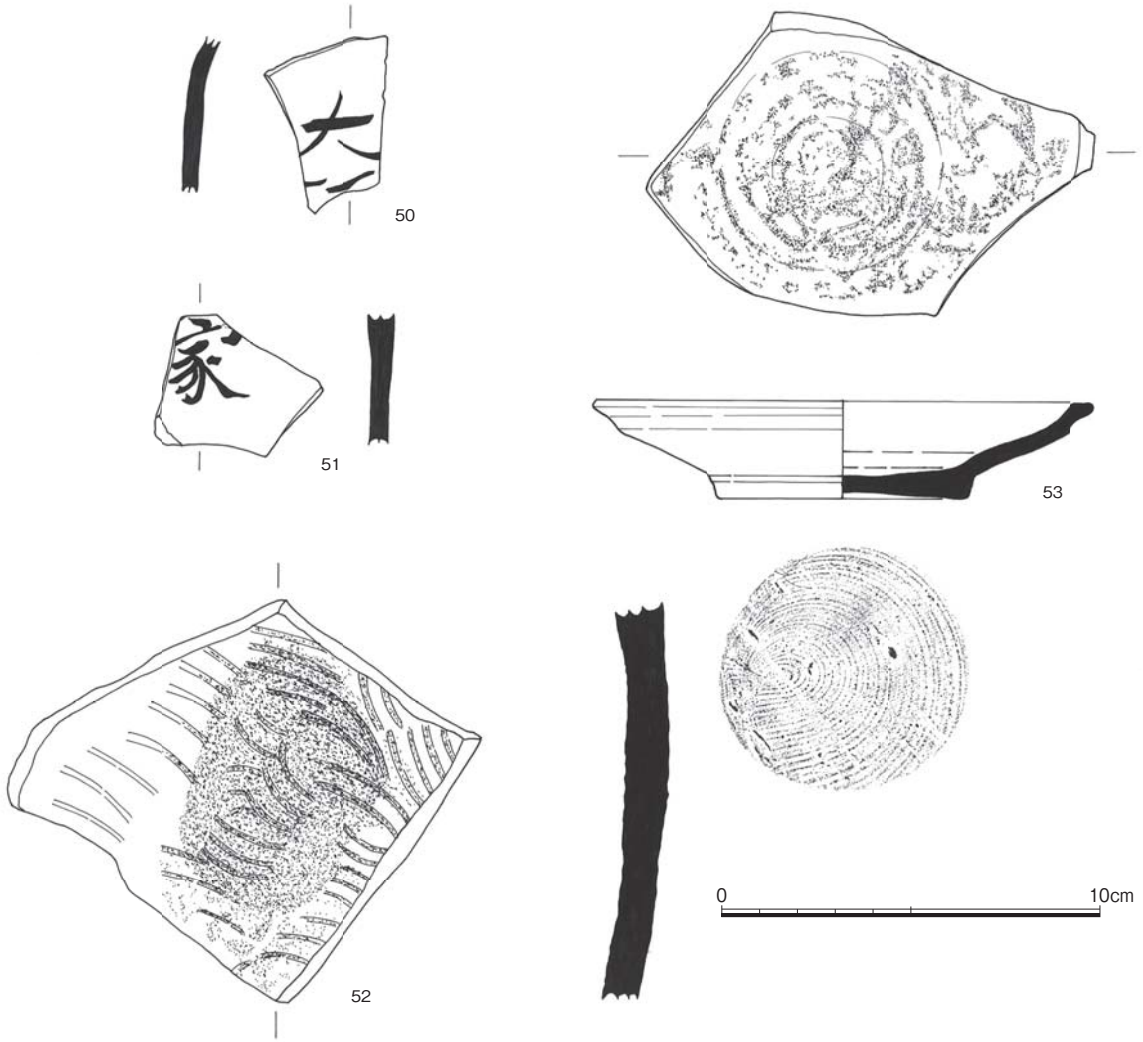


fig. 72　B78区出土墨書土器・転用硯

⑥木製品

54は木製鋤の身の部分で先端の一部を欠失しているが、ほぼ完全な状態で残る。長さ59㎝、幅10～11㎝、厚さ1㎝前後を測る。材質はコナラ属アカガシ亜属である。

湿地の最下層から出土した。

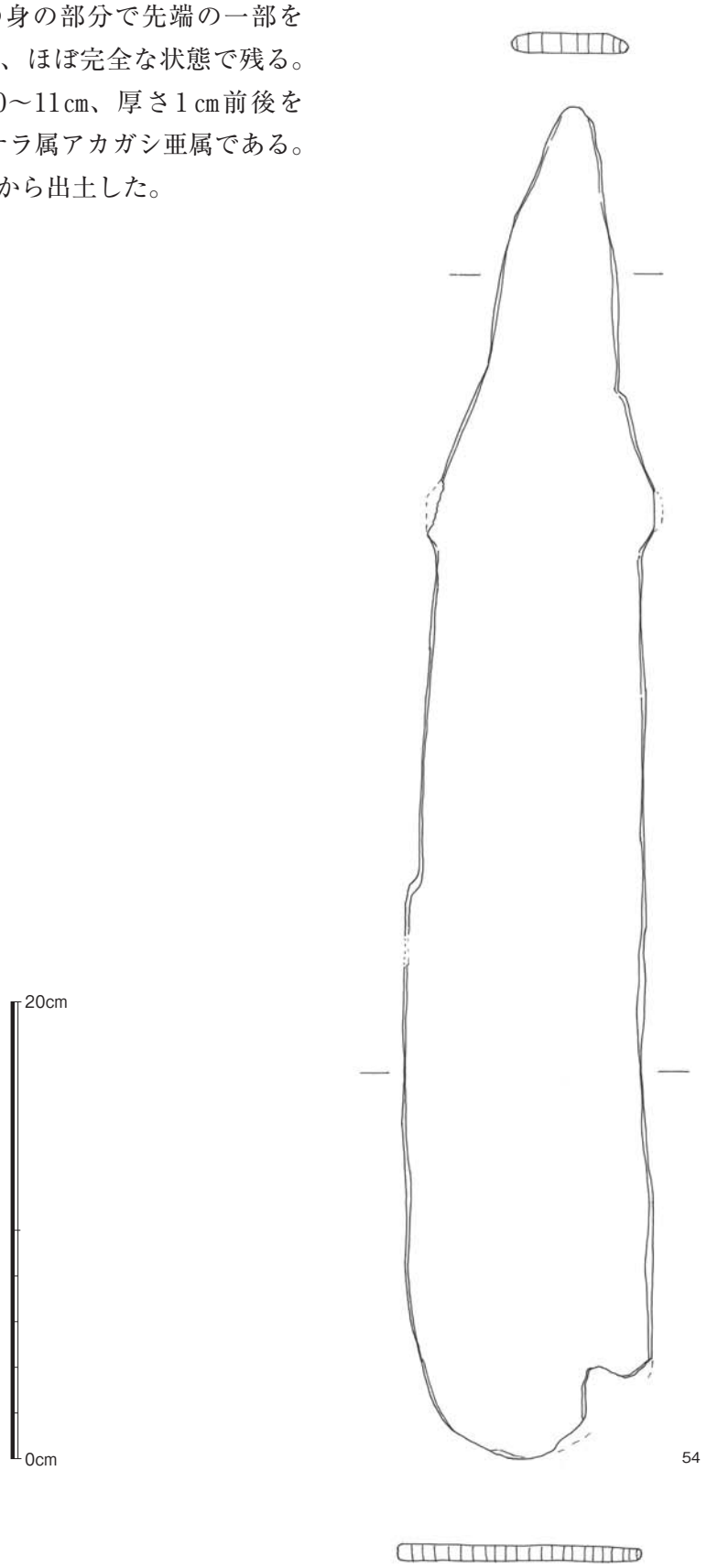


fig. 73　B78区出土木製品

B79区

立地

当該区は浜堤と湿地の変換点に位置する。前回の第12次調査では浜堤から湿地に下がる地形が確認されたが、今回は浜堤のみの検出であった。浜堤上の遺構面は3面確認した。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近代の耕作土以下は中近世の耕作土（茶灰色砂質土）が続く、耕作土下は茶褐色砂質土があり、この土に奈良～平安時代の土器が含まれる。その下は浜堤堆積物の黄灰色中砂が確認され、この上面で奈良～平安時代頃のピット・柱穴を複数検出した。

第1・2遺構面（犂溝・ピット）

中近世の溝・ピットを検出する遺構面が2面確認された。いずれの溝状の遺構で南北方向に延びる。いずれも浅く、出土遺物は少ない。これらは耕作に関連する遺構である。

第3遺構面（柱穴・ピット）

奈良～平安時代初め頃の柱穴・ピットが18基確認された。第12次調査で確認された柱穴と並びが一致し、複数の掘立柱建物が重複していることが判明した。

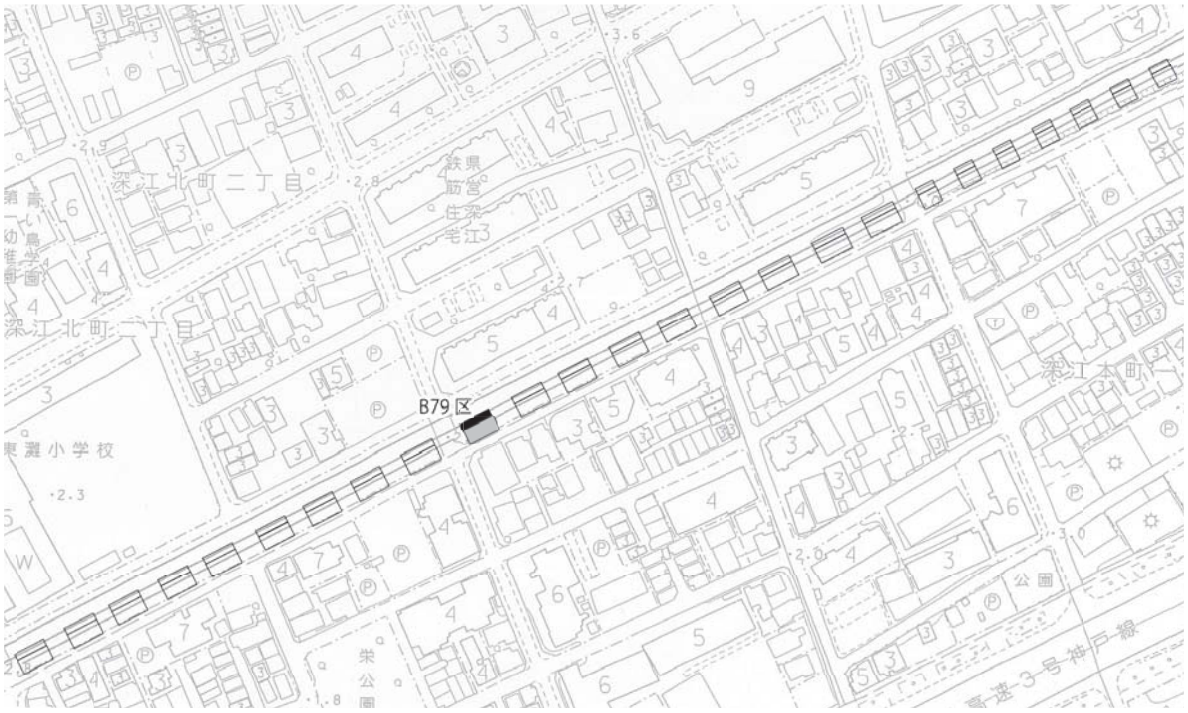


fig. 74　B79区位置図

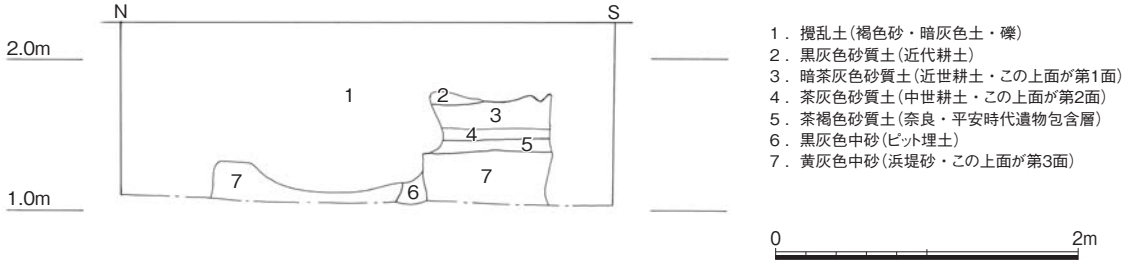


fig. 75　B79区東壁断面図

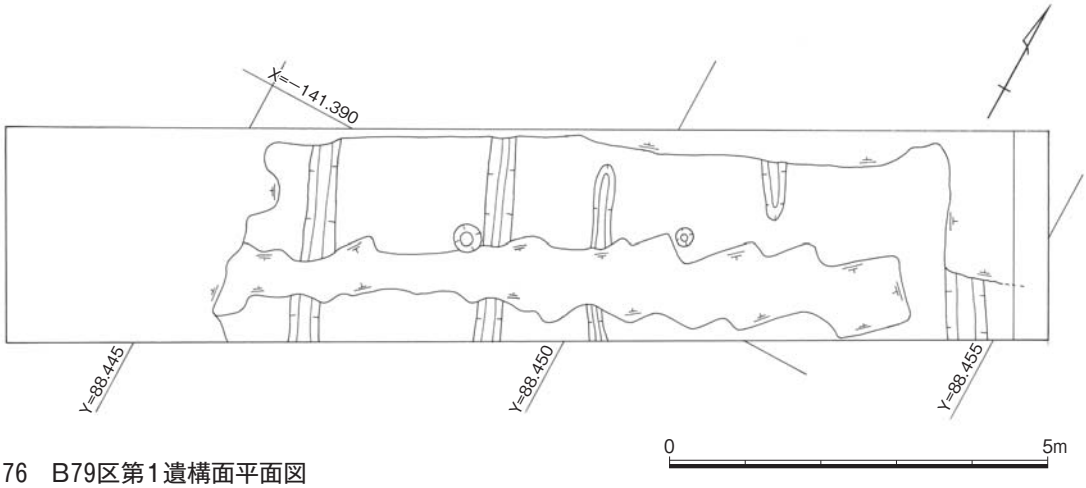


fig. 76　B79区第1遺構面平面図

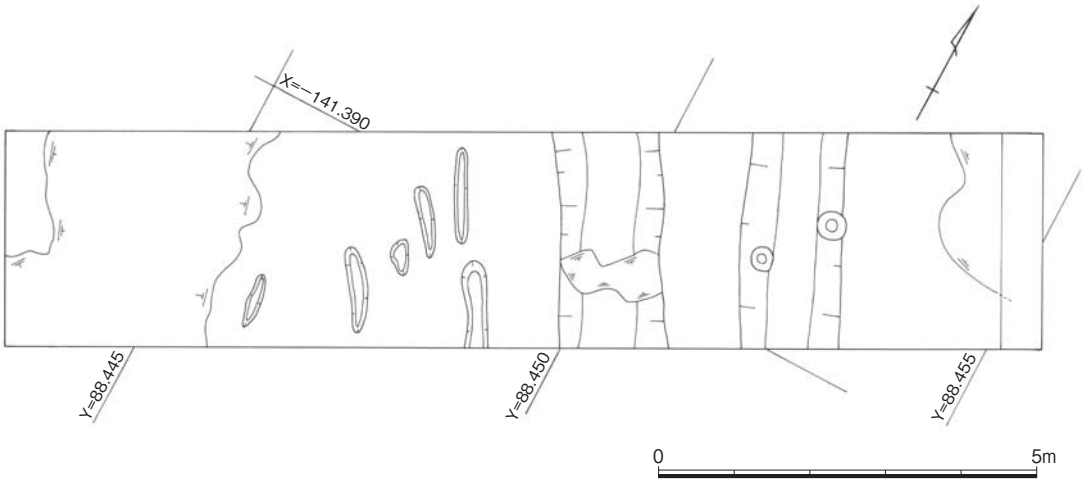


fig. 77　B79区第2遺構面平面図

fig. 78　B79区第2遺構面全景（東から）

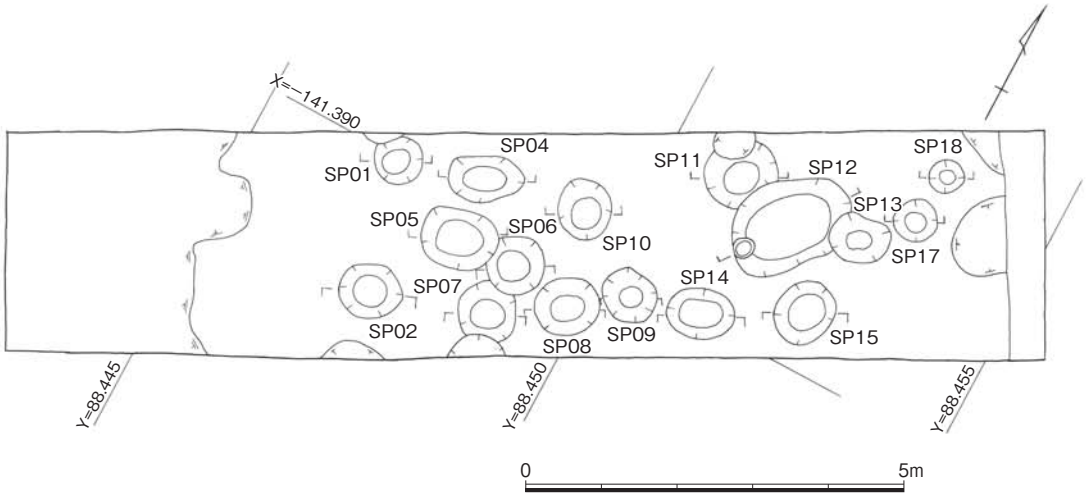


fig. 79　B79区第3遺構面平面図

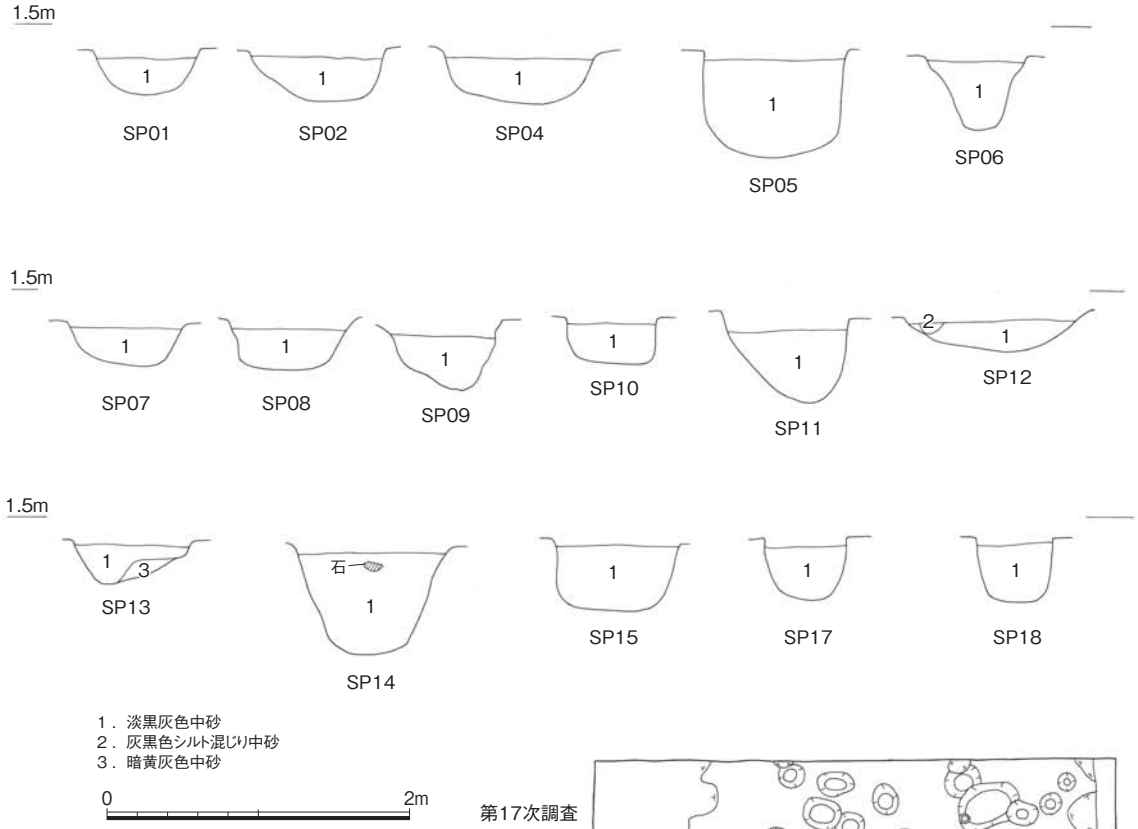


fig. 80　B79区柱穴・ピット断面図

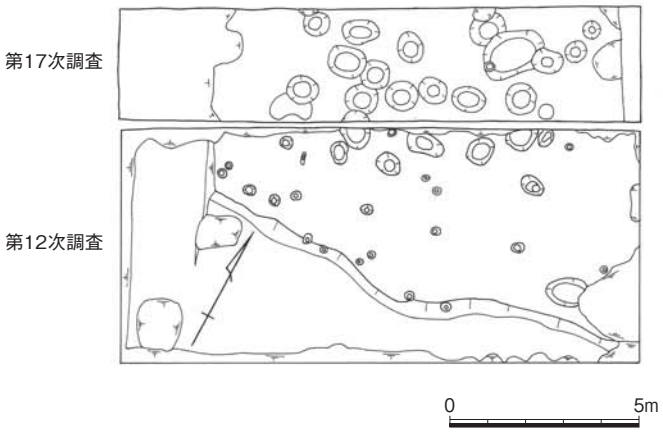


fig. 81　B79区第12・17次調査合成図

柱穴はほぼ東西方向に並び、東西方向の棟の建物が、複数回同じ場所に建てられたと推定される。深さは30～70㎝と差がある。柱穴の断ち割りを行ったが、明確な柱痕は確認できなかった。第12次調査地では、柱穴群の南側にそれらに沿う形で、柵列の可能性があるピット群がほぼ一列に並んでいることが判る。

出土遺物

55～58は須恵器坏蓋で、口縁部が屈曲するもの（55）や、内面にかえりを持つもの（56～58）がある。59は須恵器壷の頸部と思われる。55，57はピット内、その他は遺物包含層である茶褐色砂質土から出土した。

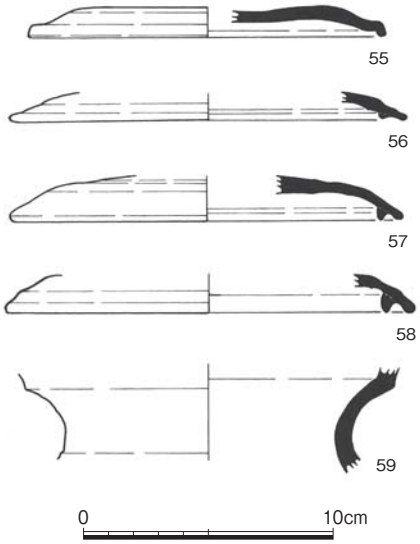


fig. 82　B79区出土土器

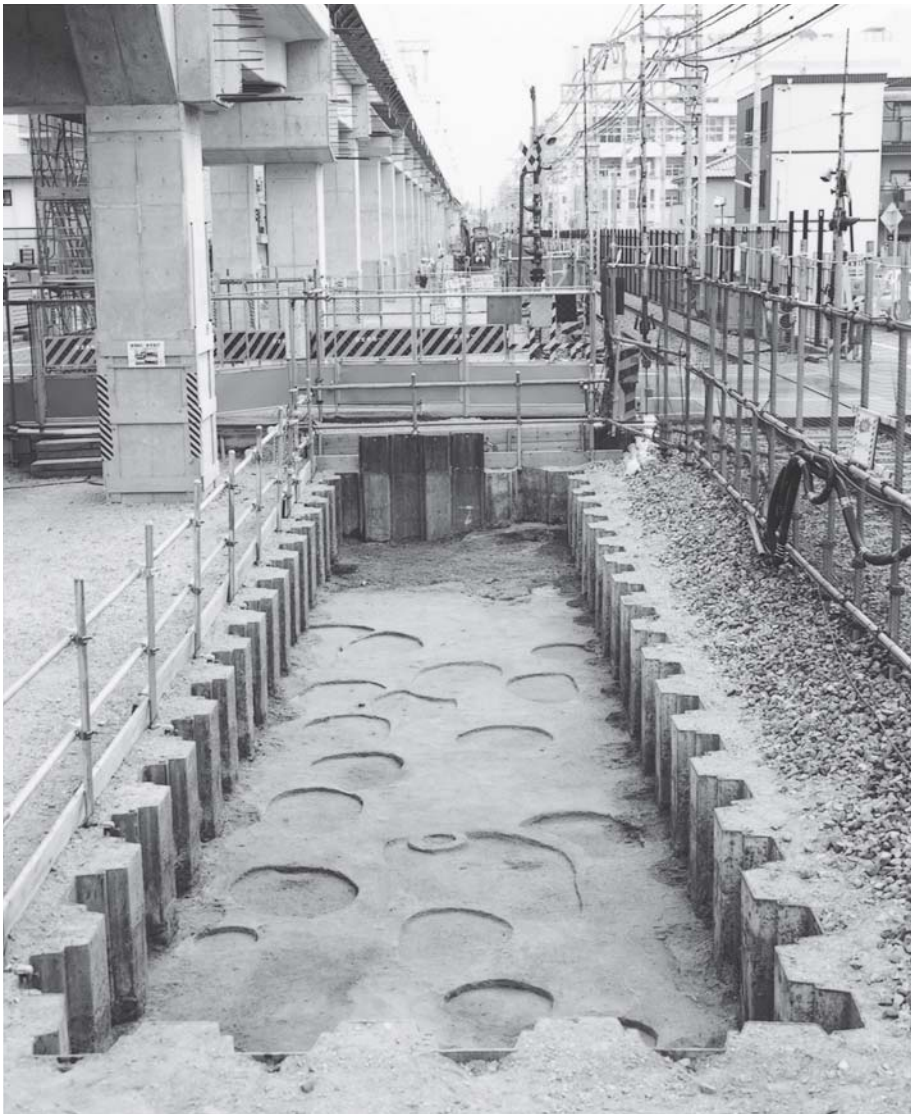


fig. 83
B79区第3遺構面
全景（東から）

B80-A区

立地

当該区は浜堤と湿地の縁辺部に位置する。B79区で浜堤となったものが、当調査区東半分では再び東に少し下がるという複雑な地形の一部にあたっている。

浜堤上では、奈良～平安時代の柱穴・ピット（第１遺構面）が確認された。また、浜堤と湿地の境目付近には黒灰色砂質シルト（炭混）が堆積し、奈良時代末期～平安時代初頭の土器が含まれていた。また湿地堆積層を除去すると潮汐の影響をうけた澪筋を確認した（第２遺構面）。

基本層序

阪神電車の軌条下は厚い盛土で、中世耕作土である黄褐色砂質土以下、東側は湿地堆積物（灰色中砂・黒色シルト）が互層になって堆積する。調査区西側では浜堤堆積物である黄灰色中砂が堆積するが、その境界部分には奈良時代末期～平安時代初め頃の土器を含む黒灰色砂質シルト（炭混）が堆積する。

fig. 84　B80-A区位置図

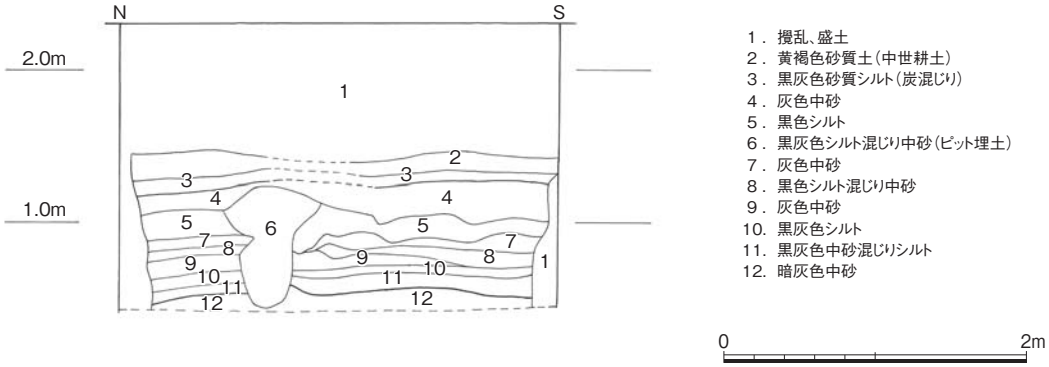


fig. 85　B80-A区東壁断面図

第1遺構面（柱穴・ピット）

浜堤上の遺構面（奈良・平安時代）で柱穴・ピットを21基検出している。うち2基は柱材が出土している。これら検出遺構と前回の調査の図面を重ね合わせると、南西～北東方向に柵列の可能性がある並びが確認される。また、湿地の堆積土上面からピットが確認されたことから、湿地がある程度埋没した段階で、柱穴・ピットが掘り込まれる造作が行われたと判断される。湿地と浜堤の境目で落ち込み（SX01）を確認したが、埋土からは中世の土器が出土した。

第2遺構面（浜堤と湿地の境界・澪筋）

調査地の西側半分は浜堤、東半分は湿地にあたる。湿地内からは曲物の部材、木錘、大量のはつり材、木の枝、松笠等が出土した。また、湿地の底で潮汐の影響を受けた澪筋を検出した。

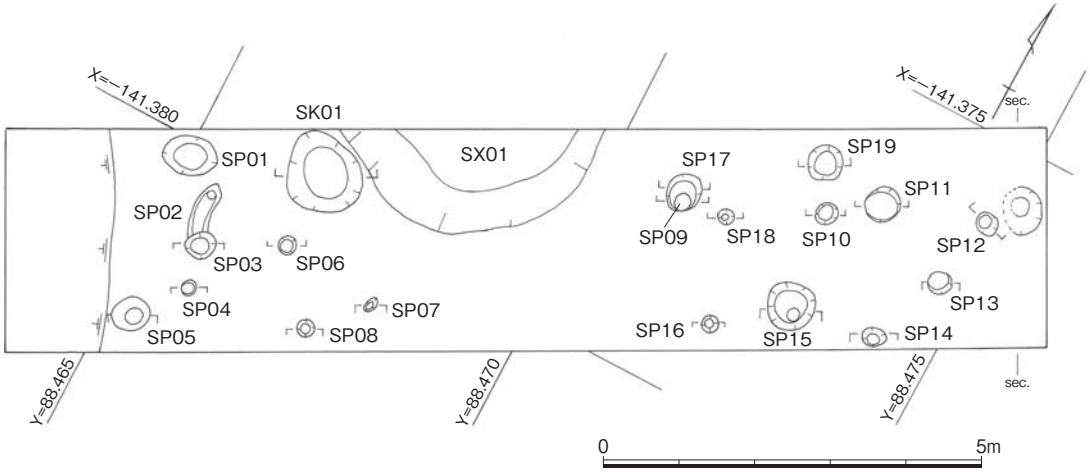


fig. 86　B80-A区第1遺構面平面図

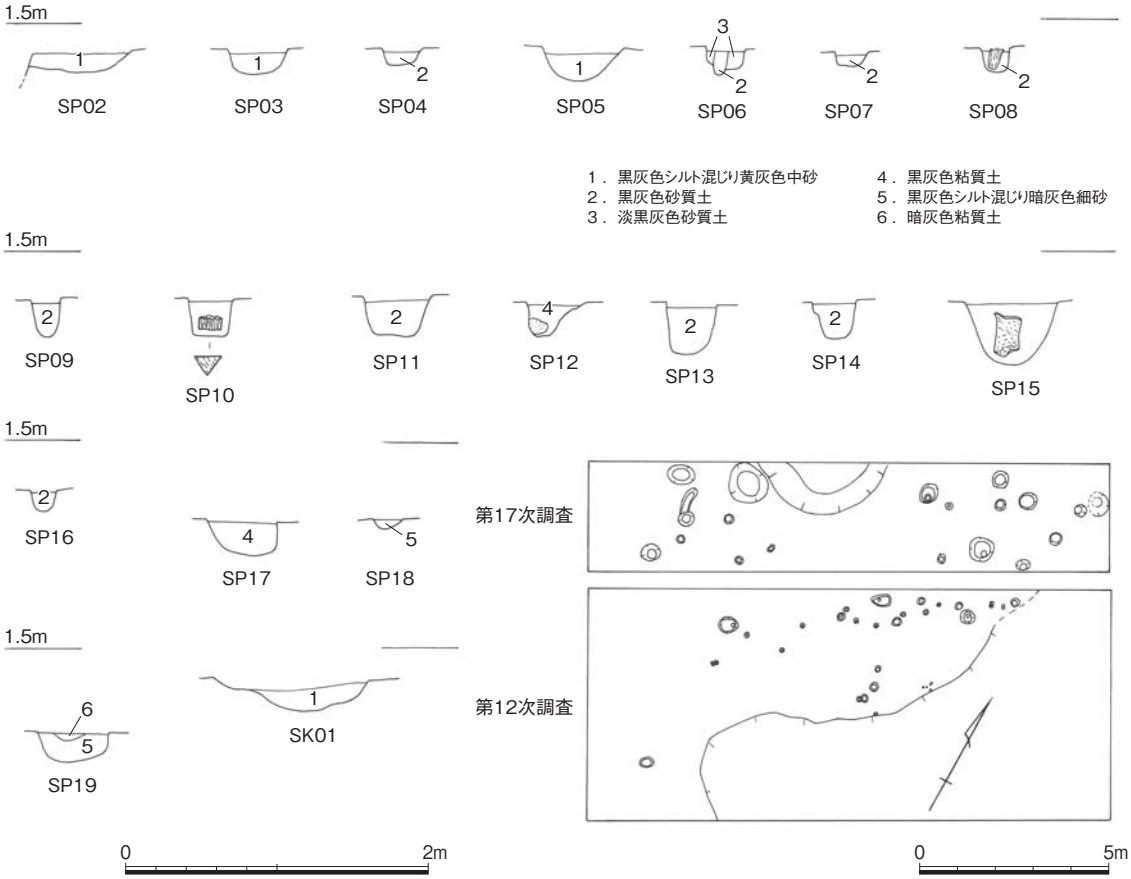


fig. 87　B80-A区柱穴・ピット断面図　　fig. 88　B80-A区第12・17次調査合成図

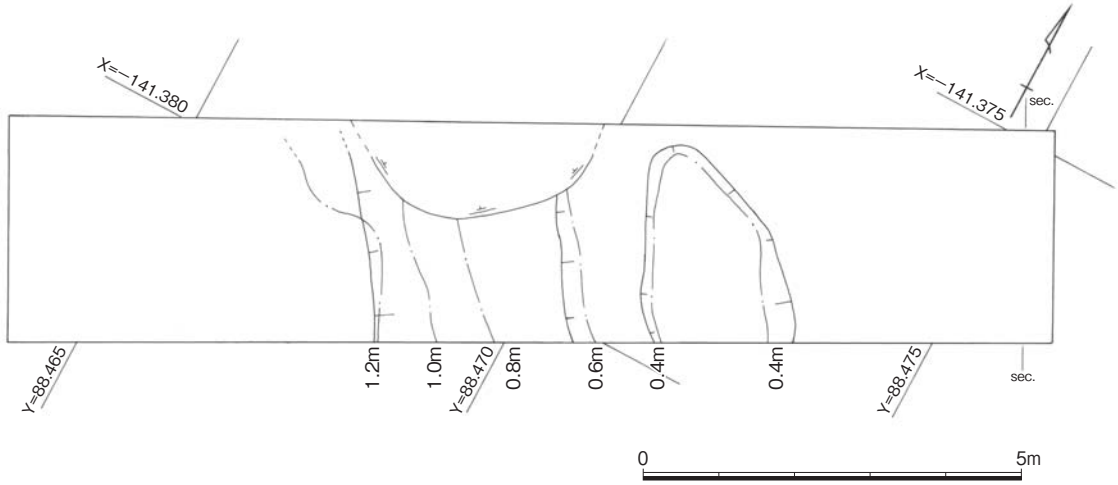


fig. 89　B80-A区第2遺構面平面図

①弥生土器

60は壷形土器の肩部の部分で、外面に櫛描文と波状文を施す。弥生時代中期のものである。浜堤堆積砂より出土。

②土錘

61は棒状有孔土錘、62，63，64は管状土錘、65は蛸壺、66は有溝土錘である。これらは土師質で湿地内堆積土より出土。

③土器

67～71は須恵器の坏蓋で、67，68，71は丸みを帯びた天井部を持ち、69，70は天井部が扁平である。71はピット、その他は湿地から出土。72は須恵器坏、73～75は土師器坏で、74，75は口縁端部内面

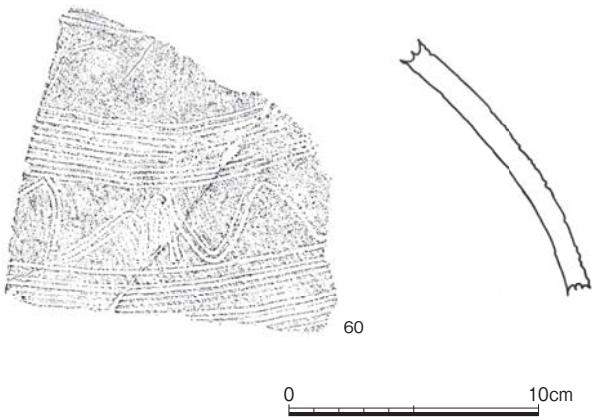


fig. 90　B80-A区出土弥生土器

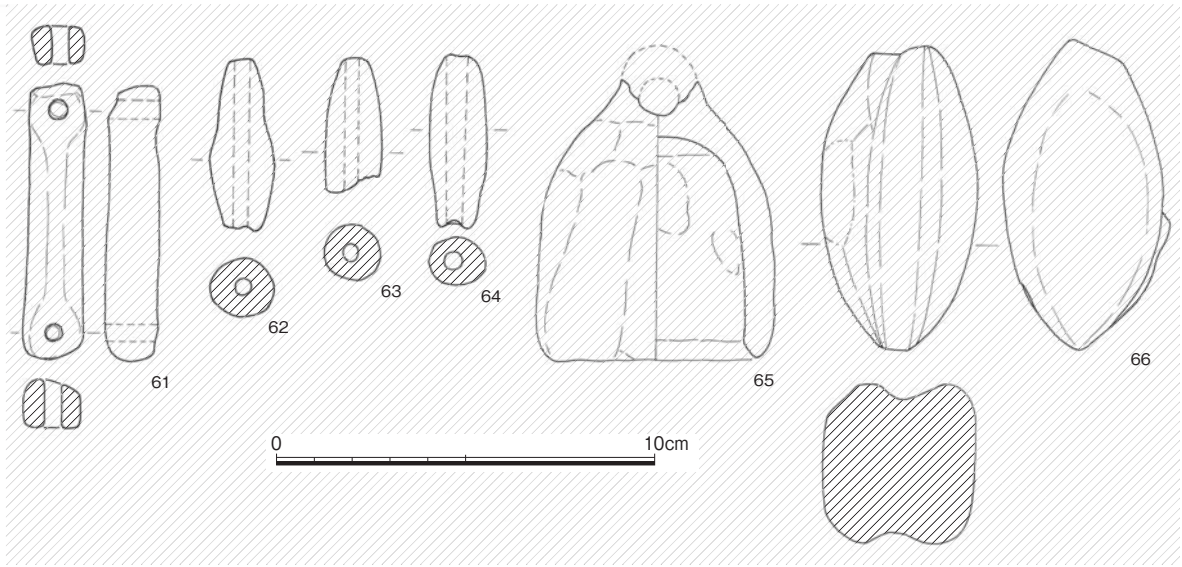


fig. 91　B80-A区出土土錘

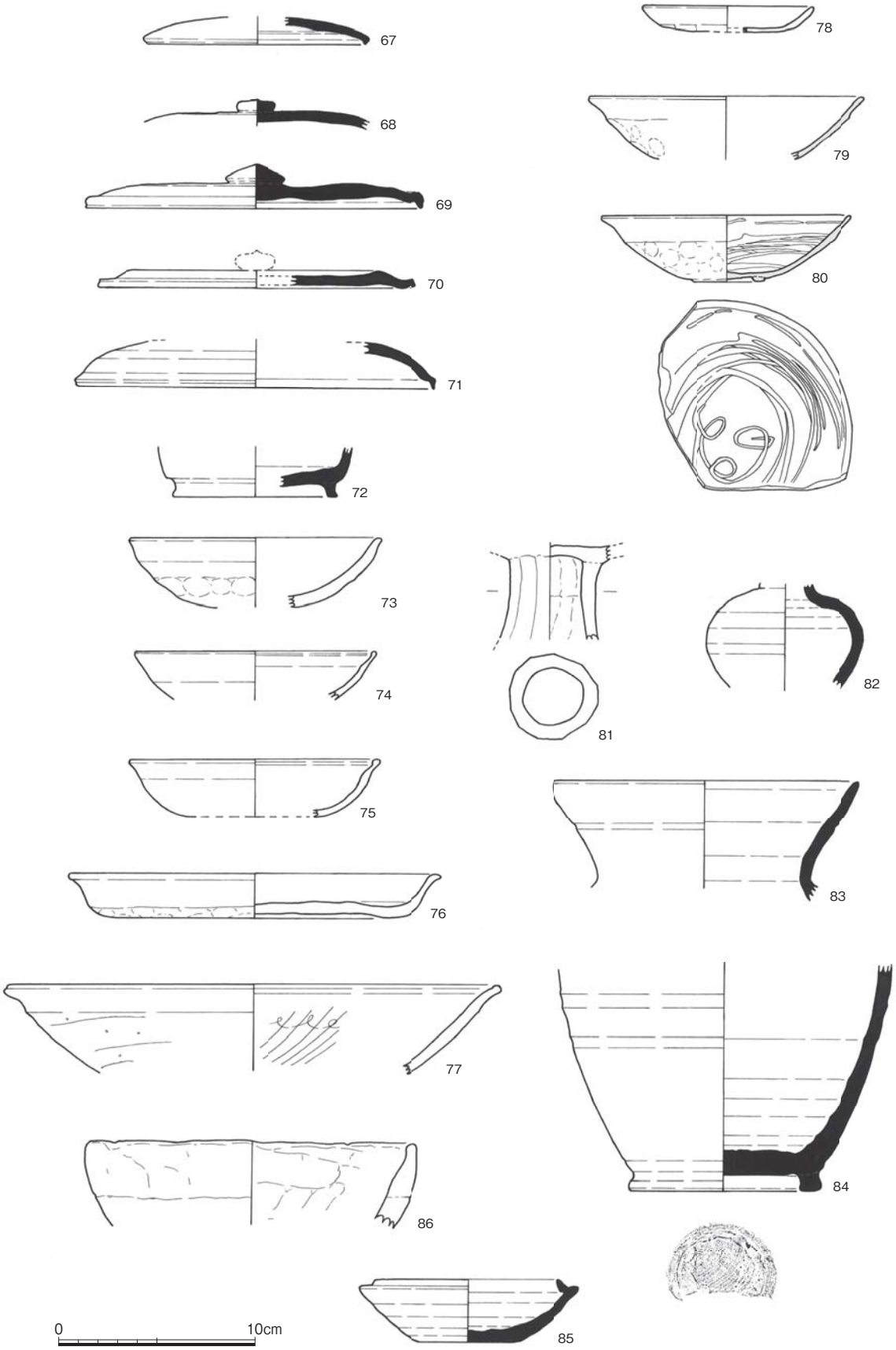


fig. 92　B80-A区出土土器、製塩土器

に段を有する。76は土師器皿で底面に指頭圧痕が残る。77は土師器の盤で、外面はヘラ削り、内面は放射状と螺旋状の暗文を施す。湿地出土。78は土師器小皿、79，80は瓦器椀で、外面には指頭圧痕、80には内面にヘラミガキの調整痕が残る。78～80はSX01出土。81は土師器高坏の脚部、82は須恵器小壷、83は須恵器甕口縁部、84は須恵器壷の胴部～底部で糸切り底。85は須恵器坏、86は製塩土器である。湿地出土。78～80は鎌倉時代初め頃、他は飛鳥～平安時代初め頃のものである。

④瓦

87，88は軒丸瓦、他は平瓦で、87は瓦質、89，90，91，93は須恵質、92，94は土師質である。87は内区に蓮弁、外区に珠文帯を施す。同じタイプのものが、第12次調査のB80-B区で確認されている。平瓦は凹面には布目痕、凸面には縄目痕が残る。

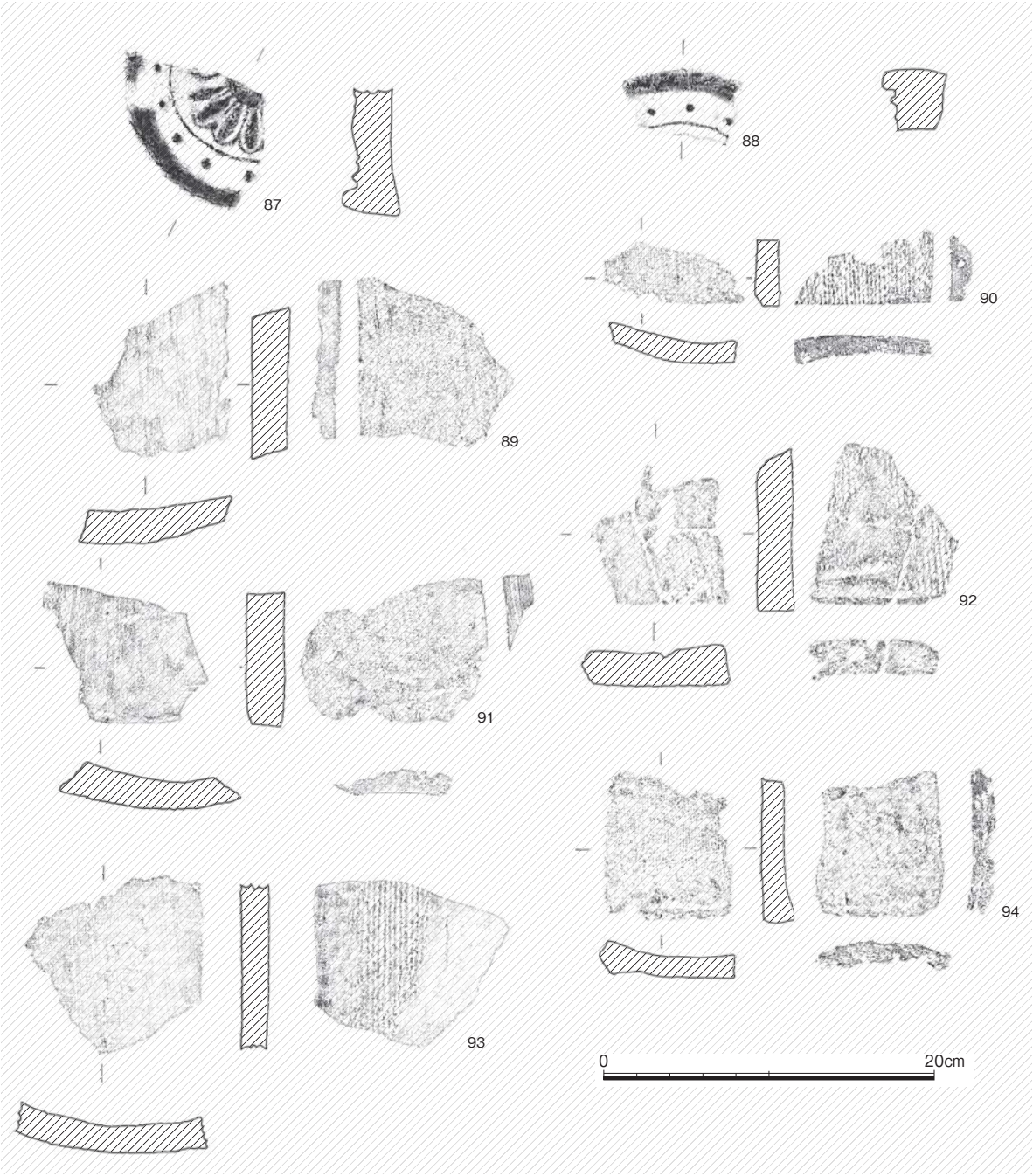


fig. 93　B80-A区出土瓦

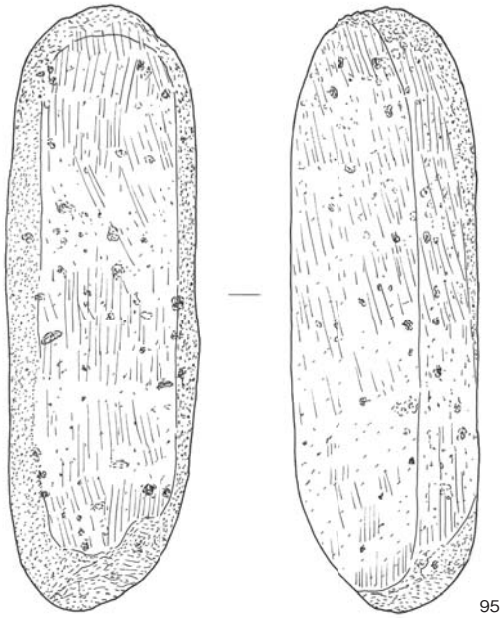
⑤石製品

95は側面に擦過痕があり、平滑な面を形成する。端面には敲打痕が残る。花崗岩質。96は平滑な面に擦過痕を残す。砂岩質。いずれも湿地堆積土から出土した。

⑥木製品

湿地内堆積土からは多数の木片や木屑などに混じって、木製品を確認した。

97，98は先端を尖がらせた棒で、用途は不明である。99～102は木錘で、99，100は腐食して片側半分が残っている。102は、ほぼ完全な形で残っている。全長14cm、直径5cmを測る。この形状のものは第12次調査（B80-B区）で確認されている。101は曲物の底板で、3か所に木釘で側板を留めた孔（深さ約1cm）が認められる。直径約13cmである。



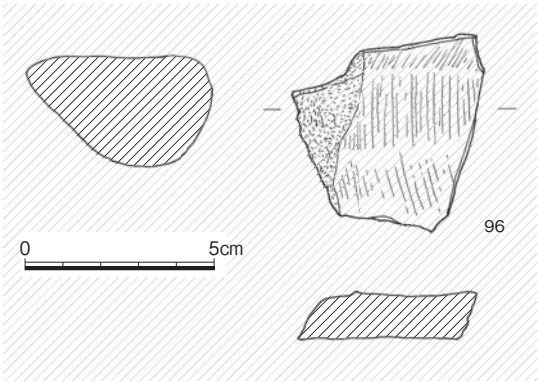


fig. 94　B80-A区出土砥石

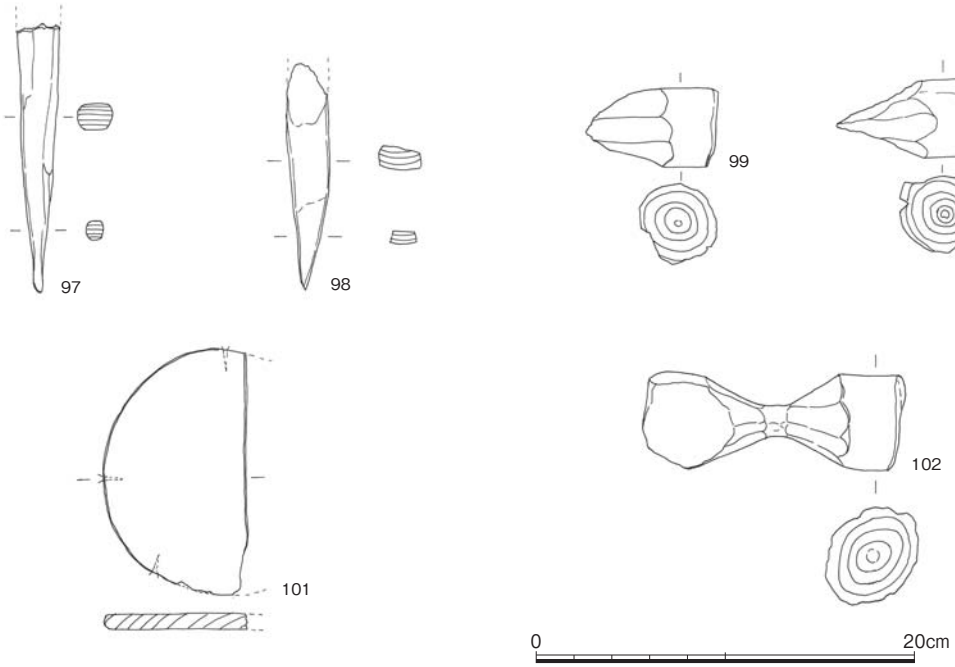


fig. 95　B80-A区出土木製品

B80-B区

立地

当該区は大半が湿地である。黒色系シルト層と細砂層が交互に堆積する状況となっている。B80-A区と同様に湿地と浜堤が入り組んだ複雑な地形の部分であると判断される。

基本層序

盛土、中近世耕作土の下は湿地堆積物で、黒色砂質シルト（上層）、灰色細砂を含む黒色砂質シルト（下層）、黒灰色砂質シルト、黒色シルトの順に堆積している。これ以下は灰色細砂・粗砂層が認められる。

湿地

中世耕土である暗灰色砂質土層を除去すると、土器を多く含む奈良～平安時代初めの湿地上面が現れる。黒色砂質シルト層上面では、主に調査区西側で、杭跡・礫群・土器小破片群が出土している。また同層からは金銅製の端止め金具、木簡、土馬等の特殊な遺物が出土した。その下層の黒褐色シルト層からは「手」と書かれた墨書土器、小型の須恵器円面硯が出土した。

fig. 96　B80-B区位置図

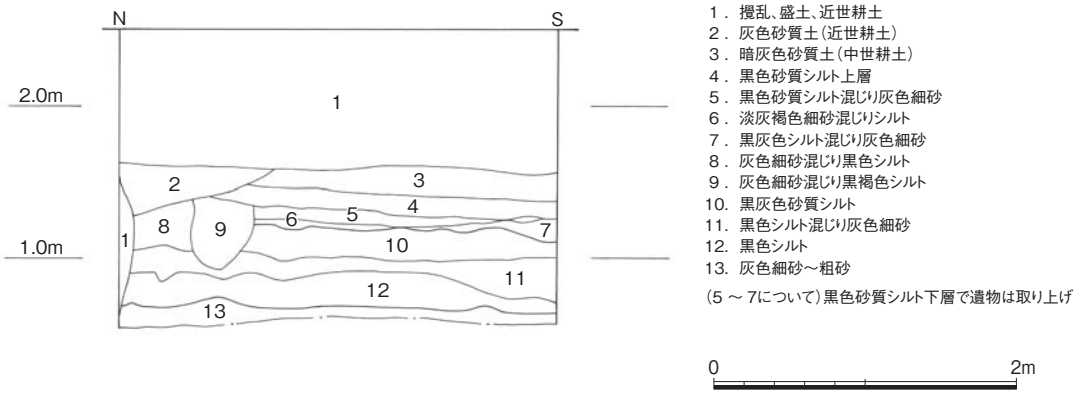


fig. 97　B80-B区東壁断面図

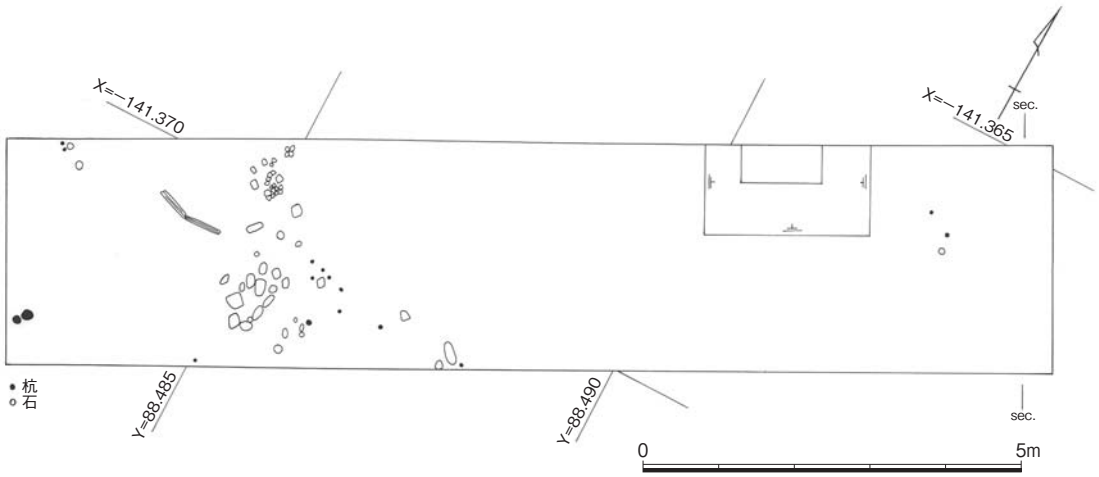


fig. 98　B80-B区湿地内杭・石材出土状況図

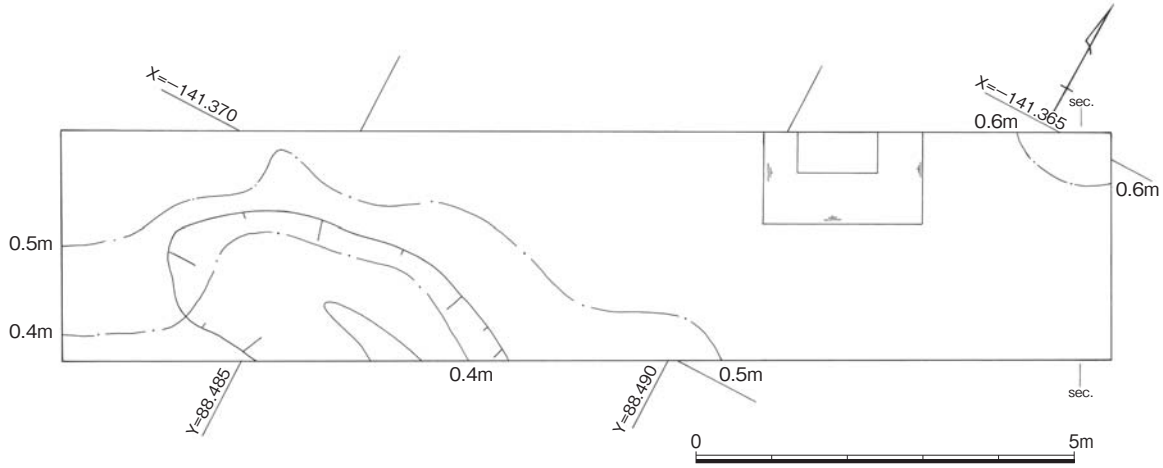


fig. 99　B80-B区谷状地形平面図

さらに下層の黒色シルト混灰色細砂層からは飛鳥時代の土器が出土した。

湿地内から出土した木製品としては木簡、杓子、斎串、馬形、舟形、人形、下駄、曲物、木楔、浮子、木錘、机の脚部と思われるほぞ穴のある部材などがある。また、桃の種子や松葉の塊、松傘などの植物化石が出土した。黒色砂質シルトの下層部分からは大量の大小の木片が出土したため、堆積土砂を採取して（28リットルコンテナ70箱）、水洗選別作業を行ったところ、大量の木屑（木端材・斫り材）、植物の種子、土器片を取り出すことができた。

谷状地形

湿地層の底では浅い谷（窪地）状地形が南の第12次調査地から延びてきている。

出土遺物

①須恵器

103～106，107，108は坏蓋、109～121は高台付の坏、109には外底面に爪型状の痕跡を残す。122，130は宝珠つまみ付の坏蓋、123，126～129、131，132は無高台の坏、125，134は内面に立ち上がりがある坏、135は瑕である。139～141は長頸壷、142は長方形透かし孔を持つ円面硯、143は鉢である。144，145は提瓶、146は把手付の壷、147は台付の鉢である。148は丸底の鉢、149は短頸壷、150は把手付の盤である。151～156は甕で、151～153は頸部に波状文と沈線を施す。155の胴部外面は平行、内面は同心円のタタキ目を施す。156の胴部外面はカキ目調整、157は坏の底部に、158は甕の頸部に×印を線刻する。いずれも湿地状地形から出土。

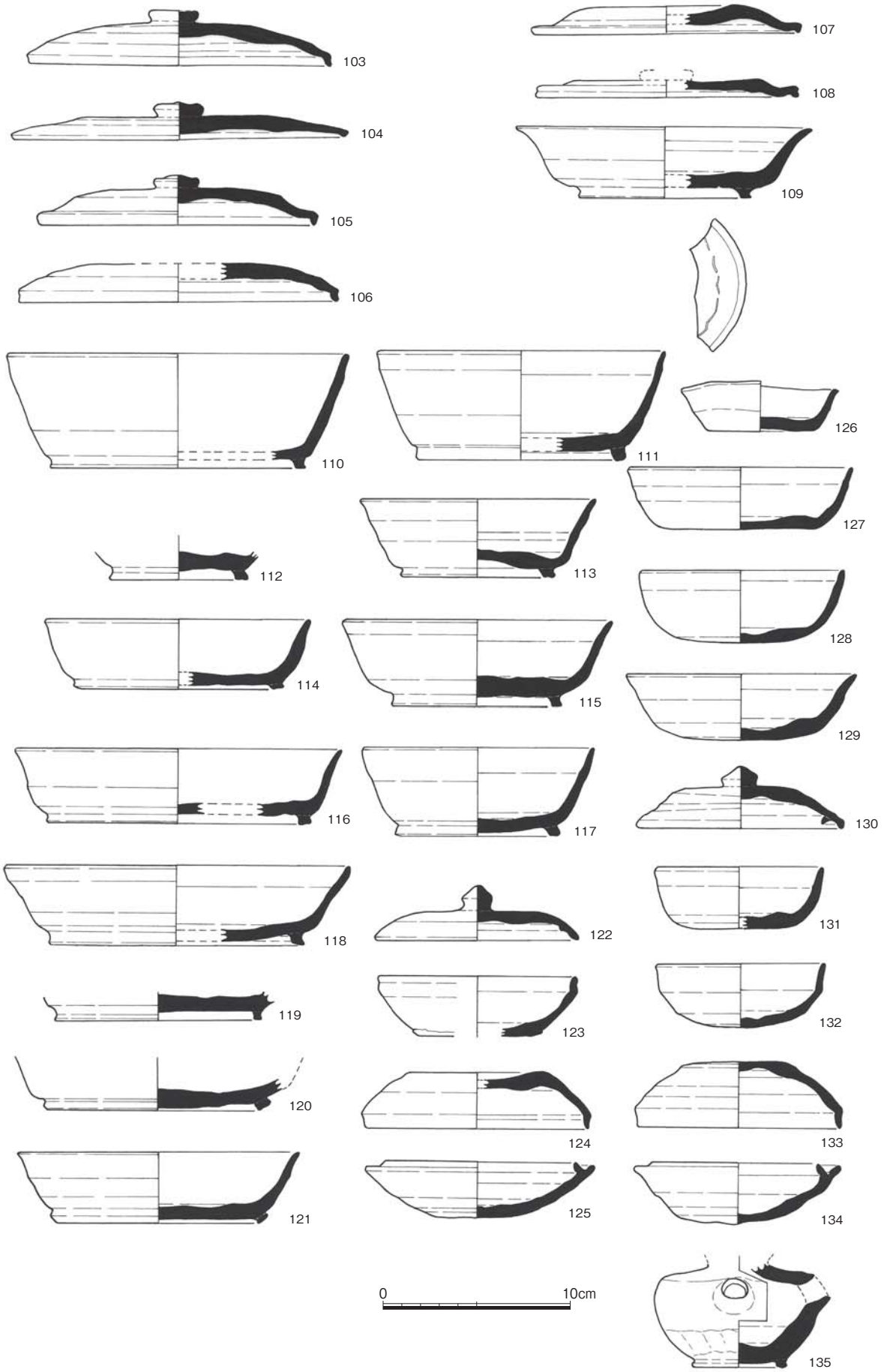


fig. 100　B80-B区出土土器(1)

②磁器・緑釉陶器

136は青磁碗で、高台内刳り部分は露胎で、中国龍泉窯の製品である。中世耕作土出土。137，138は緑釉陶器椀・皿で、137は土師質で乳灰茶色、138は須恵質で淡青灰色の釉が掛る。

③土師器・製塩土器

159，160は坏で、外反する口縁部に内面に段を有する。161の坏は内面に放射状の暗文を施す。162は鉢で、外面は刷毛目調整である。163は小型の竈の一部と思われる。外面は刷毛目

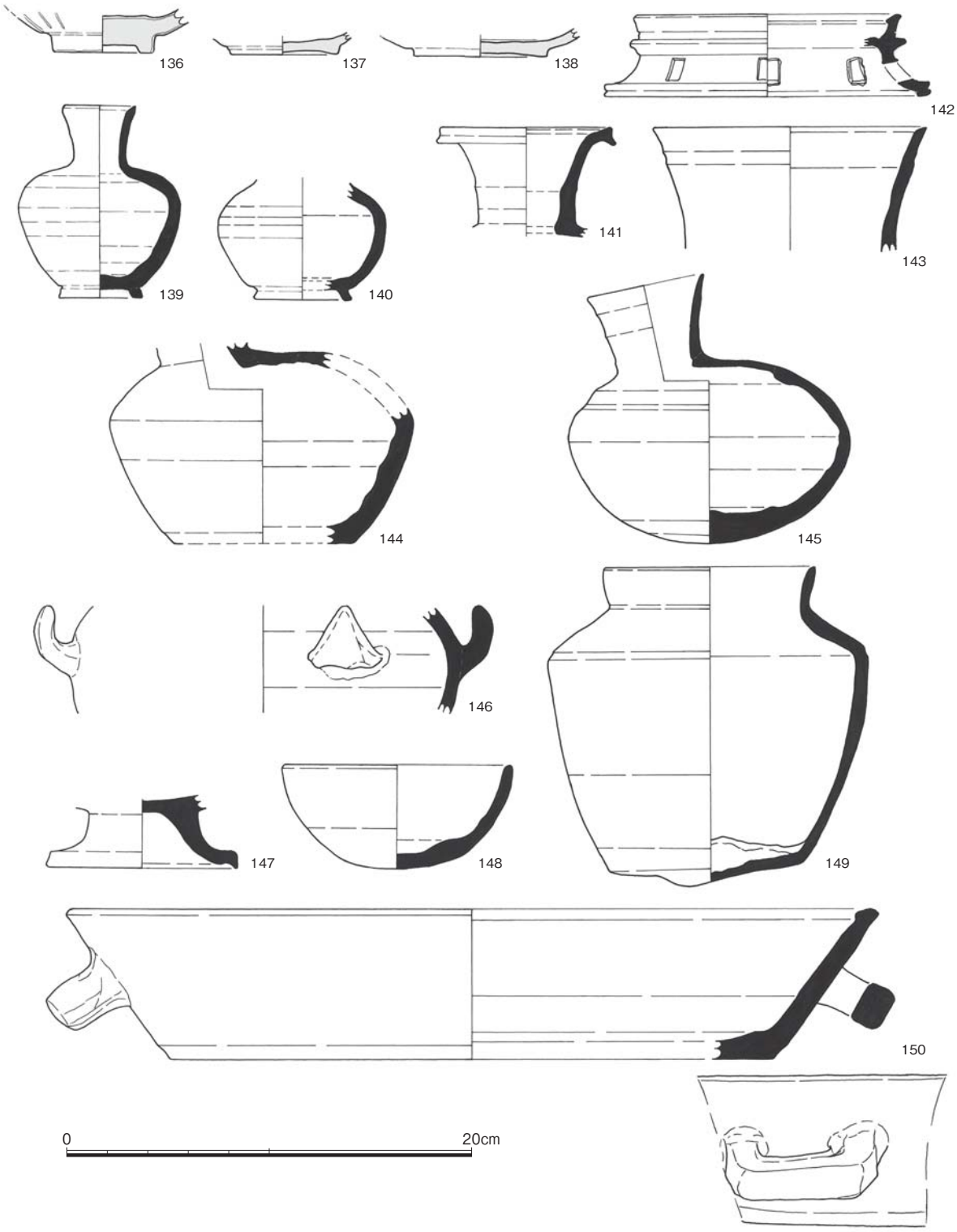


fig. 101　B80-B区出土土器（2）

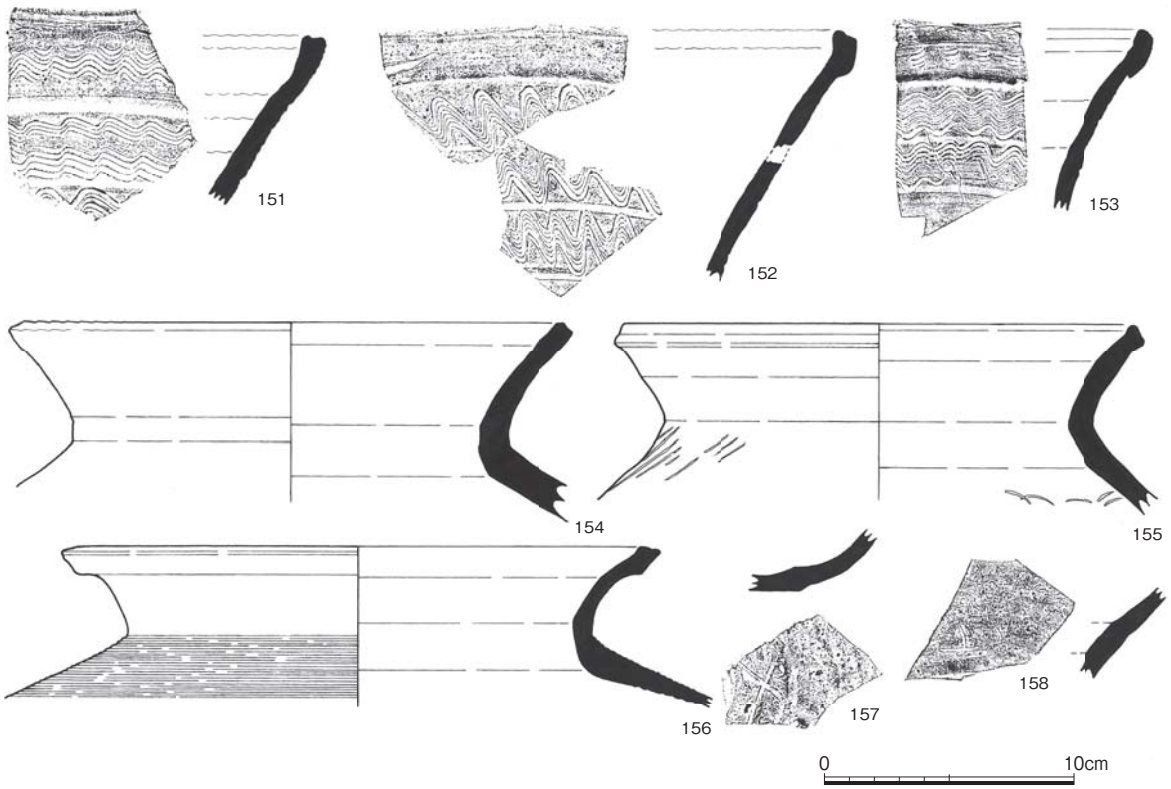


fig. 102　B80-B区出土土器(3)

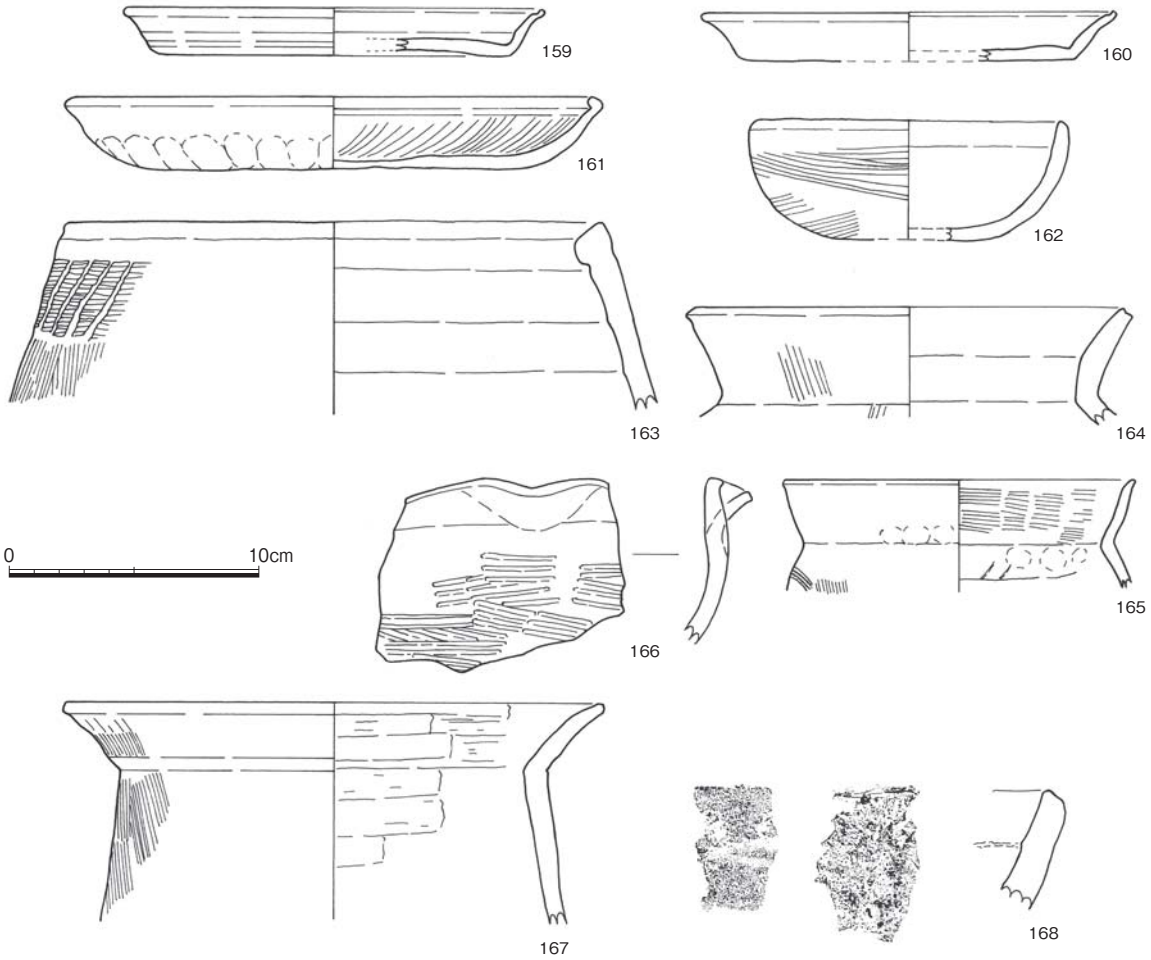


fig. 103　B80-B区出土土器(4)

調整。164，165，167，169，170は甕で、内外面に刷毛目調整を施す。166は片口を持つ鉢で、外面は刷毛目調整。168，171，172，173は製塩土器で、手づくね成形、内外面に指頭圧痕を残す。168の内面は布目圧痕が残る。いずれも湿地内出土。

④搬入土器

174は壷形土器で、口縁部が大きく屈曲する。胎土は褐色。四国地方からの搬入品と思われる。弥生時代後期末頃のものか。湿地内出土。

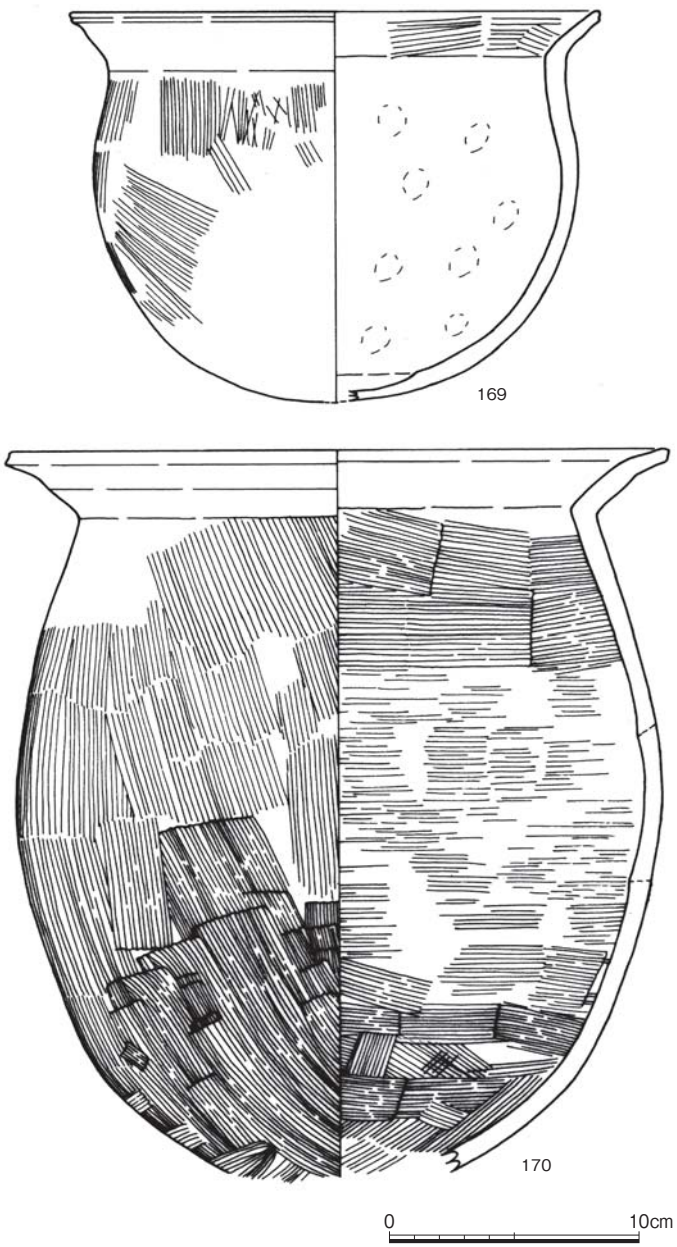
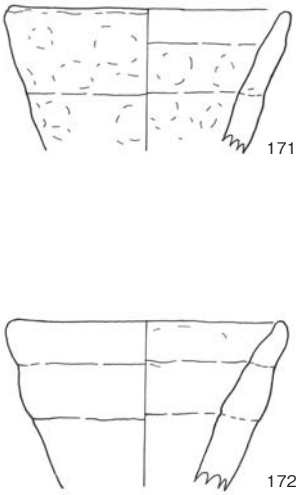


fig. 104　B80-B区出土土器（5）



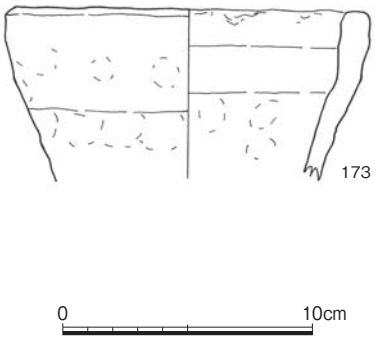


fig. 105　B80-B区出土土器（6）

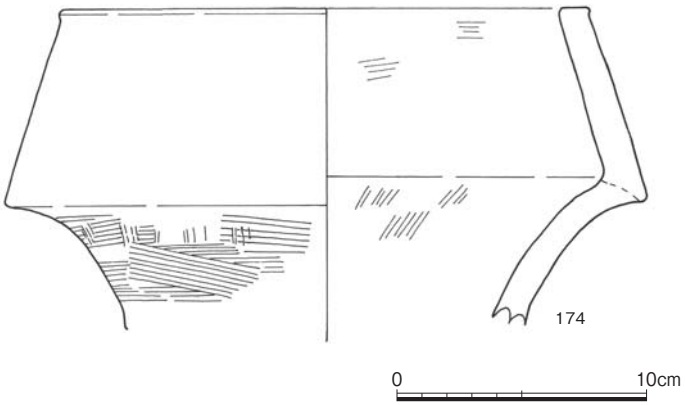


fig. 106　B80-B区出土土器（7）

⑤墨書土器・絵画土器

175～177は土師器坏で、底部外面に文字の残画があるが、文字は不明である。湿地内から出土。178，179は須恵器坏蓋で、178は天井部外面、179は天井部内面に文字の残画が残る。180～187は須恵器坏で、底部外面に墨書が残る。180～183は「大垣」、184，186は文字不明、185は「罡」、187は「弟足」、188，190，193は文字不明で筆ならしの可能性がある。191，192，194は「驛」、195は文字不明、196は「垣」、198，199も「垣」の字画の一部の可能性がある。197は「手」と書かれている。192は土師器坏で、それ以外は須恵器坏または坏蓋であり、天井部・底部の内外面に墨書が残る。

200～204には文字の残画はみとめられるが、文字不明。200，201は土師器、202～204は須恵器。205は須恵器坏蓋の内外面に墨痕を残す。内面には多数の曲線を描き、左下には、小舟の上で棹状のものを操る人の姿の様なものが表現されている。多数の曲線が波または川の流れを表現しているならば、それに漕ぎ出す人の姿を描いているのかもしれない。第12次調査のB80-B区から出土した絵画土器には、人物の顔から肩の正面像、背景には楼閣状のものが描かれているものが発見されている。墨書土器・絵画土器はすべて湿地内の出土である。

⑥転用硯

206～209は須恵器甕の胴部の破片を利用して硯としている。206，208は内面に207，209は内外面に墨痕が残る。表面の磨滅は顕著ではない。

210～221はすべて須恵器坏蓋である。内面を硯に転用している。それぞれ、墨の痕跡が明瞭に残り、一部には筆ならしの跡も認められる。第12・14次調査の報告書で既に述べているが、坏蓋は坏の口縁に裏向けて（内面を上向けて）載せ、硯面として利用したと想定される。

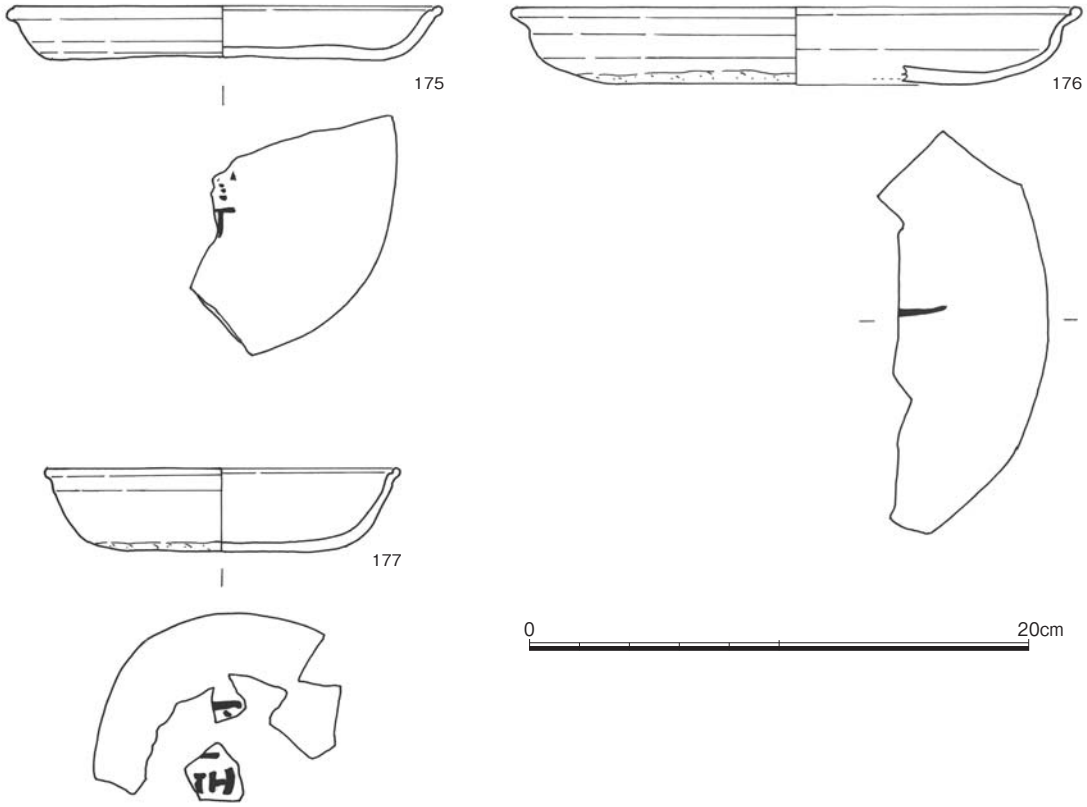


fig. 107　B80-B区出土墨書土器（1）

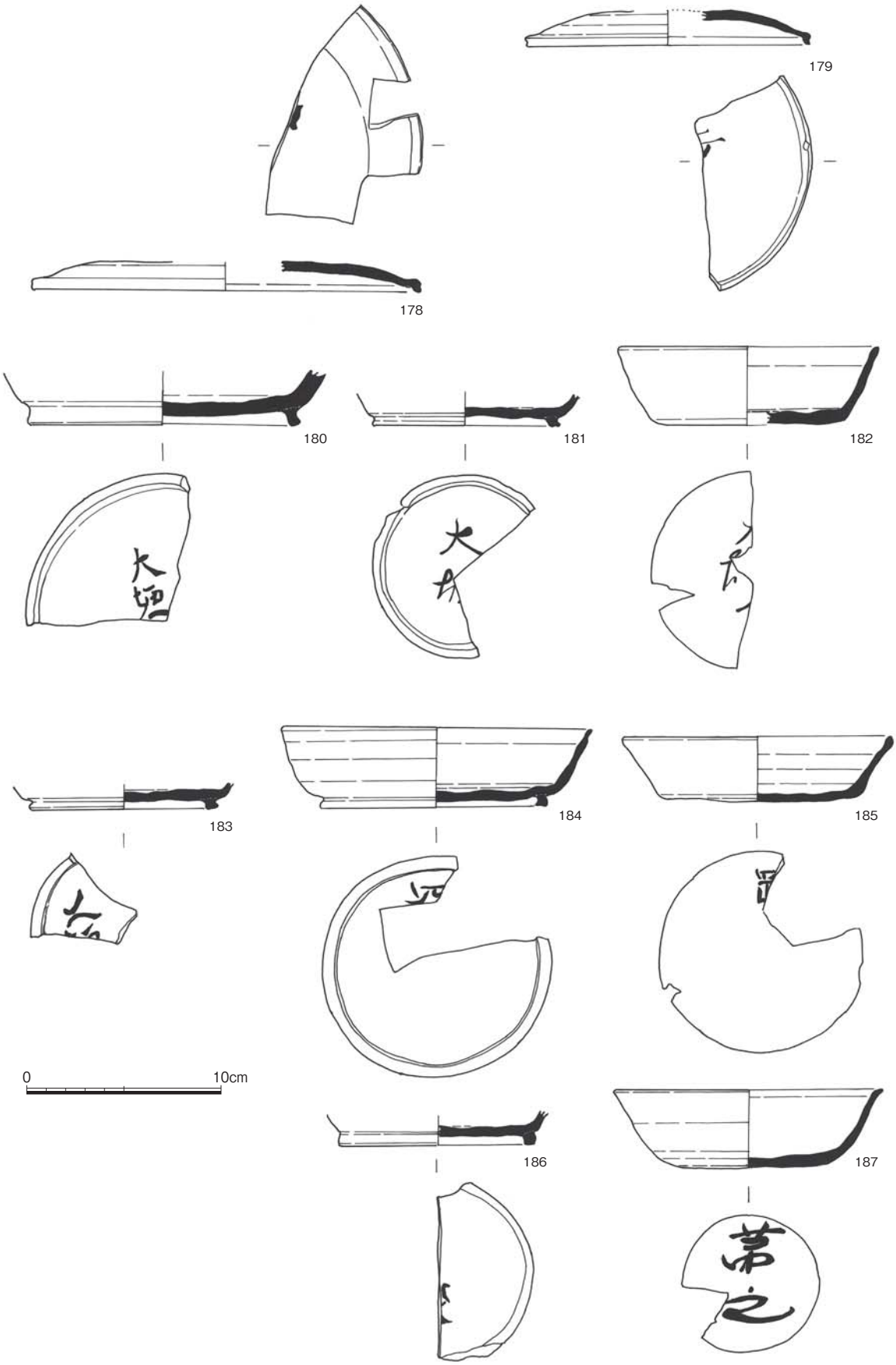


fig. 108　B80-B区出土墨書土器（2）

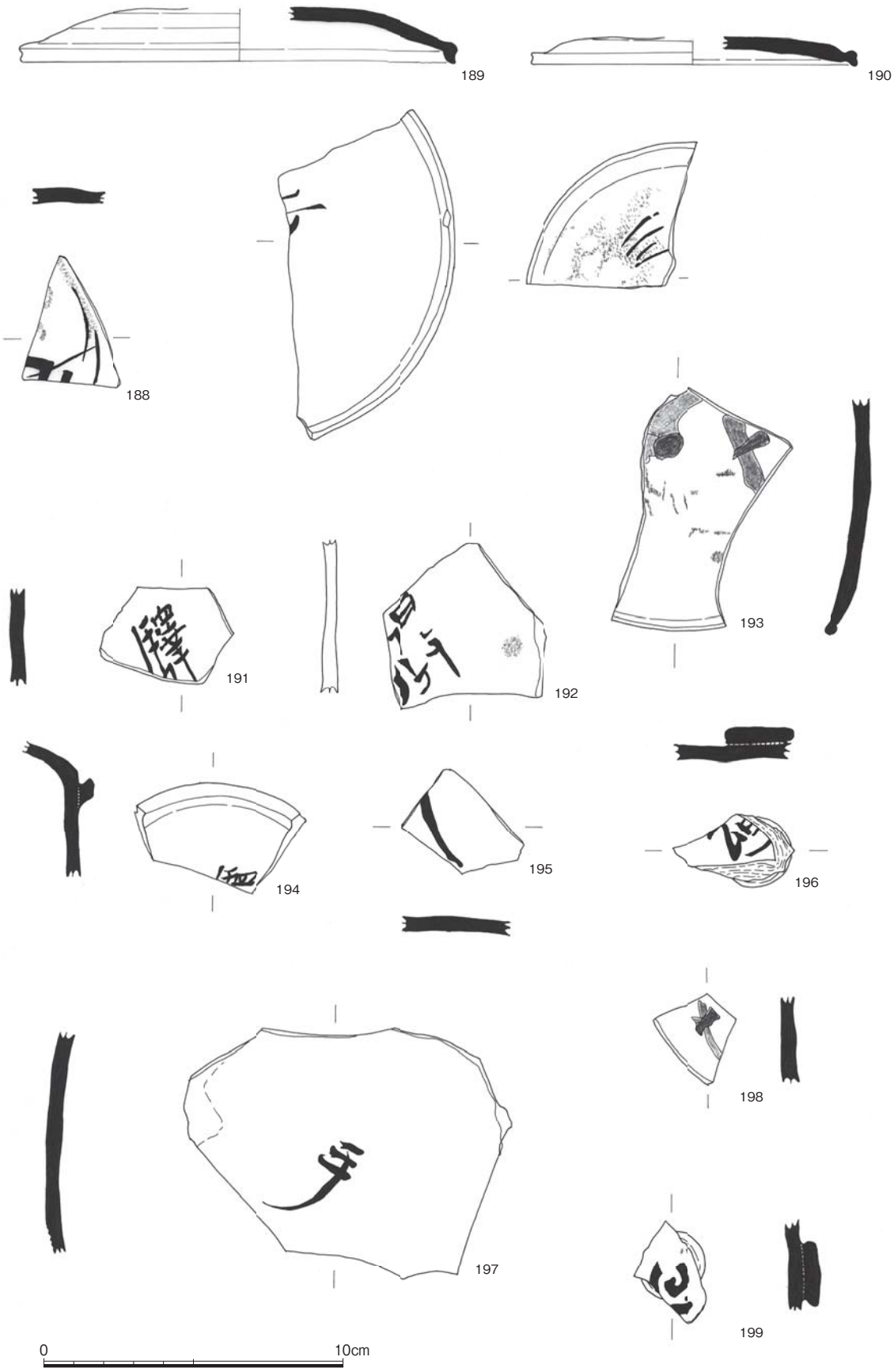


fig. 109　B80-B区出土墨書土器（3）

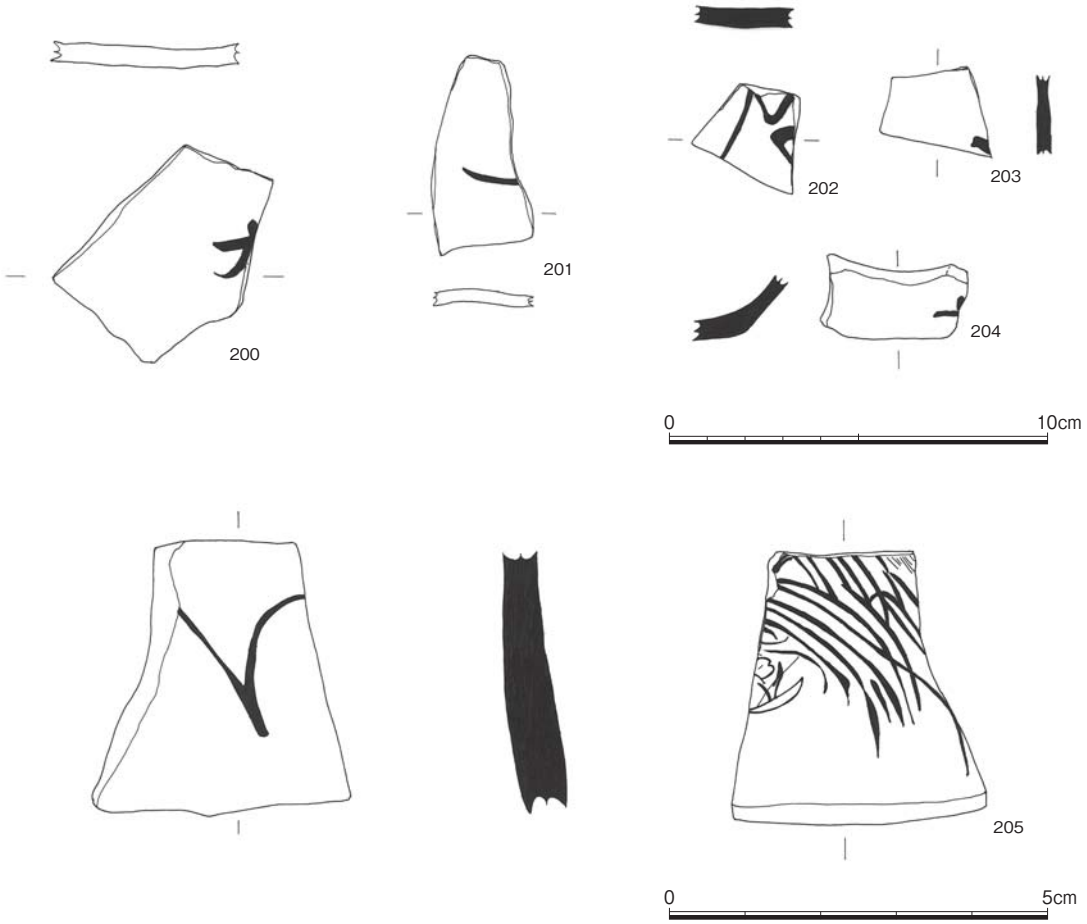


fig. 110　B80-B区出土墨書土器（4）

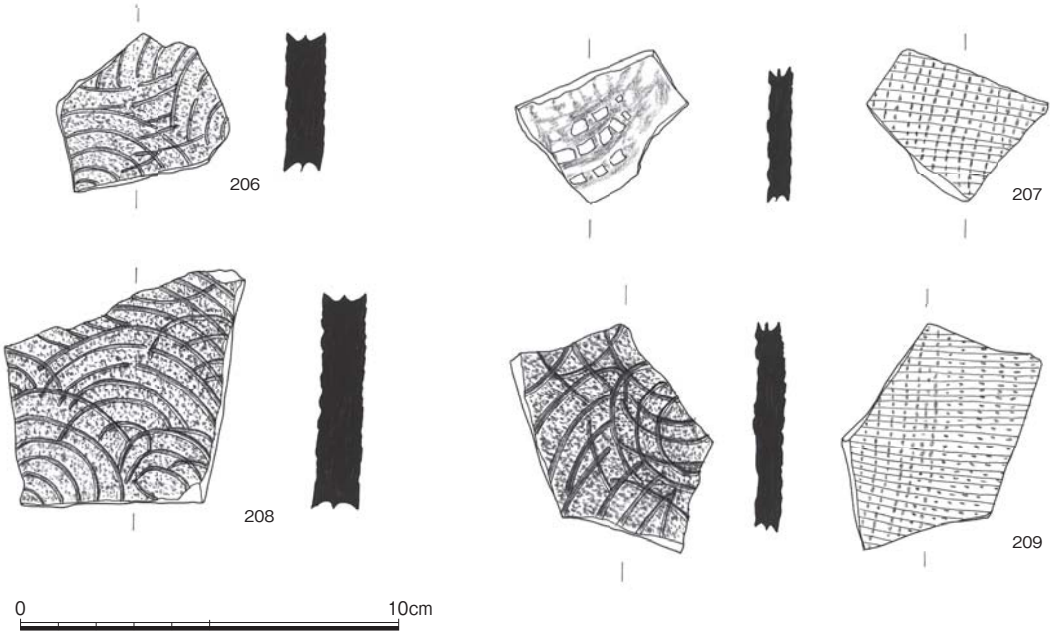


fig. 111　B80-B区出土転用硯（1）

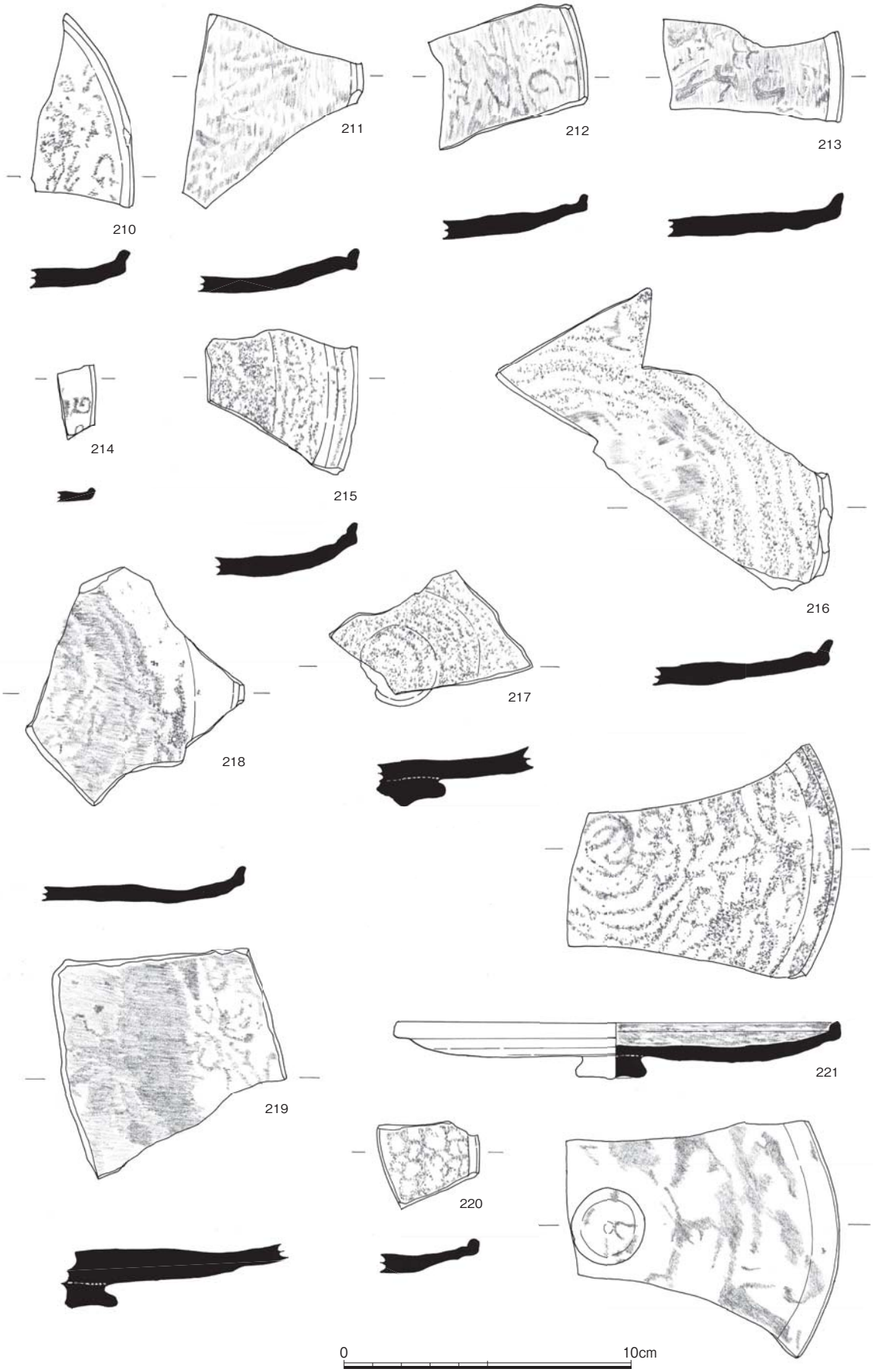


fig. 112　B80-B区出土転用硯（2）

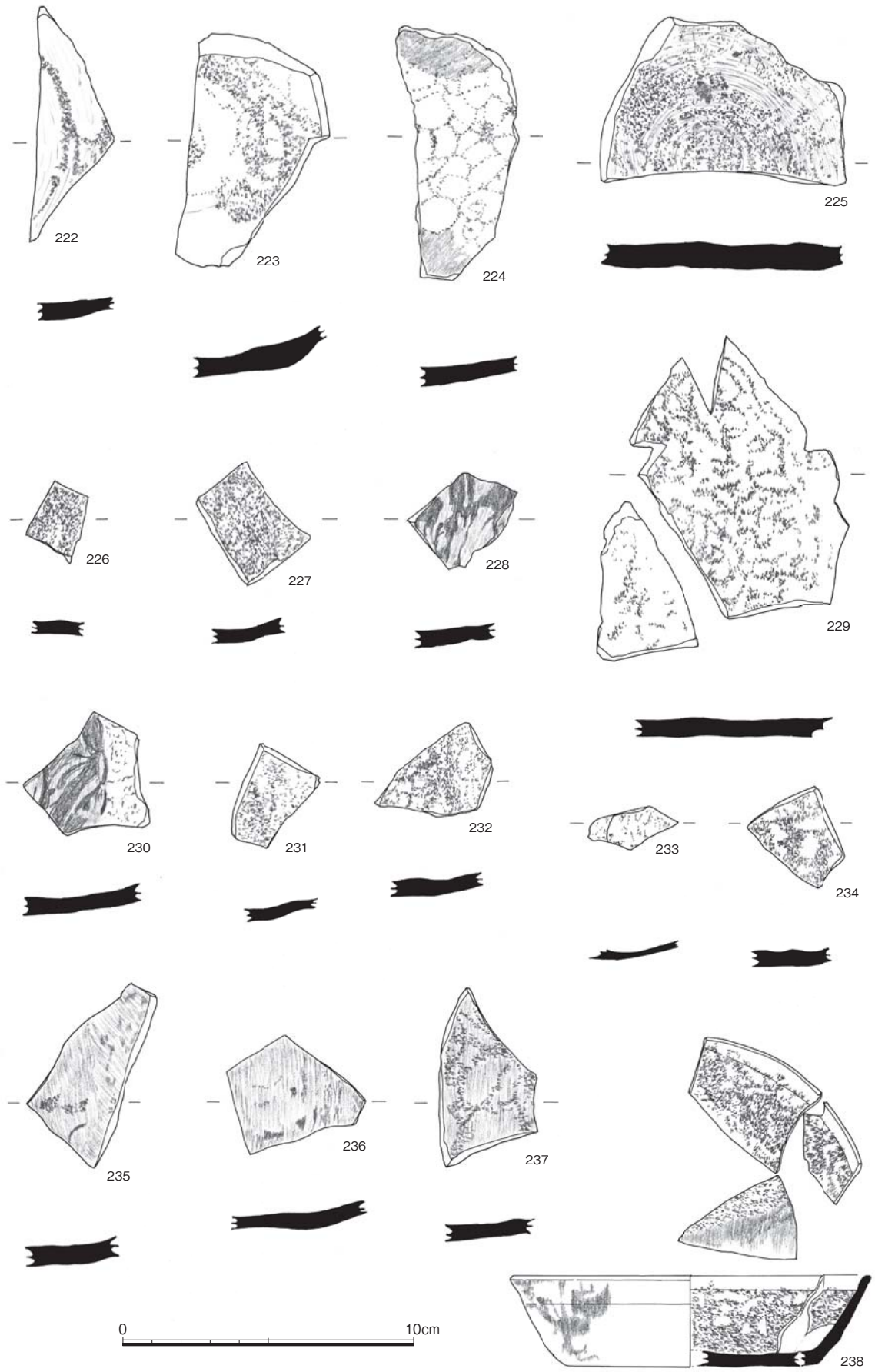


fig. 113　B80-B区出土転用硯（3）

坏蓋を利用する理由は①手近に数多くあり、転用が比較的容易であったこと。②硯面を反転して蓋をすれば、塵埃の混入や、墨汁の乾燥をある程度防ぐことが可能であるためと考えられる。

222～237は須恵器坏または坏蓋を転用して硯としたもので、墨の残り具合は様々であるが墨汁が乾く過程で縞状の模様を残すものが見られる（216，217，221）。また、筆をならしたような痕跡を残すもの（228，230）も認められる。238は須恵器坏の転用硯で、内面には墨痕が明瞭に残り、外面にも若干認められる。転用硯はすべて湿地内堆積土からの出土品である。

⑦土錘・蛸壺

239～243，266は有溝土錘で、紡錘形の平面形状と２条の溝を側面に設ける。

249～265は棒状有孔土錘で、両端に紐通しの穴を有する。長さは11～17㎝と差がある。

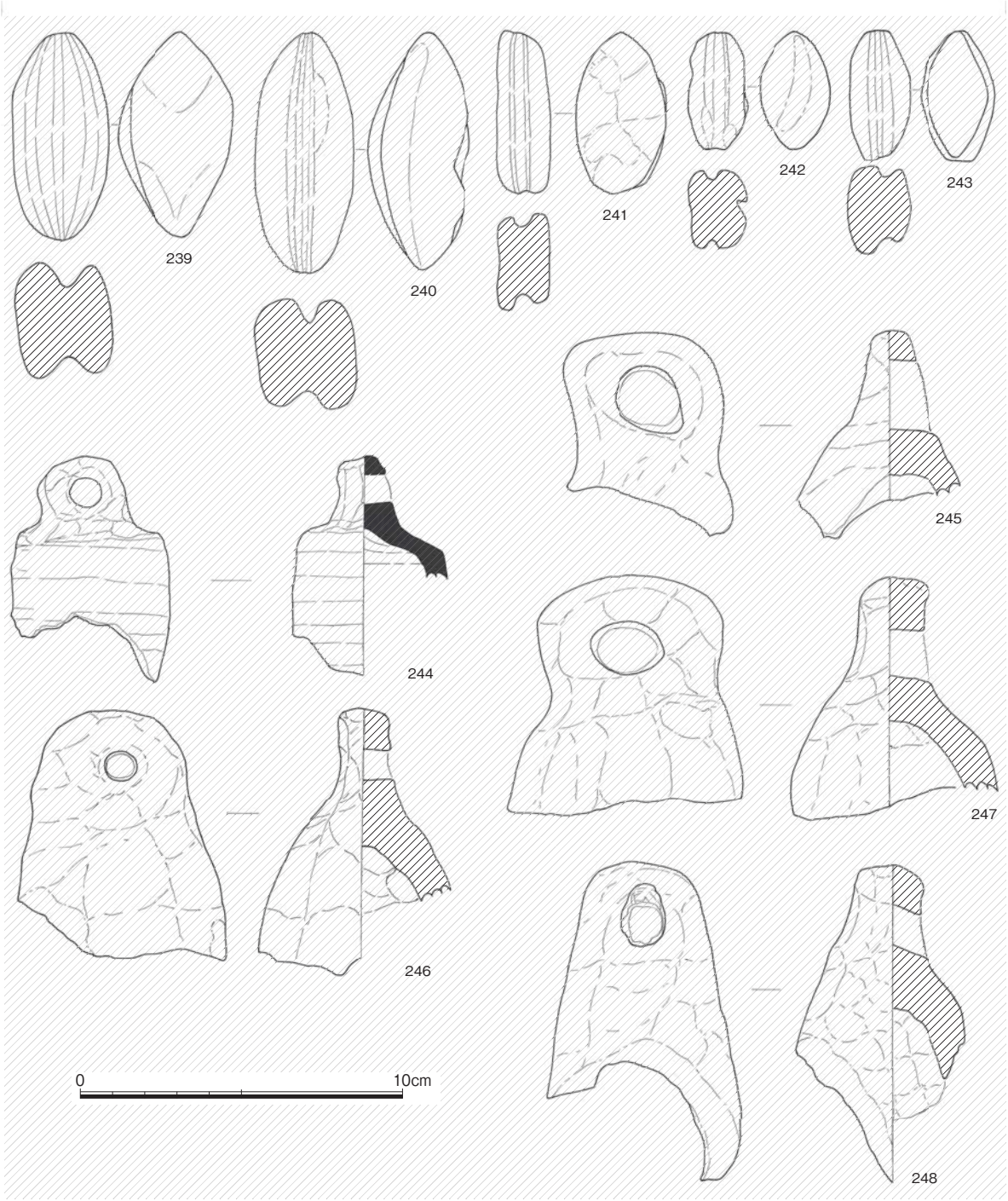


fig. 114　B80-B区出土有溝土錘・蛸壺

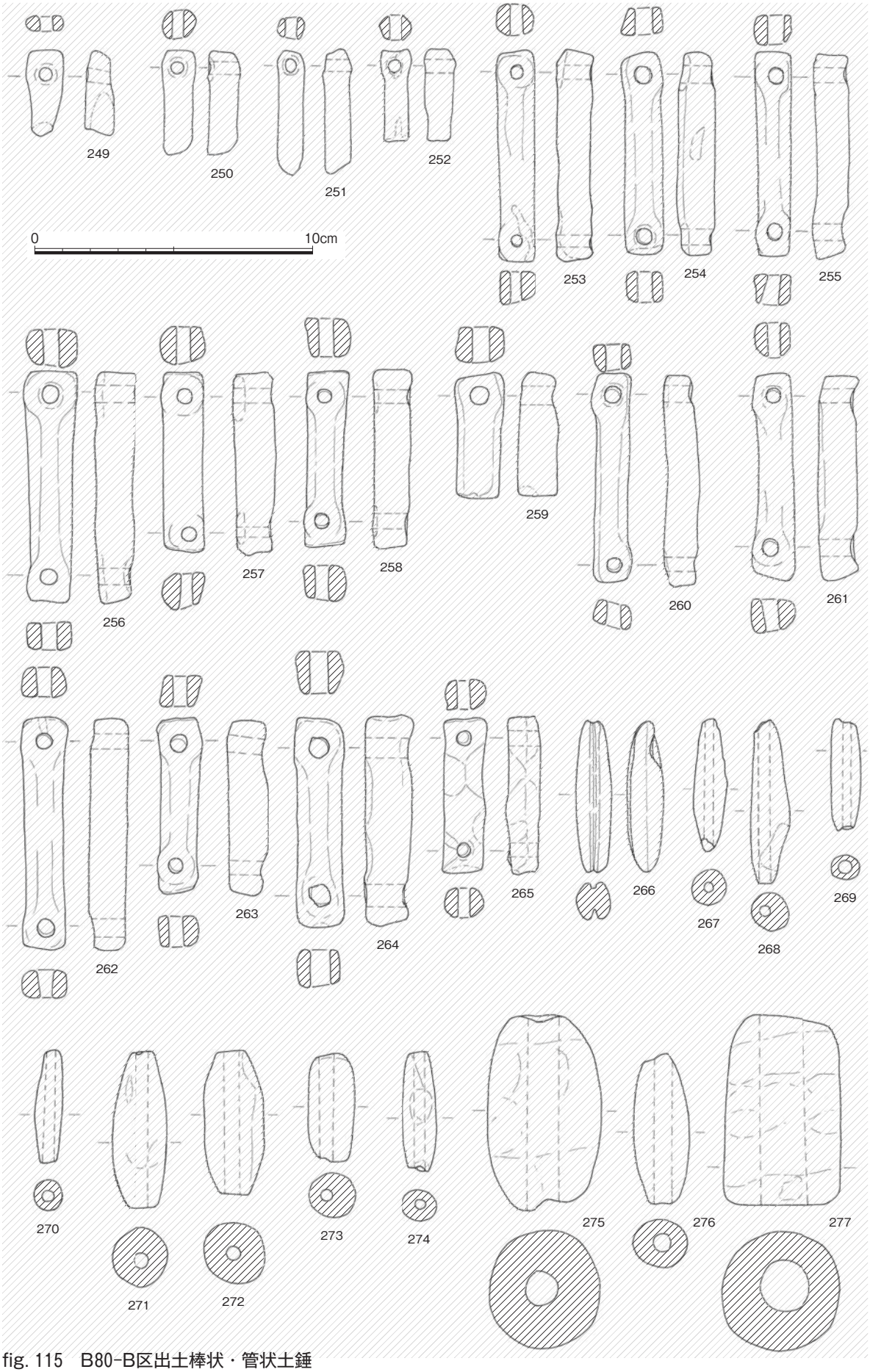


fig. 115　B80-B区出土棒状・管状土錘

使用中にほぼ中央で折損したものと紐通しの穴の部分が欠けたものが多い。

267～277は管状土錘で、267～270，273，274は小型、271，272，276は中型、275，277は大型である。綱を通したと思われる真中の穴の周辺が磨滅しているものが見られる。有溝土錘同様、大きさと重さに差があり、使用される網の種類や部位によって使い分けられたものと思われる。244～248は飯蛸壷で、244は須恵質、他は土師質である。上方に開けられた綱通しの孔は擦れて磨滅しており、沈下や引き揚げ時の摩擦によるものと推定される。土錘・蛸壺はすべて湿地内堆積土から発見された。

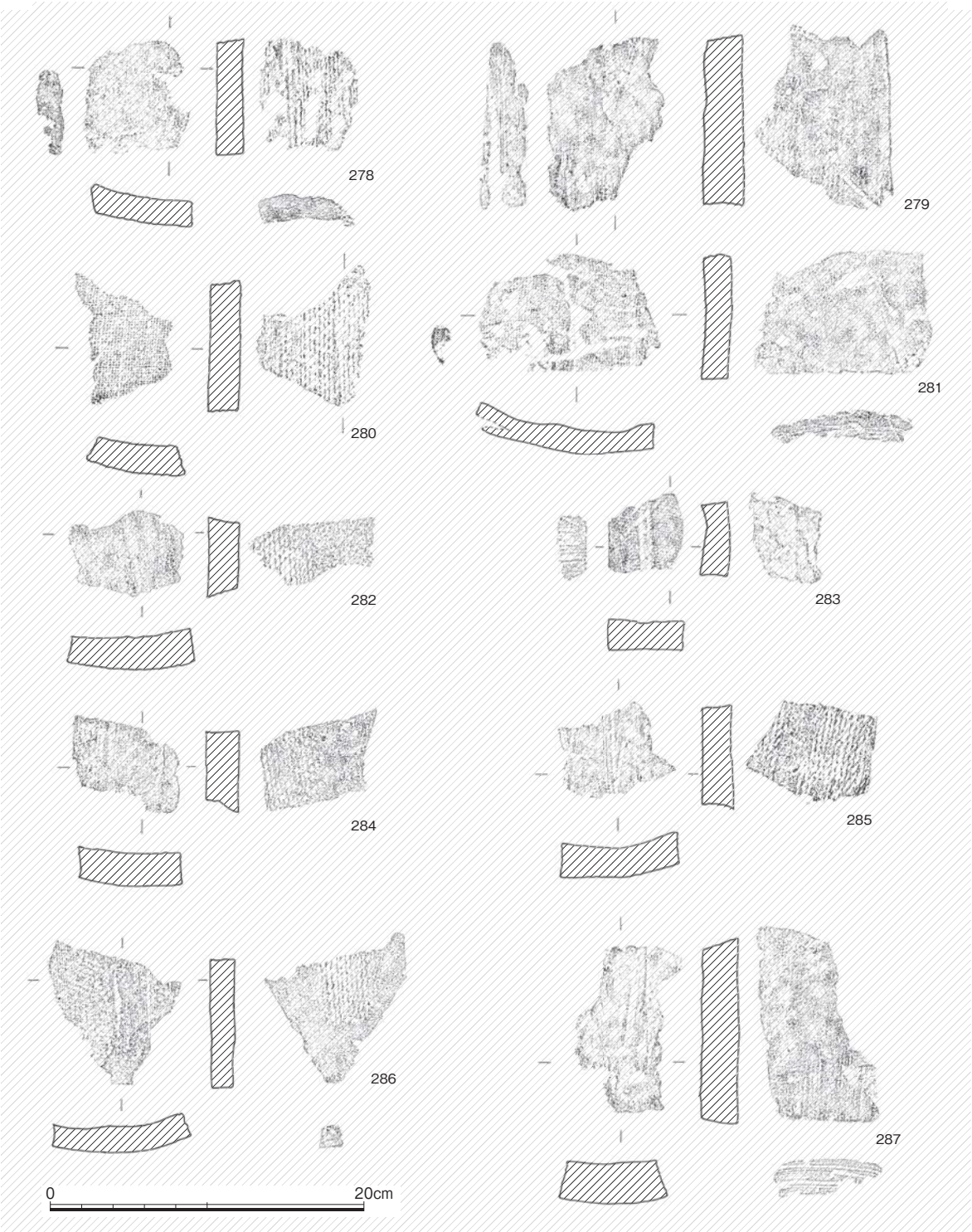


fig. 116　B80-B区出土瓦（1）

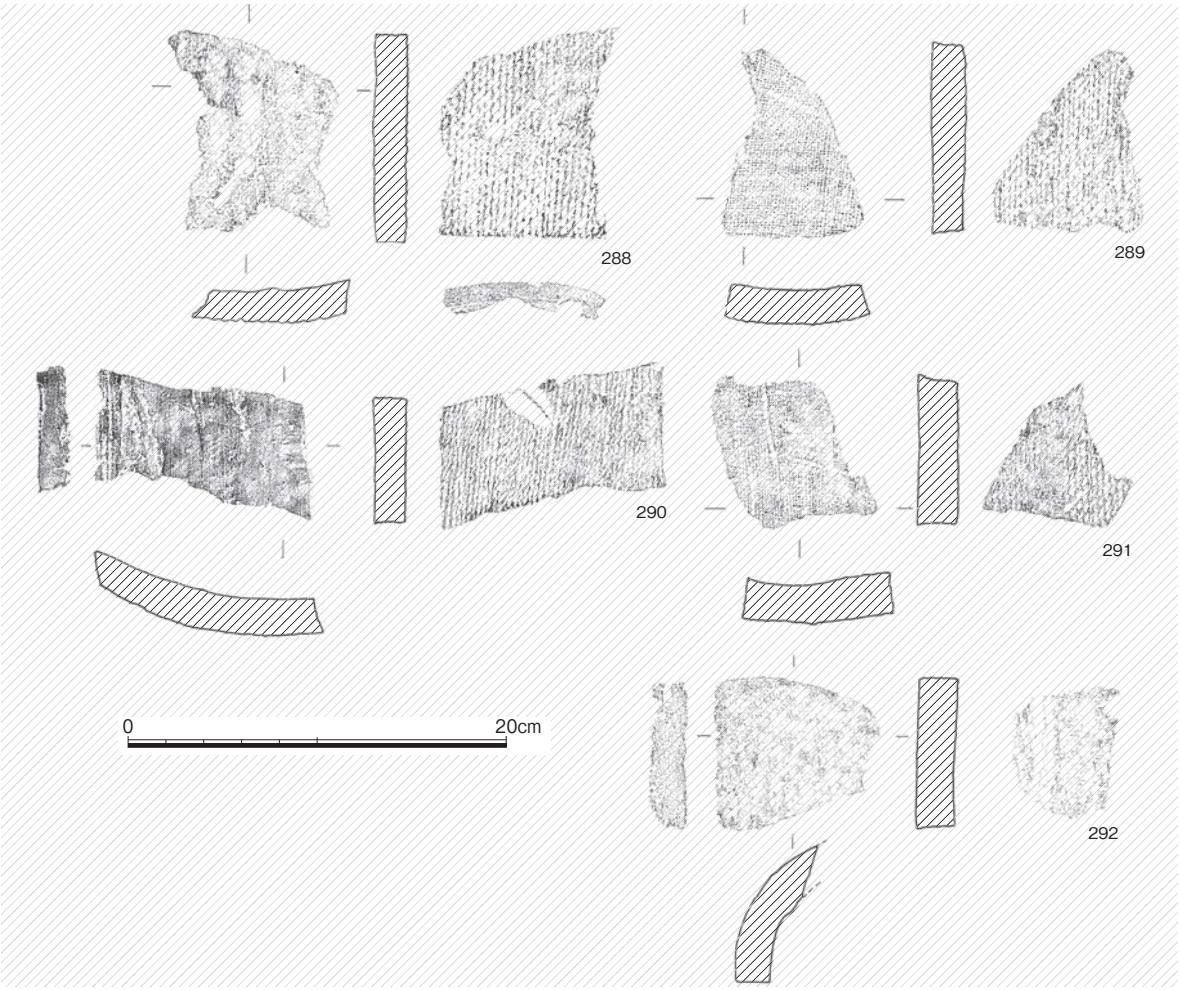


fig. 117　B80-B区出土瓦（2）

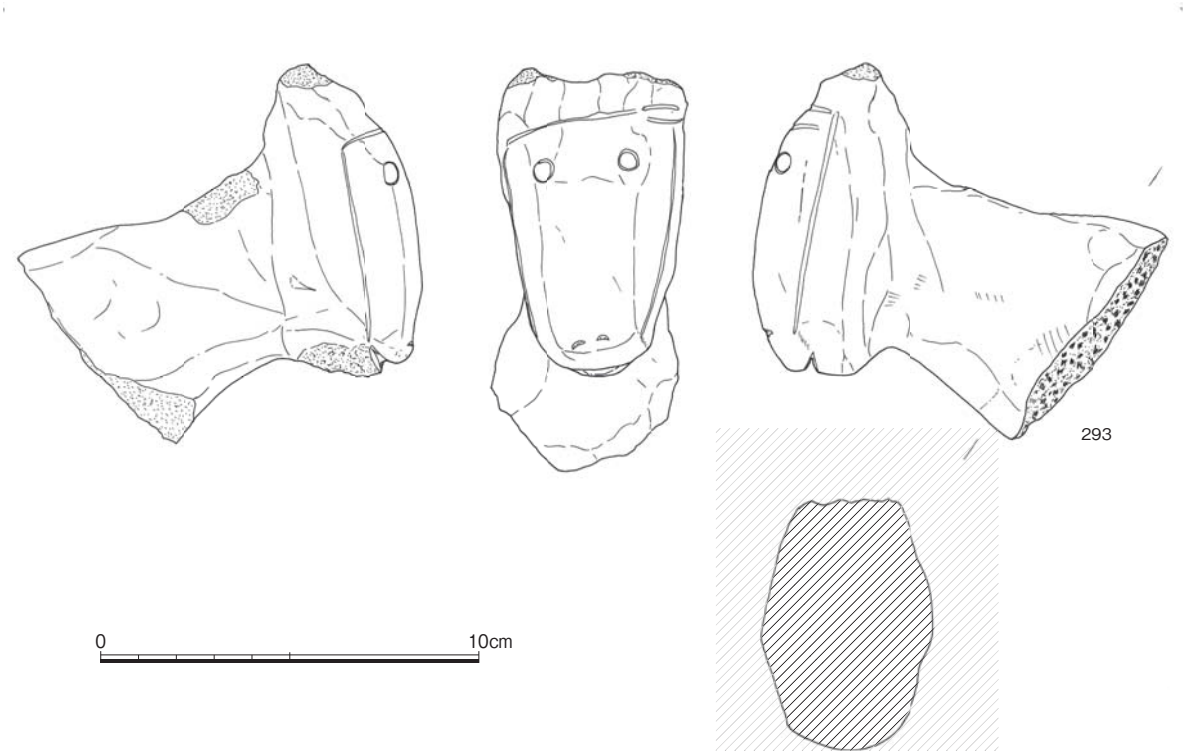


fig. 118　B80-B区出土土馬

⑧瓦・土馬

278から287は平瓦で、焼成の程度は須恵器でも土師器でもない瓦質というべき一群である。凸面は縄目が残り、凹面は布目圧痕またはヘラ削りの痕跡が残る。

288から291は須恵質の平瓦で、凸面は縄目痕、凹面には布目圧痕が残る。292は土師質の丸瓦で、凸面にはヘラ削りの痕跡、凹面には縄目圧痕とナデの痕跡が残る。

293は土師質の土馬の頭部で、手づくね成形の後、ナデで表面を整え、ヘラおよび竹管状の工具で口目鼻・馬具の一部（面繋）を表現している。頸にはたてがみを貼りつけた痕跡が残る。

⑨砥石

294～296は砥石で、294には表裏両面、295，296には表と側面に擦過痕が無数に残る。294，296は凝灰質砂岩、295は砂岩質である。瓦・土馬・砥石ともに湿地堆積層出土である。

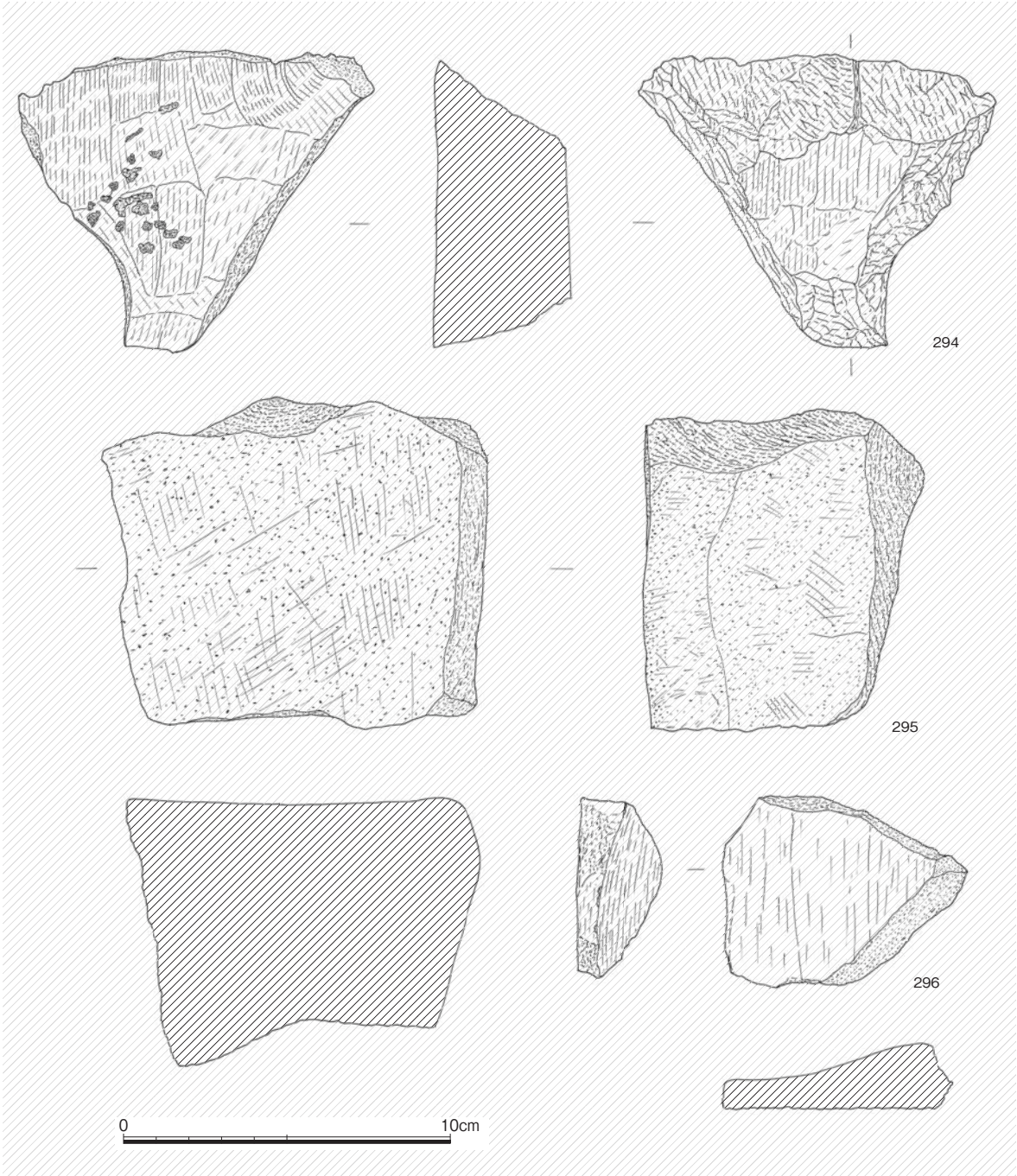


fig. 119　B80-B区出土砥石

⑨木簡

木簡は、B80-B区の湿地の堆積土から4点出土した。いずれも黒色砂質シルト下層出土で、材質はすべてヒノキである。木簡の釈文・内容は以下の通りである。

297　〔生田郷ヵ〕「□□□［　　］廣国　　(204)×23×3　019

298　〔人ヵ〕「米五斗□□息万呂□□□万呂」〔倉人立ヵ〕　182×30×5　011

299　「椋人石万呂　　(120)×(18)×3　061

300　「津守里戸主津守□□　　(118)×(16)×4　081

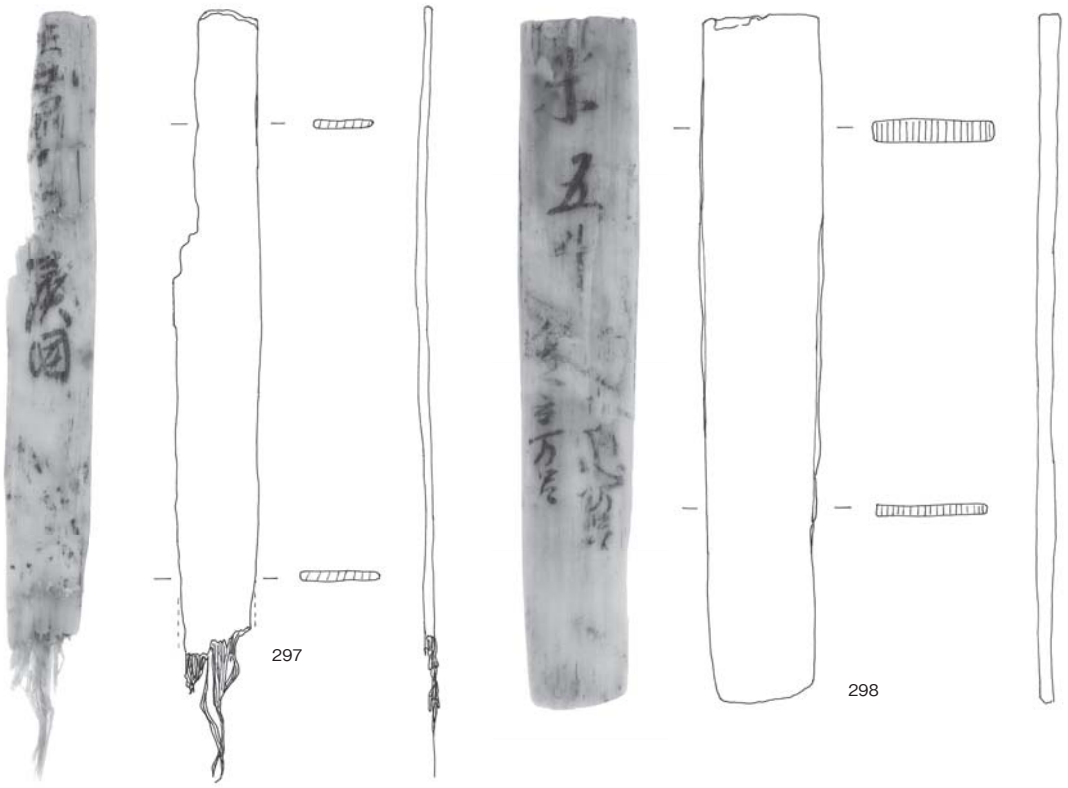
297は、上端切断か、下端折れ、左右両辺削り。「生田郷」は『和名抄』の摂津国八部郡生田郷にあたると思われる。その下は「戸主」の可能性もあるが、そうすると「廣国」の姓にあたる部分が狭くなる点が不審である。

298は四周削り。上端の加工は粗い。米の荷札で、割書の2名が貢進者と思われる。ただし通例であれば、国郡郷里名が記された後にこのような記載が来るはずであるが、反対面に墨痕は認められない。

299は斎串。上端及び左辺削り、下端折れ、右辺割れ。上端は山形に整形し、左辺上部に刻みを1カ所入れる。裏面から刃を入れ、折りかけてやめている。文字部分は墨が残り、かつ浮き上がっている。

300は、上端及び右辺削り、左辺割れ、下端折れ。「津守里」は『和名抄』の摂津国菟原郡津守郷または同西成郡津守郷にあたる可能性がある。上端が原形をとどめており、里名から書き始めている点からみれば、葦屋駅家が所在する菟原郡の津守郷にあたる可能性が高い。

298，299の「倉（椋）人」については、これまでにも第9次調査出土の承和紀年銘木簡に「椋人安道」「椋人稲継」が、第14次調査出土木簡に「椋人廣男」が見える。『続日本紀』神護景雲三年（769年）六月癸卯（七日）条には「摂津国菟原郡人正八位下倉人水守」ら18人が大和連の姓を賜ったことが見え、出土文字資料からもその分布が確認できる。



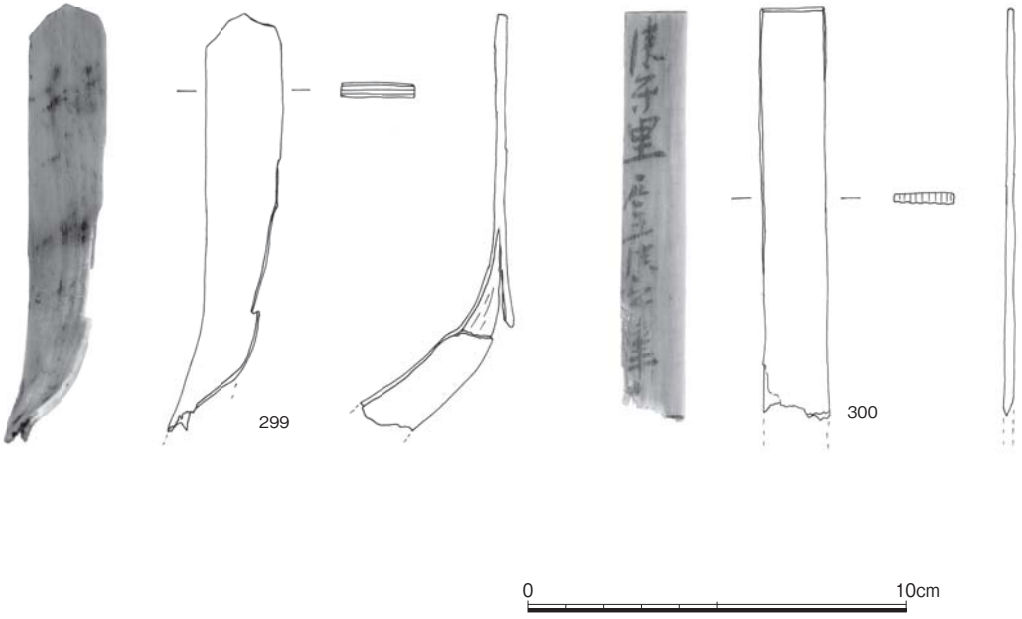


fig. 120　B80-B区出土木簡

⑩木製品

当該区の湿地内堆積土からは多数の木製品が出土した。その種類は祭祀用品、生活用具、紡織用品、漁具、武器、調度品等多種類にわたる。

301，302は人形で、体部は棒状に、頭部を削り出して作る。303～310は斎串で、下端を片刃にするものと両刃にするものがある。上方端は圭頭形にする。311は刀子状に削り出したものである。312～314は馬形で鞍付の馬を簡略化して表現している。315～320は舟形で、中央部付近に覆屋を表現するもの（315，316，318～320）と舟体のみのもの（317）がある。321，322は木釘である。323は織機の招木棒の一部の可能性がある。324は糸枠の部品、325は木錘が半分に割れたものである。326，327は網の浮子、328は浮子の可能性が高い木製品である。329～333

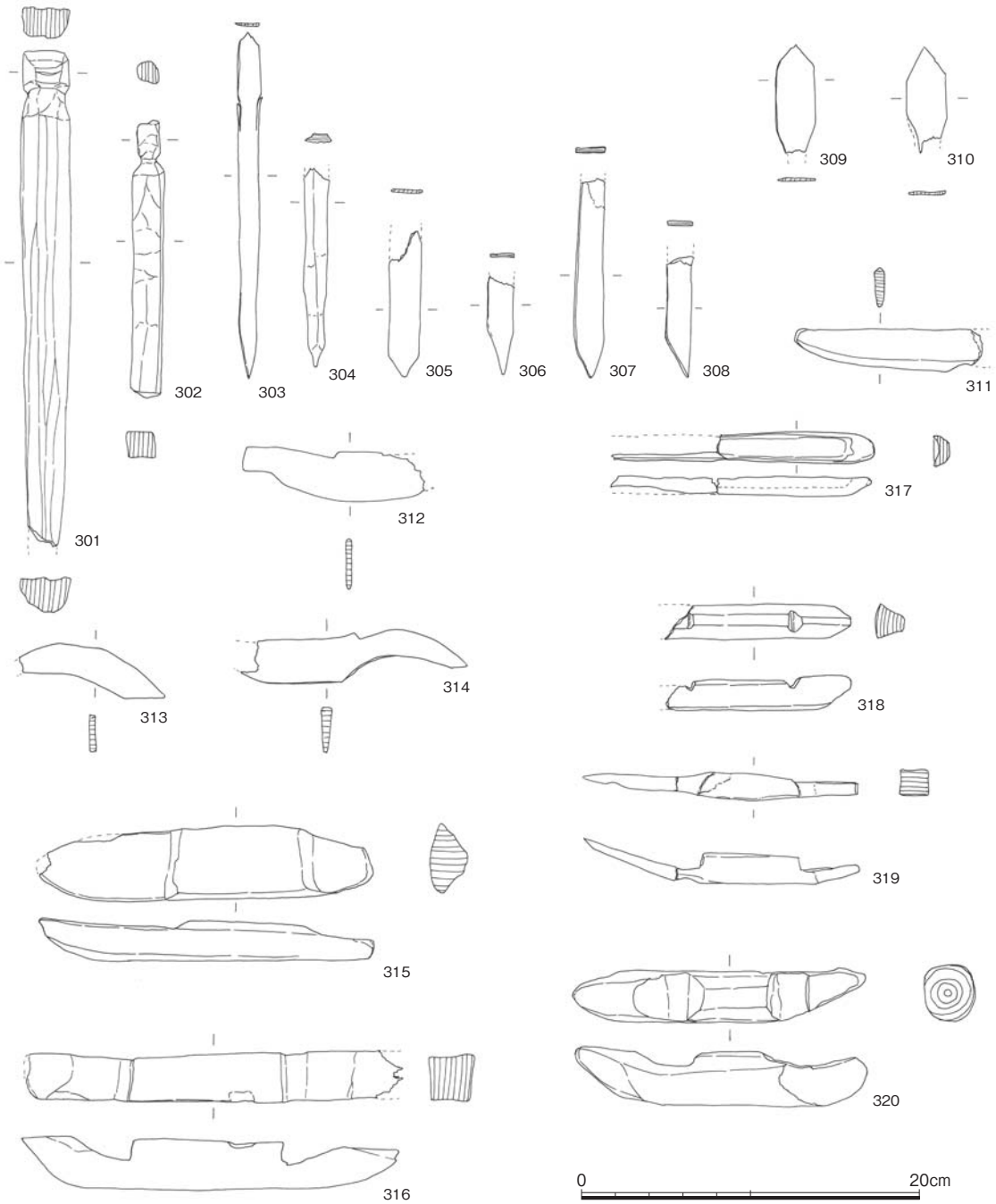


fig. 121　B80-B区出土木製品（1）

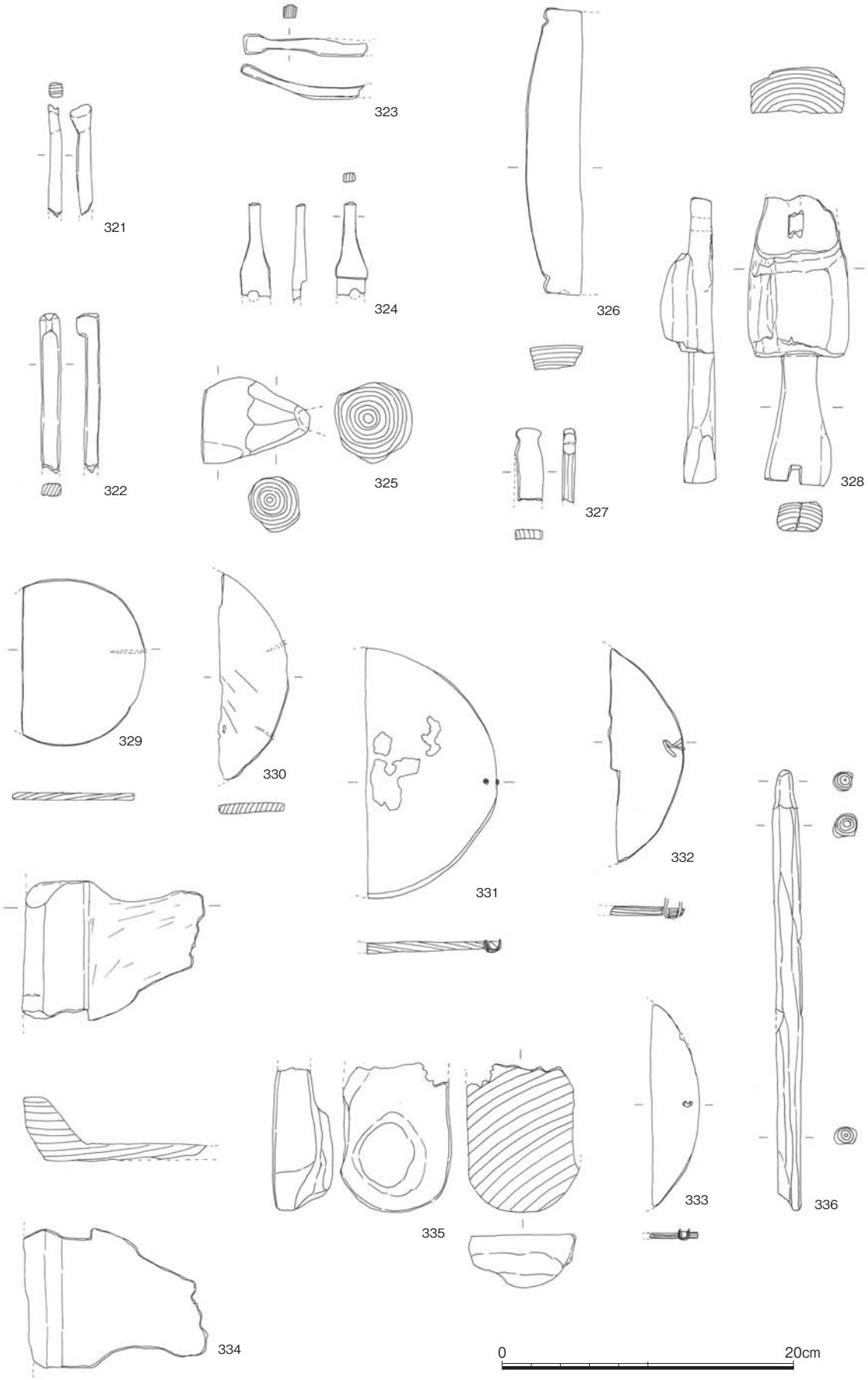


fig. 122　B80-B区出土木製品（2）

は曲物の底板で、329，330には側板を留める木釘の目孔が残る。331～333は端部に側板を立たせて固定する樹皮紐を通すための孔が2穴穿たれ、樹皮の平紐が二重になって残存している。334は方形の木盤、335は下駄の一部、336は丸木弓の一部。337，338は道具の把手または装飾品の一部である。339～351は調度品やその他道具類の部材や未成品と考えられるが、詳細は不明。

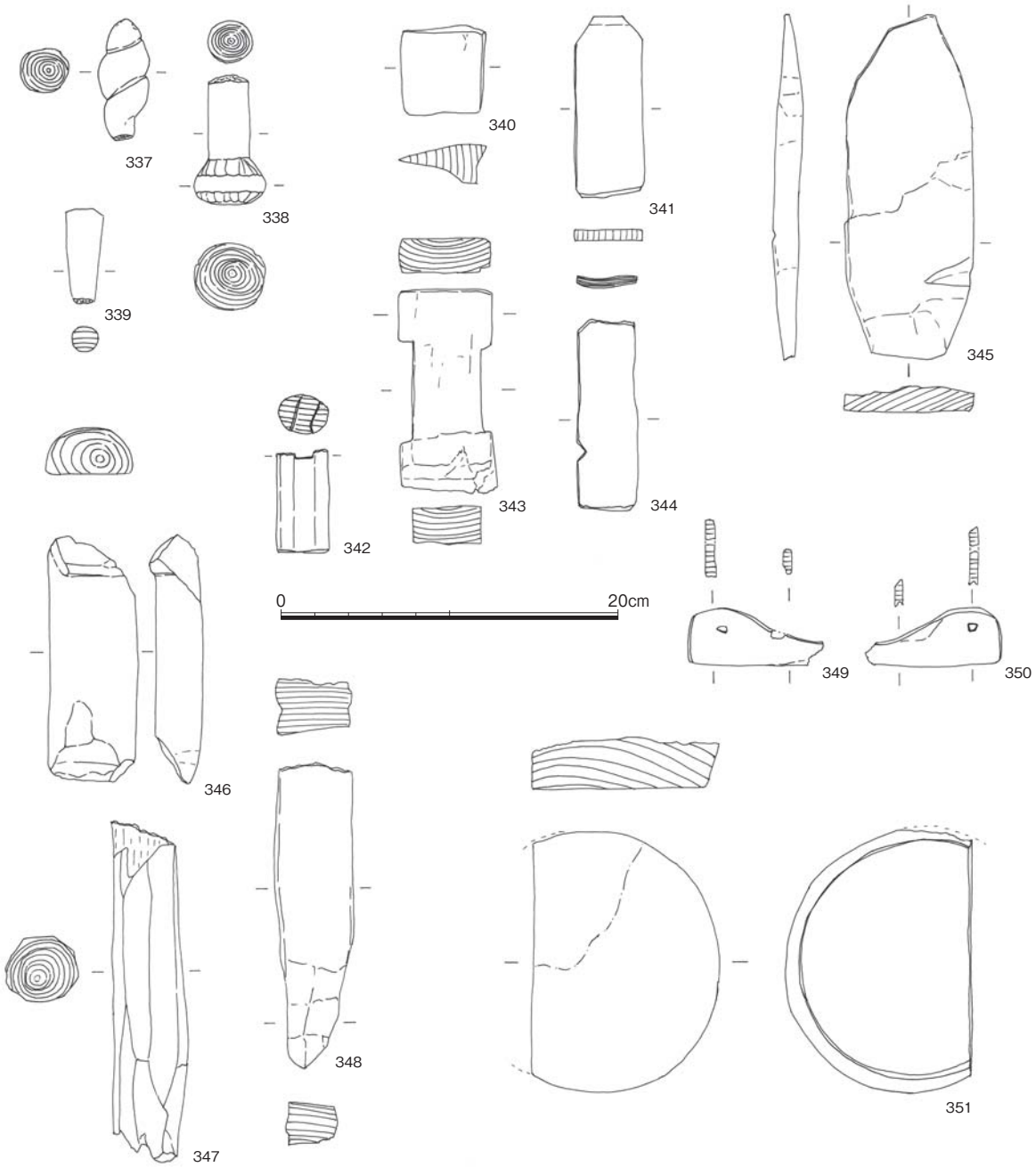


fig. 123　B80-B区出土木製品（3）

⑪金属製品

湿地堆積層を構成する黒色砂質シルトから、金銅製の端止め金具が出土した。これはU字形の表金具で、2.3㎝×2.6㎝の大きさである。内側に突出した3か所の鋲で裏金具と合わせるようになっている。U字形の中央に稜を作り出すという精巧な工作が見受けられる。これは装身具や馬具等の部品の一部である可能性が高い。

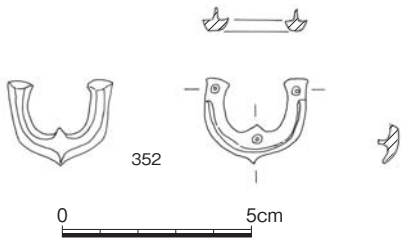


fig. 124　B80-B区出土金属製品

B81-A区

立地

当該区から東側は、B83-A区で浜堤が湿地に変換するまで、安定した浜堤が連続する。浜堤上ではピット、柱穴、土坑等が多く確認され、居住域の中心地と考えられる。

今回の調査では中近世の耕作に伴う溝、奈良・平安時代の遺構等３面の遺構面が検出された。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土、近代・近世耕作土下で中世耕作土（灰褐色細砂）が現れ、その上面で、耕作に関連する南北方向の溝やピットを発見（第１遺構面）。その下には奈良・平安時代の土器を含む茶褐色混じり灰褐色細砂がある。その下の浜堤砂である暗灰色細砂上で奈良・平安時代の遺構面が現れ、柱穴・ピットが多数検出される（第２遺構面）。さらに下層の浜堤堆積砂である黄灰色細砂上面で浅い流路や落ち込みが発見された（第３遺構面）。

第１遺構面（耕作に伴う溝・ピット）

中世耕作土面で東半分に南北方向の耕作に伴う溝を４条検出した。西半部では、浅いピットや犂溝なども確認している。出土遺物は少ない。

fig. 125　B81-A区位置図

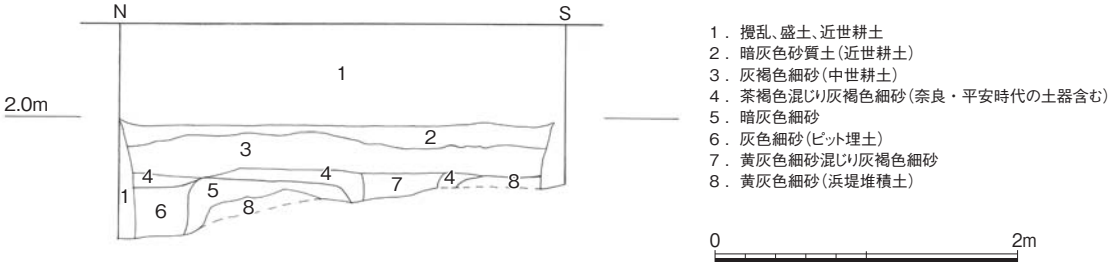


fig. 126　B81-A区東壁断面図

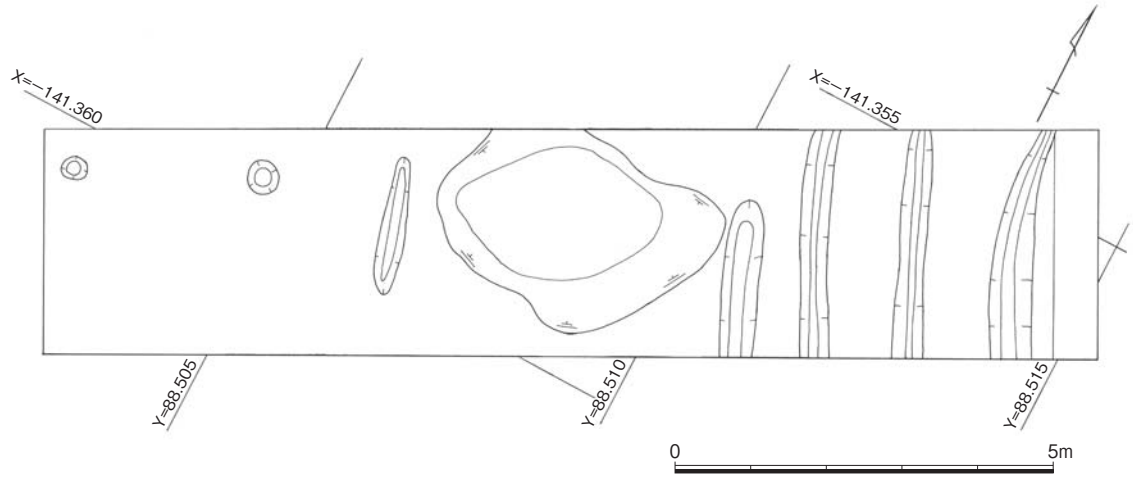


fig. 127　B81-A区第1遺構面平面図

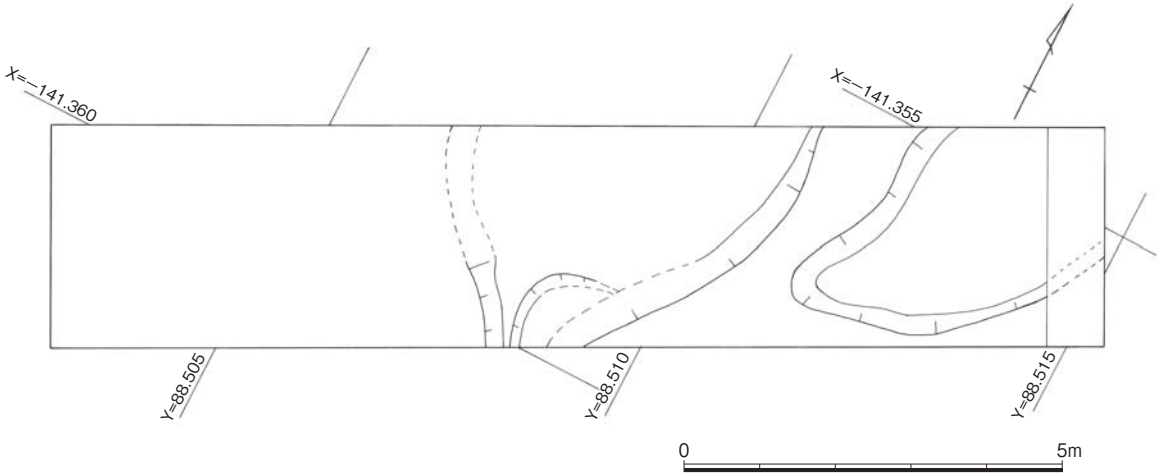


fig. 128　B81-A区第3遺構面平面図

第2遺構面（柱穴・ピット）

奈良・平安時代の遺構面で、柱穴・ピットを53基検出した。うち4基は柱根・立木の根が残存していた。柱穴の一部は前回の第12次調査の柵列に連続しているものが確認された。柱穴・ピット埋土には飛鳥～平安時代初めの土器を含む。

第3遺構面（奈良時代以前の浅い流路・落ち込み）

柱穴・ピット等を確認した灰色細砂を除去すると、浜堤堆積砂である黄灰色細砂が確認され、その上面で南北方向の浅い流路が検出され、堆積土から須恵器甕が破片の状態で出土した。

出土遺物

第2遺構面のピット等の遺構内から出土した土器類は細片で、図化が困難なものがほとんどであった。第3遺構面の浅い流路上層から破片となって出土したものが須恵器甕（353）で外面は縦方向と横方向のタタキ目を組み合わせ、内面は同心円状のタタキ目を用いる。

354～358は棒状有孔土錘で、両端に紐通しの孔を開ける。359は有溝土錘で、紡錘形の平面形に2条の溝が付けられている。360～368は管状土錘で、真中に紐通しの孔が貫通している。大きさに差異があり、各種の漁網に用いられたものと推測される。土錘はすべて土師質である。369は須恵質の釣鐘形の飯蛸壷である。361～363は中世耕作土（灰褐色細砂）出土、その他は奈良・平安時代の土器を含む茶褐色混じり灰褐色細砂～遺構検出中に出土した。

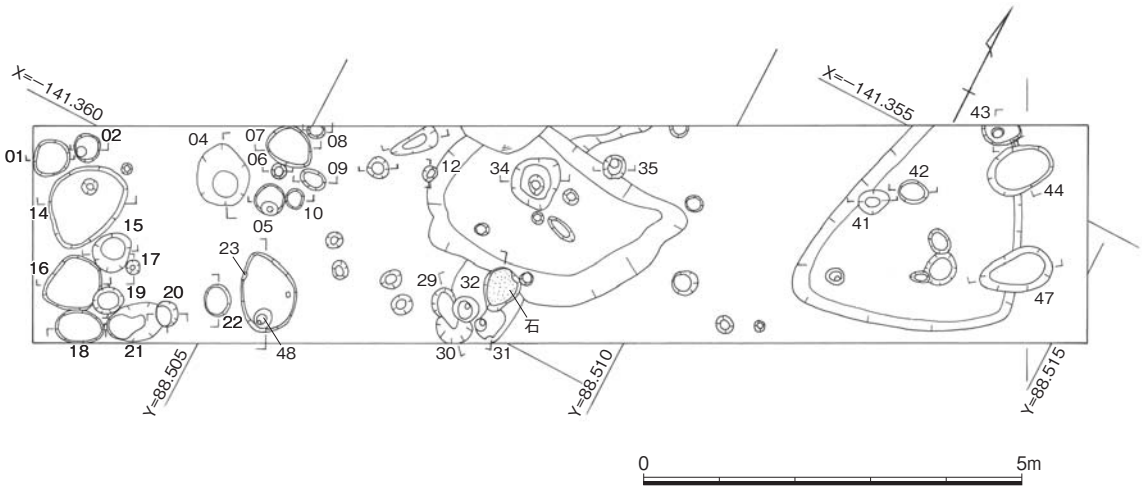


fig. 129　B81-A区第2遺構面平面図

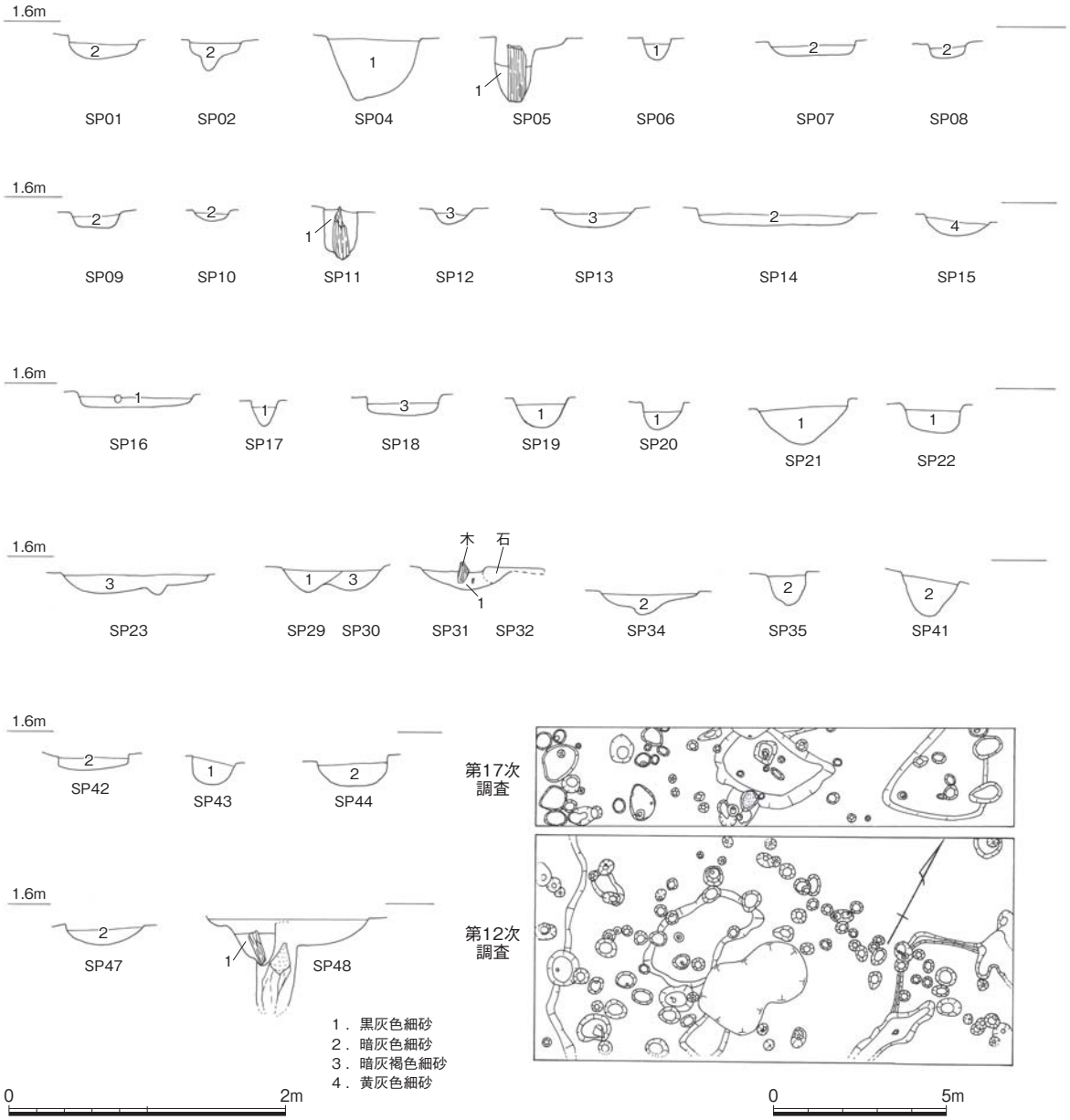


fig. 130　B81-A区第2遺構面 柱穴・ピット断面図　　fig. 131　B81-A区第12・17次調査合成図

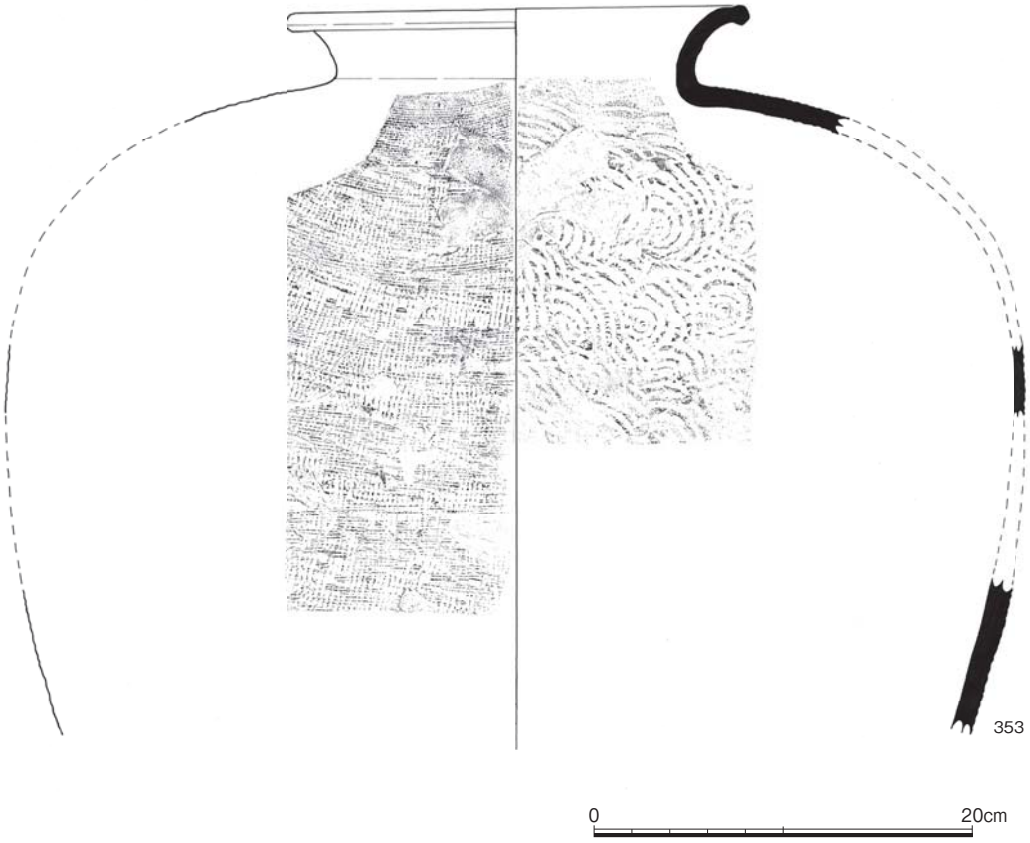


fig. 132　B81-A区出土土器

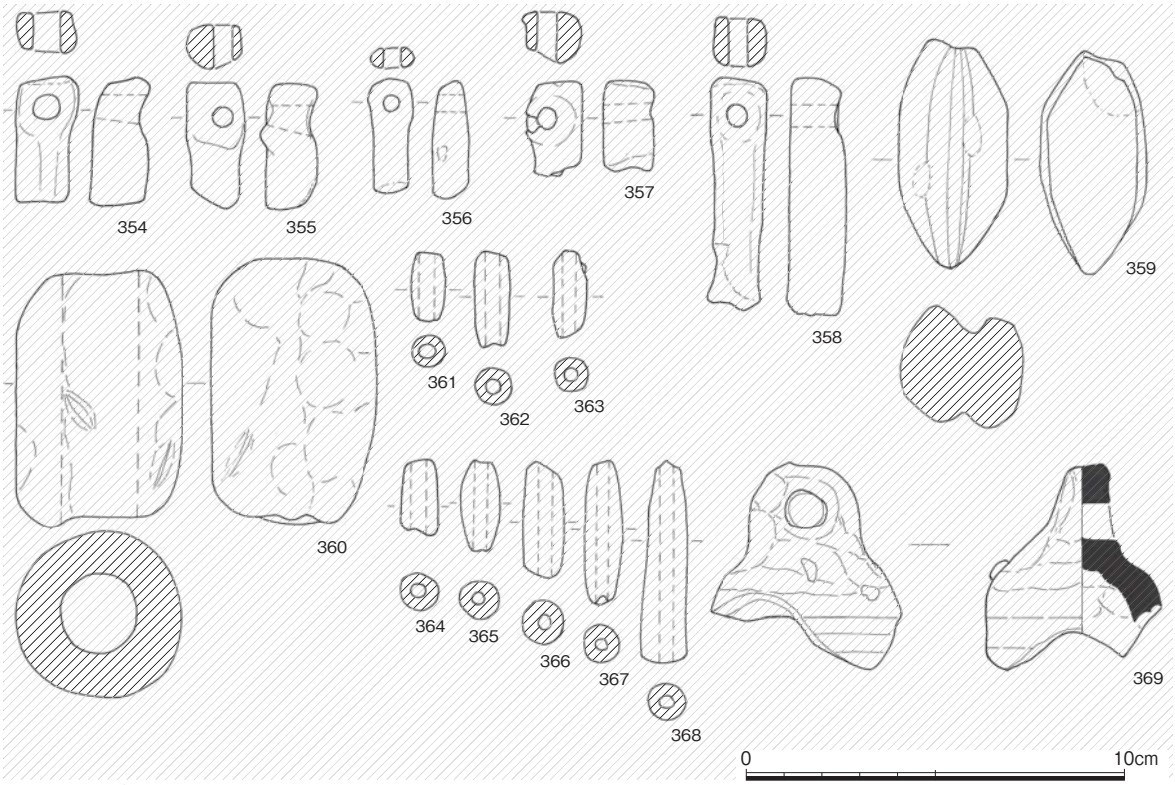


fig. 133　B81-A区出土土錘・蛸壺

B81-B区

立地

当該区は安定した浜堤上に位置し、2面の遺構面が確認された。特に第2遺構面では、B81-A区同様に奈良・平安時代の遺構が多く検出された。

基本層序

阪神電車軌条の盛土下は中世耕作土（暗灰色砂質土）が現れる。この上面で浅い溝を確認した（第1遺構面）。その下は奈良～平安時代の土器を含む茶褐色砂質土が続き、その下の浜堤の堆積層（黄灰色細砂～中砂）の上面で柱穴・ピットを検出した（第2遺構面）。その下は黄灰色中砂・粗砂層が堆積する。

第1遺構面（犂溝）

中世耕作土面で耕作に伴う南北・東西方向の溝を10条検出した。

第2遺構面（柱穴・ピット）

奈良・平安時代遺構面で柱穴・ピット30基を検出した。特に北西端の柱穴埋土からは焼土塊・鉱滓・鞴の羽口等が出土した。付近で鍛冶作業を行っていたとみられる。

fig. 134　B81-B区位置図

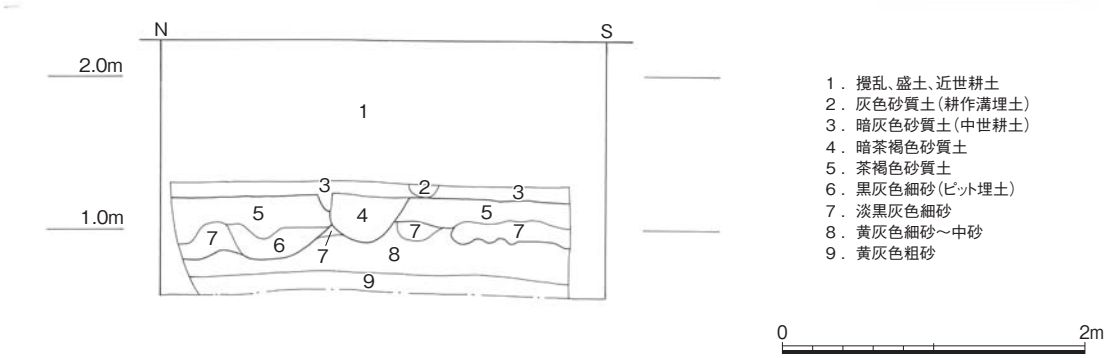


fig. 135　B81-B区東壁断面図

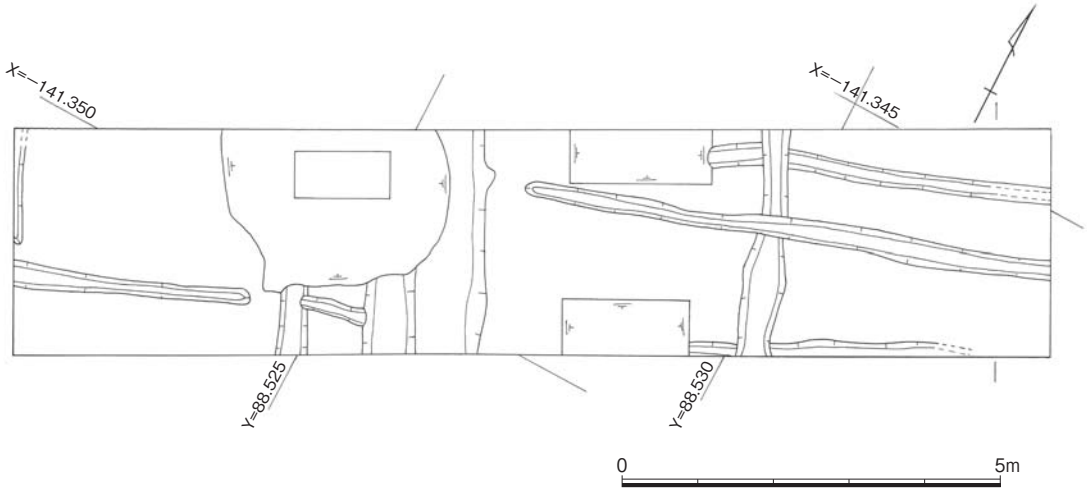


fig. 136　B81-B区第1遺構面平面図

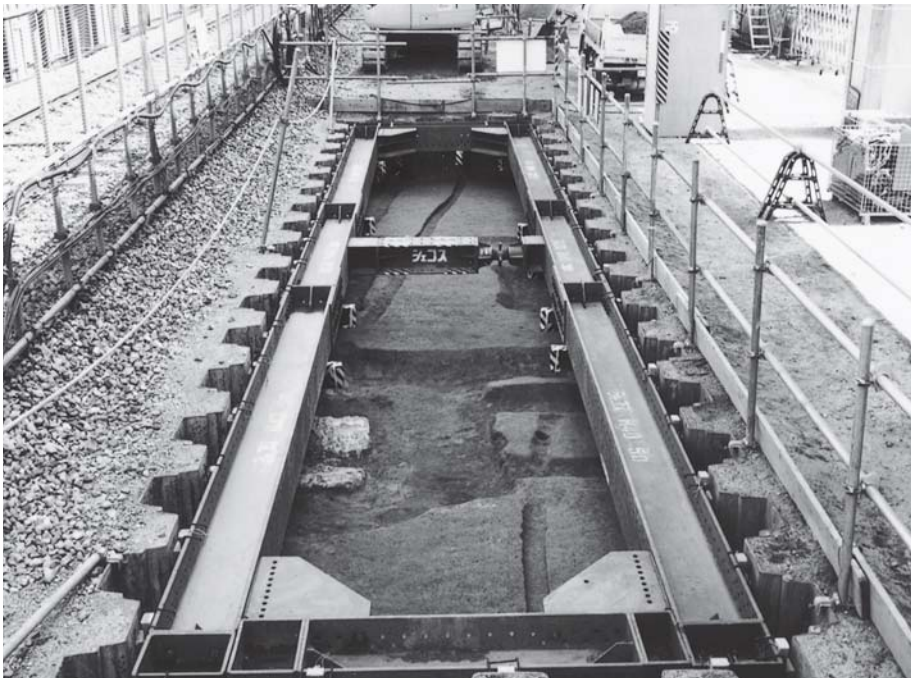


fig. 137
B81-B区第1遺構面全景
（西から）

浜堤形成砂上面

浜堤形成砂（黄灰色細砂）上面で前回の第12次調査では、古墳時代後期の祭祀遺物がまとまって出土したが今回は見つからず、弥生時代末～古墳時代初めの土器片がわずかに出土した。

出土遺物

370～372は棒状有孔土錘で、両端に紐通しの孔を開ける。373，374は管状土錘で、真中に紐通しの孔が貫通している。大小のサイズがある。374は中世犂溝出土、それ以外は奈良～平安時代の土器を含む茶褐色砂質土および第2遺構面検出時出土。

375～377は須恵器坏、坏蓋、有蓋高坏で、古墳時代後期～飛鳥時代のものである。375は第2遺構面のピット、376，377は第2遺構面検出時に出土した。378は土師器坏で内面は放射状の暗文、外面底付近は指頭圧痕が残る。茶褐色砂質土出土。379は須恵器坏蓋、380，381は坏の底部である。379は中世犂溝、380，381は第2遺構面検出時に出土した。

382，383は鞴の羽口である。高熱を受け、口縁部が焼け爛れて飴状に溶解し、無数の気泡が浮き出ている。小破片が溶着したものも認められる。第2遺構面の北西端の柱穴埋土から焼

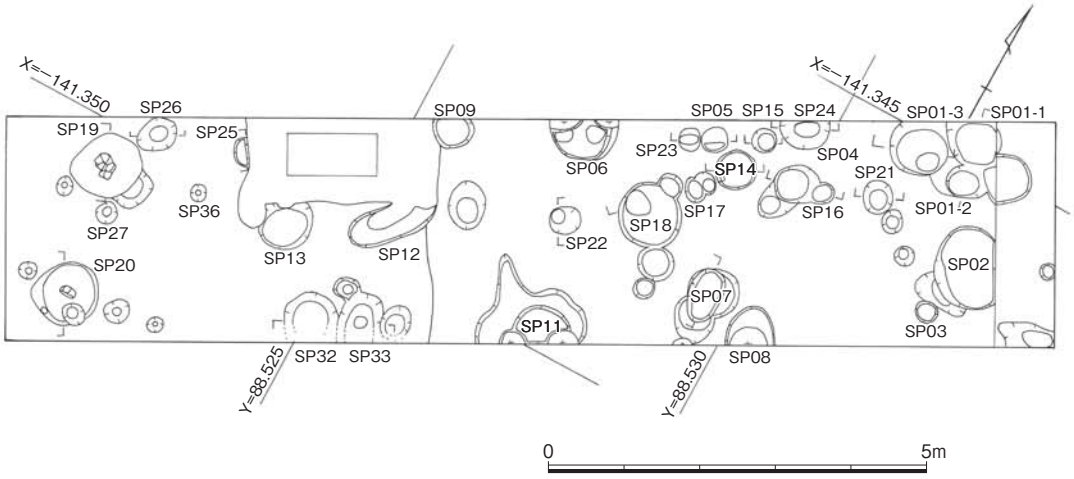


fig. 138　B81-B区第2遺構面平面図

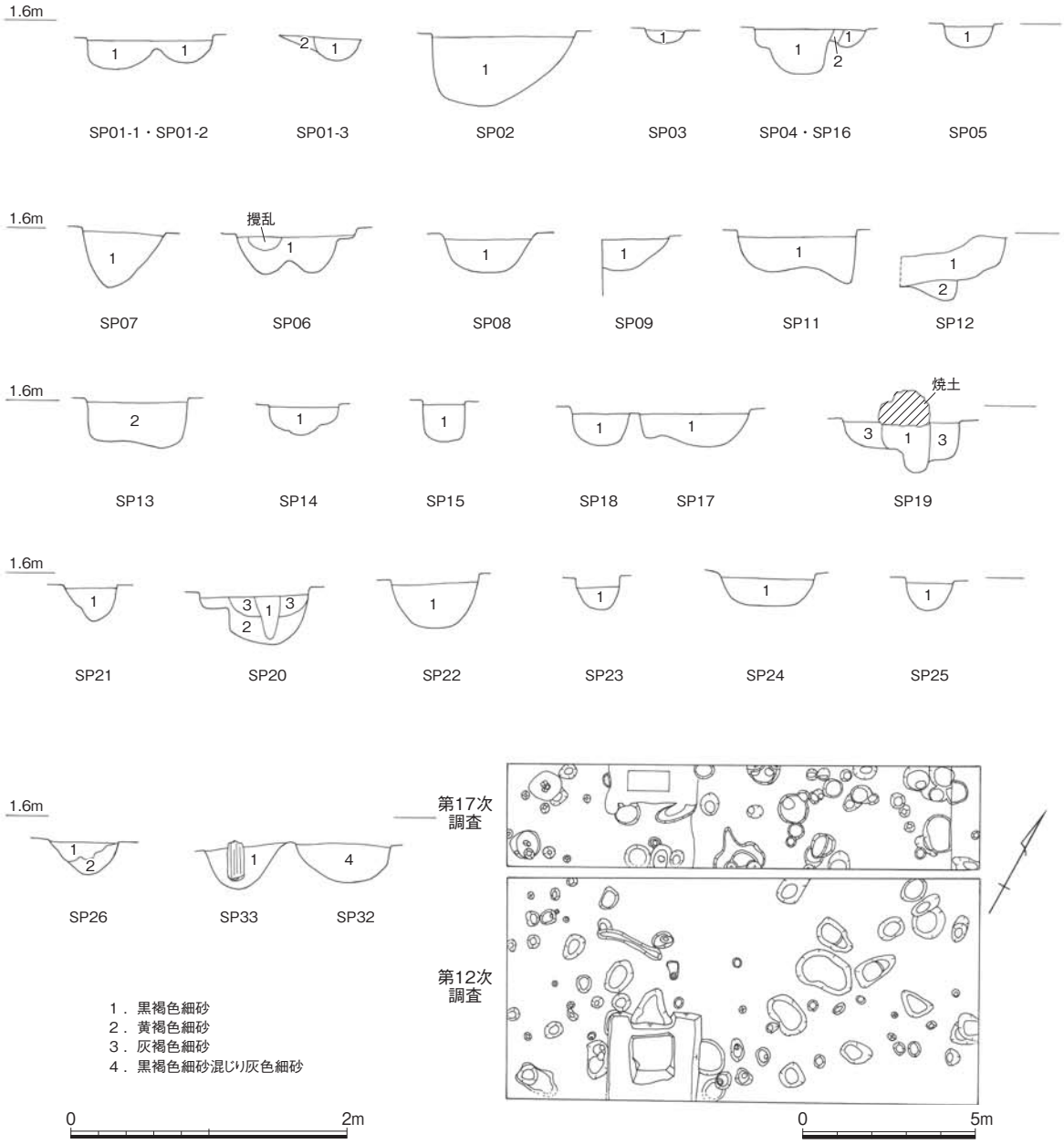


fig. 139　B81-B区柱穴・ピット断面図

fig. 140　B81-B区第12・17次調査合成図

土塊・鉱滓とともに出土した。

384は瓦質の丸瓦で、凸面には縄目圧痕とナデ調整、凹面には布目圧痕が残る。第2遺構面検出時出土。385は土師質の平瓦で、凸面には縄目圧痕、凹面には布目圧痕がわずかに残る。茶褐色砂質土より出土した。

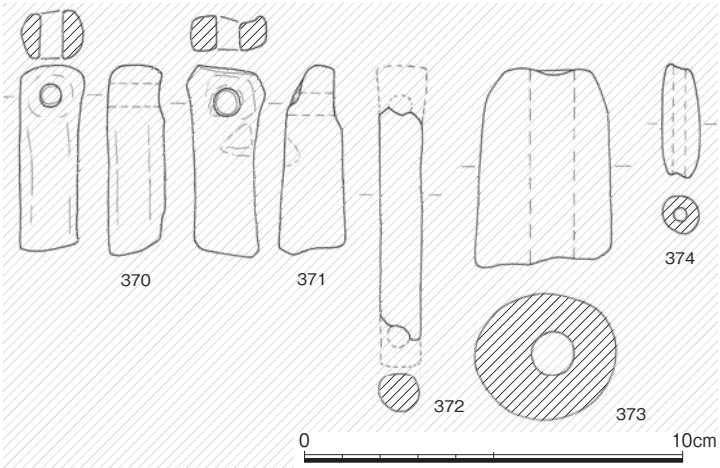


fig. 141　B81-B区出土土錘

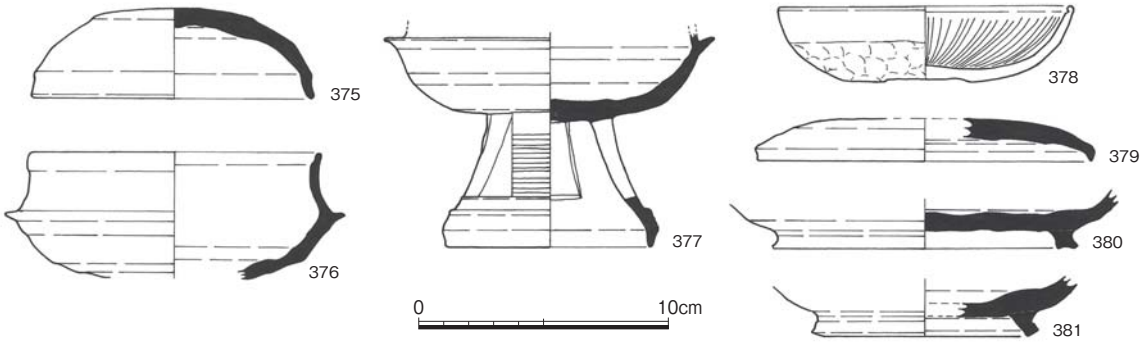


fig. 142　B81-B区出土土器

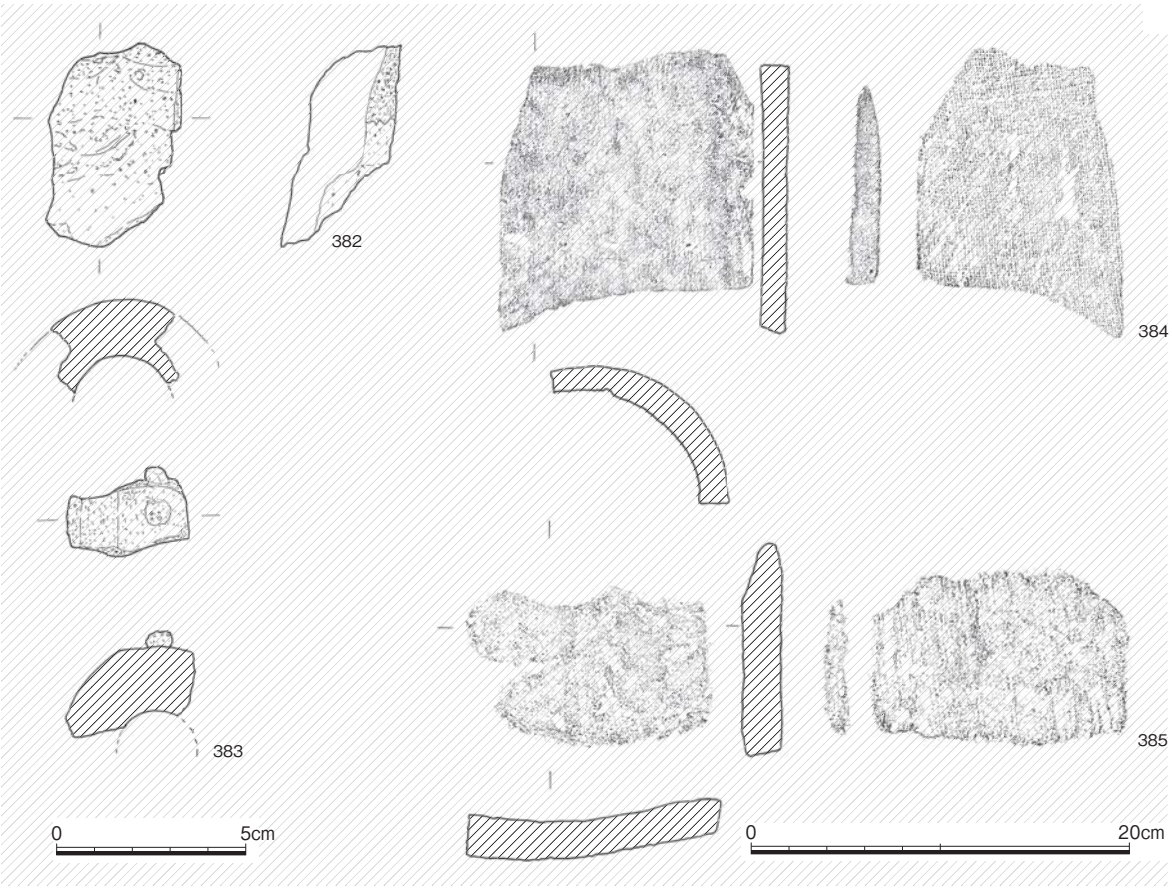


fig. 143　B81-B区出土鞴羽口・瓦

B82-A区

立地

当該区は安定した浜堤上に位置するが、東端には古墳時代頃の土石流による堆積が認められる。合計3面の遺構面が確認された。

基本層序

阪神電車の軌道の盛土、中世耕作土（黄褐色中砂～細砂混じり淡灰色粗砂～中砂・この上面が第1遺構面）。その下は灰色系粗砂～中砂が続く。褐色細砂混じり暗灰色中砂層上面で柱穴・ピットを確認（第2遺構面）する。以下は西側については浜堤を形成する黄灰色砂（上面が第3遺構面）、東側は土石流堆積の粗砂・砂礫が堆積する。

第1遺構面（犂溝）

中近世耕作土面で溝5条と土坑2基、落ち込み等を検出した。中近世頃の遺構と判断される。

第2遺構面（柱穴・ピット）

褐色細砂混じり暗灰色中砂層上面では、土坑・柱穴を40基以上検出した。このうち、SP01

fig. 144　B82-A区位置図

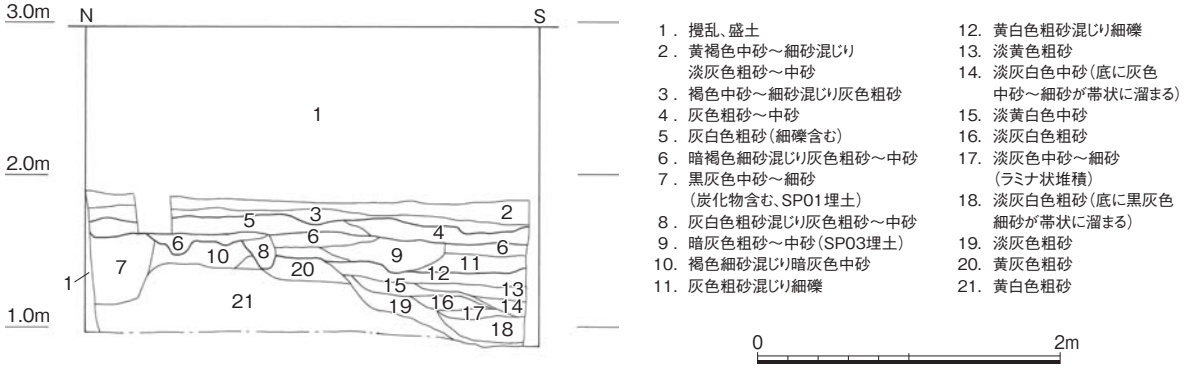


fig. 145　B82-A区東壁断面図

からは柱材が出土している。埋土には奈良時代の土師器・須恵器などの破片が含まれる。建物の復元には至らないが、SP28・SP14・SP42、そして第12次調査区のSP43がほぼ等間隔で一列に並ぶ。それぞれのピットの間隔は約1.5mである。方角は北から東に4°振っている。また、SP01・SP44、第12次調査同区のSP02もほぼ等間隔に一列に並ぶ。それぞれのピットの間隔は約1.6mである。方角は北から西に6°振っている。また、SP02から90°東に振って、SP03と組み合う可能性も考えられる。

第3遺構面（ピット・溝・土石流）

黄灰色粗砂（浜堤形成砂）層上面で、ピット、溝、土石流を検出している。ピットは2基検出しており、いずれも直径は約0.7m、深さは約0.2mである。溝の幅は約0.7m、深さは約0.2mで自然に流下したものである可能性が高い。古墳時代前期の土師器の小片が出土している。土石流は南側に接する第12次調査でも検出されており、同一の流れである。前回の調査では古墳時代の祭祀遺物が出土しているが、今回の調査ではそれに関連する遺物は出土しなかった。

出土遺物

386～389は須恵器坏・坏蓋、390～393は土師器坏で、391は口縁部に煤が付着し、灯火器として使用。392，393の底部は回転ヘラ切り未調整。394，395は須恵器壷で、394の底にはヘラ記号がある。396～398は須恵器坏、399は須恵器鉢。これらの土器は飛鳥～平安時代の中に収まる。第2遺構面直上の灰色中砂～粗砂と第2遺構面のピット出土。400～402は棒状有孔土錘、403～413は管状土錘、414は有溝土錘で、いずれも土師質。415は須恵質の飯蛸壷である。

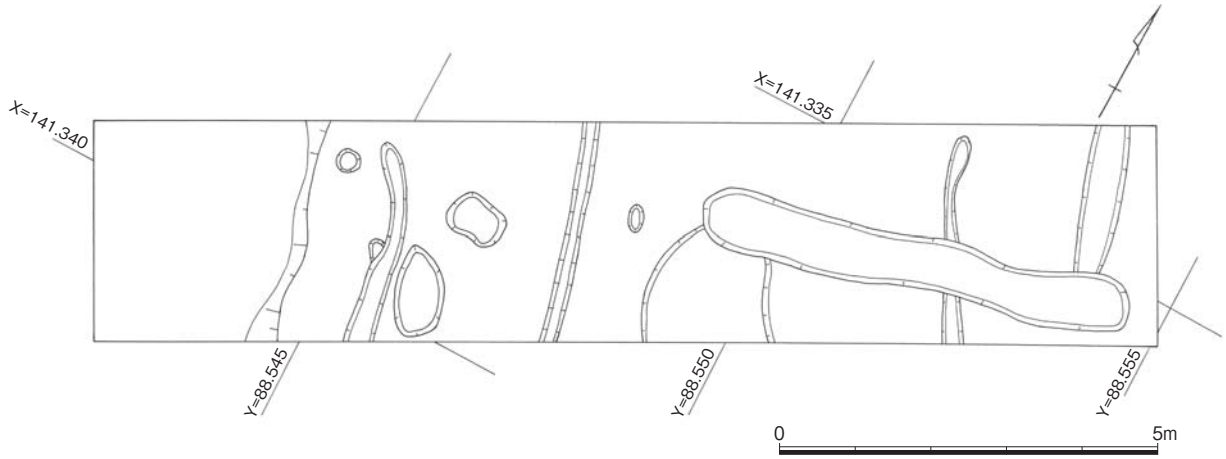


fig. 146　B82-A区第1遺構面平面図

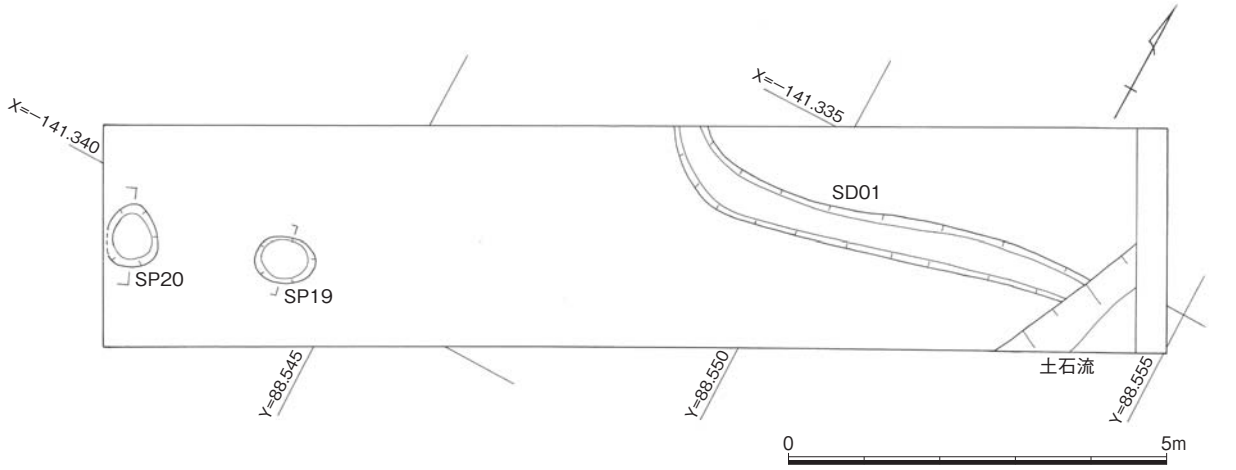


fig. 147　B82-A区第3遺構面平面図

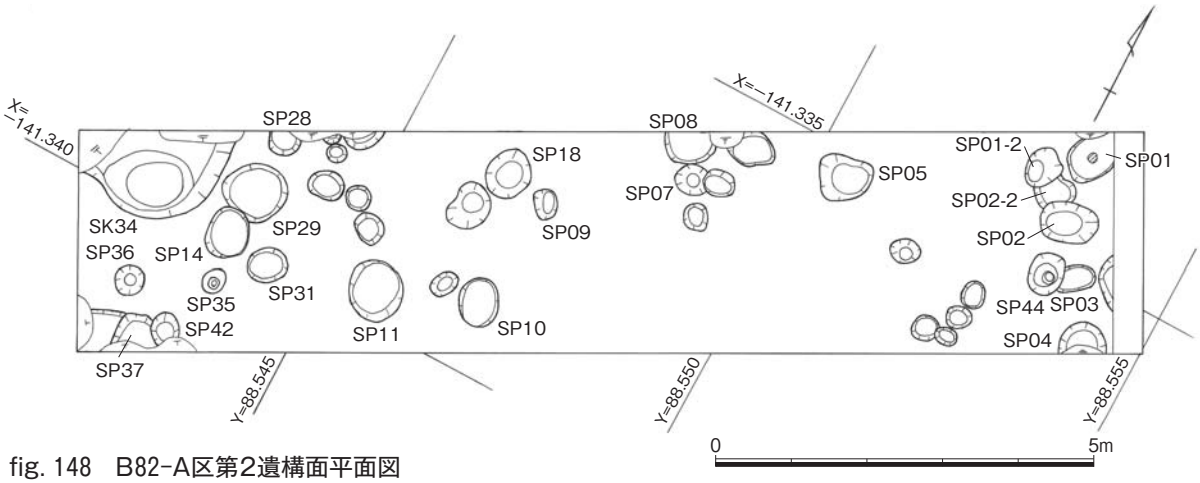


fig. 148　B82-A区第2遺構面平面図

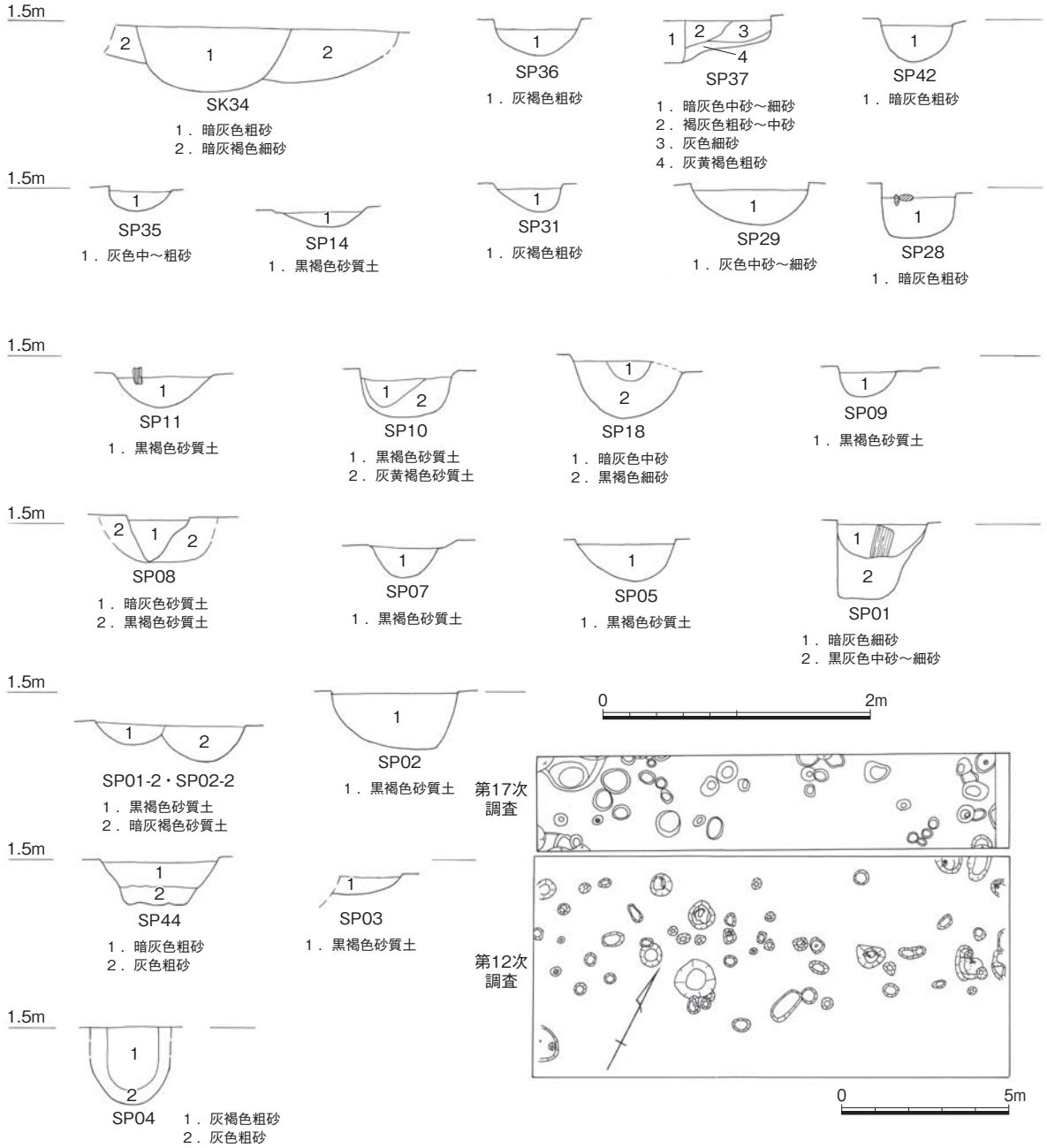


fig. 149　B82-A区第2遺構面柱穴・ピット断面図　　fig. 150　B82-A区第12・17次調査合成図

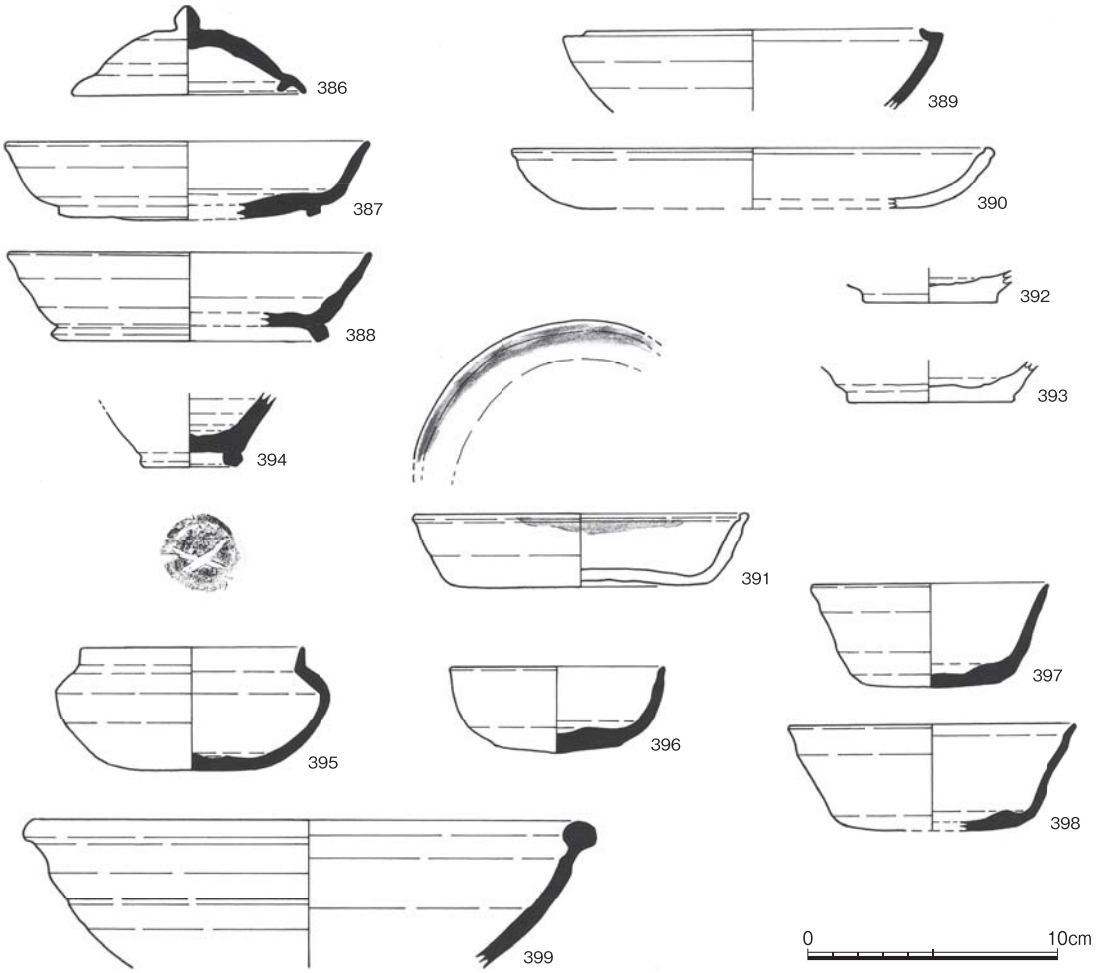


fig. 151　B82-A区出土土器

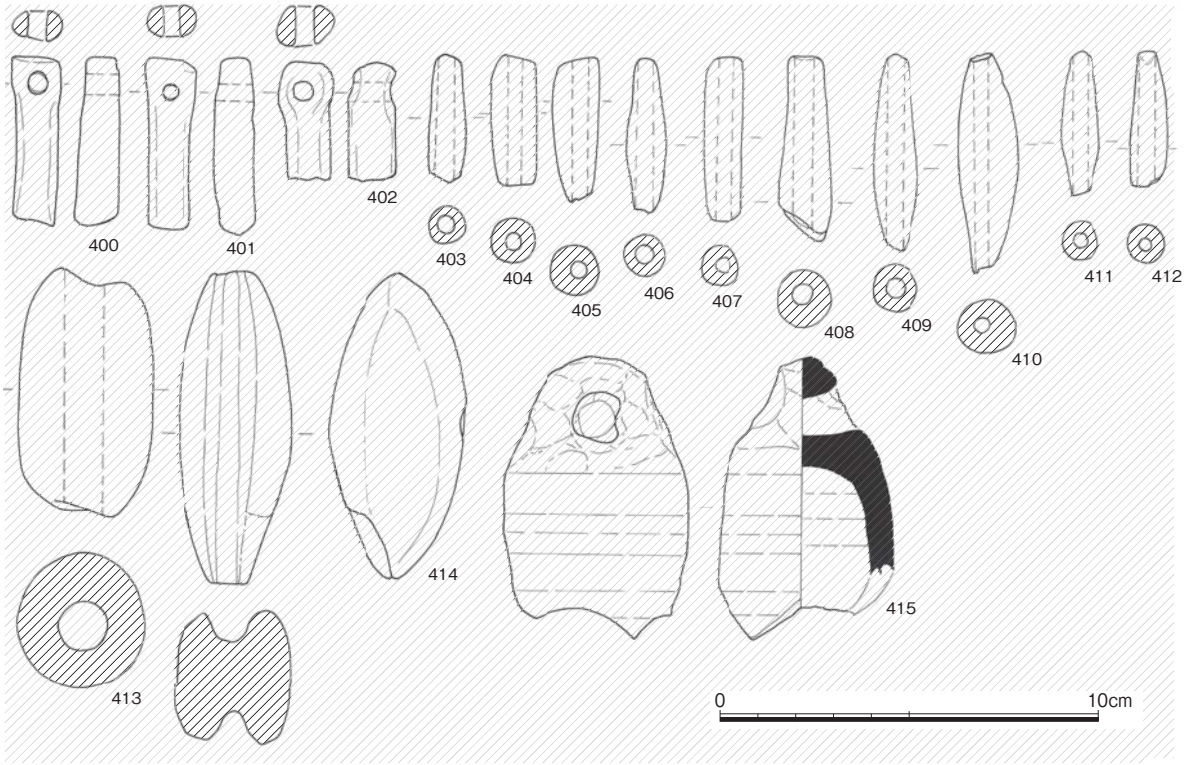


fig. 152　B82-A区出土土錘・蛸壺

B82-B区

立地

当調査区は浜堤上に位置するが、調査区西端は浜堤の低地部分にあたり、土石流によって調査区の西側1/3が浜堤の砂が削られている。この土石流はB82-A区の東半分のものと連続すると思われる。合計３面の遺構面が確認された。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近世の耕作土の下に、中世耕作土である茶灰色砂質土が確認される（この上面が第１遺構面）。その下は洪水砂である暗灰色粗砂が堆積する。さらに下は土壌化が進んだ黒灰色砂質土（上面が第２遺構面）で、奈良～平安時代のピット・柱穴が確認された。その下層は、東側では茶色砂質土混じり黒灰色細砂層（上面が第３遺構面）、西端では土石流の粗砂・礫が堆積する。東側の浜堤砂の下には黒灰色細砂、黄灰色粗砂が堆積する。

fig. 153　B82-B区位置図

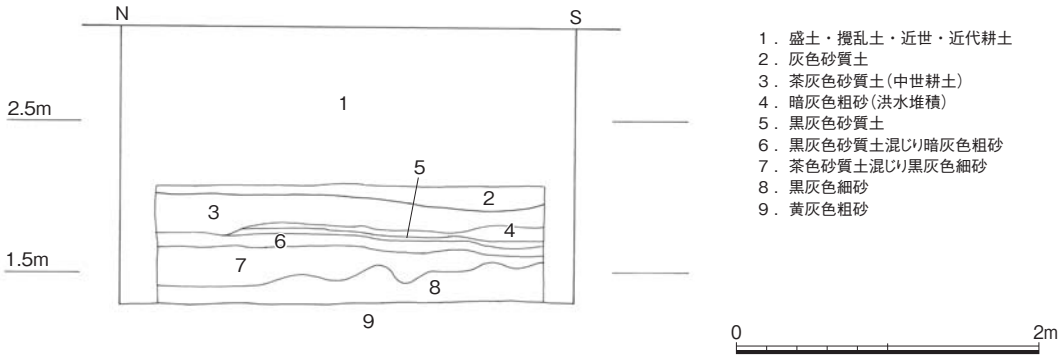


fig. 154　B82-B区東壁断面図

第1遺構面（犂溝・石組み溝）

中世耕土面で南北方向の犂溝、石組み溝を確認した。石組み溝は近世の遺構で、東側の溝肩を人頭大の河原石を組み合わせて護岸し、内部には灰色系の粗砂が堆積している。なお、この溝は第12次調査でも検出されている。

第2遺構面（柱穴・ピット・落ち込み）

中世耕作土の下層には暗灰色粗砂（洪水砂）が拡がる。洪水砂を除去すると、黒灰色細砂の奈良・平安時代遺構面となる。柱穴、ピット、落ち込みが23基検出された。

なお、第12次調査の遺構面と合成すると3×2間以上の掘立柱建物が両調査区の西端に造られていたことが判明した。また、建物より東側には多数の小さなピットが検出されているが、連続して繋がるものはない。遺構の時期は出土遺物から奈良・平安時代頃と判断される。

第3遺構面（浜堤堆積砂上面・土石流堆積砂）

黒灰色砂質土を掘り下げてゆくと黄灰色中砂の浜堤形成層上面となる。この面で前回の第12次調査では、古墳時代後期の祭祀遺物が出土したが今回は確認されなかった。その下層の黒灰色細砂層からは古墳時代後期の甑形土器が出土している。また西端の土石流の堆積砂中からは、古墳時代後期初頭頃の須恵器坏が見つかった。土石流と浜堤の接する付近から、古墳時代後期の土師器の甕が出土した。

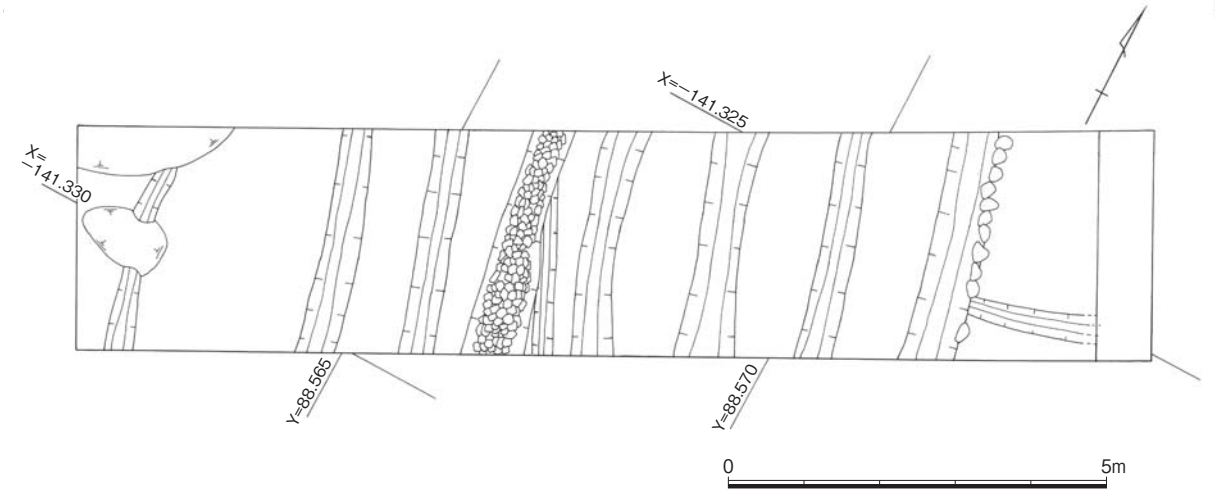


fig. 155　B82-B区第1遺構面平面図

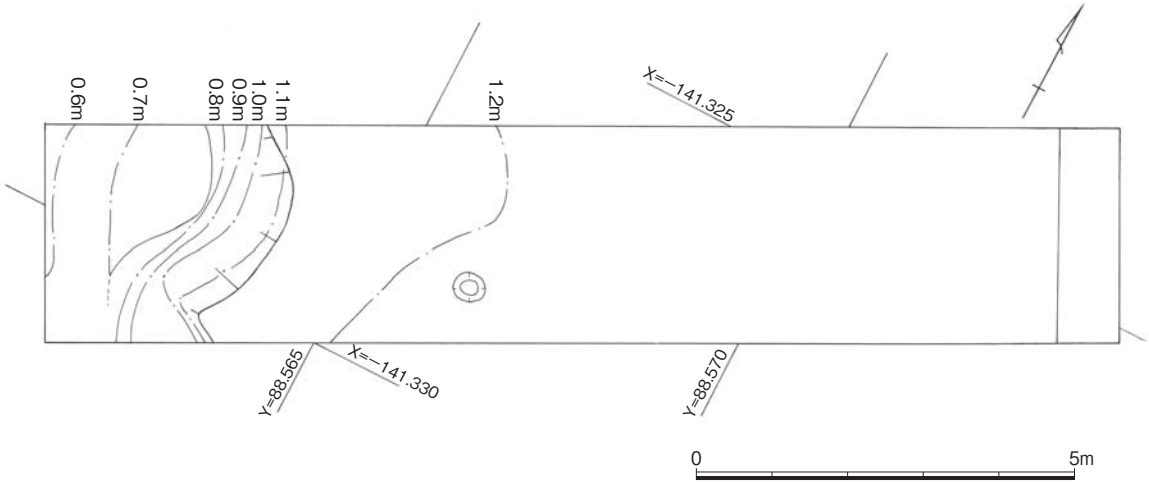


fig. 156　B82-B区第3遺構面平面図

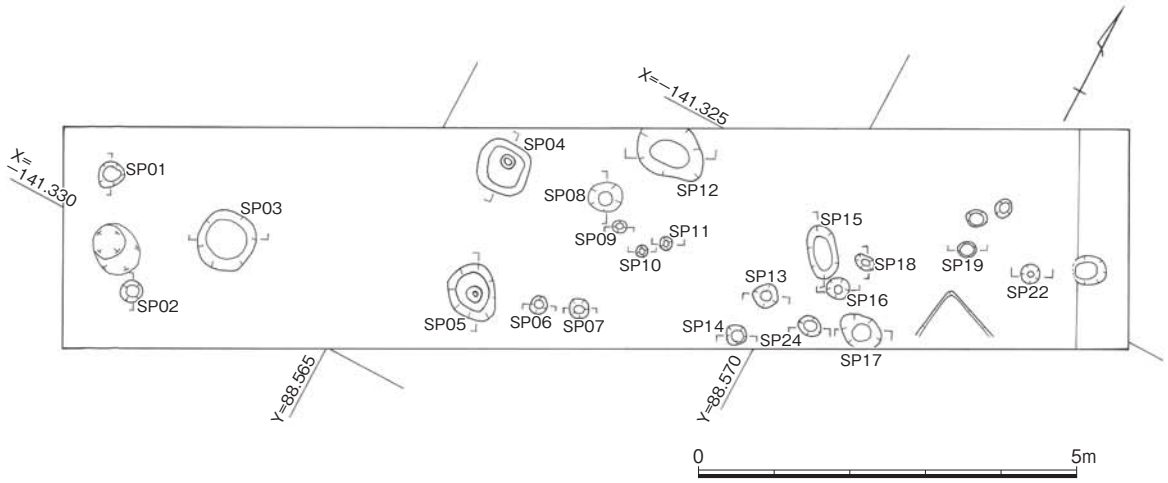


fig. 157　B82-B区第2遺構面平面図

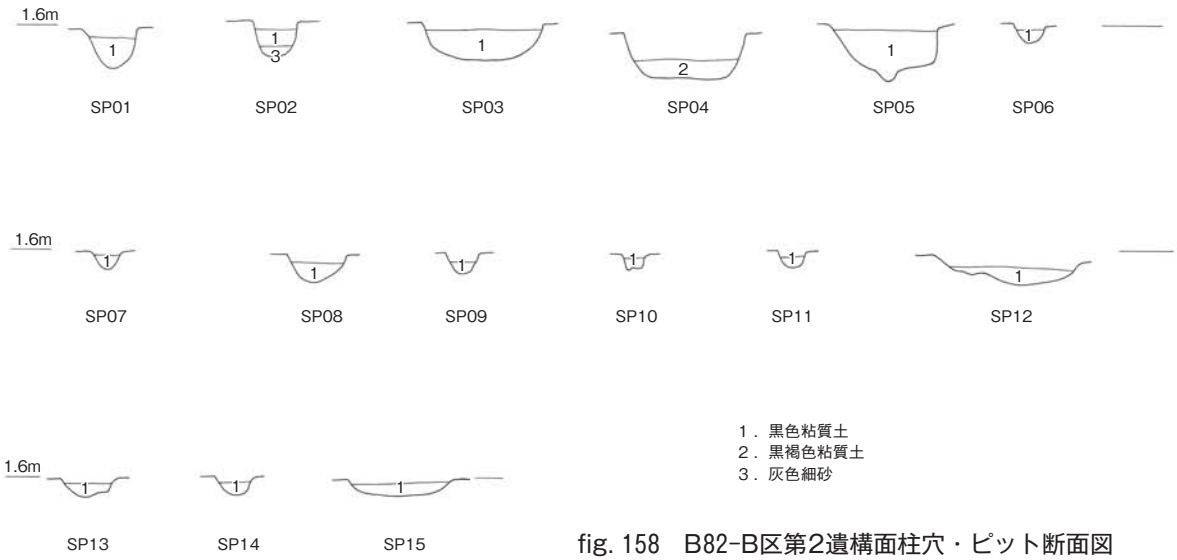


fig. 158　B82-B区第2遺構面柱穴・ピット断面図

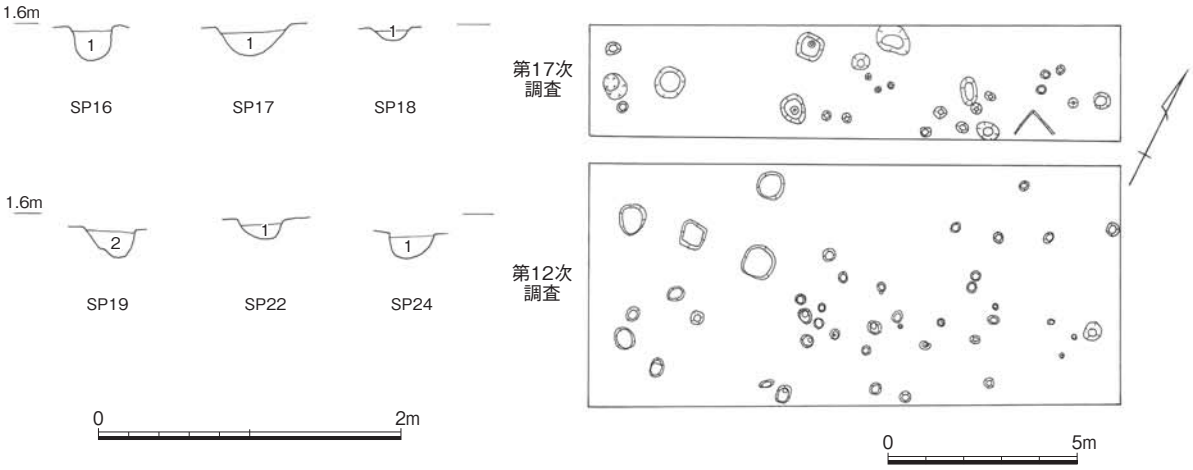


fig. 159　B82-B区第12・17次調査合成図

出土遺物

416は管状土錘、417は有溝土錘で土師質である。416は黒灰色砂質土、417は暗灰色粗砂出土。

419は甑形土器で両側に把手が付く。黒灰色細砂層出土。

420は壷形土器の底部で黒灰色砂質土出土。421は小型丸底壷の口縁部と思われる。第2遺構面ピット出土。422は調査区西端の土石流堆積砂中から出土した須恵器坏である。418は土師器甕で、胴部が球形に近く口縁部が直立気味に立ち上がる。浜堤砂と土石流砂の境目付近から出土。420は弥生時代末～古墳時代初頭、それ以外は古墳時代後期の土器である。423, 424は須恵器坏・椀で、423は焼成が甘く、424は稜椀タイプのものである。いずれも第2遺構面から出土。

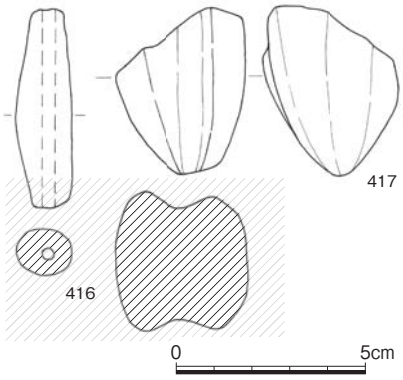


fig. 160　B82-B区出土土錘

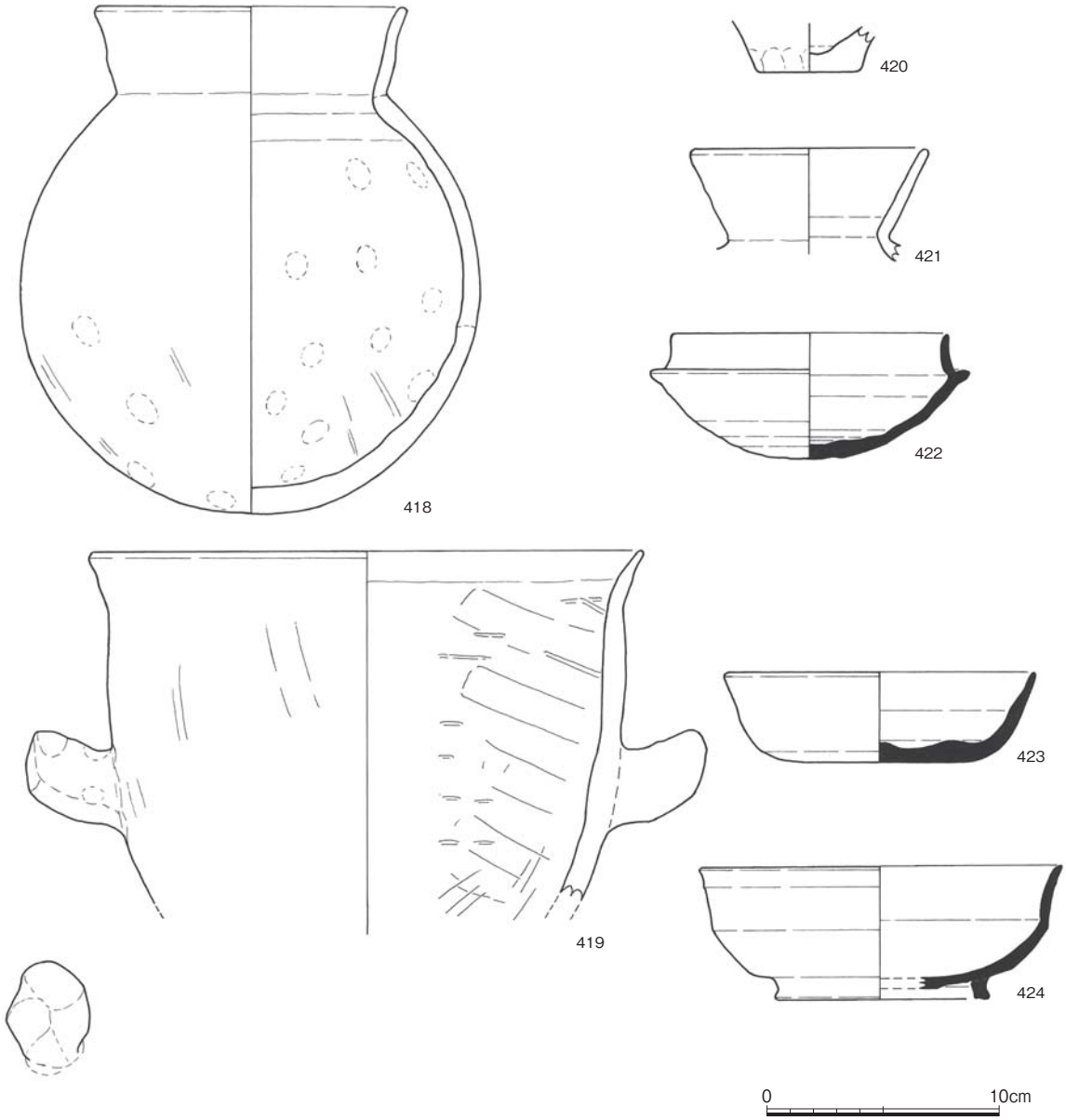


fig. 161　B82-B区出土土器

B83-A区

立地

当該区は西側に広がっていた浜堤が下がってゆき湿地に変わってゆく境目にあたる。東半分は湿地となり東に下がってゆき、西半分は傾斜を持ちながら浜堤が緩やかに上がってゆく斜面の地形である。また浜堤上には浅い澪筋が入り込んでいる。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土、中・近世の耕作土・洪水砂の下は、東半分では湿地層が現れる。湿地層は灰色砂・暗灰色～黒灰色シルトの互層であり、西から東に少しずつ下がってゆく。同様に西側の浜堤砂（黄灰色細砂）層も同様に西から東に下がりながら堆積している。

湿地

湿地層は砂・シルトの互層となる。シルト層は概ね5層に分層できる。堆積状況から見ると、

fig. 162　B83-A区位置図

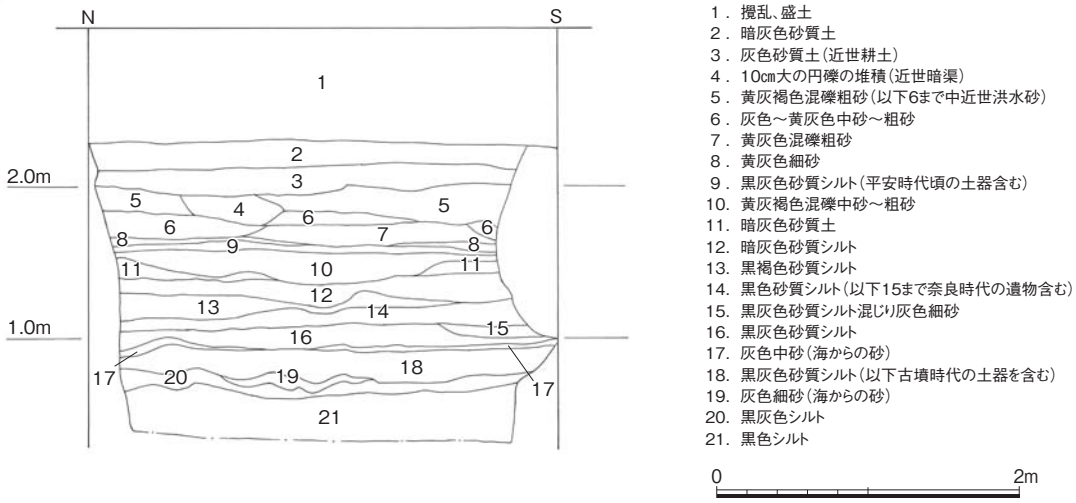


fig. 163　B83-A区東壁断面図

湿地のシルト層がある程度溜まった段階で、浜堤から供給される砂によって、それらが覆われるという段階を何度も経て埋没していったことが判る。さらに下に湿地層は連続するが、掘削限界深度に到達したため、湿地底面は確認できていない。湿地の上層では奈良・平安時代の遺物、下層では古墳・弥生時代の遺物が出土した。

澪筋

西側の浜堤砂上には、海水の干満によって生じた浅い澪筋が東西方向に入り込んでいた。澪筋の中には灰色～褐色細砂～粗砂が堆積しており、古墳時代後期頃の土師器が出土した。

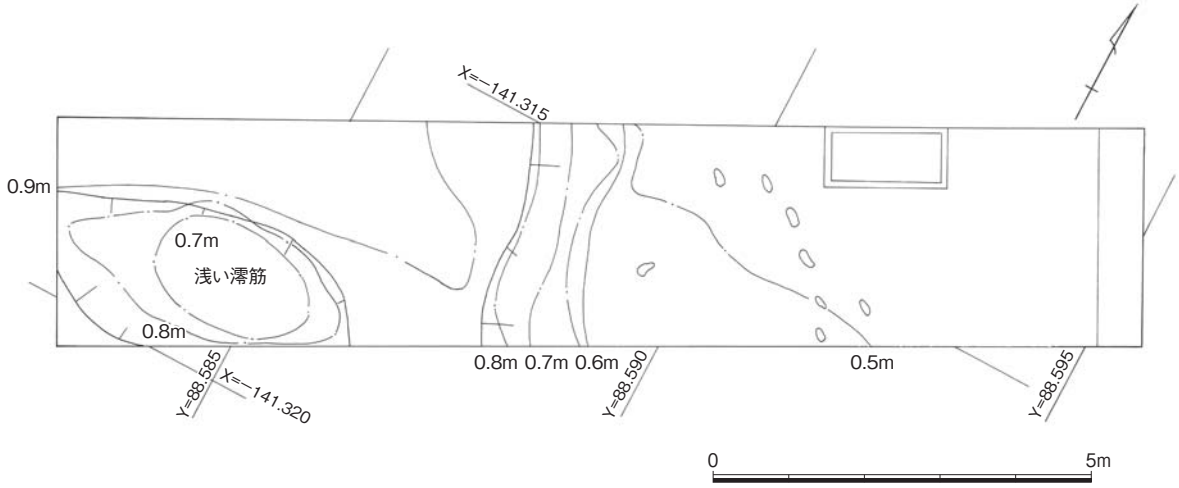


fig. 164　B83-A区第1遺構面平面図

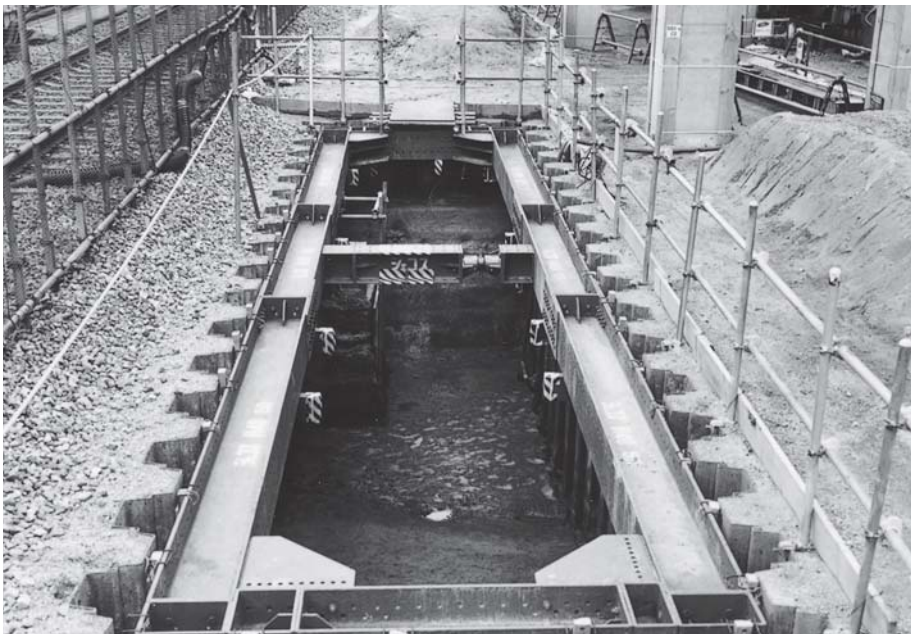


fig. 165
B83-A区第1遺構面全景
（西から）

出土遺物

①土器・転用硯

425は土師器壷で、肩部外面に刷毛目を有する。澪筋から出土。426～432は須恵器で、426は鉢の底部、427～429は坏蓋。430～432は転用硯で、430は壷の胴部の破片を、431，432は坏蓋の内面を硯として利用している。426～432は湿地層出土。425は古墳時代後期、その他は奈良時代に属する。

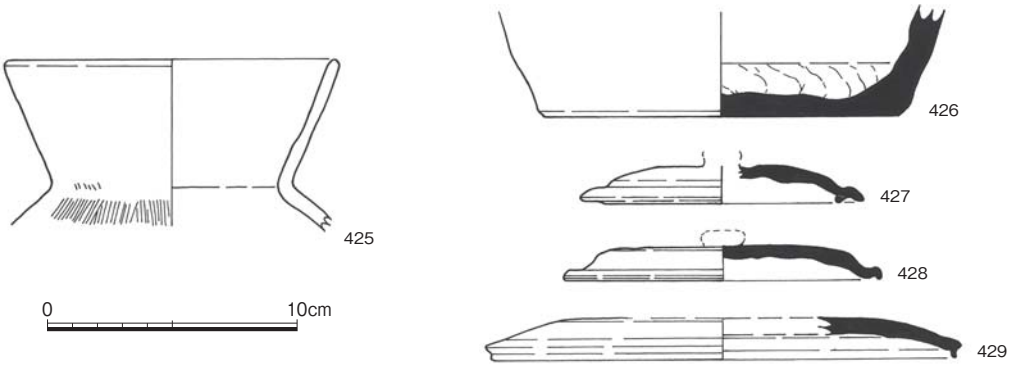


fig. 166　B83-A区出土土器

fig. 167　B83-A区出土転用硯

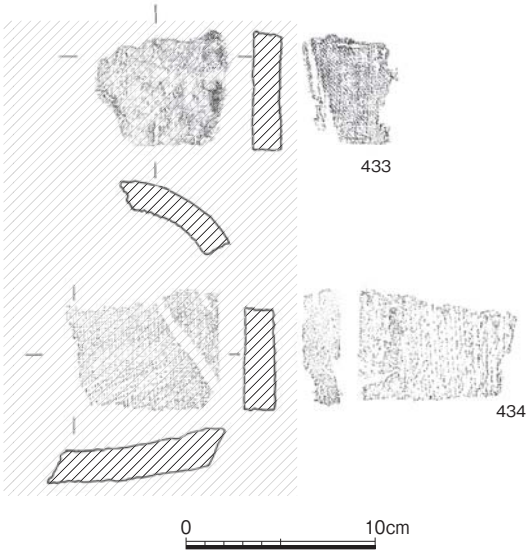


fig. 168　B83-A区出土瓦

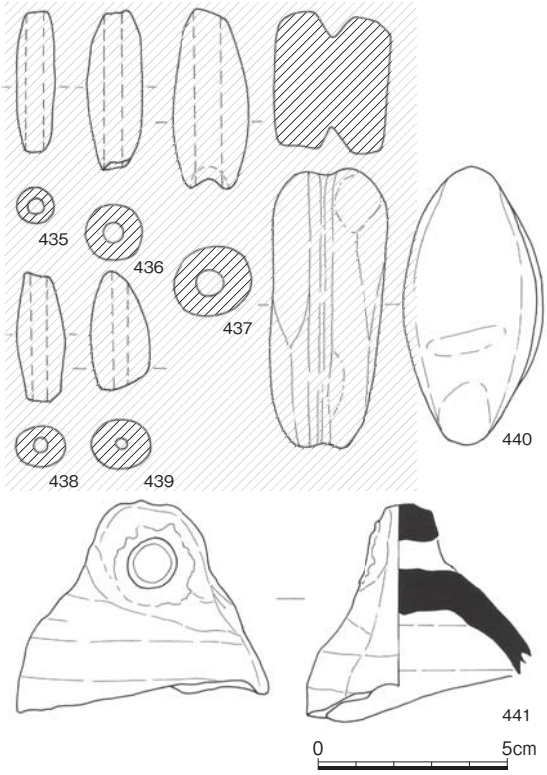


fig. 169　B83-A区出土土錘・蛸壺

②瓦

433は瓦質の丸瓦で、凸面はナデ調整、凹面は布目圧痕を残す。434は須恵質の平瓦で、凸面は縄目圧痕、凹面は布目圧痕が認められる。いずれも湿地層出土。

③土錘・蛸壺

435～439は管状土錘、440は有溝土錘、441は須恵質の飯蛸壺である。435, 436は近世耕作土、他は湿地層出土。

④木製品

442, 443は曲物の底板で、442は直径12㎝、443は18㎝程度、443は端部に側板を立たせて固定する樹皮紐を通すための孔が2穴穿たれ、樹皮の平紐が二重になって残存している。444は下駄の一部で歯の部分がよく磨滅している。447も下駄と思われるが遺存状態が悪い。445は加工痕のある板材、446は断面半円形の棒材に、等間隔に4穴を穿ち、曲面の方の穴の端を2穴ずつ浅い溝で連結したものである。浅い溝は、穴に紐などを通して別の部材に固定するための造作と思われるが、使用方法は不明である。

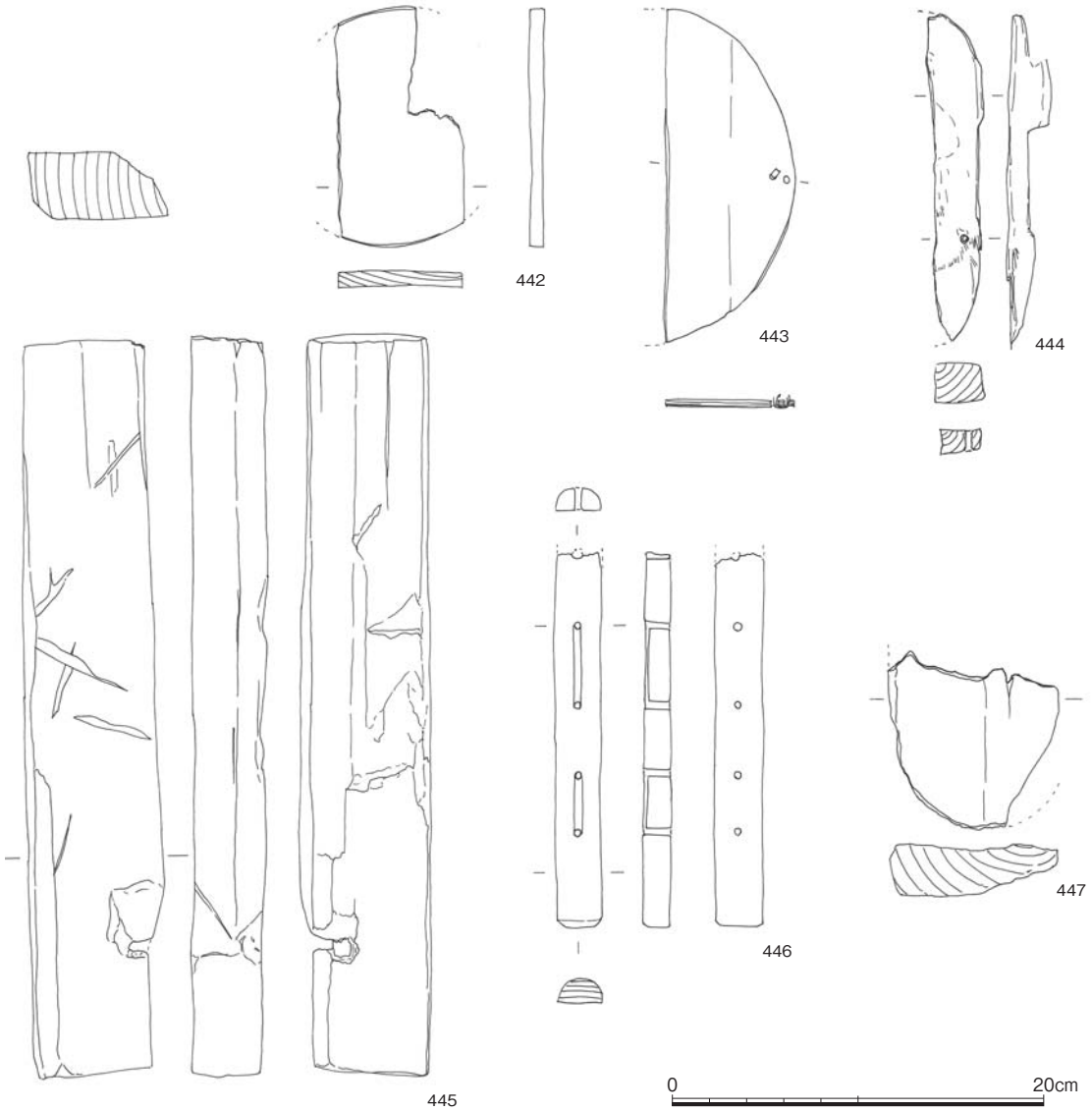


fig. 170　B83-A区出土木製品

B83-B区

立地

当該区は、全体が東方向に深く落ち込む堤間湿地になっており、シルト・砂層が連続して堆積している。当該区では中近世の耕作溝（第１遺構面）、奈良・平安時代頃の水田遺構（第２遺構面）を確認した。

基本層序

阪神電車の軌条下の盛土、近世の耕作土、近世の洪水砂層があり、中・近世耕作土（暗灰色小礫混じり粘質土）上面で耕作に伴う溝（第１遺構面）が確認された。以下は主にシルト系の堆積土が続き、低湿地であったことを示唆する。その間に洪水砂と思われる明灰色極細砂～中砂が薄く堆積し、それを除去した段階で水田の畦畔を２条確認した（第２遺構面）。

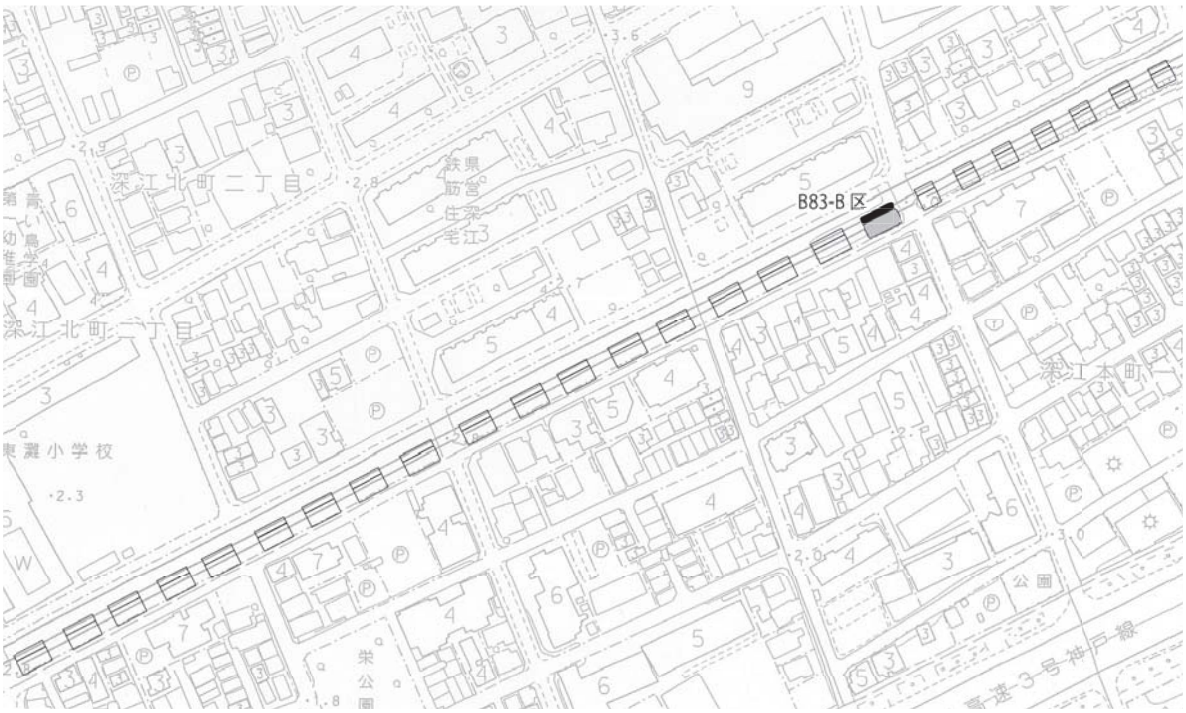


fig. 171　B83-B区位置図

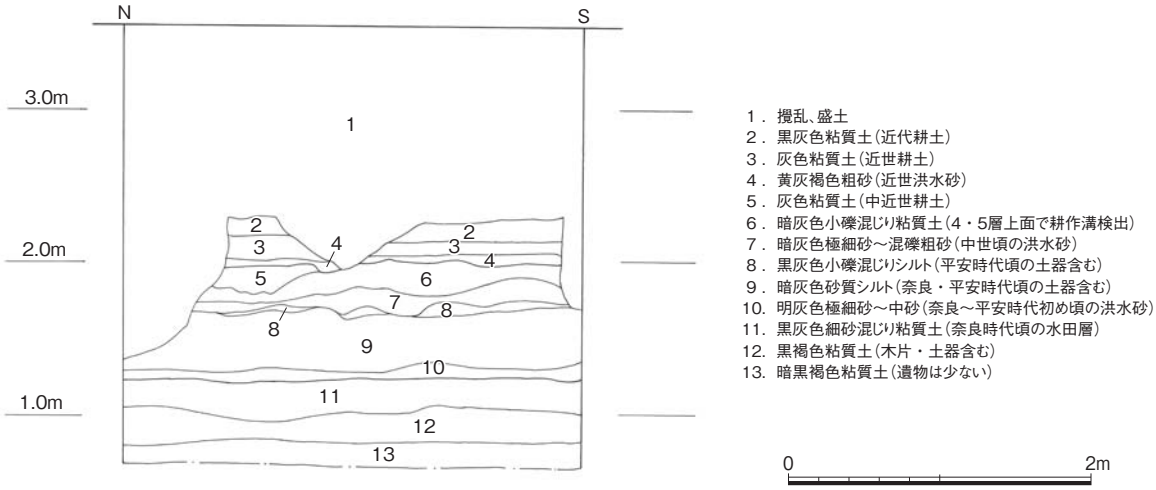


fig. 172　B83-B区東壁断面図

以下の堆積層から出土する遺物は漸次少量となる。掘削限界である現況地表面から約2.7mに達したが、湿地の底は確認できなかった。

第1遺構面（犂溝）

中近世の耕作土の北端では東西方向の溝状の落ち込み、南北方向に並ぶ溝を検出した。

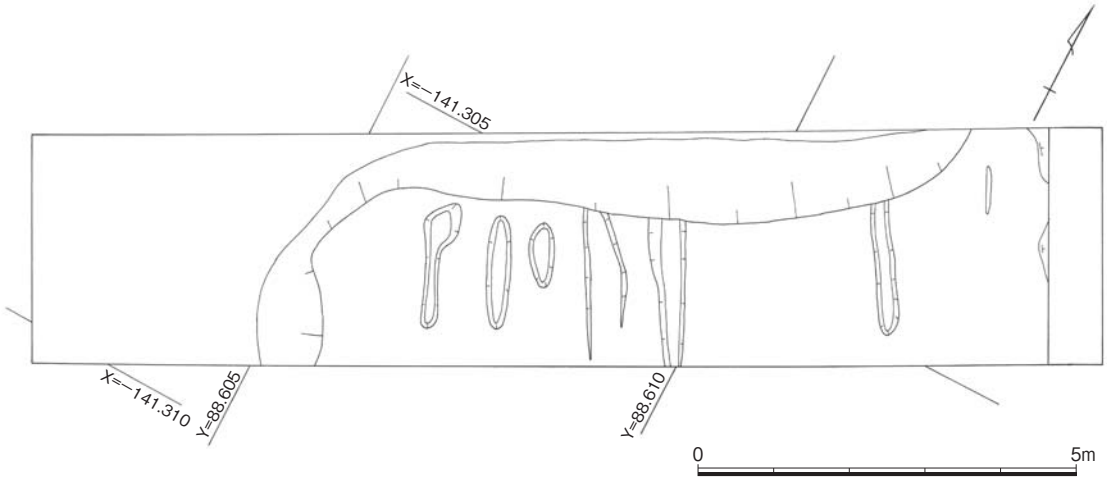


fig. 173　B83-B区第1遺構面平面図

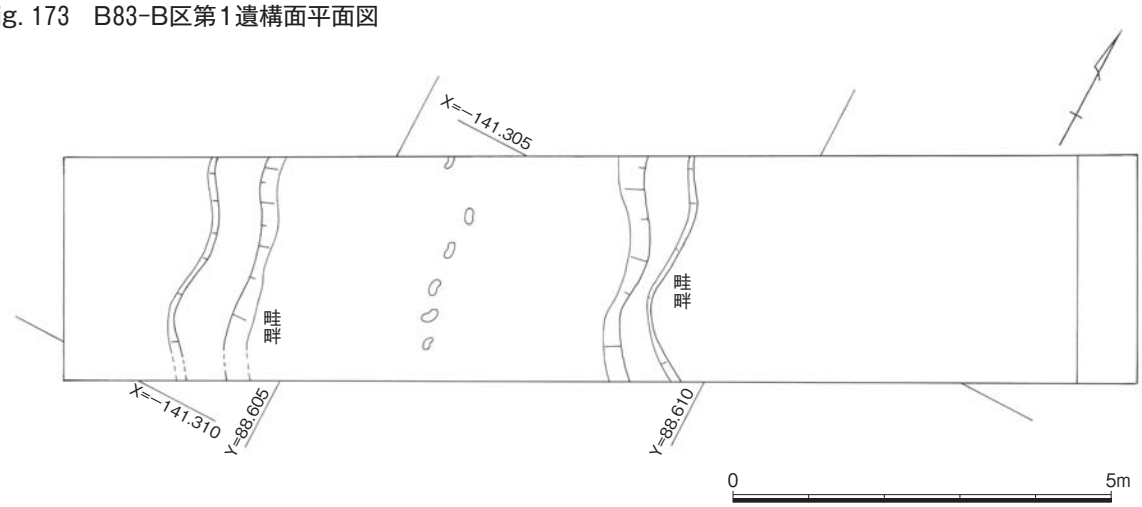


fig. 174　B83-B区第2遺構面平面図

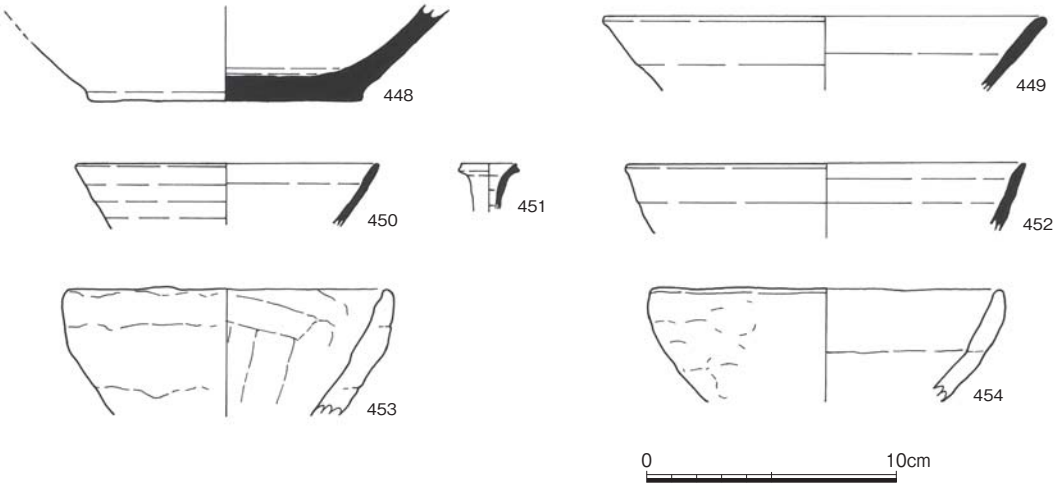


fig. 175　B83-B区出土土器

第2遺構面（水田畦畔・足跡）

薄い洪水砂の下にある黒灰色細砂混じり粘質土面で南北方向の畦畔2条を検出した。奈良～平安時代初め頃のものと思われる。この面では偶蹄目および人の足跡が複数確認された。

湿地からの出土遺物としては記号を記した墨書土器、転用硯、馬の歯、斎串、馬形木製品、ほぞ穴のある建築材、板材、桃の種子などが出土している。

出土遺物

448～452は須恵器で、448は鉢、449は椀で平安時代末頃の洪水砂出土。450，452は坏、451は小型の水注の口縁部と思われる。453，454は製塩土器で、手づくね成形を行い、器表には指頭圧痕が残る。451は湿地層から、その他は奈良時代頃の水田層より出土した。

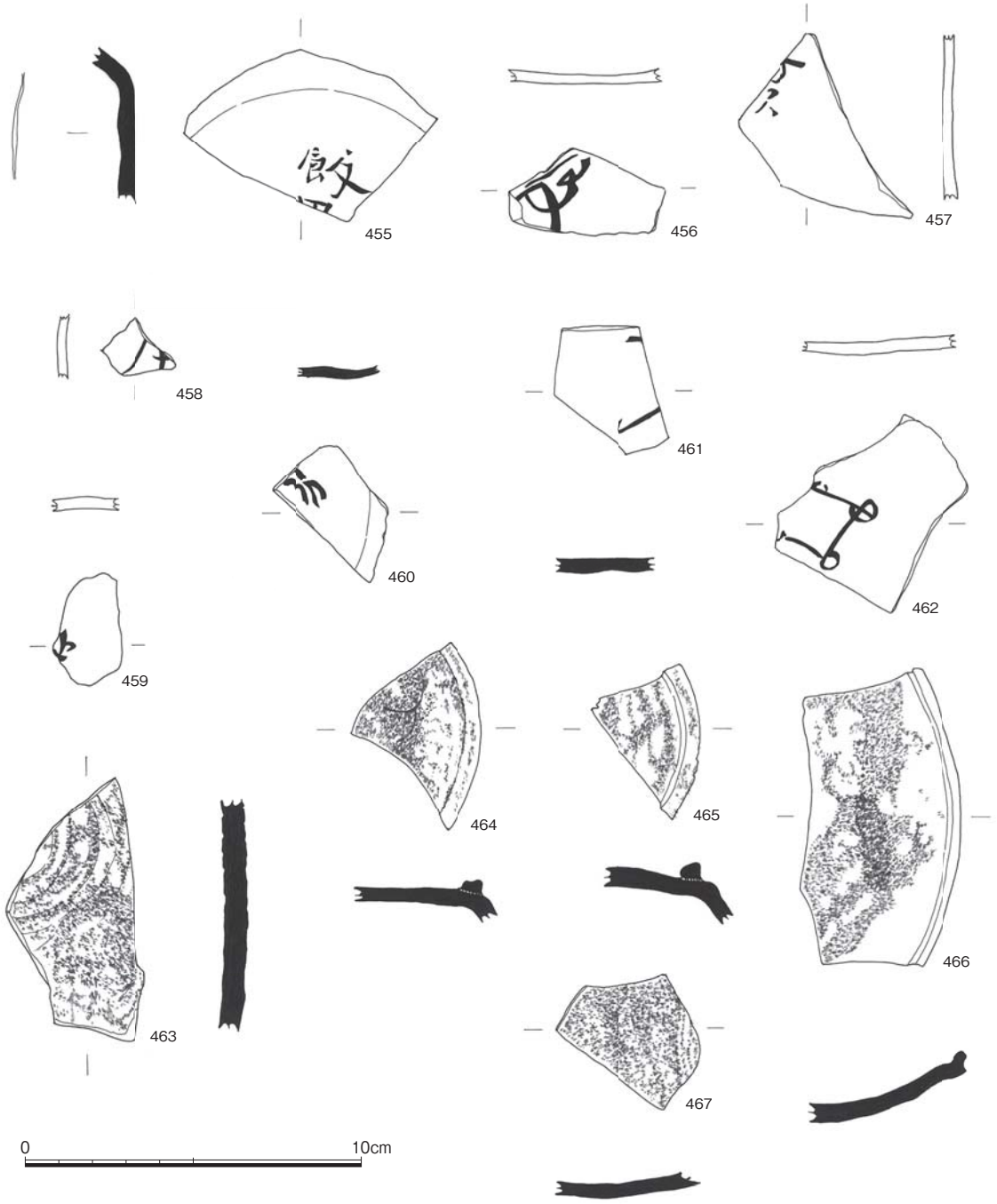


fig. 176　B83-B区出土墨書土器・硯

455～462は墨書土器で、455には「飯□」、456には「及」が読み取れる。その他は判読できない。462は記号と思われる。456，457，458，459，462は土師器、その他は須恵器である。

463～467は転用硯でいずれも須恵器である。463は甕の胴部破片を、464，465は坏の高台内面を、466，467は坏蓋内面を硯に転用している。455～457，465は湿地層出土、その他は奈良時代の水田層より出土した。

468，469は土師質の管状土錘で近世耕作土から出土、470は鞴の羽口で、先端部が焼け爛れている。湿地内堆積層より出土した。

471，473は斎串、472は木箆であるが、箆の一部と柄が折れて失なわれている。474は木釘の頭部、475は一辺1.5㎝程の角材を長さ2.2㎝ほどに切って、その4面に1本と2本の筋目を2面ずつ入れている。さいころの様にも見えるものである。

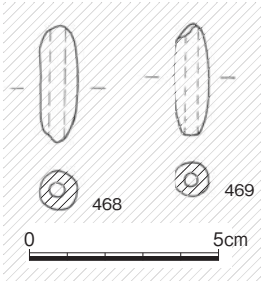


fig. 177
B83-B区出土管状土錘

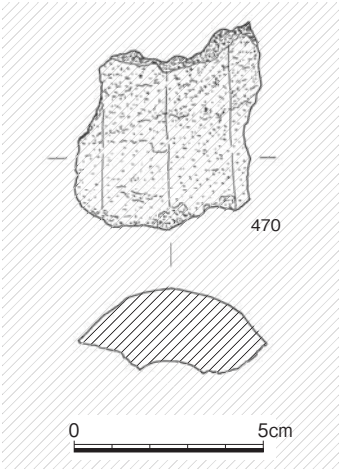


fig. 178　B83-B区出土鞴羽口

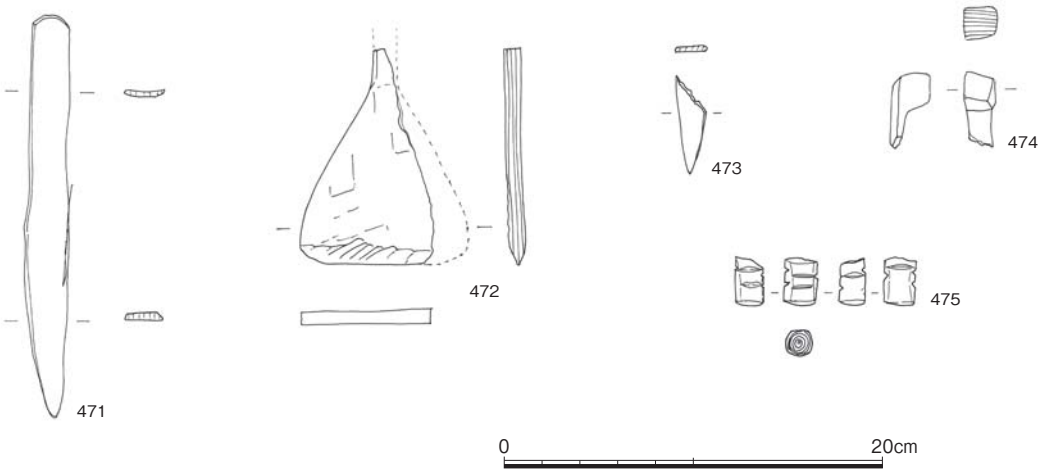


fig. 179　B83-B区出土木製品

P2区

立地

当該区は東側の道路付近に流れていた小河川の影響を受けて、厚く洪水砂層に覆われている。下層では2面の遺構面を確認した。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近世の耕作土以下は中・近世頃の洪水の堆積層が堆積し、その下に奈良時代頃の土器を含む湿地層（第1遺構面）、以下も粘質土（シルト）と砂で構成される海の影響を受けた層が堆積する。その内の黒色粘質土中で、自然流路・足跡を確認した（第2遺構面）。

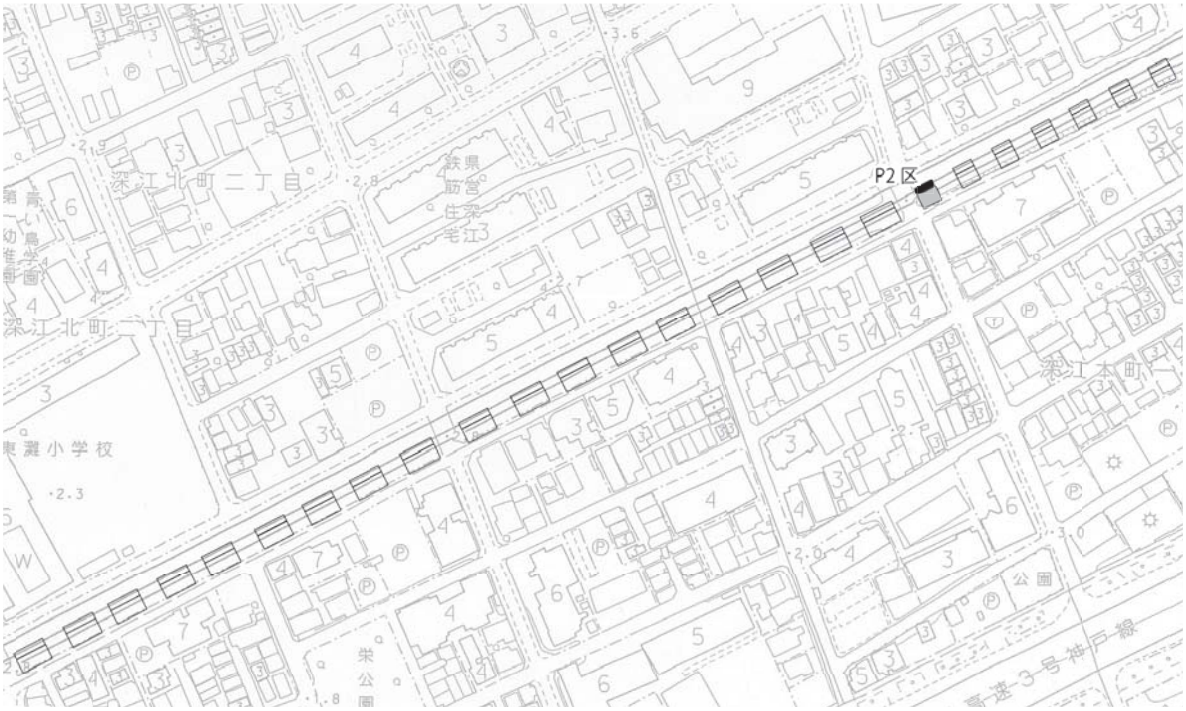
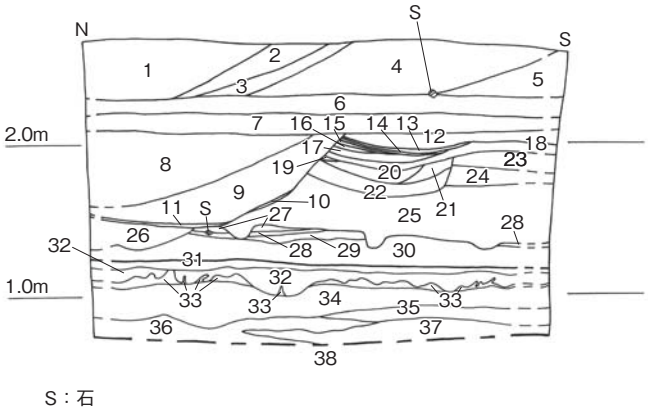


fig. 180　P2区位置図



1～5・8～11. 攪乱
6・7・23・24. 盛土
12. 洪水砂
13～22. 溝埋土
25. 礫層
26. 溝埋土/褐色粗砂
27. 洪水砂/青灰色シルト
28. 湿地/灰白色を含む黒色粘質細砂
29. 洪水砂/黒色を含む灰色シルト
30. 湿地/黒青灰色粘質土
31. 第1遺構面（水田）/黒灰色粗砂混じり粘質土
32. 湿地/暗灰色粘質土
33. 湿地/暗黒色粘質土
34. 湿地/黒茶色粗砂混じり粘質土
35. 洪水砂/灰色と褐色を含む暗黒色粗砂混じり粘質土
36. 灰色と褐色を含む黒色粘質土
37. 洪水砂/黒灰色粗砂混じり粘質土
38. 第2遺構面/黒色粘質土

0　2m

fig. 181　P2区東壁断面図

第１遺構面（水田畦畔・土坑・溝・足跡）

第31層（黒灰色粗砂混じり粘質土）で、水田畦畔１条と土坑１基、溝あるいは土坑とみられる遺構を１基と人と偶蹄類の足跡を検出した。水田畦畔は、高さ10cmほどであり、中央付近から杭が１本出土した。前回の第14次調査で検出した第４層（黒灰色粘質土）上面が当遺構面に相当する。出土遺物には飛鳥～奈良時代の土器や転用硯、木製品がある。

第２遺構面（自然流路・足跡）

第38層（黒色粘質土）で、南側で二又となる形状の自然流路１条と人と偶蹄類の足跡を検出した。時期を判別できる遺物に恵まれないが、当遺構面は概ね飛鳥～古墳時代に当たるものと考えられる。

出土遺物

476は祭祀品である木製の馬形で、頭部のみが表現されている。長さ20cm、幅11cmの大きさを測る。厚手で大振りな作りである。第１遺構面直上の黒青灰色粘質土から出土。477は転用硯で、須恵器坏蓋の内面を硯として利用している。天井部付近に墨痕が薄く残る。第１遺構面より出土。

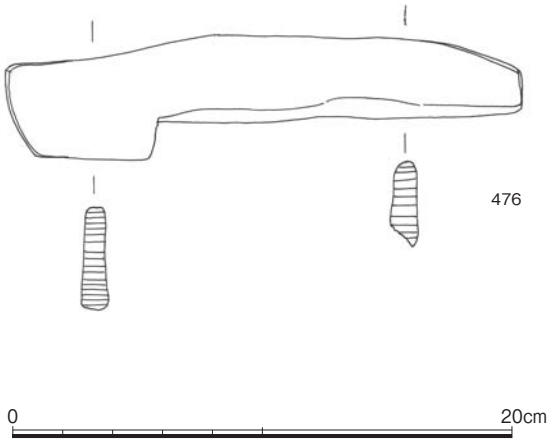


fig. 182　P2区出土木製品

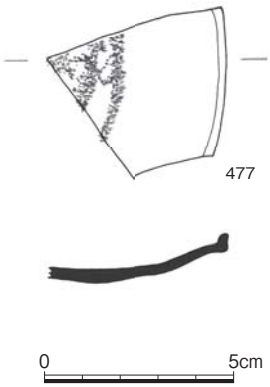


fig. 183　P2区出土転用硯

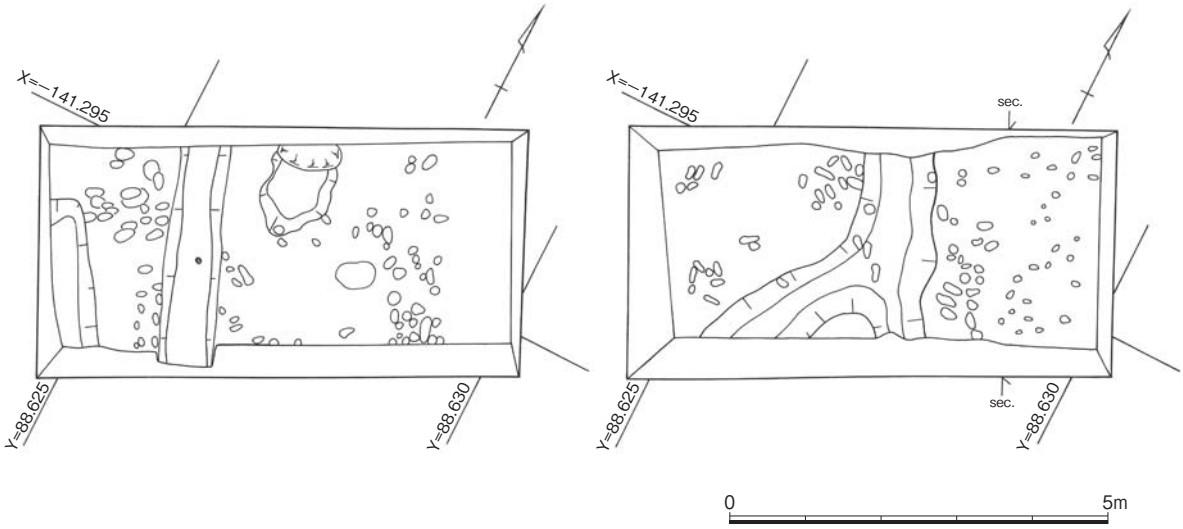


fig. 184　P2区第1遺構面平面図（左）・第2遺構面平面図（右）

P3区

立地

当該区付近は低湿地に堆積したシルト・洪水砂層が連続する。3面の遺構面を確認した。

基本層序

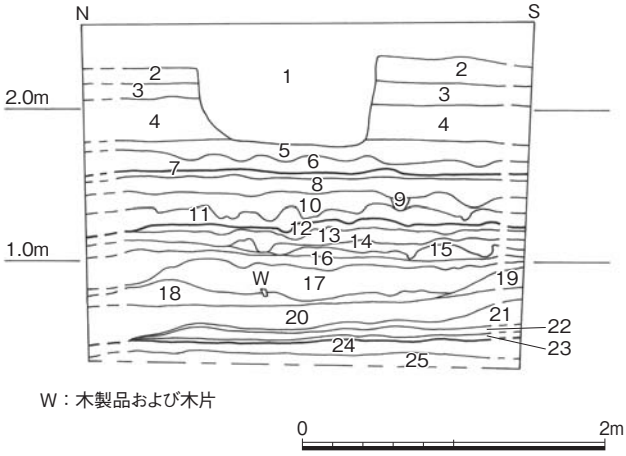
阪神電車の軌条下には近世・近代耕作土、P2区から連続する近世洪水砂層（礫層）がある。

その下は平安時代頃の湿地層（第1遺構面：黒灰色粗砂混じり粘質土）、奈良時代頃の湿地層（第2遺構面：黒褐色粘質中砂）、古墳時代前期頃の湿地層（第3遺構面：黒色粘質土）を確認した。

第1遺構面（足跡）

第7層（黒灰色粗砂混じり粘質土）で、調査区西側の落込みと偶蹄類とみられる足跡を検出した。瓦・須恵器・土師器・管状土錘など出土した。当遺構面は平安時代に相当する。

fig. 185　P3区位置図



1～3．攪乱
4．礫層
5．近世代耕作土/灰白色粗砂
6．包含層/黒茶色中砂
7．第1遺構面/黒灰色粗砂混じり粘質土
8．洪水砂/黒茶色中砂
9．ピット/灰白色含む黒茶色中砂
10．洪水砂/灰白色と暗灰色細砂含む灰褐色粗砂
11．洪水砂/灰白色含む暗灰黒色細砂
12．第2遺構面（水田）/黒褐色粘質中砂
13．洪水砂/灰褐色中砂
14．洪水砂/灰白色細砂含む暗灰黒色粘質細砂
15．包含層/黒灰茶色中砂
16．洪水砂/灰白色と暗褐色含む黒茶色中砂
17．洪水砂/褐色と灰色含む黒茶色中砂
18．洪水砂/暗灰白色細砂と暗灰色細砂がラミナ状に入る
19．洪水砂/灰白褐色粗砂
20．第3遺構面（湿地）/黒色粘質土
21．洪水砂/暗青灰白色粘質中砂
22．湿地/黒色粘質土/木片含む
23．洪水砂/黒色粘質中砂/木片含む
24～25．湿地/黒色粘質土/木片含む

fig. 186　P3区東壁断面図

第2遺構面（土坑・ピット・足跡）

第12層（黒褐色粘質中砂）で、土坑5基、ピット1基、人と偶蹄類の足跡を検出した。黒褐色粘質土は、当調査区全体には拡がらず、その下層の洪水砂上に薄く、斑に堆積していた。SK01からは、須恵器高坏の脚部が出土している。当遺構面は奈良時代頃と考えられる。

第3遺構面（足跡・小穴）

第20層（黒色粘質土）では、当遺構面全体に直径3～5㎝、深さ5㎝ほどの小穴が無数にひろがり、調査区東側では人と偶蹄類の足跡を検出した。黒色粘質土中からは土師器壺が出土している。また同層は、葦や竹などの有機質を含んでいた。当遺構面は古墳時代前期に当たる。

出土遺物

478は管状土錘で、棒状のものに粘土を貼りつけて成形する。6層（黒茶色中砂）より出土。また、第2遺構面直上層からは図示していないが、木製の叩き棒（長さ約27㎝、径3.6㎝～1.9㎝）が出土した（写真図版21左下）。

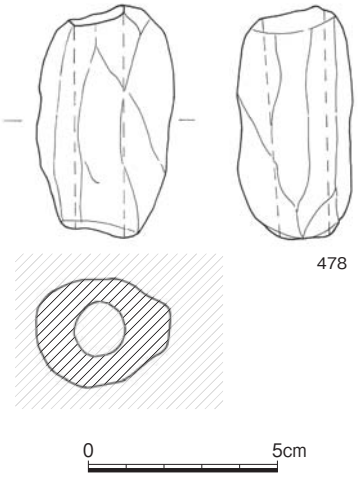


fig. 187　P3区出土管状土錘

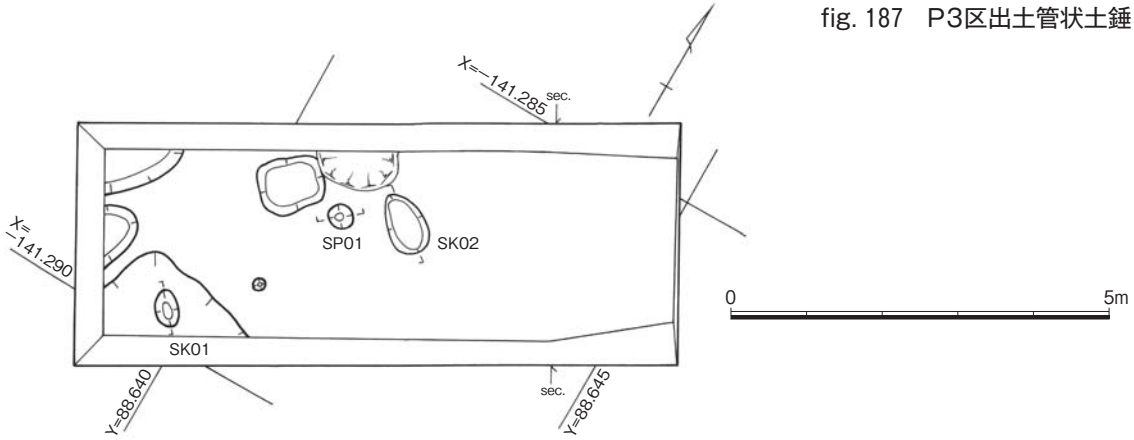


fig. 188　P3区第2遺構面平面図

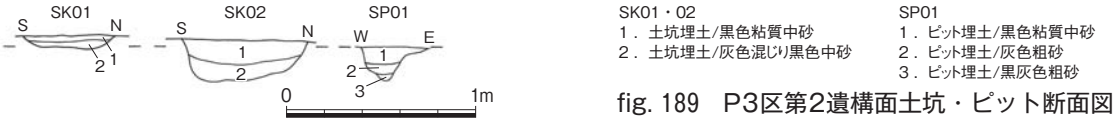


fig. 189　P3区第2遺構面土坑・ピット断面図

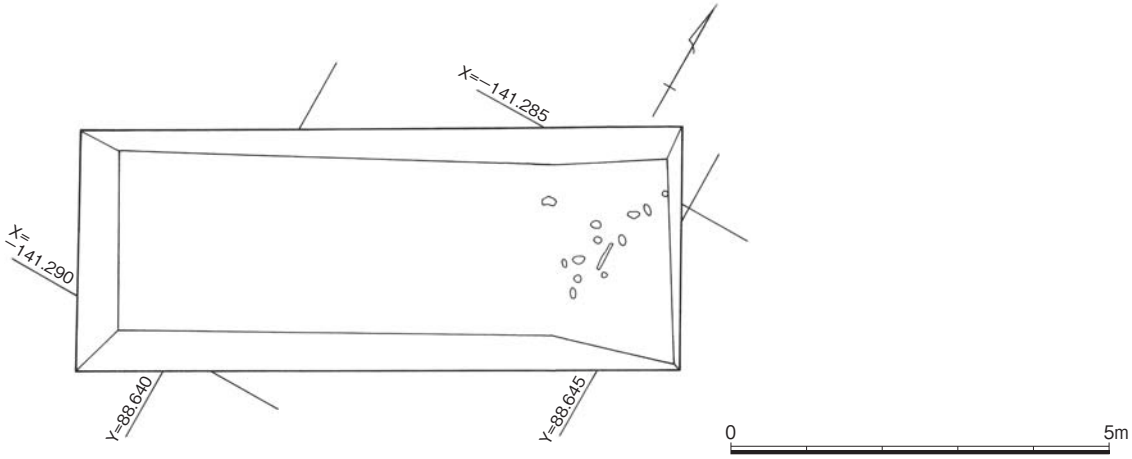


fig. 190　P3区第3遺構面平面図

P4区

立地

当該区では低湿地が続く。4面の遺構検出面を確認した。

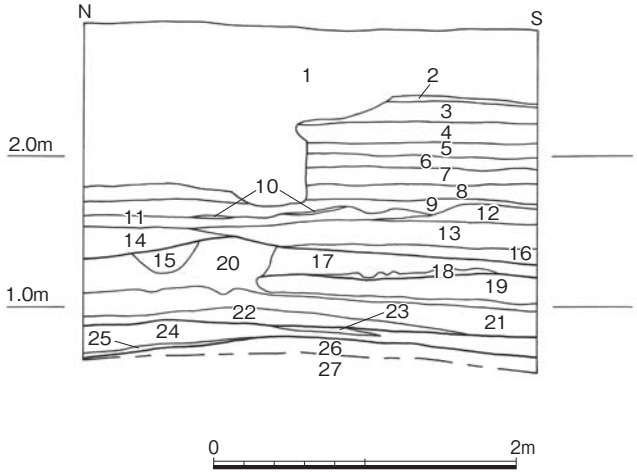
基本層序

阪神電車軌条下の盛土、近代・近世・中世耕作土が続き、その下は湿地（褐色～黒色粘質土）層と砂層が連続する。低湿地状態である中に時折、洪水砂が堆積する状況を看取できる。

第1遺構面（土坑・性格不明遺構）

第16層（黒茶色粘質土）上面で、直径1.4m、深さ0.4mの土坑（SK01）1基と不定形の性格不明遺構（SX01）を1基検出した。SK01からは須恵器片、SX01からは須恵器高坏や土師器片などが出土している。当遺構面は奈良～平安時代に当たるものと考えられる。

fig. 191　P4区位置図



1～9．攪乱・盛土・洪水砂
10．湿地/黒褐色シルト
11．湿地/黒青灰色粗砂混じり粘質土
12．洪水砂/暗青灰色粗砂混じり粘質土
13．湿地/黒茶色粗砂混じり粘質土
14．洪水砂/灰褐色混じり暗青灰色粗砂
15．土坑/暗灰色混じり黒色粗砂
16・20．第1遺構面/黒茶色粘質土
17．洪水砂/灰褐色混じり暗灰色粗砂
18．湿地/暗灰色シルト
19．第2遺構面/黒色粘質土
21．洪水砂/黒斑混じり灰褐色シルト
22．湿地/灰斑混じり黒灰色シルト
23．溝埋土/緑灰色シルト
24．溝埋土/黒斑混じり灰色シルト/第3遺構面と検出面が同一・黒灰色シルト
25．第4遺構面/黒色粘質土と黒灰色シルト
26．第4遺構面/青灰色シルト
27．洪水砂/灰色シルト

fig. 192　P4区東壁断面図

第2遺構面（土坑・足跡）

第19層（黒色粘質土）上面で、東西1.5m、南北2.0m、深さ0.4mの土坑1基と人と偶蹄類の足跡を検出した。当調査区中央付近からは、杭が5本出土しており、うち1本は南北方向に倒れた状態で出土した。当遺構面は奈良時代に当たる。

第3遺構面（土坑・溝）

第24層と同一標高面で検出した黒灰色シルト層上面である。東西3.2m、南北1.5m、深さ0.8mの土坑（SK01）1基と幅0.4～0.6m、深さ0.2mの南北方向の溝1条（SD01）を検出した。当遺構面は飛鳥時代に当たる。

第4遺構面（足跡）

第26層（青灰色シルト）は、当調査区全体には拡がらず、黒色粘質土や褐色シルトなど複数の土層が斑状に堆積していた。これらの層の上面で、人と偶蹄類の足跡を検出した。出土遺物は古墳時代（布留式土器）の直口壺と杭等がある。

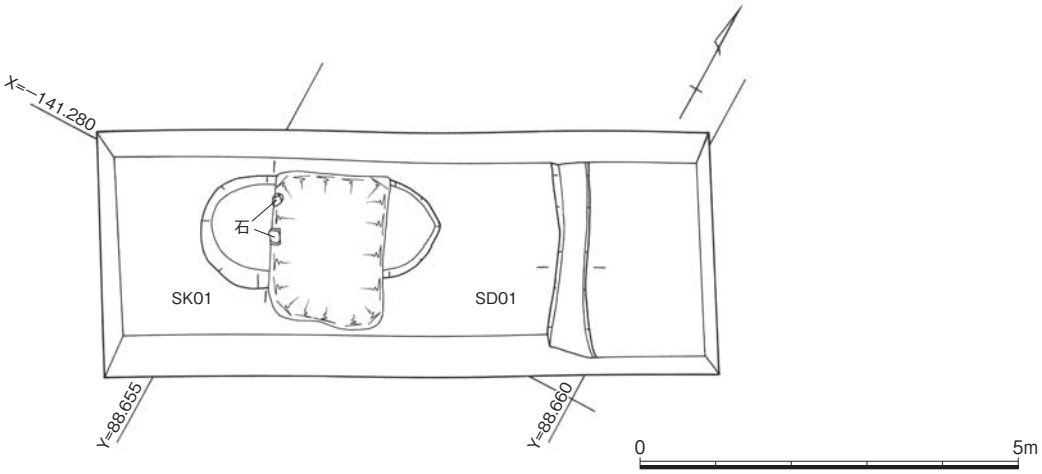


fig. 193　P4区第3遺構面平面図

出土遺物

479は管状土錘で、中心部に孔を穿ち、片側の側面に溝を設ける。有溝土錘の形態も併せ持つタイプである。第1遺構面直上層から出土。

480は土師器甕で、楕円形の体部に直立する口縁部を持つ。内外面ハケ目調整、底面には指頭圧痕が残る。最下層である灰色シルト層出土。

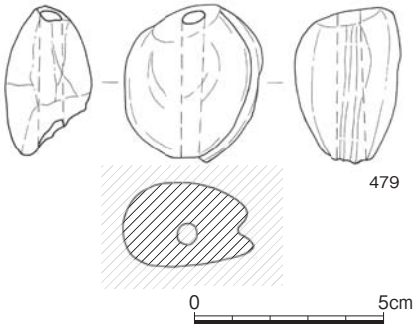


fig. 194　P4区出土土錘

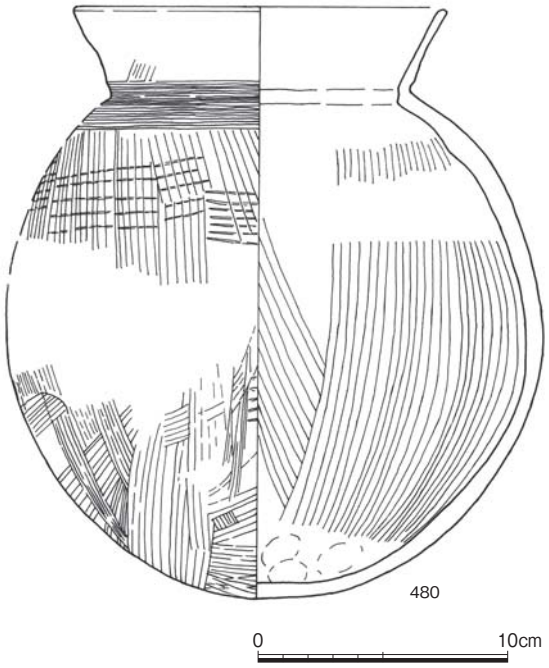


fig. 195　P4区出土土器

P5区

立地

この部分も低湿地の堆積層が続く。調査区内では3面の遺構面を確認した。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、中・近世耕作土の下は、奈良時代頃の湿地層（黒褐色粘質土）が広がる。以下、砂・シルトが連続する堆積層中から2面の遺構面を検出した。

第1遺構面（足跡）

第21層（黒褐色粘質土）上面で、土坑1基と東西溝1条、人と偶蹄類の足跡を検出した。足跡の方向は、東西と南北に進むルートがあったとみられる。当遺構面は奈良時代に当たる。

fig. 196　P5区位置図

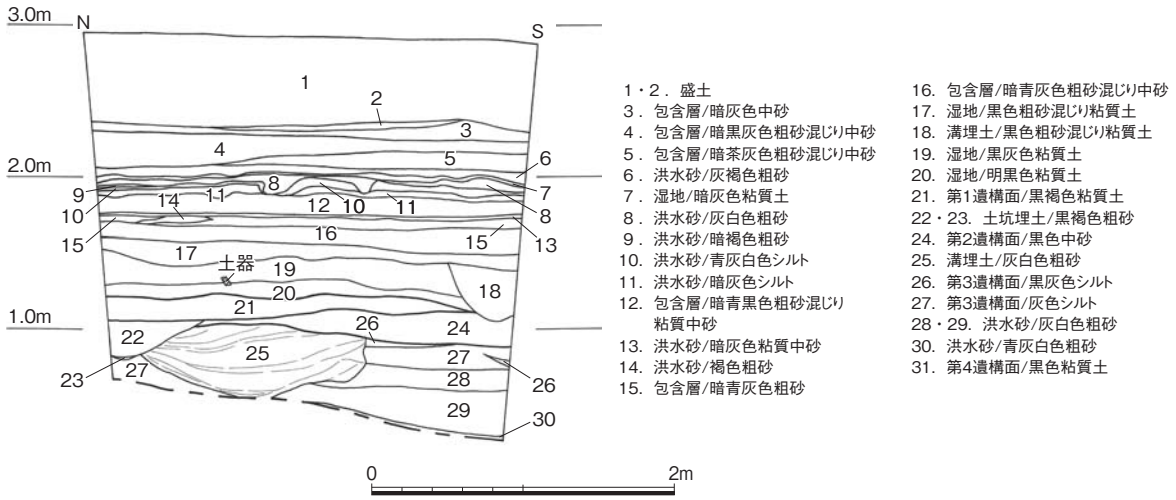


fig. 197　P5区東壁断面図

第2遺構面（溝）

第24層（黒色中砂）上面で、幅0.8m、深さ0.15mの東西方向の溝1条を検出している。当遺構面は奈良時代に当たる。

第3遺構面（土坑・足跡）

第26・27層（黒灰色シルト・灰色シルト）上面で、土坑5基、人と偶蹄類の足跡を確認した。土坑は、調査区北側から東西方向に並んだ状態で検出され、直径0.7～0.9mの円形で、深さ0.3～0.6mである。黒灰色シルト・灰色シルト層は、調査区全体に拡がらず、青灰色シルトが東西方向に向って帯状に拡がる。出土遺物はないが、飛鳥～奈良時代に相当するものと考えられる。

出土遺物

481は土師器小皿で、手づくね成形を行い口縁部は横ナデで調整する。中世の遺物を含む黒灰色粘質土～明黒色粘質土から出土した。

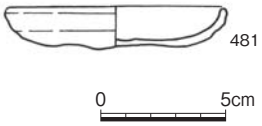


fig. 198　P5区出土土器

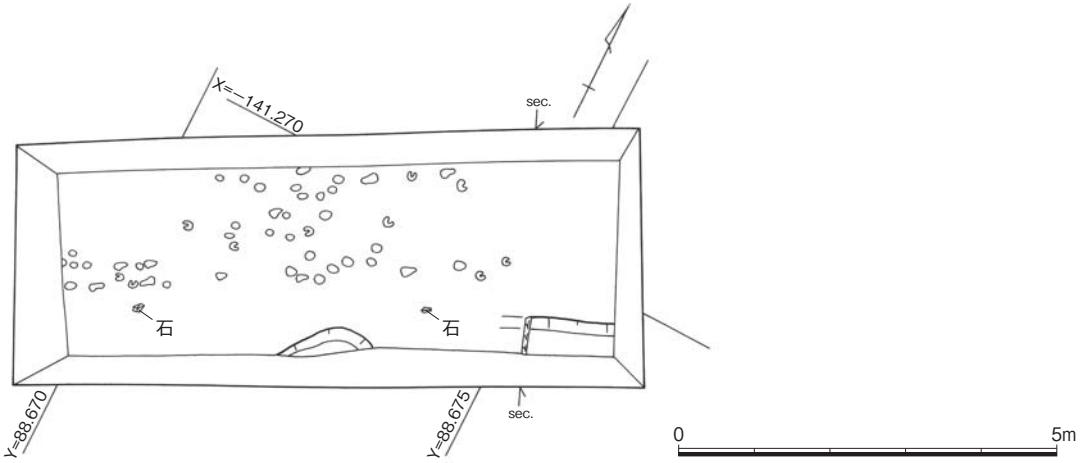


fig. 199　P5区第1遺構面平面図

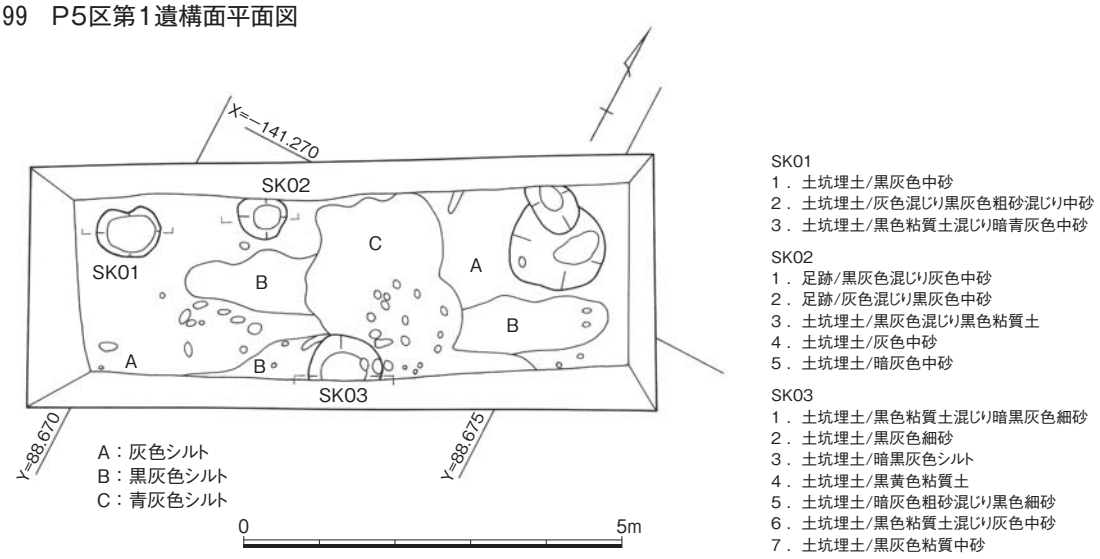


fig. 200　P5区第3遺構面平面図

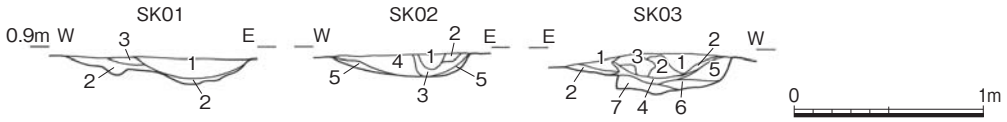


fig. 201　P5区第3遺構面土坑断面図

P6区

立地

当該区付近も湿地状の地形の中に位置する。調査区内では7面の遺構面を確認した。

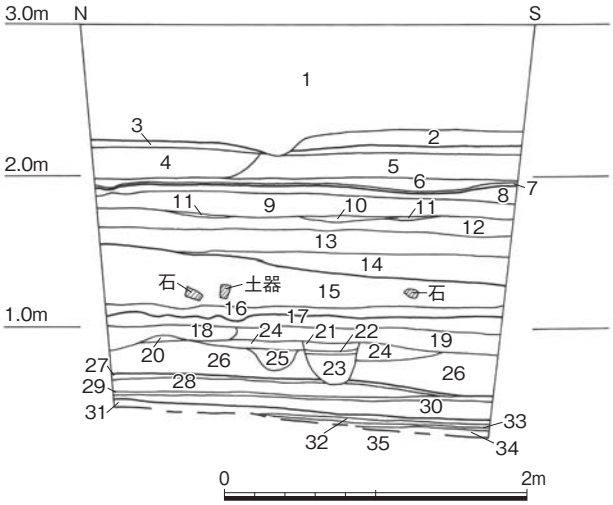
基本層序

阪神電車軌条の盛土、・近世・中世の耕作土が連続し、奈良時代頃の湿地層を確認する。以下は中砂・シルト層が互層で堆積し、それらの層から足跡や古墳時代頃の遺構を確認した。

第1遺構面（土坑・溝・暗渠）

第3層（暗青灰色粘質土）上面で土坑2基、東西方向の溝1条を検出している。土坑は、直径0.6～0.7mの円形で、深さ0.3mである。東西方向の溝は、幅0.8～1.2m、深さ0.3mであり、溝内

fig. 202　P6区位置図



1．盛土
2．湿地/青黒色粗砂混じり粘質土
3．第1遺構面/暗青灰色粘質土
4．溝埋土/灰色混じり褐色中砂
5．包含層/青灰色細砂
6．11. 洪水砂/灰色シルト
7．洪水砂/青灰色シルト
8．第2遺構面/明青灰色シルト
9．湿地/暗灰色粘質土
10. 湿地/黒色粗砂混じり粘質土
11. 湿地/黒褐色粗砂混じり粘質土
12. 湿地/黒茶色粗砂混じり粘質土
13. 湿地/黒灰色粗砂混じり粘質土
14. 湿地/黒褐色粗砂混じり粘質土
15. 第3遺構面/黒灰色粗砂混じり粘質土
16. 湿地/黒色粗砂
17. 第4遺構面/黒灰色粗砂混じり粘質土
18. 砂利/褐色粗砂
19. 湿地/灰白色混じり黒色中砂
20. 湿地/黒色中砂
21. 溝埋土/灰白色細砂
22. 溝埋土/黒灰色シルト
23. 溝埋土/灰白色混じり黒褐色中砂
24. 洪水砂/褐色混じり黒色中砂
25. 土坑埋土/黒色混じり褐色中砂
26. 洪水砂/暗灰褐色中砂
27. 第5遺構面/黒灰色シルト
28. 洪水砂/暗灰白色中砂
29. 湿地もしくは澪/黒青灰色粘質土
30. 洪水砂/暗灰色中砂
31. 第6遺構面/黒色粘質土
32. 洪水砂/灰色中砂
33. 澪/黒色粘質土/竹や葦含む
34. 洪水砂/黒色混じり青灰色シルト
35. 第7遺構面/黒色粘質土/竹や葦含む

fig. 203　P6区東壁断面図

中央から西側にかけて石組の暗渠が遺存していた。前回第12次調査で検出していた犂溝は、当調査区まで拡がらないことを確認した。当遺構面は江戸～明治時代に当たる。

第2遺構面（溝）

第8層（明青灰色シルト）上面で、幅0.4m、深さ0.1mの南北方向の溝1条を検出している。溝内には、拳大の礫が充填されており、その埋土中から土錘が1点出土している。当遺構面は江戸時代に当たる。

第3遺構面（足跡）

第15層（黒灰色粗砂混じり粘質土）上面では、調査区中央から南側にかけて溝状の落込みがあり、その落込みを避けるように人と偶蹄類の足跡を検出した。出土遺物は中世の土器、陶磁器、棒状土錘、転用硯、土馬の脚部などがある。当遺構面は鎌倉時代～戦国時代に当たる。

第4遺構面（足跡）

第17層（黒灰色粗砂混じり粘質土）上面で、人と偶蹄類の足跡を検出した。当遺構面は奈良時代に当たる。

第5遺構面（足跡）

第27層（黒灰色シルト）上面で、人と偶蹄類の足跡を検出している。当遺構面は、黒灰色シルトが当調査区全体に拡がらず、暗灰色シルトや暗青灰色シルト、黒色粘質土など複数の土層が斑状に堆積している。当遺構面は飛鳥時代に当たる。

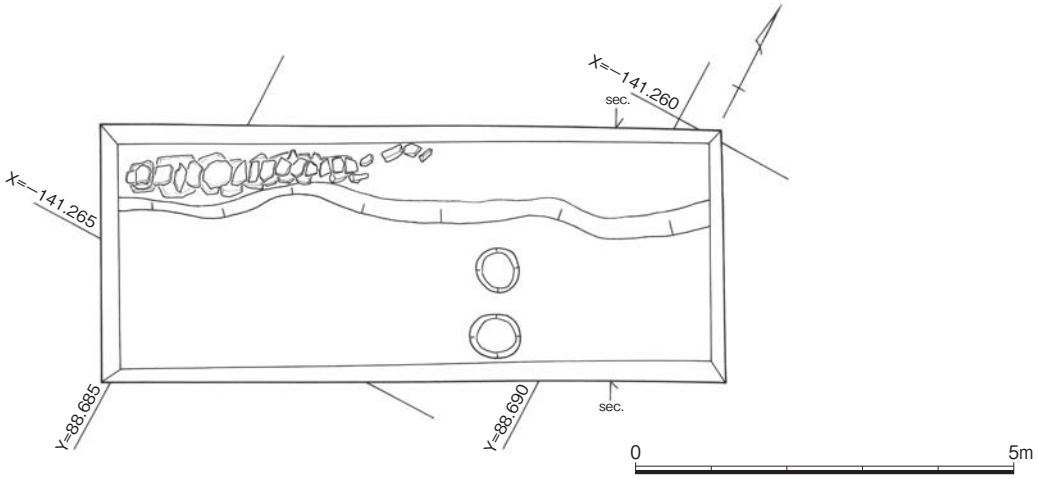


fig. 204　P6区第1遺構面平面図

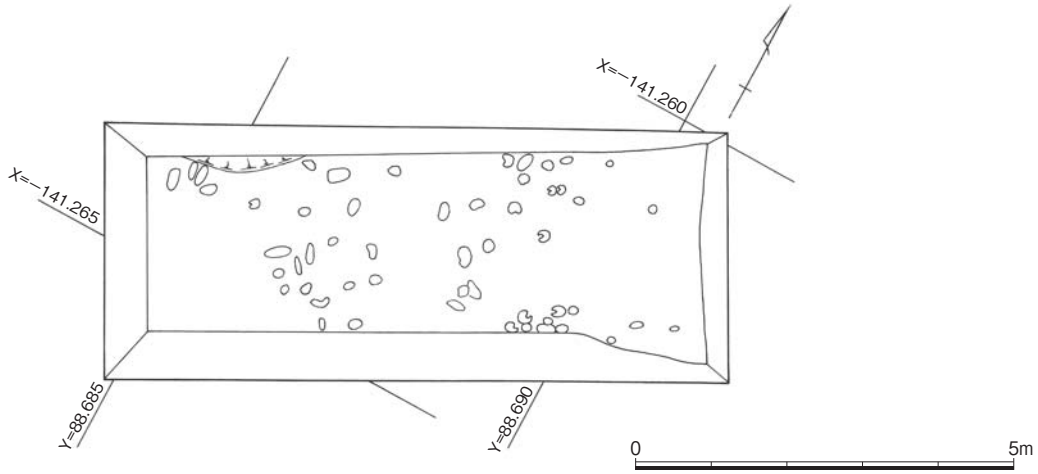


fig. 205　P6区第4遺構面平面図

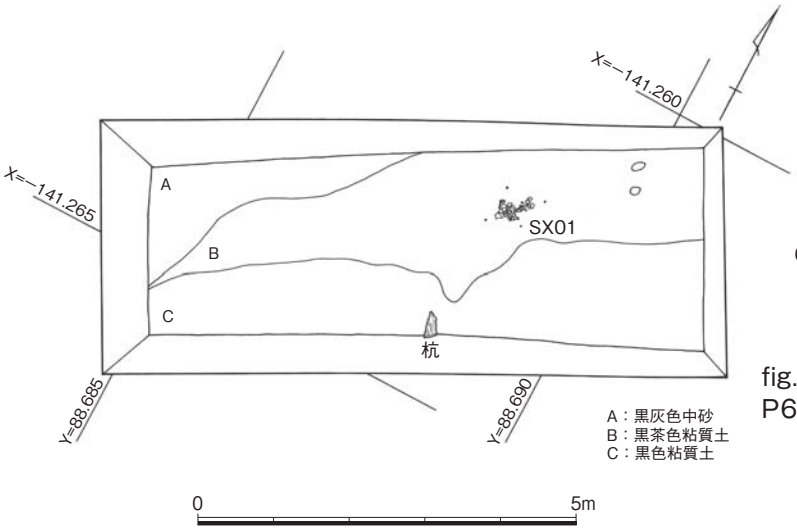


fig. 206　P6区第6遺構面平面図

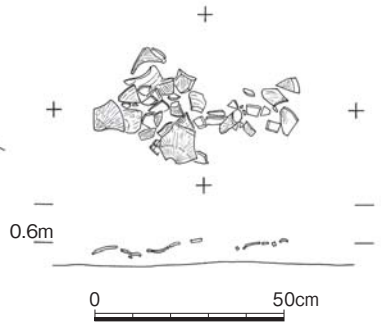


fig. 207
P6区第6遺構面SX01土器出土状況図

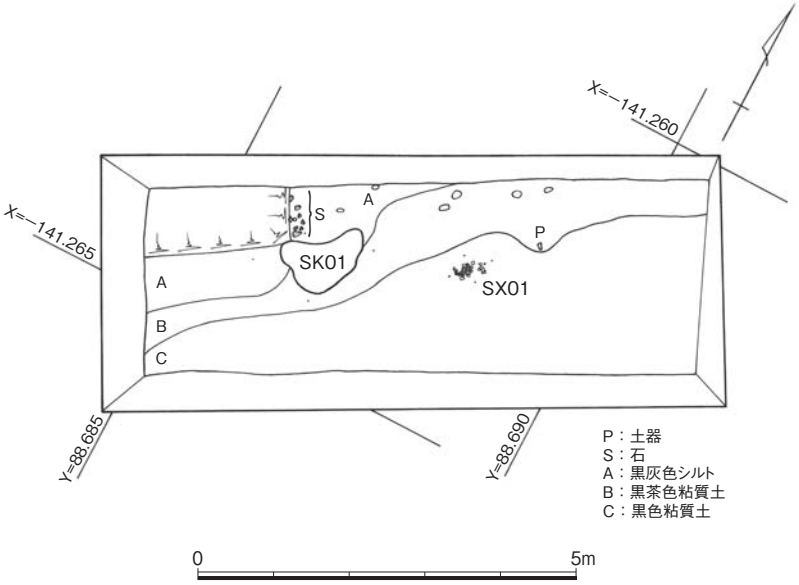


fig. 208　P6区第7遺構面平面図

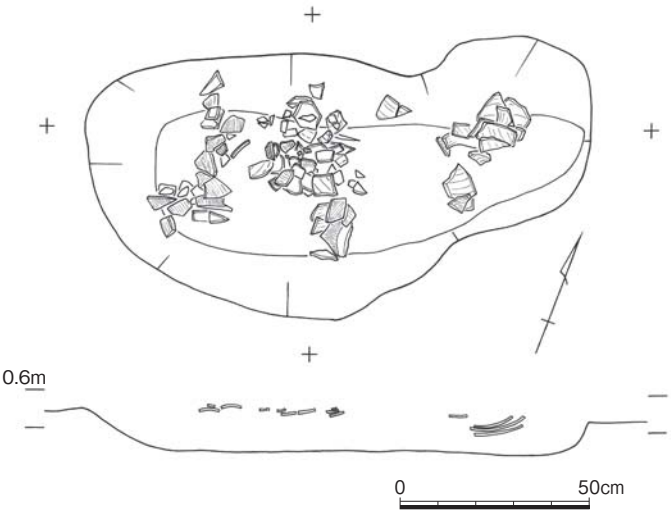


fig. 209　P6区第7遺構面SK01土器出土状況図

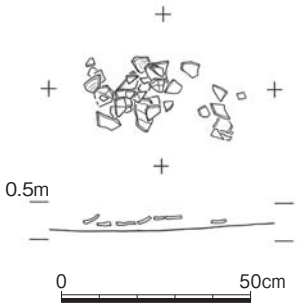


fig. 210
P6区第7遺構面SX01土器出土状況図

第6遺構面（足跡・土器溜）

第31層（黒色粘質土）上面で、人の足跡とみられる遺構を検出している。出土遺物は、横に倒れた状態で出土した直径0.2mほどの杭と、古墳時代前期の高坏が2点出土している土器溜（SX01）があり、SX01の土器は、土圧によって押し潰されている。黒色粘質土層は、調査区全体に拡がらず、黒灰色中砂層と黒茶色粘質土層が共に検出された状態で堆積しており、北から南へ勾配を持つ地形となる。

第7遺構面（土坑・土器溜・足跡）

第35層（黒色粘質土）上面で、土坑1基（SK01）と土器溜1ヶ所（SX01）、人と偶蹄類の足跡を検出した。SK01は、東西0.7m、南北0.4m、深さ0.1mであり、埋土中から古墳時代（布留式土器）の直口壺が2点以上出土した。SX01では、当調査区中央のやや東側寄りで土器が土圧で押し潰れた状態で出土した。黒色粘質土層は調査区全体に拡がらず、黒灰色シルト層と黒茶色粘質土層が同一遺構面で露出しており、北から南へ勾配を持つ地形となる。

fig. 211　P6区第6遺構面SX01土器出土状況（北から）

fig. 212　P6区第7遺構面SK01土器出土状況（南東から）

出土遺物

482，483は土師器の高坏で外面は刷毛目調整、脚部の内面はヘラ削りを行う。484は土師器壷で胴部外面は刷毛目、内面はナデ調整を施す。第６遺構面SX01から出土。485は土師器壷で、内外面にヘラミガキを施す。486，487は土師器甕で、内外面はハケ目調整、指頭圧痕を残す。第７遺構面SX01出土。488，489は須恵器坏蓋内面を硯として利用している。第３遺構面直上層出土。490は棒状有孔土錘、491～493は管状土錘で、490は第３遺構面直上層、491は第６遺構面SX01、492，493は第２遺構面から出土。494は土面子で第１遺構面出土。

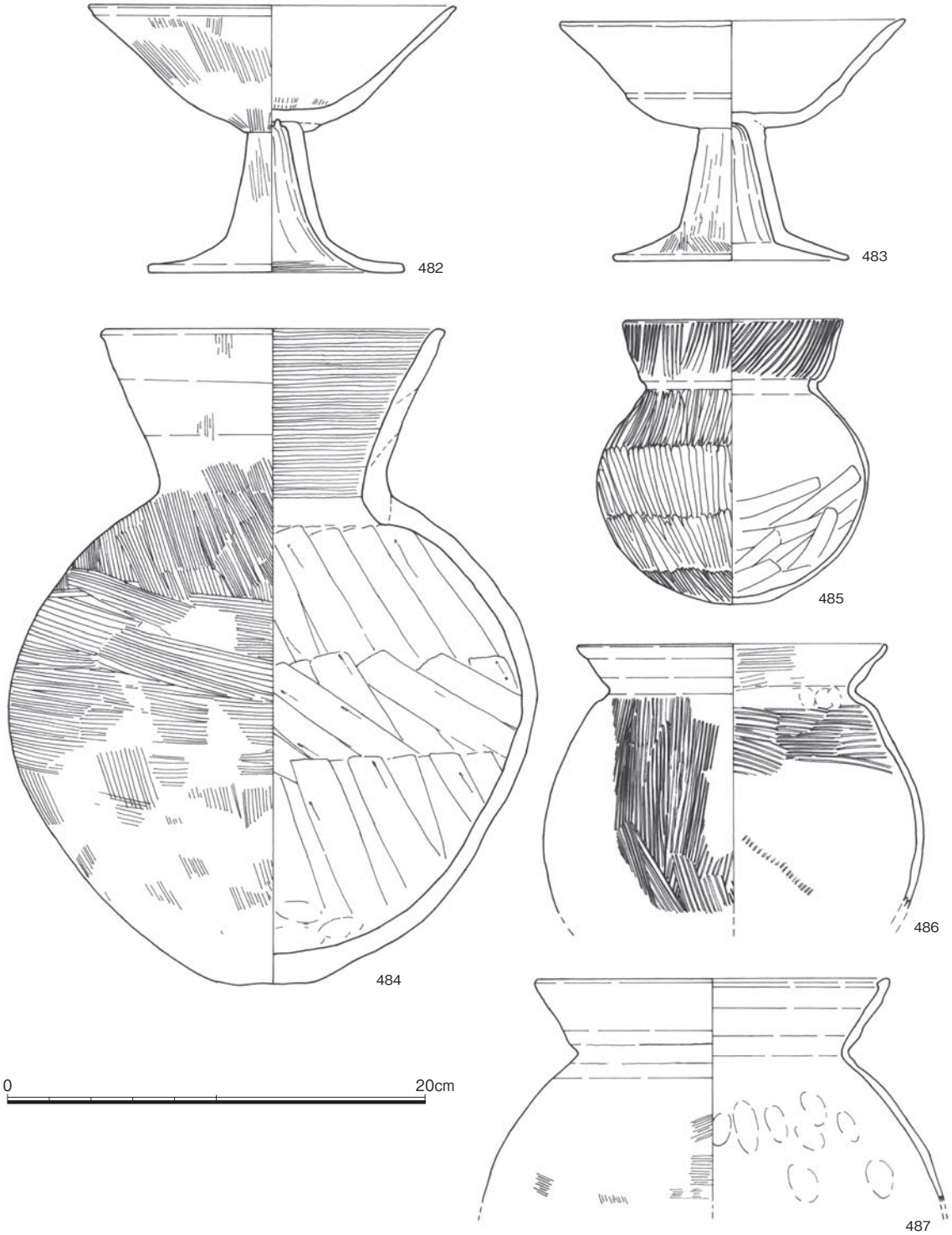


fig. 213　P6区出土土器

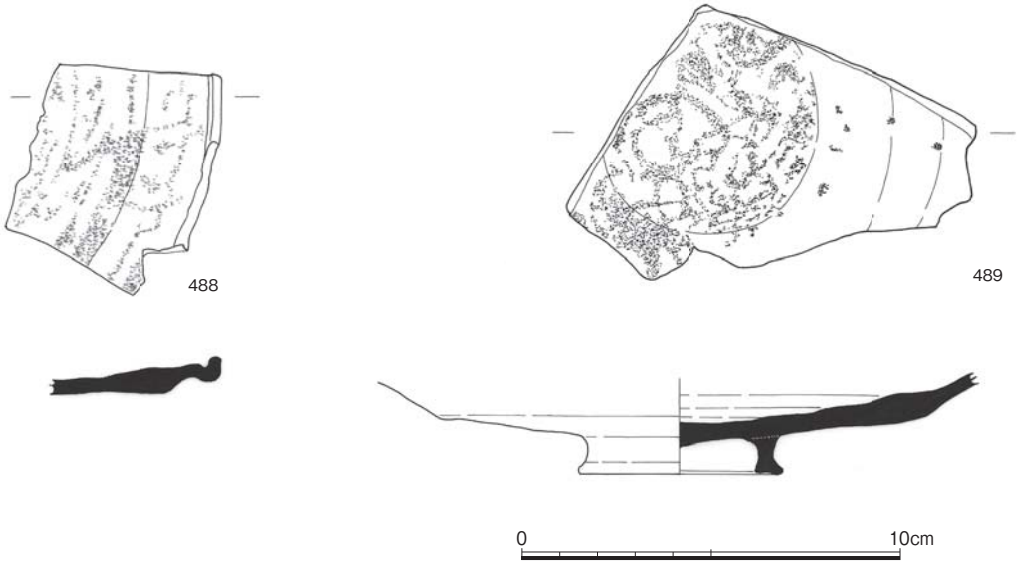


fig. 214　P6区出土転用硯

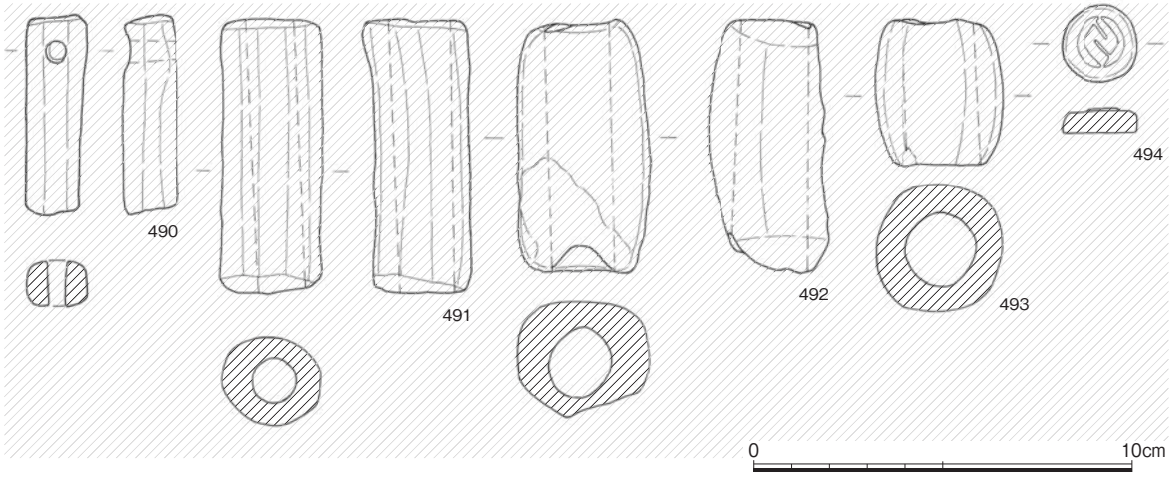


fig. 215　P6区出土土錘・泥面子

木製品は湿地状の堆積層である黒茶色粗砂混じり粘質土より出土した3点を図示した。495は木釘の未成品または調度品の部材の可能性のある製品で、496はほぞ穴がある部材、497は道具類の柄として作られた可能性がある破片である。なお、497には焼け焦げが見られる。

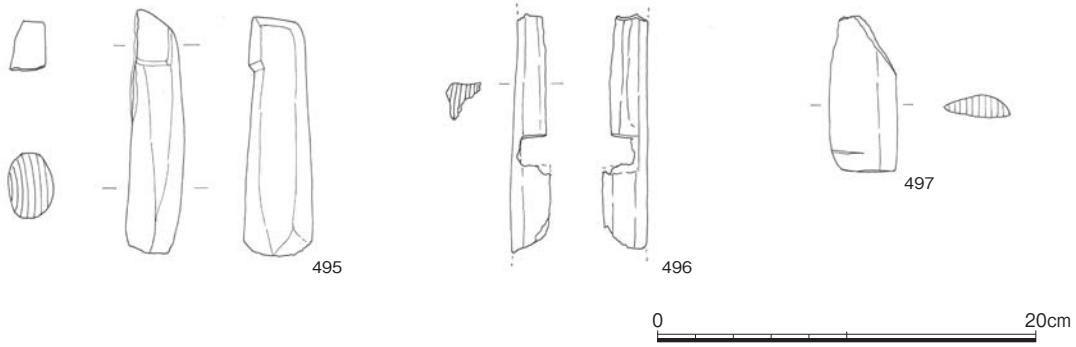


fig. 216　P6区出土木製品

P7区

立地

当該区も湿地の状態で堆積した層が連続している。この中で6面の遺構面を確認した。

基本層序

阪神電車の盛土下、近代・中近世耕作土（第1・2遺構面）、奈良・平安時代頃の湿地層（黒茶色粘質土・第3遺構面）、洪水層（灰色混じり暗青灰色粗砂・第4遺構面）、湿地層（灰色シルト・第5遺構面、黒色粘質土・第6遺構面）、の堆積が確認された。

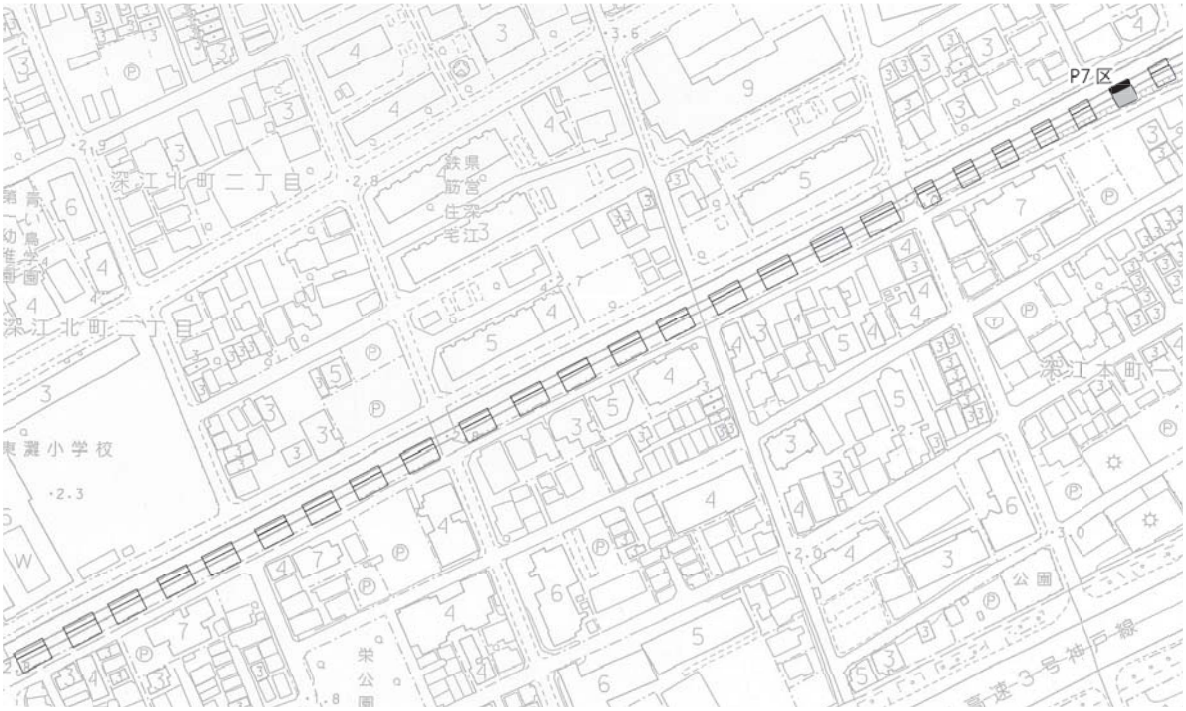
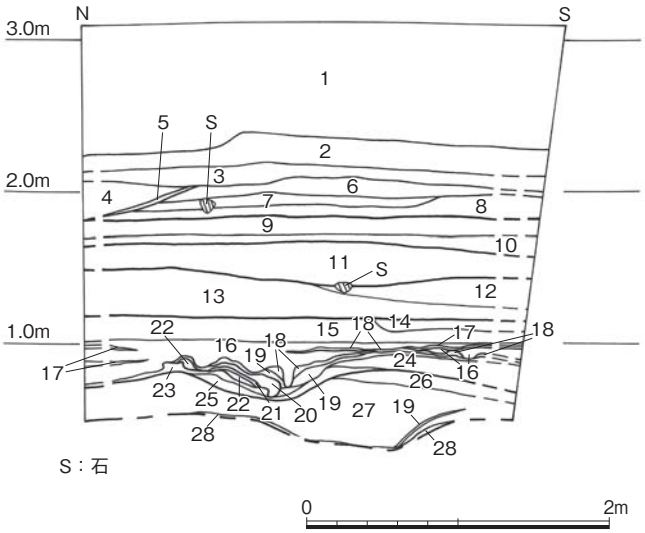


fig. 217　P7区位置図



1．盛土
2．包含層/暗灰色粗砂混じり中砂
3．包含層/礫混じり灰色粗砂混じり細砂
4．土坑/鉄分含む橙灰色細砂
5．土坑/鉄分含む橙灰色粗砂
6．包含層/鉄分含む橙褐色粗砂
7．包含層/鉄分含む橙色粗砂
8．包含層/灰白色細砂
9．第1遺構面/暗オリーブ色粗砂混じり細砂
10．包含層/暗オリーブ灰色細砂
11．第2遺構面/暗青灰色粗砂混じり細砂
12．包含層/暗黒茶色粘質土
13．第3遺構面/黒茶色粘質土
14．包含層/暗青黒色粗砂
15．第4遺構面/灰色混じり暗青灰色粗砂
16．洪水砂/灰白黒色粗砂
17．湿地/黒灰色細砂
18．洪水砂/暗青緑灰色細砂
19．湿地/黒色粘質細砂
20．洪水砂/暗灰色シルト
21．湿地/褐色粗砂混じり黒灰色粗砂
22．洪水砂/灰白色シルト
23．湿地/黒色粘質土
24．洪水砂/暗灰白色粗砂
25．洪水砂/暗黒灰色粘質土
26．洪水砂/緑灰色粗砂
27．第5遺構面/灰色シルト
28．第6遺構面/黒色粘質土

fig. 218　P7区東壁断面図

第1遺構面（土坑・足跡）

第9層（暗オリーブ色粗砂混じり細砂）上面で、土坑1基、人と偶蹄類の足跡を検出した。土坑は、東西1.4m、南北1.0m、深さ0.7mである。当遺構面は鎌倉～戦国時代に当たる。

第2遺構面（溝）

第11層（暗青灰色粗砂混じり細砂）上面で東西方向の溝9本、南北方向の溝18本を検出した。遺構の切り合い関係から、南北方向の溝が古く、東西方向の溝が新しいことがわかる。溝内からは、鎌倉時代の土師器や須恵器等が出土している。耕作に伴う溝と考えられる。

第3遺構面（足跡）

第13層（黒茶色粘質土）上面で、人と偶蹄類の足跡を検出した。足跡類は当調査区北側に集中しており、東西方向に進路が読み取れる。また、当調査区中央の西側から集石を検出したが、その性格は不明である。当遺構面は奈良時代に当たる。

第4遺構面（溝・足跡）

第15層（灰色混じり暗青灰色粗砂）上面で、土坑1基と南北方向の溝6条、南北方向に伸びる斜行溝2条、人と偶蹄類の足跡を検出した。溝は、調査区に直行する溝を斜行する溝が切るため、形成時期が異なる。耕作に伴う溝と考えられる。当遺構面は飛鳥～奈良時代に当たる。

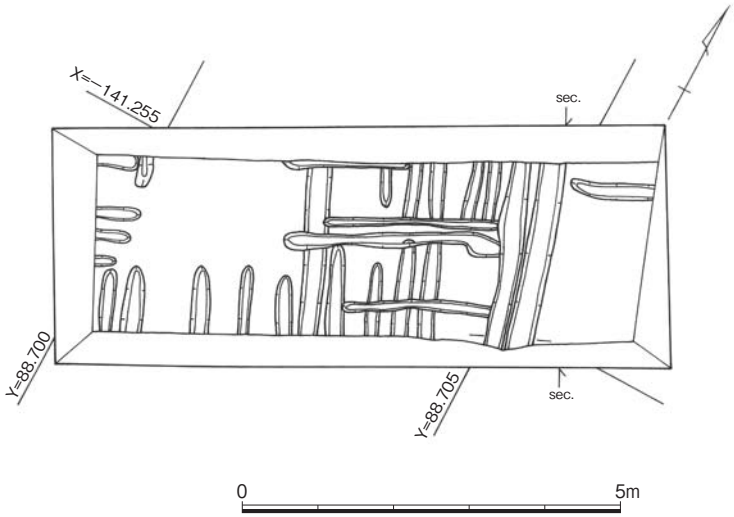


fig. 219　P7区第2遺構面平面図

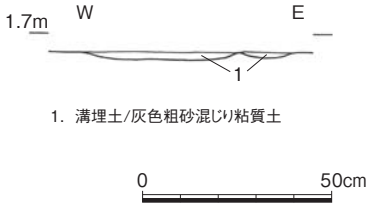


fig. 220
P7区第2遺構面検出南北溝断面図

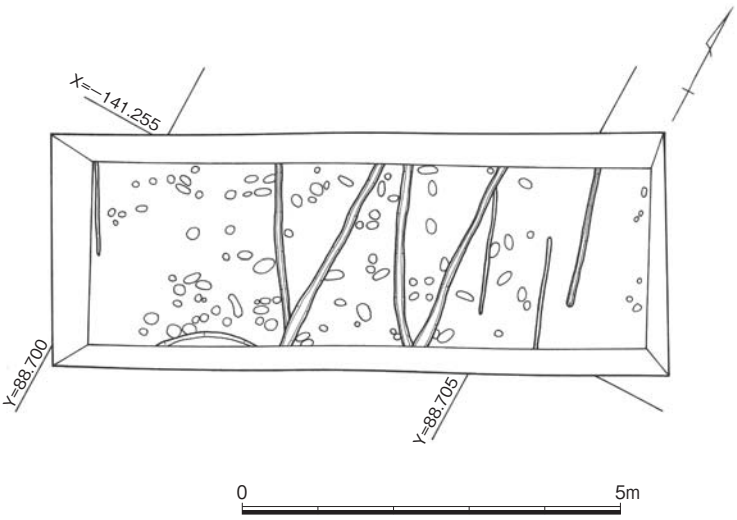


fig. 221　P7区第4遺構面平面図

第5遺構面（溝）

第27層（灰色シルト）上面で、幅0.7～1.0m、深さ0.2mの東西方向の溝を１条検出した。当遺構面は飛鳥時代に当たる。

第6遺構面（溝・土器群）

第28層（黒色粘質土）上面で、幅1.1m、深さ0.15mの東西方向の溝１条を検出した。黒色粘質土は、当調査区全体に拡がらず、黒色粘質土下層の灰白色シルトと黒色粘質土、そして暗灰色シルトが斑状に堆積している。出土遺物は、これらの層からやや浮いた状態で古墳時代（布留式土器）の甕が２点出土しており、うち１点はほぼ完形品である。

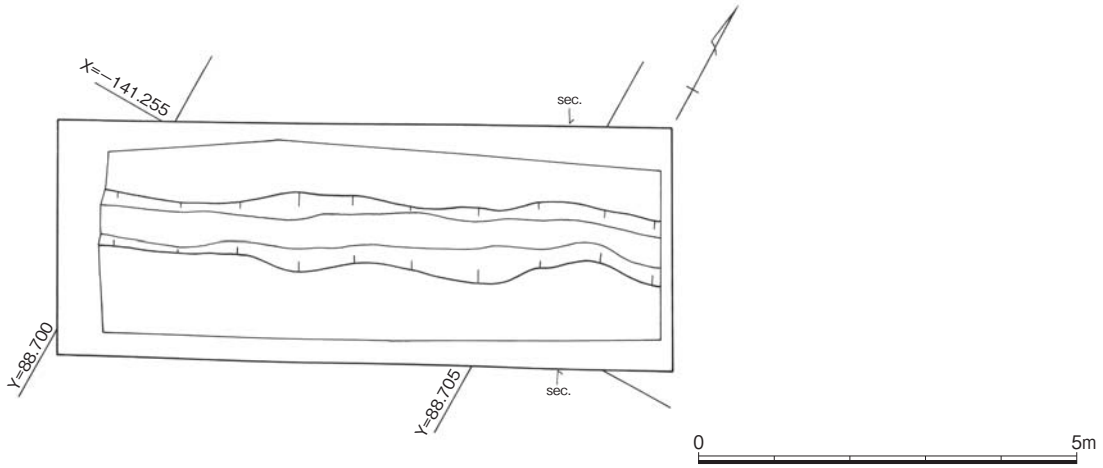


fig. 222　P7区第5遺構面平面図

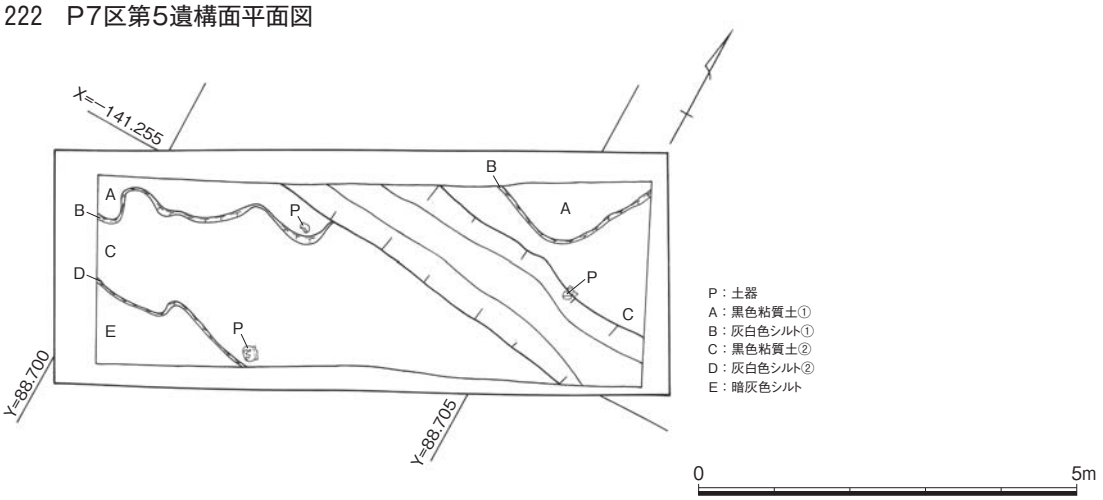


fig. 223　P7区第6遺構面平面図

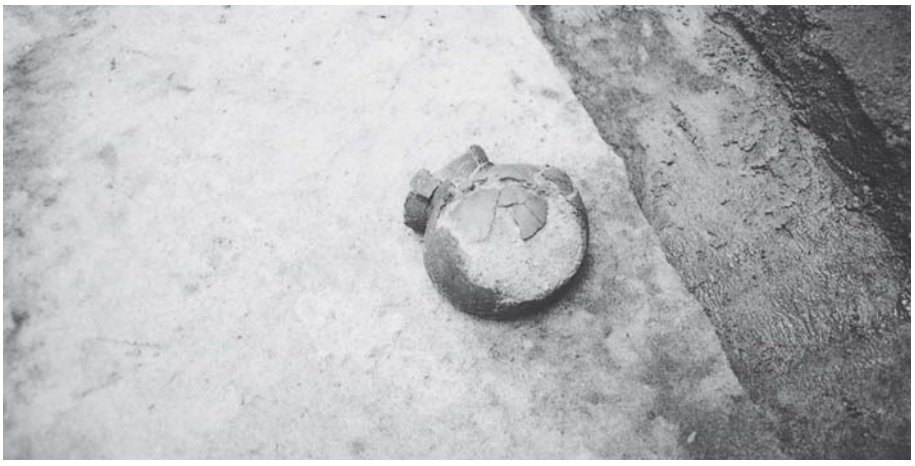


fig. 224
P7区第6遺構面
検出中に出土した
甕出土状況（南から）

出土遺物

498，499，501は管状土錘で、細い棒に粘土紐を貼り付けて成形する。500は棒状有孔土錘で、端部に紐通しの孔を開ける。498は第１遺構面、499は第１遺構面直上層、500は第３遺構面直上層、501は第２遺構面出土である。

502，503は土師器甕で、球形の胴部に直立した口縁部を持つ。502の胴部上半部は刷毛目、下半部は指頭圧痕を残す。内面はナデと指頭圧痕が残る。いずれも古墳時代（布留式土器併行期）に属する。

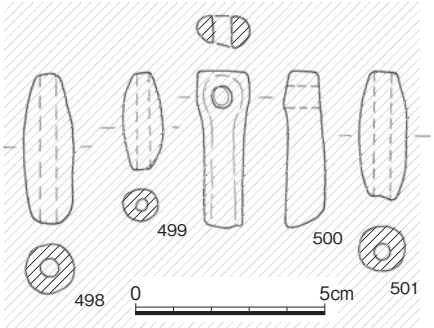


fig. 225　P7区出土有孔・管状土錘

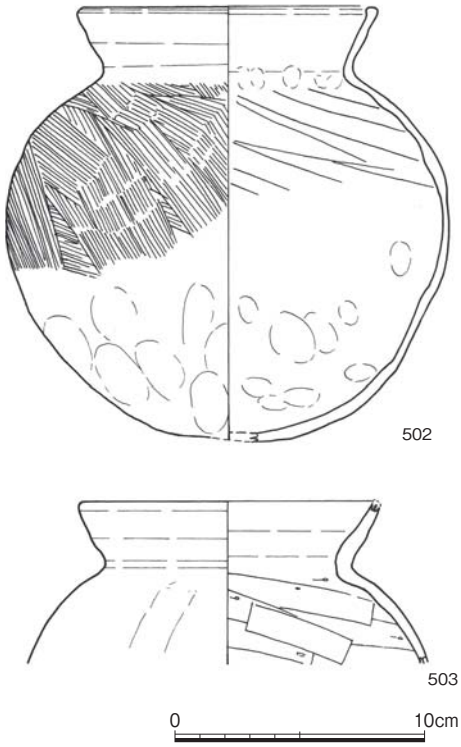


fig. 226　P7区出土土器

木製品は湿地層や洪水砂層から出土した。504は一端にフォークのような２条の突起を有するもので、長さ15㎝、幅４㎝、厚さ0.7～1.3㎝を測る。用途は不明である。505は祭祀品である馬形で残存長14㎝、いずれも黒色粘質土出土。506は道具類の木の柄と推定される。第２遺構面である暗青灰色粗砂混じり細砂出土。507は箸と思われる丸棒材で、先端を尖らせる。長さ約６㎝、幅0.3㎝程である。第３遺構面の黒茶色粘質土出土。

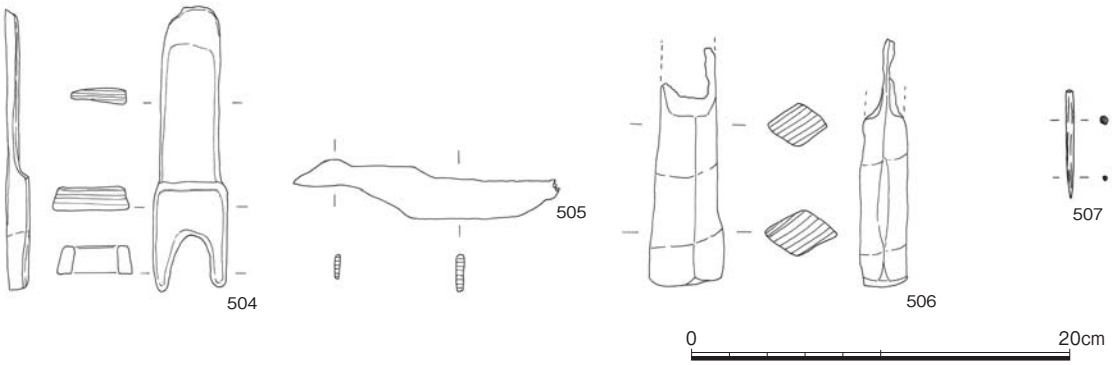


fig. 227　P7区出土木製品

P8区

立地

当該地は湿地に相当し、近代に至るまで連綿と耕作地として利用されている。調査区内では3面の遺構面を確認した。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土、近代・近世耕作土の下、幾度かの洪水による細砂～粗砂層が確認さ

fig. 228　P8区位置図

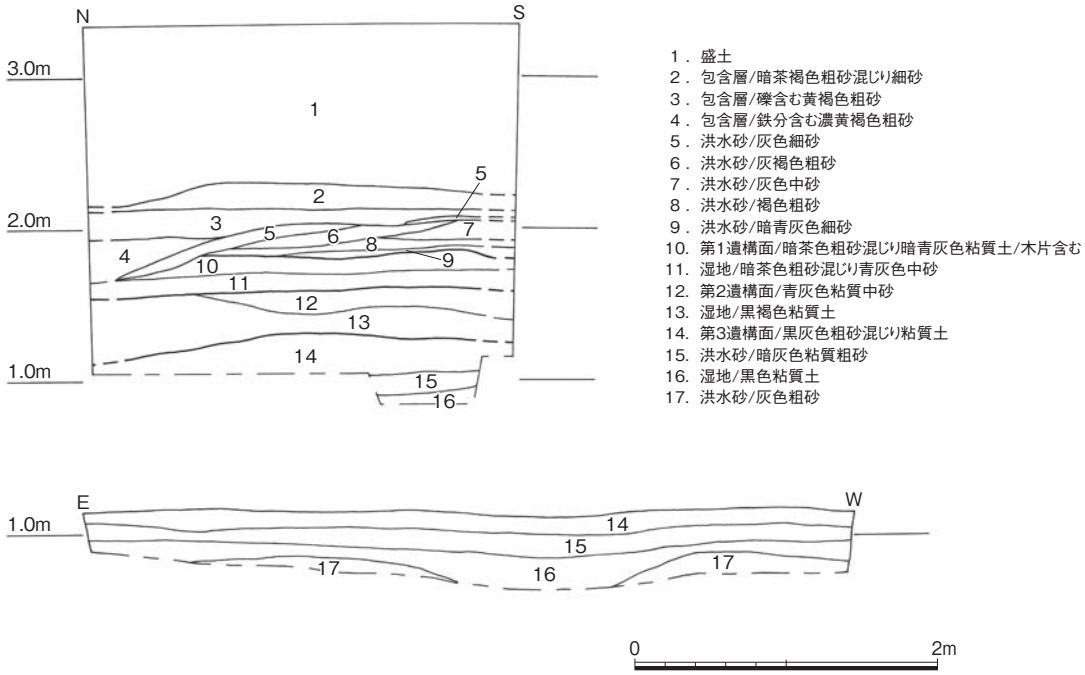


fig. 229　P8区東壁（上）・南壁（下）断面図

れる。その下は暗茶色粗砂混じり暗青灰色粘質土（第１遺構面）が堆積する。以下は洪水砂と粘質土が連続し、その中から２面の遺構検出面が確認された。

なお、当調査区は掘削深度が深く、かつ狭小な調査区内では安全な全面調査の実施が不可能であることから、第３遺構面以下は、南側に先行トレンチを設けて、前回第14次調査で検出した澪の延伸を確認するに止めた。

第１遺構面（土坑）

第10層（暗茶色粗砂混じり暗青灰色粘質土）上面で、土坑とみられる遺構１基と落込みを検出した。当遺構面は、飛鳥～奈良時代に当たる。

第２遺構面（溝・巣穴）

第12層（青灰色粘質中砂）で、幅0.5～0.6m、深さ0.1mの東西方向の溝１条と湿地に住む小動物、昆虫等の無数の巣穴を検出した。当遺構面は飛鳥～奈良時代に当たる。

第３遺構面（足跡）

第14層（黒灰色粗砂混じり粘質土）上面で、人と偶蹄類の足跡を検出した。

出土遺物

図示はしていないが、直径10㎝程の浅い木皿が出土している。残存長5.6㎝、高さ７㎝、皿面に刃物の切痕が認められる。

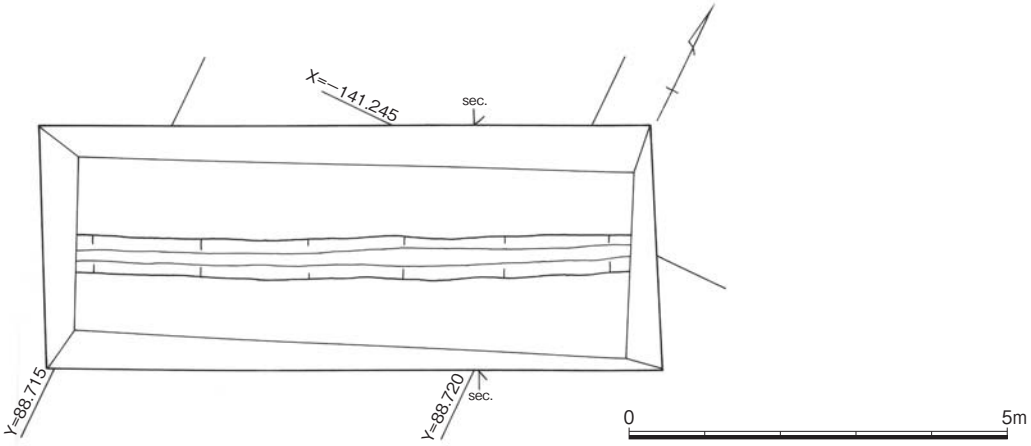


fig. 230　P8区第2遺構面平面図

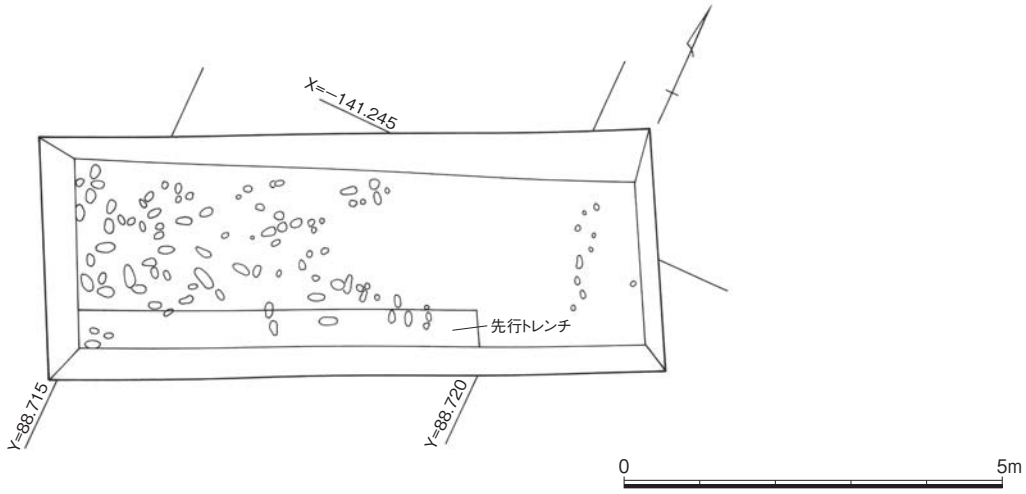


fig. 231　P8区第3遺構面平面図

Ⅲ．古環境の調査と復元

1．深江北町遺跡第17次調査出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

神戸市東灘区の深江北町遺跡から出土した木製品300点について樹種同定を行った。

（2）試料と方法

試料は、第17次調査で出土した木製品300点である。時期は、奈良時代と推測されている。

木取りの確認後、試料から剃刀を用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定、写真撮影を行った。

（3）結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属とマツ属複維管束亜属、ツガ属、コウヤマキ、ヒノキ、スギ、ヒノキ科の７分類群、広葉樹はシキミとクスノキ、サクラ属樹皮、ツブラジイ、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、カエデ属、サカキ、ヒサカキ、シャシャンボ、トネリコ属トネリコ節（以下、トネリコ節）、コシアブラの12分類群、その他に単子葉類のタケ亜科があり、合計20分類群が確認された。器種分類ごとの樹種同定結果をfig. 232、結果の一覧をfig. 236～241に示す。なお、器種分類は伊東・島地編（2012）を参照した。

全体ではヒノキが最も多く228点であった。その他はアカガシ亜属が14点、マツ属複維管束亜属が12点、スギが11点、ツガ属が６点、サカキが５点、モミ属とコウヤマキ、シキミ、シャシャンボが３点、サクラ属樹皮とツブラジイが２点、ヒノキ科とクスノキ、スダジイ、カエデ属、ヒサカキ、トネリコ節、コシアブラ、タケ亜科が各１点であった。

樹種／器種	工具	農耕土木具	紡織具	紡織具？	漁労具	武器	服飾具	容器	食事具？	祭祀具	祭祀具？	遊戯具	文房具	建築部材	その他	不明・未製品木製品	板材	棒材	計
モミ属	1				1					1									3
マツ属複維管束亜属			1							1				1			2	7	12
ツガ属										2							3	1	6
コウヤマキ														2				1	3
ヒノキ	1		1		1		3	66	3	46	1		3	6	10	11	31	45	228
スギ					1								1	1	1		2	5	11
ヒノキ科	1																		1
シキミ			2			1													3
クスノキ								1											1
サクラ属樹皮								2											2
ツブラジイ															1	1			2
スダジイ										1									1
コナラ属アカガシ亜属		1	1	1	1		1			2					1	3	2	1	14
カエデ属															1				1
サカキ				1												1		3	5
ヒサカキ																		1	1
シャシャンボ										1		1			1				3
トネリコ属トネリコ節																		1	1
コシアブラ															1				1
タケ亜科																	1		1
計	3	1	5	2	4	1	4	69	3	54	1	1	4	10	16	16	41	65	300

fig. 232　器種分類ごとの樹種同定結果

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

①モミ属　*Abies*　マツ科　fig. 242　1a-1c（No. 248）

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織でじゅず状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約5種ある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

②マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科　fig. 242　2a-2c（No. 261）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

③ツガ属　*Tsuga*　マツ科　fig. 242　3a-3c（No. 8）

仮道管、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は急である。放射組織の上下に放射仮道管があり、有縁壁孔対によって確認することができる。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1分野に2～4個存在する。

ツガ属は暖帯から福島県以南の温帯に生育する常緑高木で、ツガとコメツガがある。材はやや強い程度で、耐朽性・保存性は中庸、割裂および乾燥は容易である。

④コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc.　コウヤマキ科　fig. 242　4a-4c（No. 291）

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。分野壁孔はやや小型の窓状となる。

コウヤマキは、福島県以南の温帯から暖帯上部に生育する常緑針葉高木である。材は耐朽性および耐湿性が強く、強靱である。

⑤ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　fig. 242　5a-5c（No. 110）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

⑥スギ　*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don　ヒノキ科　fig. 242，243　．6a-6c（No. 54）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

⑦ヒノキ科　Cupressaceae

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は小型で、1分野に1～3個存在する。年輪が非常に密で、分野壁孔の型が不明瞭であるため、ヒノキ科までの同定に留めた。

⑧シキミ　*Illicium anisatum* L.　シキミ科　fig. 243　7a-7c（No. 5）

小型で角張った道管がほぼ単独で分布する散孔材で、年輪のはじめに道管が1列に配列する

傾向がある。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は1～3列幅で異性である。

シキミは暖帯に分布する常緑の小高木もしくは低木である。材はやや重硬で、粘り気がある。

⑨クスノキ　*Cinnamomum camphora* (L.) J. Presl　クスノキ科　fig. 243　8a-8c (No. 27)

やや大型の道管が単独ないし2～4個複合して散在し、晩材部で徐々に径を減じる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3細胞幅で大型の油細胞がある。

クスノキは亜熱帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は、やや軽軟なものから中庸程度まで幅があるが、切削加工は容易で、耐水性や耐朽性、耐虫性は極めて高い。

⑩サクラ属樹皮　*Prunus* bark　バラ科　fig. 243　9a-9c (No. 129)

コルク組織からなる周皮である。層構造が確認できるが、層ごとの境は明瞭ではない。

⑪ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky　ブナ科　fig. 243　10a-10c (No. 231)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性および乾燥は中庸であり、耐久性は著しく低い。

⑫スダジイ　*Castanopsis sieboldii* (Makino) *Hatus. ex* T. Yamaz. *et* Mashiba　ブナ科　fig. 243, 244　11a-11c (No. 176)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は単列同性である。

スダジイは福島県と新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や耐朽性は中庸だが、狂いが出やすい。

⑬コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　fig. 244　12a-12c (No. 174)

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織による識別が困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靱で、水湿に強い。

⑭カエデ属　*Acer*　ムクロジ科　fig. 244　13a-13c (No. 226)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様がみられる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織はほぼ同性で、1～5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。木材組織からはチドリノキ－カジカエデ以外は識別困難なため、この2種を除いたカエデ属とする。材は全体的に緻密で靱性がある。

⑮サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　モッコク科　fig. 244　14a-14c (No. 166)

小径で角張った道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は30段程度の

階段状である。放射組織は異性で、ほぼ1列である。

サカキは亜熱帯から暖帯に分布する常緑の小高木である。材は硬く強靱で、割裂は困難である。

⑯ヒサカキ　*Eurya japonica* Thunb. *var. japonica*　モッコク科　fig. 244　15a-15c (No. 24)

小径で角張った道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、40段以上となる。放射組織は1～4列幅で、上下に直立もしくは方形細胞が数個連なる異性である。

ヒサカキは亜熱帯～暖帯に生育する常緑低木または小高木である。材の強さは中庸で、割裂は困難である。

⑰シャシャンボ　*Vaccinium bracteatum* Thunb.　ツツジ科　fig. 244　16a-16c (No. 210)

小型で角張った道管が、単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一もしくは10段以下の階段状で、道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で細胞幅は10列程度、細胞高は非常に高い。

シャシャンボは、関東南部および石川県以西の暖帯に生育する常緑の低木もしくは小高木である。

⑱トネリコ属トネリコ節　*Fraxinus* sect. *Ornus*　モクセイ科　fig. 245　17a-17c (No. 126)

年輪のはじめに大型の道管が1列程度並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に2～3個複合して散在する。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1～3列幅である。

トネリコ節は温帯に分布する落葉高木で、トネリコやアオダモなど7種がある。材は中庸～やや重硬で、切削加工は容易で保存性も中庸である。

⑲コシアブラ　*Chengiopanax sciadophylloides* (Franch. et Sav.) C. B. Shang et J. Y. Huang　ウコギ科　fig. 245　18a-18c (No. 237)

年輪のはじめにやや大型の道管がまばらに配列し、晩材部では小型の道管が単独もしくは放射方向に数個複合して分布する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～4列幅程度で、上下に1つずつ方形細胞が連なる異性である。

コシアブラは、暖帯上部から温帯に分布する落葉高木である。材は軽軟で、割裂しやすい。

⑳タケ亜科　Subfam. *Bambusoideae*　イネ科　fig. 245　19a (No. 274)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一対の道管とそれと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間で、日本では12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。割裂性が非常に大きい。

(4) 考察

以下、今回樹種同定を行った木製品および木材について器種別にまとめる。器種別の樹種同定結果をfig. 233～235に示す。

工具は、ヘラ状工具がモミ属、楔がヒノキ科、楔形がヒノキであった。

農耕土木具の鋤はアカガシ亜属であった。

紡織具は、糸車がヒノキ、招木？がマツ属複維管束亜属、木錘がシキミとアカガシ亜属であった。木錘もしくはコマ未製品はアカガシ亜属とサカキであった。

漁労具は、浮子がスギとアカガシ亜属、浮子？がモミ属とヒノキであった。

武器と思われる丸木弓？はシキミであった。

服飾具は、下駄と下駄未製品がヒノキ、服飾具？がアカガシ亜属、装飾品？がヒノキであった。

容器は、曲物の底板や板材、タガがヒノキ、帯と綴じ具がサクラ属の樹皮であった。槽もしくは木盤？はクスノキ、木皿はヒノキであった。

食事具の箸？と、箸と思われる棒材は、ヒノキであった。

祭祀具は、斎串や舟形、人形、馬形はヒノキが多く、その他は斎串でモミ属、舟形と舟形？でスダジイとアカガシ亜属、シャシャンボ、舟形木製品？でマツ属複維管束亜属、馬形でモミ属とツガ属がみられた。また、斎串の可能性もある棒材はヒノキであった。

遊戯具の骰子？はシャシャンボであった。

文房具は、木札がスギ、木簡がヒノキであった。

建築部材の柱材は、ヒノキが多く、その他にコウヤマキとマツ属複維管束亜属、スギがみられた。

その他の木製品では、柄？と柄の握り部分、栓？、把手？がヒノキ、柄の部分がツブラジイ、木釘がヒノキとコシアブラ、脚？がアカガシ亜属、脚部？がカエデ属、杭の先端がスギであった。

不明木製品や未製品ではヒノキが多く、その他にアカガシ亜属とツブラジイ、サカキがみられた。

板材はヒノキが多く、その他にマツ属複維管束亜属とツガ属、スギ、アカガシ亜属、タケ亜科がみられた。

棒材・端材でもヒノキが多く、その他にマツ属複維管束亜属とツガ属、コウヤマキ、スギ、アカガシ亜属、サカキ、ヒサカキ、シャシャンボ、トネリコ節が確認された。

全体ではヒノキが最も多く、約7割を占めていた。器種別にみると、曲物を中心とした容器や箸と思われる食事具、斎串や人形、馬形などの祭祀具、建築材板材や棒材で、ヒノキを主とする針葉樹が多用されていた。ヒノキなどの針葉樹は、全般に軽軟で割裂性が大きいため、加工が容易である。一方、広葉樹はいずれも重硬な材質の樹種であった。器種が判明している試料で広葉樹が使用されていたのは、鋤や木錘など強度や重さを必要とする器種で、アカガシ亜属やシキミ、サカキなどが使用されていたが、祭祀具の舟形でもスダジイやアカガシ亜属、シャシャンボがみられた。器種によって樹種を選択して利用していたと推測される。

深江北町遺跡の第12・14次調査でも、今回の分析と同じように奈良時代の層位から出土した木製品の樹種同定が行われており、ヒノキを含むヒノキ科が全体の72.9％を占め、アカガシ亜属とマツ属複維管束亜属、スギが続いていた（神戸市教育委員会，2014）。今回の樹種構成も第12・14次調査の分析結果とほぼ同様である。また、第12・14次調査の用材傾向も農具や錘にアカガシ亜属を使用しており、舟形も類似した傾向を示していた。

	工具			農耕土木具	紡織具			紡織具？	漁労具		武器？	服飾具				容器												食事具？		
																曲物														
樹種／器種	ヘラ状工具	楔	楔形	鋤	糸車	木錘	招木？	木錘かコマ未製品	浮子	浮子？	丸木弓？	下駄	下駄未製品	装飾具？	装飾品？	底板	底板（綴紐付）	底板（墨付？）	板材結束具付	漆付	角のあて板？	タガ	帯	綴じ具	槽？木盤？	木皿	箸？	棒材（箸？）	計
モミ属	1									1																				2
ヒノキ			1		1					1		1	1		1	57	1	1	1	1	1	3				1	1	2	75
スギ									1																					1
マツ属複維管束亜属							1																							1
ヒノキ科		1																												1
シキミ						2					1																			3
クスノキ																									1					1
サクラ属樹皮																							1	1						2
コナラ属アカガシ亜属				1		1		1	1					1																5
サカキ								1																						1
総計	1	1	1	1	1	3	1	2	2	2	1	1	1	1	1	57	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	2	92

fig. 233　器種別の樹種同定結果（1）

	祭祀具											祭祀具？	遊戯具？		文房具		建築部材	その他木製品										
樹種／器種	斎串	斎串（完形）	斎串か人形	舟形	舟形？	舟形未製品	舟形木製品？	人形	刀子状木製品	馬形	馬形（大）	先の鋭った棒、斎串？	骰子？		墨書木札	木簡	柱材	柄？	柄の握り部分	柄の部分	木釘	脚？	脚部？	栓？	把手？	杭の先端	計
モミ属	1									1																	2
マツ属複維管束亜属							1										1										2
ツガ属										1																	1
コウヤマキ																	2										2
ヒノキ	28	1	1	2		2		2	1	8	1	1				3	6	1	1		3			1	2		64
スギ															1		1									1	3
ツブラジイ																				1							1
スダジイ				1																							1
コナラ属アカガシ亜属				1	1																	1					3
カエデ属																							1				1
シャシャンボ				1									1														2
コシアブラ																					1						1
総計	29	1	1	5	1	2	1	2	1	10	1	1	1		1	3	10	1	1	1	4	1	1	1	2	1	83

fig. 234　器種別の樹種同定結果（2）

参考・引用文献

平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社．

浦　蓉子（2014）出土樹皮紐の材質同定のための基礎研究―現生サクラ属、カバノキ属樹皮組織の比較―．日本文化財科学会第31回大会実行委員会編「日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集」：240-241，日本文化財科学会．

神戸市教育委員会（2014）深江北町遺跡　第12・14次調査　埋蔵文化財発掘調査報告書．184p，神戸市教育委員会文化財課．

樹種／器種	不明木製品・未製品	板材	棒材・端材	計
マツ属複維管束亜属		2	7	9
ツガ属		3	1	4
コウヤマキ			1	1
ヒノキ	11	31	47	89
スギ		2	5	7
ツブラジイ	1			1
コナラ属アカガシ亜属	3	2	1	6
サカキ	1		3	4
ヒサカキ			1	1
シャシャンボ			1	1
トネリコ属トネリコ節			1	1
タケ亜科		1		1
計	16	41	68	125

fig. 235　器種別の樹種同定結果（3）

№	R番号	分類	遺物名	樹種	木取り
1	R-009	農耕土木具	鋤	コナラ属アカガシ亜属	柾目
2	R-022	板材	板	コナラ属アカガシ亜属	柾目
3	R-034	棒材	先の尖った棒	マツ属複維管束亜属	芯去削出
4	R-037-1	紡織具	木錘	コナラ属アカガシ亜属	芯持削出
5	R-037-2	紡織具	木錘	シキミ	芯持削出
6	R-037-3	紡織具	木錘	シキミ	芯持削出
7	R-037-4	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
8	R-037-5	板材	板材（大）	ツガ属	板目
9	R-037-6	板材	切り欠きのある板材	ヒノキ	板目
10	R-042-1	棒材	先の鋭った棒	ヒノキ	芯去削出
11	R-042-2	棒材	角棒	スギ	角材
12	R-043	板材	板材	ヒノキ	柾目
13	R-047-1	板材	板材	ヒノキ	柾目
14	R-047-2	板材	板材	マツ属複維管束亜属	板目
15	R-021-1	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
16	R-021-2	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
17	R-021-3	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
18	R-021-4	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
19	R-021-5	棒材	穿孔のある棒材	ヒノキ	板目
20	R-022-1	服飾具	装飾品？	ヒノキ	みかん割り
21	R-022-2	板材	先端の尖った板材	ヒノキ	角材
22	R-024	漁労具	浮子？	ヒノキ	半割
23	R-026-1	紡織具？	木錘かコマ未製品	サカキ	丸木
24	R-026-2	棒材	棒材	ヒサカキ	丸木
25	R-027-1	工具	楔	ヒノキ科	柾目
26	R-027-2	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
27	R-027-3	容器	槽？木盤？	クスノキ	横木取り
28	R-029	文房具	木簡	ヒノキ	板目
29	R-031-1	祭祀具？	先の鋭った棒、斎串？	ヒノキ	芯去削出
30	R-031-2	祭祀具	馬形	ヒノキ	柾目
31	R-031-3	祭祀具	馬形	ツガ属	柾目
32	R-031-4	祭祀具	馬形	ヒノキ	板目
33	R-031-5	祭祀具	馬形	ヒノキ	柾目
34	R-036	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
35	R-039-1	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
36	R-039-2	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
37	R-039-3	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
38	R-039-4	食事具？	棒材（箸？）	ヒノキ	芯去削出
39	R-039-5	食事具？	棒材（箸？）	ヒノキ	芯去削出
40	R-043-1	不明木製品・未製品	不明製品	ヒノキ	板目
41	R-043-2	服飾具	下駄未製品	ヒノキ	追柾目
42	R-046-1	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
43	R-046-2	紡織具？	木錘かコマ未製品	コナラ属アカガシ亜属	半割
44	R-046-3	不明木製品・未製品	（特）不明品	ヒノキ	柾目
45	R-046-4	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
46	R-046-5	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
47	R-046-6	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
48	R-046-7	不明木製品・未製品	用途不明未製品	コナラ属アカガシ亜属	柾目
49	R-046-8	不明木製品・未製品	用途不明未製品	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り
50	R-046-9	板材	板材	ヒノキ	板目
51	R-046-10	棒材	棒材	ヒノキ	角材
52	R-046-11	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
53	R-046-12	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
54	R-046-13	棒材	棒材	スギ	芯去削出
55	R-046-14	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
56	R-046-15	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
57	R-046-16	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出

fig. 236　樹種同定結果一覧（1）

№	R番号	分類	遺物名	樹種	木取り
58	R-046-17	棒材	棒材	スギ	芯去削出
59	R-056-1	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
60	R-056-2	工具	楔形	ヒノキ	角材
61	R-056-3	紡織具	糸車	ヒノキ	柾目
62	R-056-4	容器	曲物底	ヒノキ	板目
63	R-056-5	容器	曲物底	ヒノキ	板目
64	R-056-6	容器	曲物底	ヒノキ	板目
65	R-056-7	容器	曲物底	ヒノキ	板目
66	R-056-8	容器	曲物底	ヒノキ	板目
67	R-056-9	容器	曲物底	ヒノキ	柾目
68	R-056-10	容器	曲物底	ヒノキ	板目
69	R-056-11	容器	曲物底	ヒノキ	板目
70	R-056-12	板材	板材	マツ属複維管束亜属	板目
71	R-056-13	板材	板材	ヒノキ	板目
72	R-056-14	板材	板材	ヒノキ	角材
73	R-056-15	板材	板材	ヒノキ	板目
74	R-056-16	板材	板材	ヒノキ	柾目
75	R-056-17	その他	杭の先端	スギ	芯去削出
76	R-057-1	祭祀具	斎串（完形）	ヒノキ	板目
77	R-057-2	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
78	R-057-3	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
79	R-057-4	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
80	R-057-5	祭祀具	舟形？	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り
81	R-057-6	漁労具	浮子	スギ	板目
82	R-057-7	棒材	棒材	ヒノキ	角材
83	R-057-8	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
84	R-057-9	文房具	木簡	ヒノキ	板目
85	R-062-1	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
86	R-062-2	祭祀具	刀子状木製品	ヒノキ	柾目
87	R-062-3	漁労具	浮子	コナラ属アカガシ亜属	柾目
88	R-062-4	その他	栓？	ヒノキ	芯去削出
89	R-062-5	不明木製品・未製品	木製品	コナラ属アカガシ亜属	芯持削出
90	R-062-6	棒材	先端の鋭った棒	ヒノキ	芯去削出
91	R-062-7	棒材	先端の鋭った棒	ヒノキ	芯去削出
92	R-062-8	棒材	先端の鋭った棒	ヒノキ	角材
93	R-062-9	祭祀具	馬形	ヒノキ	板目
94	R-062-10	祭祀具	馬形	ヒノキ	板目
95	R-062-11	祭祀具	馬形	ツガ属	板目
96	R-062-12	不明木製品・未製品	不明製品（板状）	ヒノキ	柾目
97	R-062-13	不明木製品・未製品	不明製品（板状）	ヒノキ	柾目
98	R-062-14	不明木製品・未製品	不明製品（板状）	ヒノキ	柾目
99	R-062-15	不明木製品・未製品	不明製品（板状）	ヒノキ	柾目
100	R-062-16	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
101	R-062-17	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
102	R-062-18	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
103	R-062-19	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
104	R-062-20	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
105	R-062-21	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
106	R-062-22	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
107	R-062-23	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
108	R-062-24	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
109	R-062-25	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
110	R-062-26	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
111	R-062-27	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
112	R-062-28	棒材	抉りのある棒材	ヒノキ	角材
113	R-062-29	祭祀具	人形	ヒノキ	芯去削出
114	R-062-30	棒材	棒材	マツ属複維管束亜属	角材

fig. 237　樹種同定結果一覧（2）

№	R番号	分類	遺物名	樹種	木取り
115	R-062-31	棒材	棒材	ヒノキ	角材
116	R-062-32	棒材	棒材	ツガ属	芯去削出
117	R-062-33	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
118	R-062-34	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
119	R-062-35	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
120	R-063-1	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
121	R-063-2	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
122	R-063-3	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
123	R-063-4	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
124	R-063-5	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
125	R-063-6	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
126	R-063-7	棒材	握りのある棒材	トネリコ属トネリコ節	芯持削出
127	R-063-8	板材	両端加工の板材	ヒノキ	追柾目
128	R-063-9	板材	円盤状の板材	スギ	板目
129	R-064	容器	曲物（帯）	サクラ属樹皮	横剥ぎ（幅2.9㎝）
130	R-070-1	その他	脚？	コナラ属アカガシ亜属	芯去削出
131	R-070-2	祭祀具	舟形木製品？	マツ属複維管束亜属	芯去みかん割り
132	R-070-3	祭祀具	馬形木製品	ヒノキ	板目
133	R-070-4	棒材	先端を尖らせた棒材	ヒノキ	角材
134	R-070-5	その他	木釘	ヒノキ	芯去削出
135	R-070-6	紡織具	招木？	マツ属複維管束亜属	芯去削出
136	R-070-7	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
137	R-070-8	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
138	R-070-9	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
139	R-070-10	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
140	R-070-11	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
141	R-070-12	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
142	R-070-13	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
143	R-070-14	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
144	R-070-15	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
145	R-070-16	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
146	R-070-17	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
147	R-070-18	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
148	R-070-19	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
149	R-070-20	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
150	R-070-21	祭祀具	斎串	ヒノキ	柾目
151	R-070-22	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
152	R-070-23	棒材	先端を尖らせた棒材	ヒノキ	角材
153	R-070-24	板材	板材	ヒノキ	板目
154	R-070-25	板材	板材	ヒノキ	板目
155	R-070-26	板材	板材	ヒノキ	板目
156	R-070-27	板材	板材	ヒノキ	柾目
157	R-070-28	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
158	R-070-29	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
159	R-070-30	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
160	R-070-31	棒材	棒材	コナラ属アカガシ亜属	芯去削出
161	R-070-32	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
162	R-070-33	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
163	R-070-34	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
164	R-070-35	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
165	R-070-36	棒材	棒材	ヒノキ	角材
166	R-072-1	棒材	枘穴のある棒材	サカキ	芯去削出
167	R-072-2	棒材	枘穴のある棒材	サカキ	丸木
168	R-074-1	祭祀具	舟形未製品	ヒノキ	割材
169	R-074-2	その他	木釘	ヒノキ	角材
170	R-074-3	その他	木釘	ヒノキ	芯去削出
171	R-074-4	容器	曲物底板	ヒノキ	板目

fig. 238　樹種同定結果一覧（3）

№	R番号	分類	遺物名	樹種	木取り
172	R-074-5	不明木製品・未製品	不明製品	ヒノキ	柾目
173	R-074-6	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
174	R-076-1	祭祀具	舟形	コナラ属アカガシ亜属	芯去削出
175	R-076-2	祭祀具	舟形	ヒノキ	芯去削出
176	R-076-3	祭祀具	舟形	スダジイ	丸木
177	R-076-4	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
178	R-076-5	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
179	R-076-6	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
180	R-077-1	容器	曲物底板（綴紐付）	ヒノキ	板目
181	R-077-2	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
182	R-080	文房具	木簡	ヒノキ	板目
183	R-083-1	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
184	R-083-2	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
185	R-083-4	板材	板材	ヒノキ	板目
186	R-083-5	棒材	棒材	ヒノキ	芯去削出
187	R-083-6	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
188	R-083-7	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
189	R-083-8	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
190	R-084	棒材	丸棒	ヒノキ	丸木
191	R-088-1	板材	切り込みのある板材	ヒノキ	板目
192	R-088-2	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
193	R-088-3	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
194	R-088-4	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
195	R-092-1	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
196	R-094-1	棒材	先端が瘤状の棒	マツ属複維管束亜属	芯去削出
197	R-094-2	棒材	先端が瘤状の棒	マツ属複維管束亜属	芯去削出
198	R-094-3	武器	丸木弓？	シキミ	芯去削出
199	R-094-4	棒材	棒材？	ヒノキ	芯去削出
200	R-098-1	板材	先端の尖った板材	ヒノキ	柾目
201	R-098-2	板材	切り欠きのある板材	ヒノキ	板目
202	R-098-3	不明木製品・未製品	不明未製品	サカキ	半割
203	R-098-4	祭祀具	舟形	ヒノキ	柾目
204	R-098-5	祭祀具	舟形未製品	ヒノキ	芯去削出
205	R-098-6	棒材	棒材（円形未製品）	ヒノキ	芯持削出
206	R-109-1	板材	圭頭状の板材	ヒノキ	柾目
207	R-109-2	容器	曲物板材結束具付	ヒノキ	板目
208	R-112	容器	曲物（漆付）	ヒノキ	柾目
209	R-115	服飾具	装飾具？	コナラ属アカガシ亜属	丸木
210	R-118-1	祭祀具	舟形	シャシャンボ	芯持削出
211	R-118-2	祭祀具	人形	ヒノキ	芯持削出
212	R-118-3	棒材	先端が瘤状の棒	ヒノキ	芯持削出
213	R-119-1	祭祀具	斎串	ヒノキ	柾目
214	R-119-2	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
215	R-119-3	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
216	R-019-1	棒材	角材	ヒノキ	角材
217	R-019-2	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
218	R-019-3	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
219	R-021-1	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
220	R-021-2	服飾具	下駄	ヒノキ	板目
221	R-021-3	板材	板材（丸）	ヒノキ	板目
222	R-021-4	板材	板材	ツガ属	板目
223	R-021-5	棒材	棒材	サカキ	芯去削出
224	R-021-6	棒材	棒材	ヒノキ	角材
225	R-021-7	棒材	棒材	ヒノキ	角材
226	R-029-1	その他	脚部？	カエデ属	芯持削出
227	R-029-2	祭祀具	斎串	ヒノキ	柾目
228	R-034-1	板材	先端が丸い板材	ツガ属	柾目

fig. 239　樹種同定結果一覧（4）

№	R番号	分類	遺物名	樹種	木取り
229	R-034-2	板材	先端が細い板材	ヒノキ	芯去削出
230	R-034-3	不明木製品・未製品	不明製品	ヒノキ	芯去削出
231	R-036-1	不明木製品・未製品	不明製品	ツブラジイ	芯去削出
232	R-036-2	その他	柄の部分	ツブラジイ	芯去削出
233	R-045	容器	曲物底板	ヒノキ	板目
234	R-047	板材	板材	ヒノキ	追柾目
235	R-014	祭祀具	斎串	モミ属	板目
236	R-017-1	棒材	角棒	コウヤマキ	角材
237	R-017-2	その他	木釘	コシアブラ	角材
238	R-017-3	棒材	角棒	ヒノキ	角材
239	R-017-4	棒材	角棒	ヒノキ	角材
240	R-021	板材	板材	ヒノキ	板目
241	023-1	板材	板材（大）	コナラ属アカガシ亜属	柾目
242	023-2	板材	板材（大）	ヒノキ	追柾目
243	023-3	板材	板材（大）	ヒノキ	板目
244	023-4	板材	板材（大）	ヒノキ	板目
245	023-5	板材	板材（大）	ヒノキ	柾目
246	023-6	遊戯具	骰子？	シャシャンボ	丸木
247	023-7	容器	曲物のタガ部分	ヒノキ	板目
248	023-8	工具	ヘラ状工具	モミ属	板目
249	023-9	棒材	角棒	ヒノキ	角材
250	023-10	棒材	角棒	ヒノキ	角材
251	R-025-1	漁労具	浮子？	モミ属	柾目
252	R-025-2	容器	曲物綴じ具	サクラ属樹皮	樹皮
253	R-025-3	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
254	R-025-4	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
255	R-025-5	祭祀具	斎串	ヒノキ	板目
256	R-025-6	棒材	角棒	ヒノキ	角材
257	R-025-7	棒材	角棒	スギ	角材
258	R-025-8	棒材	角棒	スギ	芯去削出
259	R-025-9	祭祀具	馬形	ヒノキ	割材
260	R-025-10	棒材	角棒	マツ属複維管束亜属	角材
261	R-025-11	棒材	角棒	マツ属複維管束亜属	角材
262	R-025-12	棒材	角棒	マツ属複維管束亜属	角材
263	R-025-13	棒材	角棒	ヒノキ	角材
264	R-028	板材	板材	スギ	板目
265	R-029	棒材	角棒	ヒノキ	板目
266	R-031	祭祀具	斎串か人形	ヒノキ	板目
267	R-005-1	容器	曲物タガ	ヒノキ	板目
268	R-005-2	容器	曲物タガ	ヒノキ	板目
269	R-007-1	祭祀具	馬形（大）	ヒノキ	板目
270	R-007-2	容器	曲物の角のあて板？	ヒノキ	板目
271	R-008	不明木製品・未製品	木製品（叩き棒か？）	ヒノキ	芯去削出
272	R-011	板材	板材	ヒノキ	板目
273	R-017	板材	板材	ヒノキ	板目
274	R-002	板材	板材	タケ亜科	割裂
275	R-006	容器	曲物底板	ヒノキ	柾目
276	R-009-1	板材	板材	ヒノキ	板目
277	R-009-2	その他	丸太材	シャシャンボ	丸木
278	R-007-1	その他	柄穴のある材	ヒノキ	角材
279	R-007-2	その他	柄？	ヒノキ	芯去削出
280	R-008	その他	把手？	ヒノキ	芯去削出
281	R-012-1	その他	穴の開いた端材	ヒノキ	角材
282	R-021	板材	板材	ヒノキ	柾目
283	R-016	その他	柄の握り部分	ヒノキ	角材
284	R-020-1	食事具？	箸？	ヒノキ	芯去削出
285	R-020-2	その他	把手？	ヒノキ	芯去削出

fig. 240　樹種同定結果一覧（5）

№	R番号	分類	遺物名	樹種	木取り
286	R-025-1	不明木製品・未製品	不明未製品	ヒノキ	板目
287	R-025-2	不明木製品・未製品	不明未製品	ヒノキ	板目
288	R-025-3	祭祀具	馬形	ヒノキ	柾目
289	R-004	容器	木皿	ヒノキ	横木取り
290	R-019	文房具	墨書木札	スギ	柾目
291	W-1	建築部材	柱材	コウヤマキ	丸木？
292	W-2	建築部材	柱材	コウヤマキ	丸木
293	W-3	建築部材	柱材	マツ属複維管束亜属	丸木
294	W-4	建築部材	柱材	ヒノキ	丸木
295	W-6	建築部材	柱材	スギ	丸木
296	W-10	建築部材	柱材	ヒノキ	丸木
297	W-11	建築部材	柱材	ヒノキ	丸木
298	W-13	建築部材	柱材	ヒノキ	丸木
299	W-15	建築部材	柱材	ヒノキ	丸木
300	W-18	建築部材	柱材	ヒノキ	丸木

fig. 241　樹種同定結果一覧（6）

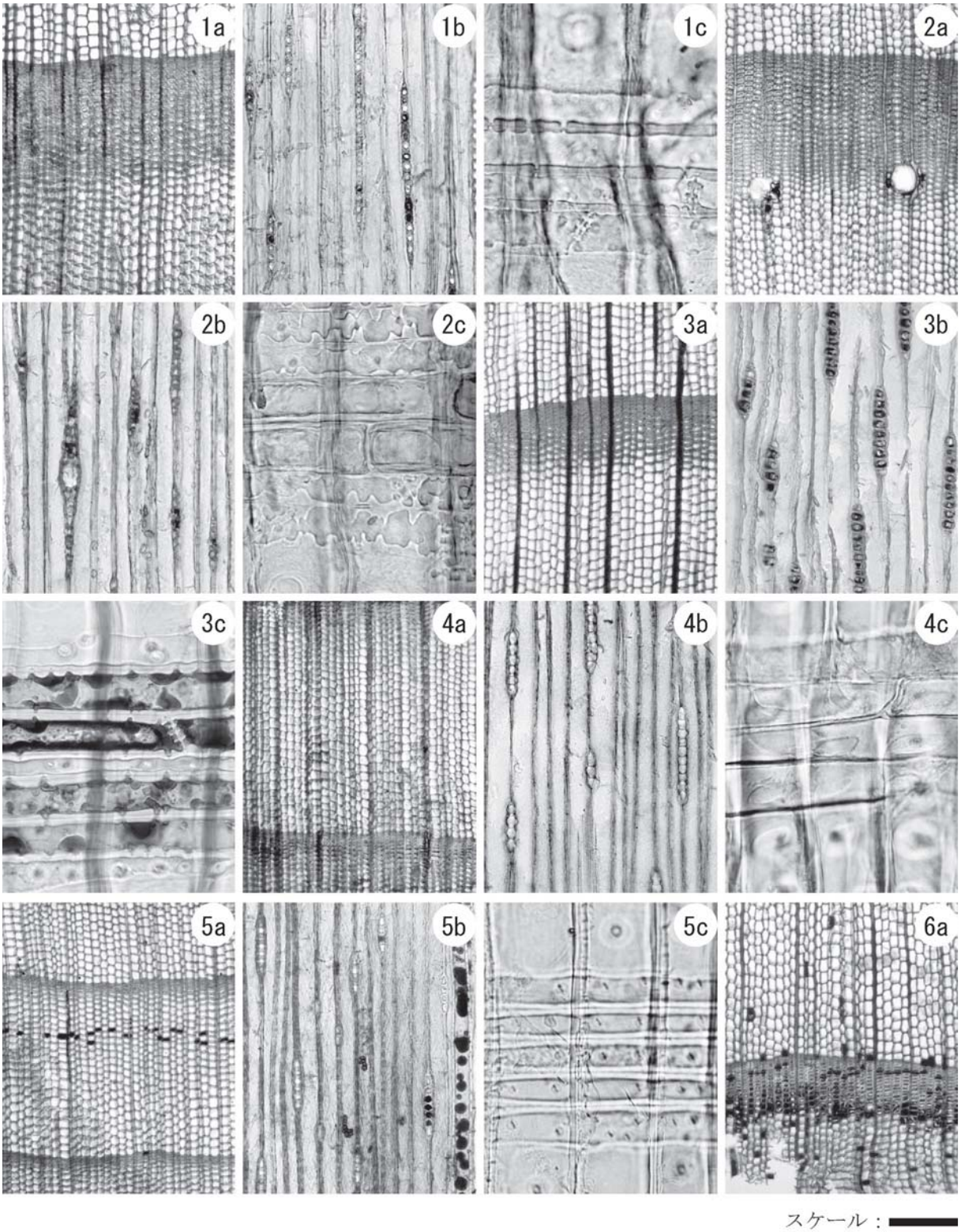
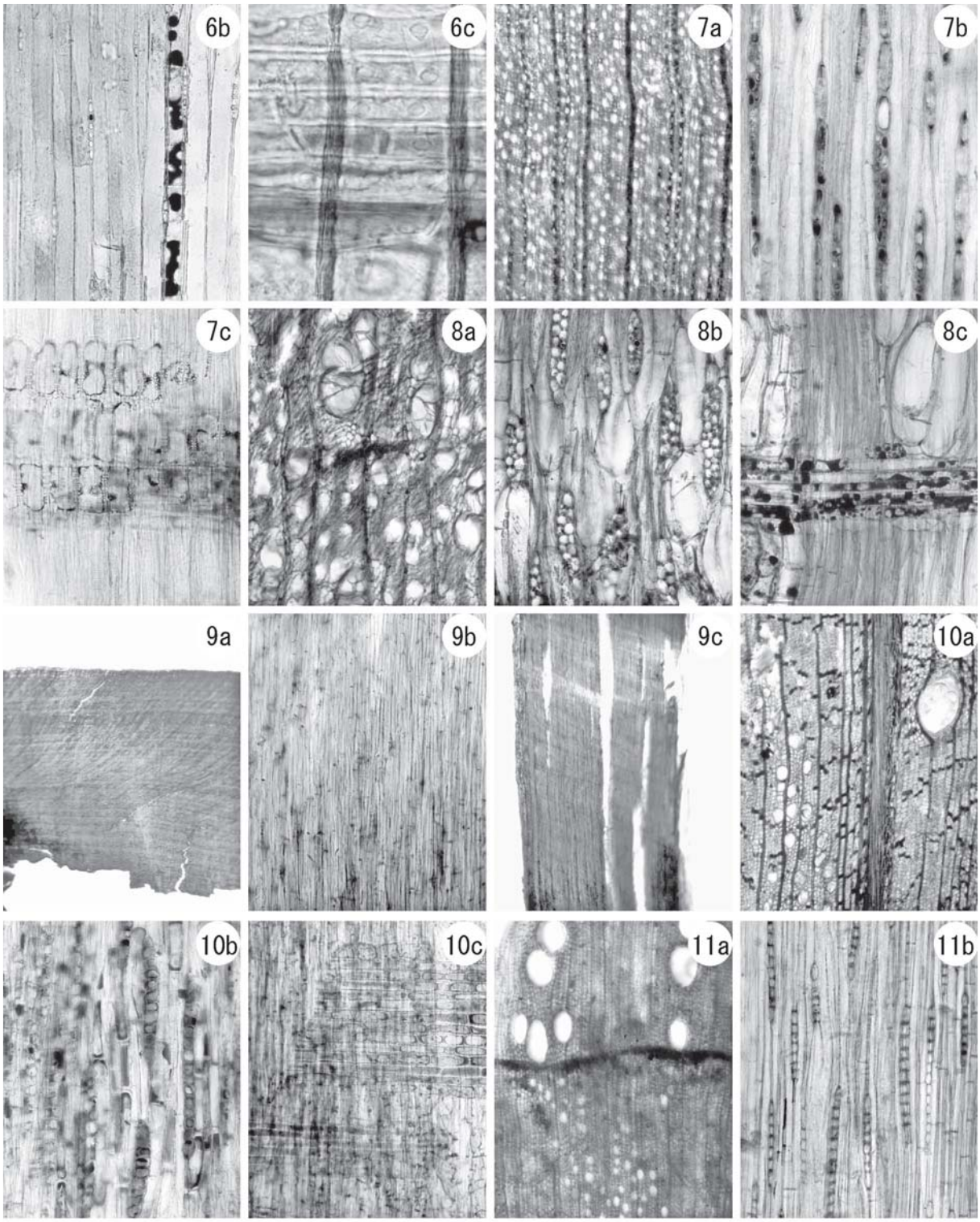


fig. 242　深江北町遺跡17次調査出土木質遺物の光学顕微鏡写真（1）

1a-1c. モミ属（No. 248）、2a-2c. マツ属複維管束亜属（No. 261）、3a-3c. ツガ属（No. 8）、4a-4c. コウヤマキ（No. 291）、5a-5c. ヒノキ（No. 110）、6a. スギ（No. 54）
a：横断面（スケール=250μm）、b：接線断面（スケール=100μm）、c：放射断面（スケール=25μm）



スケール：

fig. 243　深江北町遺跡17次調査出土木質遺物の光学顕微鏡写真（2）

6b-6c. スギ（No. 54）、7a-7c. シキミ（No. 5）、8a-8c. クスノキ（No. 27）、9a-9c. サクラ属樹皮（No. 129）、10a-10c. ツブラジイ（No. 231）、11a-11b. スダジイ（No. 176）
a：横断面（スケール=250 μm）、b：接線断面（スケール=100 μm）、c：放射断面（スケール=6：25 μm、7-10：100 μm）

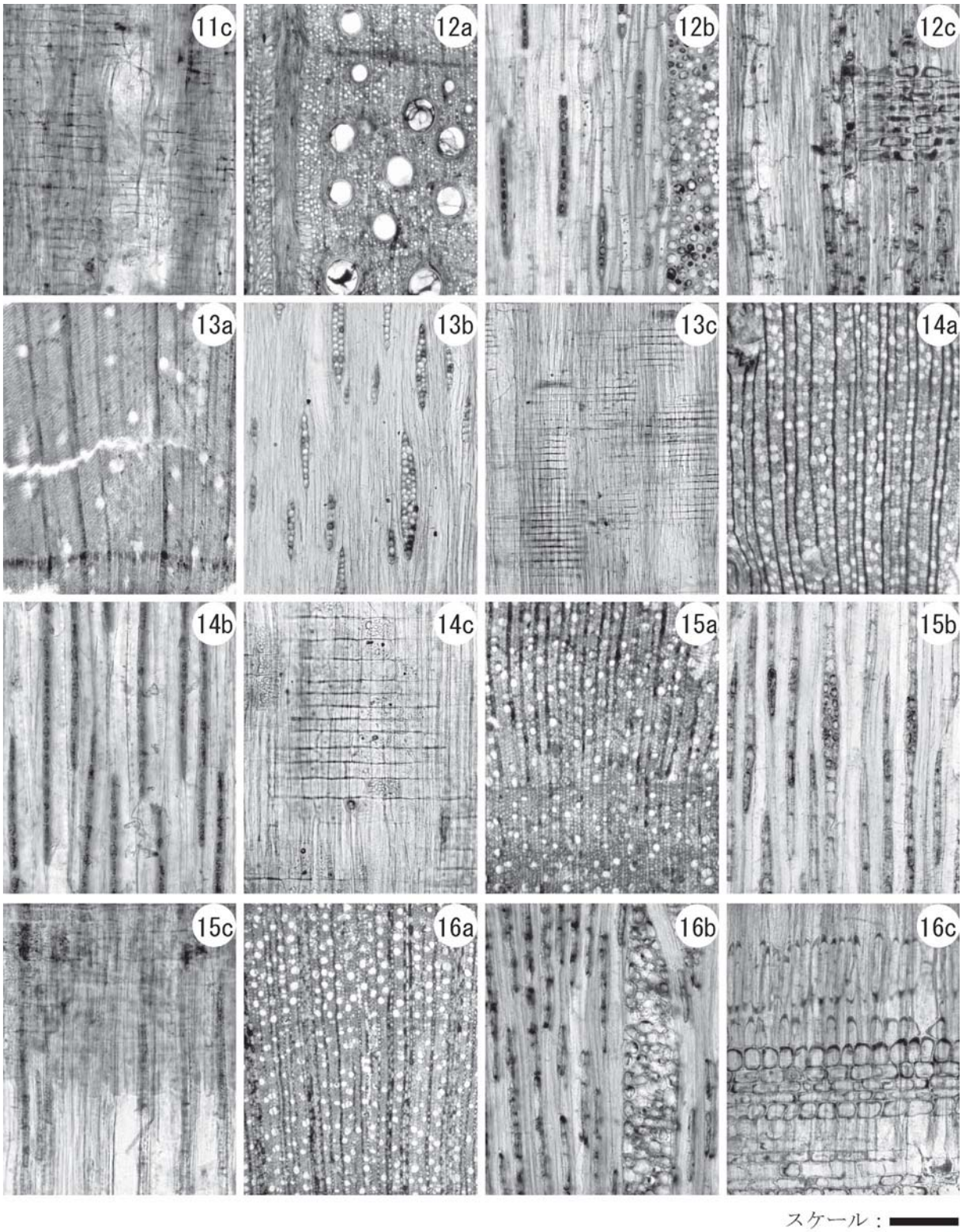
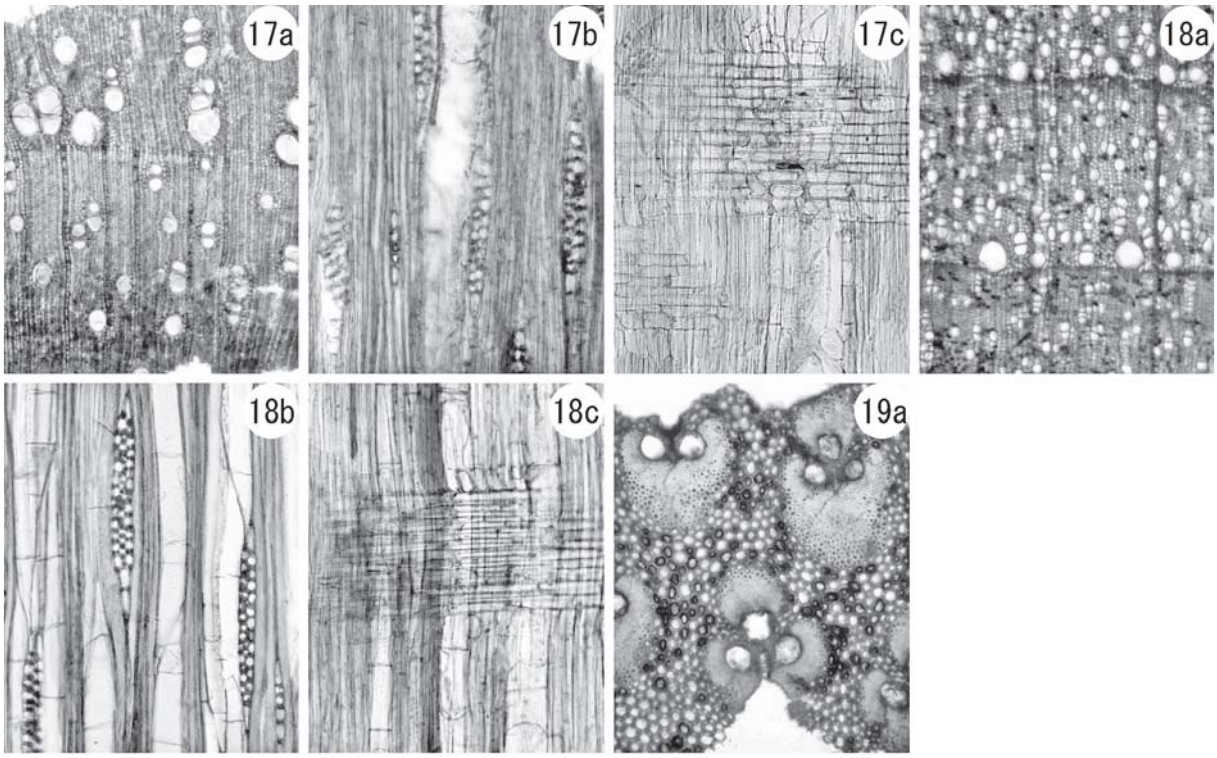


fig. 244　深江北町遺跡17次調査出土木質遺物の光学顕微鏡写真（3）

11c. スダジイ（No. 176）、12a-12c. コナラ属アカガシ亜属（No. 174）、13a-13c. カエデ属（No. 226）、
14a-14c. サカキ（No. 166）、15a-15c. ヒサカキ（No. 24）、16a-16c. シャシャンボ（No. 210）
a：横断面（スケール=250 μm）、b：接線断面（スケール=100 μm）、c：放射断面（スケール=100 μm）



スケール：

fig. 245　深江北町遺跡17次調査出土木質遺物の光学顕微鏡写真（4）

17a-17c. トネリコ属トネリコ節（No. 126）、18a-18c. コシアブラ（No. 237）、19a. タケ亜科（No. 274）
a：横断面（スケール=250μm）、b：接線断面（スケール=100μm）、c：放射断面（スケール=100μm

2．深江北町遺跡第12・17次調査から出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

神戸市東灘区深江北町に所在する深江北町遺跡は、大阪湾をめぐる沿岸流によって形成された浜堤（砂堆）上に立地する、古墳、飛鳥～平安前期、江戸時代などの複合遺跡である。ここでは、第12次調査と第17次調査で検出された遺構などから出土した大型植物遺体を同定し、食用などに利用された植物や、遺跡周辺における栽培状況、周辺の植生について検討する。

（2）試料と方法

試料は、神戸市教育委員会により採取、水洗選別された種実である。第12次調査の試料が2試料60点、第17次調査の試料が26試料146点である。採取地点については表を参照されたい。考古学的な所見による試料の時期は、弥生時代から鎌倉時代と推定されており、個々の時期については表に示した。

水洗選別は2.0㎜目の篩を用いて行われ、その後、種実が目視で抽出された。水洗量は不明である。

同定は肉眼および実体顕微鏡で行った。堅果類の大きさについては、デジタルノギスを用いて小数点第2位まで計測した。マメ科の種子については、那須ほか（2015）に基づいて簡易楕円体体積を求めた。試料は、神戸市教育委員会に保管されている。

（3）結果

同定した結果、木本植物の針葉樹ではクロマツ球果・葉の1分類群、広葉樹ではモモ核とウメ核、スモモ核、コナラ属クヌギ節果実、コナラ属アカガシ亜属未熟果、オニグルミ核、サンショウ種子、ミズキ核の8分類群、草本植物ではイネ炭化種子（頴果）とオオムギ炭化種子（頴果）、ダイズ属炭化種子、アサ核、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間果実・種子、キカラスウリ種子の7分類群の、計16分類群が得られた（fig. 246，247）。

以下に、産出した大型植物遺体について試料別に記載する。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

	調査次数	12次	17次							
	地区	B80-B	B78	B80-A			B80-B			
	試料No.	S-1, 2	S-3	S-4	S-5	S-6	S-7	S-8, 9	S-10, 11	S-12～16
	遺構・層位	黒色砂質シルト セクションはずし部分	灰白色中砂混じり 黒灰色シルト 湿地内下層	sp111	黒灰色砂質シルト～暗灰色細砂	sp115	黒色砂質シルト下層	黒褐色シルト	黒色シルト	黒色シルト混じり 灰色細砂
分類群	時期	奈良	弥生	奈良～平安	奈良～平安	奈良～平安	奈良	奈良	飛鳥	飛鳥
クロマツ	球果	(1)	9			2				5
モモ	核	(6)		1	(1)			1 (1)	11	(1)
スモモ	核	1								
オニグルミ	核							(1)		
サンショウ	種子	2								
ミズキ	核	1								
イネ	炭化種子						1			
アサ	核	2 (1)								
メロン仲間	種子	2								
ヒョウタン仲間	果実（臍あり）								(1)	(3)
	果実（臍なし）								(1)	(4)
	種子	5 (1)						2		34
キカラスウリ	種子	1								

fig. 246　深江北町遺跡から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

	調査次数	17次								
	地区	B80-B		B83-A		B83-B	P2	P3	P6	P7
	試料No.	S-17	S-18～21	S-22	S-23	S-24	S-25	S-26	S-27	S-28
	遺構・層位	あぜはずし 11、12層	黒色砂質 シルト下層	暗灰色～ 黒色シルト② （湿地層）	排土	黒灰色 粘質土 （細砂混）	第1遺構面 包含層 黒灰色粗砂 混じり粘質 土包含層 第31層	第1遺構面 包含層 黒灰色粗砂 混じり粘質 土包含層 第6層	黒色 粘質土2 第34層	暗青灰色 粗砂混じり 細砂包含層 第11～12層
分類群	時期	飛鳥	奈良	奈良～平安	―	奈良～平安	奈良～平安	平安	古墳	鎌倉
クロマツ	球果						1			
	葉		3							
モモ	核		7			(2)		1		1
	核(動物食痕)								1	
ウメ	核				1	1				
スモモ	核		1							
コナラ属クヌギ節	果実		(1)							
コナラ属アカガシ亜属	未熟果		1							
オニグルミ	核			1						
サンショウ	種子		1 (1)							
イネ	炭化種子		7 (1)							
オオムギ	炭化種子	1	1							
ダイズ属	炭化種子		1							
アサ	核		(2)							
メロン仲間	種子		3							
ヒョウタン仲間	種子		9							
キカラスウリ	種子		5							

fig. 247　深江北町遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

S-1，2：クロマツとモモ、スモモ、サンショウ、ミズキ、アサ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、キカラスウリがわずかに得られた。

S-3：クロマツがわずかに得られた。

S-4：モモがわずかに得られた。

S-5：モモがわずかに得られた。

S-6：クロマツがわずかに得られた。

S-7：イネがわずかに得られた。

S-8，9：モモとオニグルミ、ヒョウタン仲間がわずかに得られた。

S-10，11：モモが少量、ヒョウタン仲間がわずかに得られた。

S-12～16：ヒョウタン仲間が少量、クロマツとモモがわずかに得られた。

S-17：オオムギがわずかに得られた。

S-18～21：クロマツとモモ、スモモ、クヌギ節、アカガシ亜属、サンショウ、イネ、オオムギ、ダイズ属、アサ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、キカラスウリがわずかに得られた。

S-22：オニグルミがわずかに得られた。

S-23：ウメがわずかに得られた。

S-24：モモとウメがわずかに得られた。

S-25：クロマツがわずかに得られた。

S-26：モモがわずかに得られた。

S-27：モモがわずかに得られた。

S-28：モモがわずかに得られた。

次に、大型植物遺体の記載を行い、挿図写真（fig. 252）を示して同定の根拠とする。

①クロマツ　*Pinus thunbergii* Parl.　球果・葉　マツ科

球果は茶褐色で、狭卵形。種鱗はくさび形で、木質化しており、硬い。露出部は菱形状。先端の突起部は中央部がわずかにくぼむ。高さ64.7㎜、幅34.5㎜。葉は茶褐色で、針形。横断面で表皮に接しない樹脂道がみられる。マツ属複維管束亜属の葉は中央に維管束があり、その周囲に樹脂道がみられる。アカマツは樹脂道が表皮に接するが、クロマツは樹脂道が表皮に接さない。長さ63.3㎜、幅1.6㎜。

②モモ　*Amygdalus persica* L.　核　バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形～紡錘形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺があり、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。齧歯類による動物食痕は、縫合線を中心にして円形の穴があく。図版に示した核の大きさは、高さ21.1㎜、幅19.1㎜、厚さ14.3㎜（完形）と、高さ23.7㎜、残存幅20.2㎜、厚さ17.7㎜（動物食痕）。計測可能な核の大きさをfig. 248に示した。

③ウメ　*Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese　核　バラ科

茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は卵円形。表面には全体的に不規則で深く小さな孔がある。着点は凹む。縫合線に沿って深い溝が入る。高さ19.2㎜、幅15.4㎜、厚さ12.8㎜。

④スモモ　*Prunus salicina* Lindl.　核　バラ科

赤褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観はいびつな楕円形。縫合線に沿ってやや深い溝が入る。表面は平滑だが、臍付近に縦方向の不規則な皺がある。高さ11.1㎜、幅9.1㎜、厚さ6.9㎜。

	長さ	幅	厚さ	試料No.	時期
核	23.49	20.40	17.60	S-27	古墳
核1	22.16	19.67	17.40	S-11	飛鳥
核2	18.48	14.53	10.72	S-11	飛鳥
核3	20.60	18.55	(7.28)	S-16	飛鳥
最小	18.48	14.53	10.72		
最大	22.16	19.67	17.40		
平均	20.41	17.58	14.06		
標準偏差	1.85	2.70	4.72		
核1	21.61	16.64	(9.59)	S-2	奈良
核2	22.93	19.91	14.61	S-8	奈良
核3	23.92	20.27	(7.94)	S-8	奈良
核4	23.40	20.36	(10.11)	S-9	奈良
核5	21.95	18.97	14.57	S-18	奈良
核6	21.30	18.93	15.43	S-18	奈良
核7	18.53	16.18	14.01	S-18	奈良
核8	22.57	17.76	14.70	S-18	奈良
核9	19.42	16.78	13.65	S-18	奈良
核10	17.13	14.78	12.77	S-18	奈良
最小	17.13	14.78	12.77		
最大	23.92	20.36	15.43		
平均	21.28	18.06	14.25		
標準偏差	2.23	1.92	0.86		
核1	16.64	14.55	12.63	S-4	奈良～平安
核2	22.52	17.52	(6.87)	S-5	奈良～平安
核3	29.48	19.08	(11.87)	S-24	奈良～平安
核4	17.56	14.84	(10.39)	S-24	奈良～平安
最小	16.64	14.55	12.63		
最大	29.48	19.08	12.63		
平均	21.55	16.50	12.63		
標準偏差	5.88	2.18			
核	21.66	18.65	17.18	S-26	平安
核	19.76	16.29	12.63	S-28	鎌倉

fig. 248　モモ核の大きさ（括弧内は破片値、単位㎜）

⑤コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops* sp.　果実　ブナ科

暗褐色で、完形ならば球形に近い円柱体で、下部は平坦。臍はやや突出し、果実の直径の約80％以上と広く、同心円状に覆瓦状の皺がある。中央は顕著に窪む。残存高15.6㎜、残存幅14.6㎜。

⑥コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　未熟果　ブナ科

果実は暗褐色で、完形ならば楕円体。表面は平滑。殻斗はリング状。残存高6.5㎜、幅9.4㎜。

⑦オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam.　核　クルミ科

茶褐色で、側面観は卵形～広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に

縦方向の浅い縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖るものが多い。図版に示した核の大きさは、高さ25.6㎜、幅23.2㎜、厚さ24.4㎜（完形）と、残存高28.4㎜、幅25.3㎜、残存厚13.1㎜（打撃痕または半割）。計測可能な核の大きさをfig. 249に示した。

	長さ	幅	厚さ	試料No.	時期
核1	28.38	25.27	(13.11)	S-9	奈良
核2	25.55	23.20	24.44	S-22	奈良～平安
平均	26.97	24.24	24.44		
標準偏差	2.00	1.46			

fig. 249　オニグルミ核の大きさ（括弧内は破片値、単位㎜）

⑧サンショウ　*Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.　種子　ミカン科

黒色で、上面観は卵形、側面観は倒卵形。基部側面に稜線があり、内側には短く斜め下を向く臍がある。網目状隆線は低く細かい。種皮は厚く硬い。長さ3.9㎜、幅3.3㎜、厚さ3.2㎜。

⑨ミズキ　*Cornus controversa* Hemsl. ex Prain　核　ミズキ科

赤褐色で、楕円形～ゆがんだ球形。基部に裂けたような大きな着点がある。種皮は厚くやや軟らかい。縦にやや流れるような深い溝と隆起が走る。長さ5.2㎜、幅4.3㎜、厚さ2.7㎜。

⑩イネ　*Oryza sativa* L.　炭化種子（頴果）　イネ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の２本の浅い溝がある。長さ5.1㎜、幅2.7㎜。

⑪オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　炭化種子（頴果）　イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る１本の溝があるが、溝の両端は欠損している。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は円形となる。長さ5.2㎜、幅2.2㎜、厚さ1.9㎜。

⑫ダイズ属　*Glycine* sp.　炭化種子　マメ科

上面観は楕円形、側面観は長楕円形。臍は全長の1/2程度で、長楕円形。一部種皮が剥け、子葉が見えている。小畑ほか（2007）や小畑（2008）に示されたダイズ属の特徴である中央に縦溝（hilar groove）と、その周囲に隆線（rim-aril）がある。長さ5.7㎜、幅3.7㎜、厚さ2.8㎜。

⑬アサ　*Cannabis sativa* L.　核　アサ科

灰褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ3.7㎜、幅3.2㎜、厚さ2.7㎜。

⑭メロン仲間　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭でやや厚みがある。藤下（1984）は、種子の大きさからおおむね次の３群に分けられるとしている。長さ6.0㎜以下の雑草メロン型、長さ6.1～8.0㎜のマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1㎜以上のモモルディカメロン型である。計測可能な５点の種子の大きさは、マクワウリ・シロウリ型とモモルディカメロン型を含み、平均値はマクワウリ・シロウリ型であった（fig. 250）。

	長軸	短軸	厚さ	試料No.	時期
種子1	7.97	3.78	0.86	S-1	奈良
種子2	7.94	4.01	0.42	S-1	奈良
種子3	7.30	3.33	0.84	S-19	奈良
種子4	8.10	3.72	1.61	S-19	奈良
種子5	8.28	3.65	1.76	S-19	奈良
最小	7.30	3.33	0.42		
最大	8.28	4.01	1.76		
平均	7.92	3.70	1.10		
標準偏差	0.37	0.25	0.57		

fig. 250　メロン仲間種子の大きさ（括弧内は破片値、単位㎜）

⑮ヒョウタン仲間　*Lagenaria* sp.　果実・種子　ウリ科

	長軸	短軸	厚さ	試料No.	時期	臍の有無	形状
果実1	18.53	26.53	7.89	S-10	飛鳥	あり	不明
果実2	39.46	33.86	3.67	S-13	飛鳥	あり	不明
果実3	49.94	45.49	3.83	S-15	飛鳥	あり	洋梨型
果実4	31.16	22.72	3.91	S-16	飛鳥	あり	不明
最小	18.53	22.72	3.67				
最大	49.94	45.49	7.89				
平均	34.77	32.15	4.83				
標準偏差	13.28	10.02	2.05				

fig. 251　ヒョウタン仲間果実の大きさ（括弧内は破片値、単位㎜）

果実は茶褐色で、臍を中心に残存する。形状は不明であるが、臍部周辺が突出しているため、洋梨型の果実と推定される。表面は平滑で、やや光沢がある。長軸49.9㎜、短軸45.5㎜。計測可能な果実の大きさをfig. 251に示した。種子はやや淡黄褐色～褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲して左右は非対象、先端はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が2本走る。壁はややスポンジ質。長さ13.8㎜、幅6.9㎜。

⑯キカラスウリ　*Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. *japonica* (Miq.) Kitam.　種子　ウリ科

黒褐色で、上面観は扁平、側面観は左右非対称の広楕円形で、着点が窄まる。背腹両面には浅い帯状の溝がそれぞれ縁の内側を一周する。表面は平滑で、光沢がある。長さ12.3㎜、幅8.2㎜。

(4) 考察

以下、第12次調査・第17次調査の弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構やグリッドから産出した大型植物遺体について、時代別に考察する。

弥生時代に相当する、第17次調査B78区（S-3）からは針葉樹のクロマツ球果がわずかに得られた。

古墳時代に相当する、第17次調査P6区（S-27）からは栽培植物のモモがわずかに得られた。

飛鳥時代に相当する、第17次調査B80-B区（S-10～17）からはクロマツがわずかと栽培植物のモモとヒョウタン仲間が少量、オオムギがわずかに得られた。ヒョウタン仲間には洋梨型の果実が含まれていた。

奈良時代に相当する、第12次調査B80-B区（S-1，2）からはクロマツとサンショウ、ミズキ、キカラスウリが得られ、栽培植物のモモとスモモ、アサ、メロン仲間、ヒョウタン仲間がわずかに得られた。第17次調査B80-B区（S-7～9，18～21）からは、クロマツとクヌギ節、アカガシ亜属、オニグルミ、サンショウ、キカラスウリ、栽培植物のモモとスモモ、イネ、オオムギ、アサ、メロン仲間（マクワウリ・シロウリ型とモモルディカメロン型）、ヒョウタン仲間がわずかに得られた。ダイズ属は栽培種のダイズと野生種のツルマメが含まれる。那須ほか（2015）では、現生のツルマメおよびダイズの種子を乾燥・炭化・未成熟の状態で計測して簡易楕円体体積を比較した結果、40㎣以下は野生型、70㎣以上は栽培型、40～70㎣の間は栽培種と野生種の両方のサイズが重なるため栽培種と野生種の中間型とみなしている。奈良時代から出土したダイズ属の簡易楕円体体積は30.9㎣で、野生型と推定される。

奈良～平安時代に相当する、B80-A区（S-4～6）からはクロマツと栽培植物のモモ、B83-A区（S-22）からはオニグルミ、B83-B区（S-24）からは栽培植物のモモとウメ、P2区（S-25）からはクロマツがわずかに得られた。

平安時代に相当する、第17次調査P3区（S-26）と鎌倉時代に相当する、第17次調査P7区（S-28）からは、栽培植物のモモがわずかに得られた。

時期不明の第17次調査B83-A区（S-23）からは、栽培植物のウメがわずかに得られた。

以上をまとめると、栽培植物ではモモとウメ、スモモ、イネ、オオムギ、アサ、メロン仲間（マクワウリ・シロウリ型とモモルディカメロン型）、ヒョウタン仲間が得られた。また、野生植物で食用可能な種実として、クヌギ節、アカガシ亜属、オニグルミ、サンショウ、ミズキが見出された。オニグルミの核では、奈良時代の1点に打撃痕かもしれない痕跡のある個体が見られた。また、クヌギ節は食べるにあたってアク抜きが必要である。奈良時代にはアカガシ亜属が産出しており、落葉樹と常緑樹が混交する植生であったと推定される。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には核長2.46～2.65㎝と比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代の核長は2.36～2.66㎝で、鎌倉期には大きさの変異幅が大きくなり、江戸時代後期になると大型になって、平均核長2.69㎝、最大で3.8㎝程度の核がみられるとしている。今回の深江北町遺跡のモモ核は、古墳時代や飛鳥時代には丸みを帯びた個体が多かったが、奈良～平安時代になると、長さと幅で10㎜異なる縦長の個体が出現した。核長の平均値は、飛鳥時代では2.04㎝、奈良時代では2.13㎝、奈良～平安時代では2.16㎝と、山梨県出土の核の平均値よりも小さかった。

針葉樹のクロマツは、日当たりのよい海岸の砂浜や岩上などに生える常緑高木のため、浜堤（砂堆）上に立地する深江北町遺跡の試料採取地点の周辺では弥生時代以降に生育していて、球果や葉が堆積したと考えられる。

得られた種実は水洗に用いられた篩が大きいため、大型の栽培植物が多かった。したがって、アワやキビなど、微小な雑穀類が含まれていたとしても検出されなかった可能性がある。今回、回収された種実はほとんどが食用可能な種実であり、試料採取地点の周辺は食料の栽培や利用のためにかなり人の手が加わった環境であったと推定される。今回は目視で確認、回収された種実を中心に検討したが、今後、堆積物中の微細な種実をあわせて検討すれば、当時の利用植物や周辺植生に関して、より詳しい情報が得られると考えられる。

引用文献

藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学―総括報告書」：638-654，同朋舎出版．

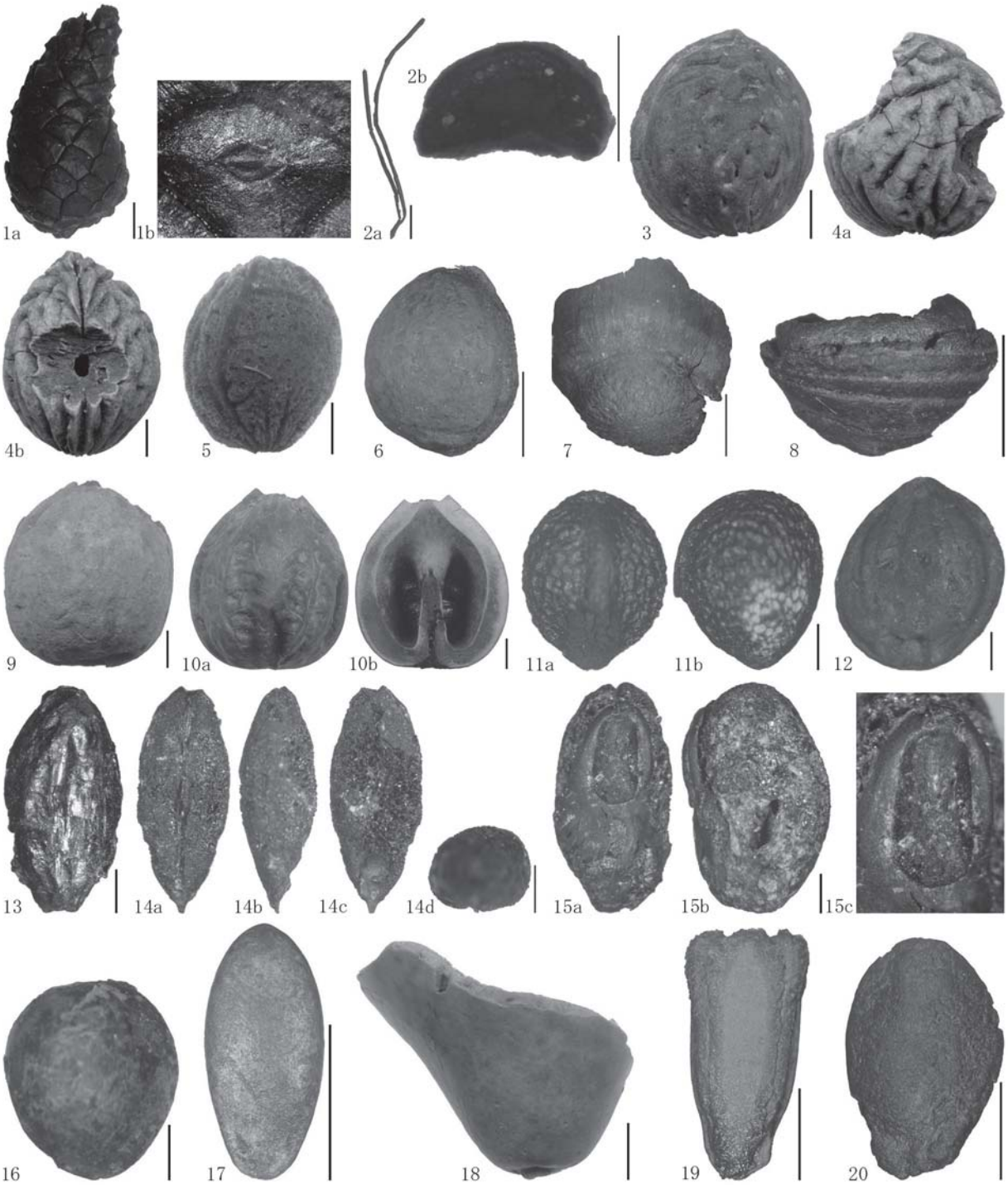
那須浩郎・会田　進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・輿石　甫（2015）炭化種実資料からみた長野県諏訪地方における縄文時代中期のマメの利用．資源環境と人類，5：37-52，明治大学黒耀石研究センター．

新津　健（1999）遺跡から出土するモモ核について―山梨県内の事例から―．山梨考古学論集IV，361-374，山梨県考古学協会．

小畑弘己（2008）マメ科種子同定法．小畑弘己編「極東先史古代の穀物３」：225-252，熊本大学．

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子（2007）土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培．植生史研究15-1，97-114．

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info



スケール 1, 2a, 18：10mm, 2b, 3-10, 17, 19, 20：5mm, 11-15a-b, 16：1mm, 15cは任意

fig. 252　深江北町遺跡から出土した大型植物遺体

1. クロマツ球果（黒色シルト混じり灰色細砂、S-12～16）、2. クロマツ葉（黒色砂質シルト下層、S-18～21）、3. モモ核（黒色砂質シルト下層、S-18～21）、4. モモ核（動物食痕、黒色粘質土2、S-27）、5. ウメ核（排土、S-23）、6. スモモ核（黒色砂質シルト下層、S-18～21）、7. コナラ属クヌギ節果実（黒色砂質シルト下層、S-18～21）、8. コナラ属アカガシ亜属未熟果（黒色砂質シルト下層、S-18～21）、9. オニグルミ核（暗灰色～黒色シルト②（湿地層）、S-22）、10. オニグルミ核（打撃痕もしくは半割、黒褐色シルト、S-8，9）、11. サンショウ種子（黒色砂質シルトセクションはずし部分、S-1，2）、12. ミズキ核（黒色砂質シルトセクションはずし部分、S-1，2）、13. イネ炭化種子（黒色砂質シルト下層、S-7）、14. オオムギ炭化種子（あぜはずし11、12層、S-17）、15. ダイズ属炭化種子（黒色砂質シルト下層、S-18～21）、16. アサ核（黒色砂質シルトセクションはずし部分、S-1，2）、17. メロン仲間種子（モモルディカメロン型、黒色砂質シルト下層、S-18～21）、18. ヒョウタン仲間果実（黒色シルト混じり灰色細砂、S-12～16）、19. ヒョウタン仲間種子（洋梨型、黒色シルト混じり灰色細砂、S-12～16）、20. キカラスウリ種子（黒色砂質シルトセクションはずし部分、S-1，2）

Ⅳ．まとめ

今回の第17次調査地は、第12・14次調査地に接した部分を調査して、概ね前回の調査成果を追認する資料を得た。

まず、調査範囲内の遺跡の分布状況であるが、B74～78区までは浜堤と湿地が交錯する部分であり、弥生～平安時代には居住地として永続的に使用された痕跡が認められなかった。当該時期には集落から外れ、大半が湿地または荒地、一部が耕作地として利用されていたものと推定される。その後、中・近世の段階には概ね安定した耕作地として利用されたことが判る。

B79～82-B区で確認された浜堤上の遺構群は、前回の第12次調査で検出された柱穴・ピット等の遺構と連続することが判明し、この浜堤上が奈良・平安時代の生活の拠点であったことが指摘できる。

B83-A～B区から東側は低湿地となり、P2区～P8区間も同様の状態が連続するが、湿地の中に海や河川から供給された砂や礫が時折堆積して、徐々に埋められてゆく状況が確認された。また、湿地層には水田跡やヒトや動物の足跡等が残されていることや、古墳時代の土器がほぼ完全な状態で複数出土する地点も確認され、当該区付近で何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。

次に遺構や遺物について確認されたことを記述する。

前回の第12次調査ではB81-B～82-B区にかけて３区間で連続して発見した古墳時代の祭祀場とそれに伴う遺物は、前回の調査区と接した部分を調査しているにもかかわらず、同様の遺構・遺物を全く確認することができなかった。これらの遺構・遺物の分布範囲は、南北方向はごく限られた狭い範囲に、東西方向には長く帯状に拡がるものと推定される。

B80-B、B83-A、B83-B区などの湿地部分からは前回同様に、奈良時代前後の土器とともに多量の木片に混じって、斎串、馬形、舟形などの祭祀具、杓子、下駄、机の脚部と推定されるものなどの生活用具、建築材、板材、木製品が出土している。特に木材加工の過程において発生したはつり材、木端材が前回同様に多量に出土したことは、付近で木工作業あるいは建築工事が行われたことを示唆するが、大型の端材がほとんど認められないことから、建築材の加工というよりも、むしろ木製品を加工・製作する工房の存在の可能性が高いと思われる。

また木製品の内、祭祀具として斎串や形代（馬形・人形・舟形等）が多いことに注目される。これらは奈良・平安時代の都城、官衙、またはその付近で出土することが多く、古代の役所で執り行われた宗教儀式の中で使用されたものであるといわれている。調査地付近に官衙的な施設が存在したことを示す積極的な証拠となるであろう。

今回出土した木簡であるが、「津守里戸主津守□□・・・」、「 米五斗　（人名併記）」、「□□□〔生田郷ヵ〕［　　］廣国・・・」、「椋人石万呂・・・」など記された木簡が出土し、これまでの調査成果と併せて地方官衙の性格を帯びた遺跡であることが一層明らかになった。

また、「驛」「大垣」など書かれた墨書土器や転用硯の出土点数が、周辺の当該時期の遺跡に比べて擢んでており、筆記作業を常に行う施設が存在したことを窺い知る資料となる。

以上、前回の調査同様に「驛家」に関わる遺物（木簡、墨書土器）が主に湿地内から発見されており、「葦屋驛家」である蓋然性が高まってくるが、浜堤上の遺構では「驛家」と断定できる遺構は、今回の調査でも確認することはできなかった。現在の段階では、ごく近辺に「葦屋驛家」または「菟原郡家」に関わる公的な施設が存在したことは確実であるが、未だその正体は明らかでないという結論に止めることにしたい。

写 真 図 版

第17次調査出土墨書土器・転用硯

カラー図版２

1. 第17次調査出土墨書土器

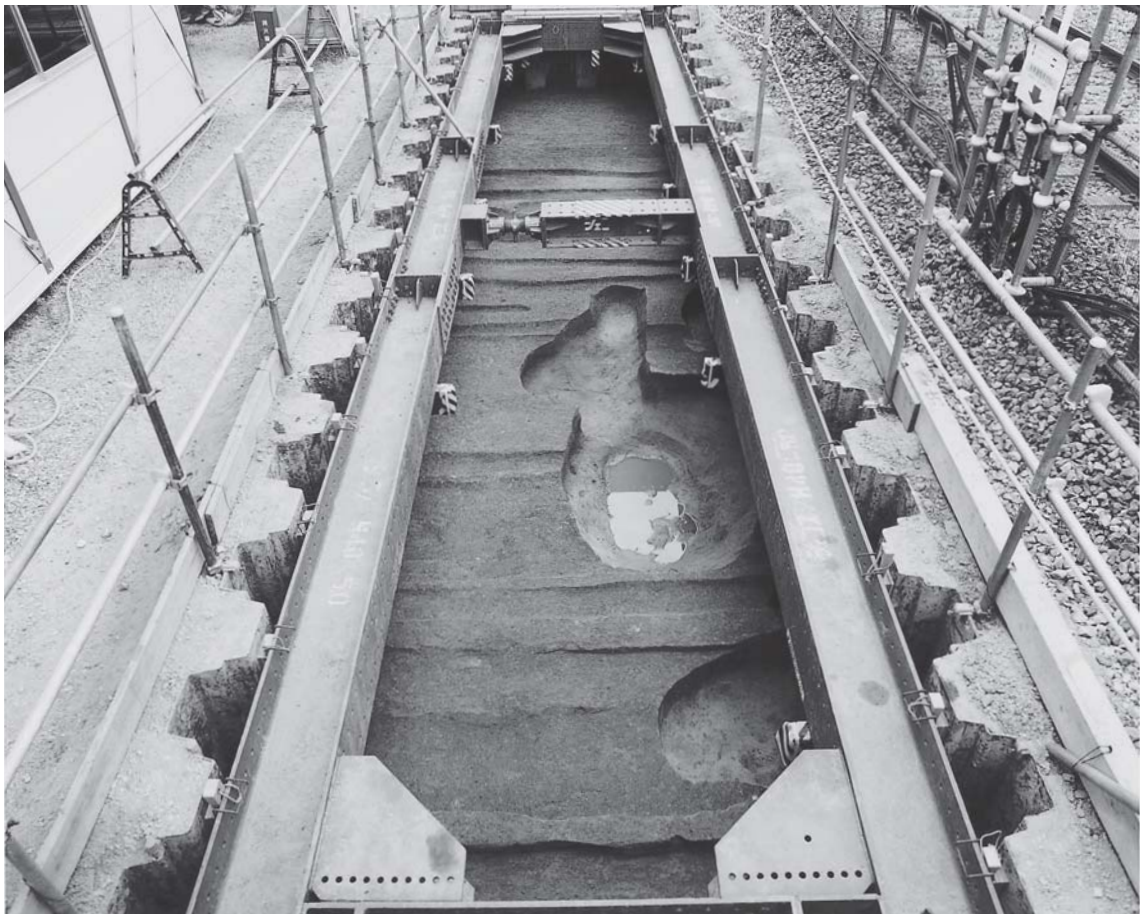
2. 第17次調査出土転用硯

第17次調査出土木製祭祀具

カラー図版４

調査地全景（西から）

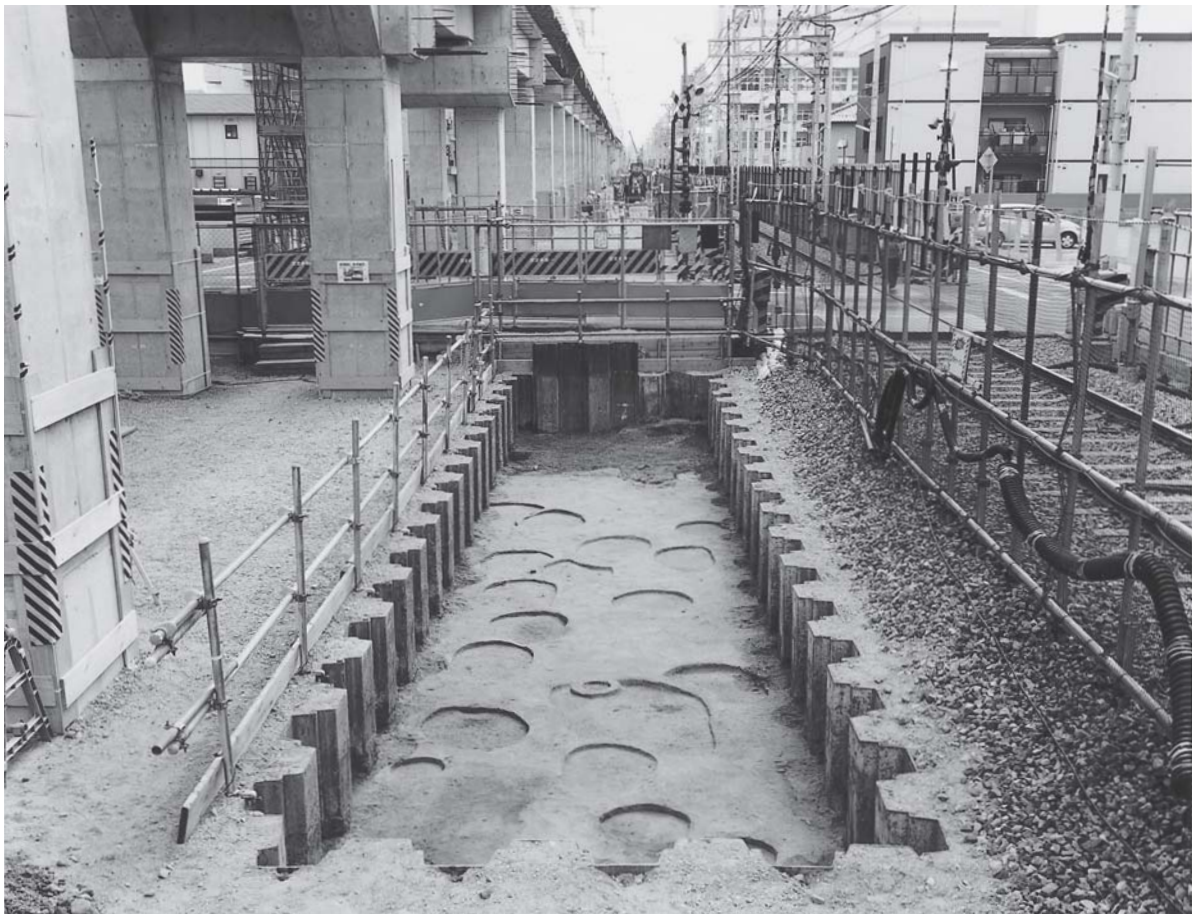
1. B75-A区　第2遺構面（東から）



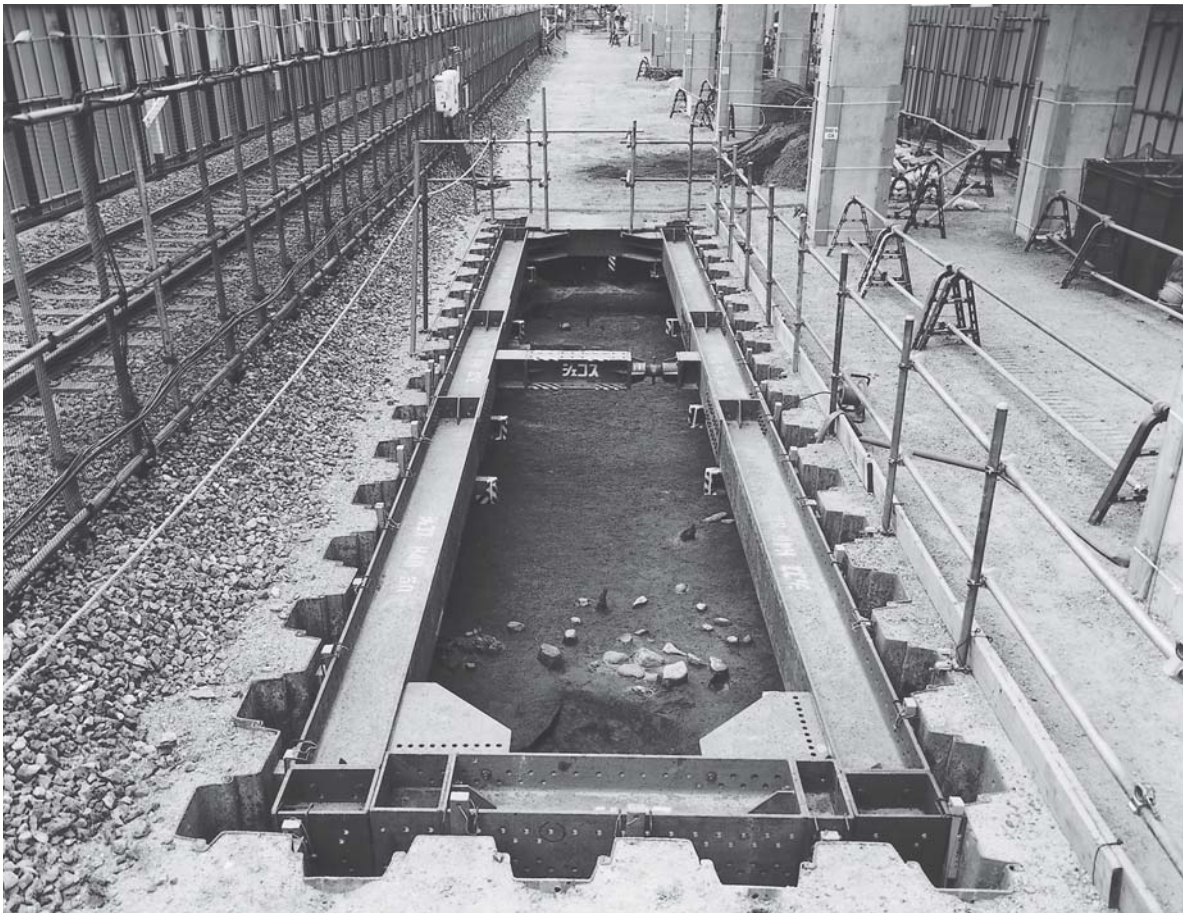
2. B76-B区　第1遺構面全景（東から）

写真図版２

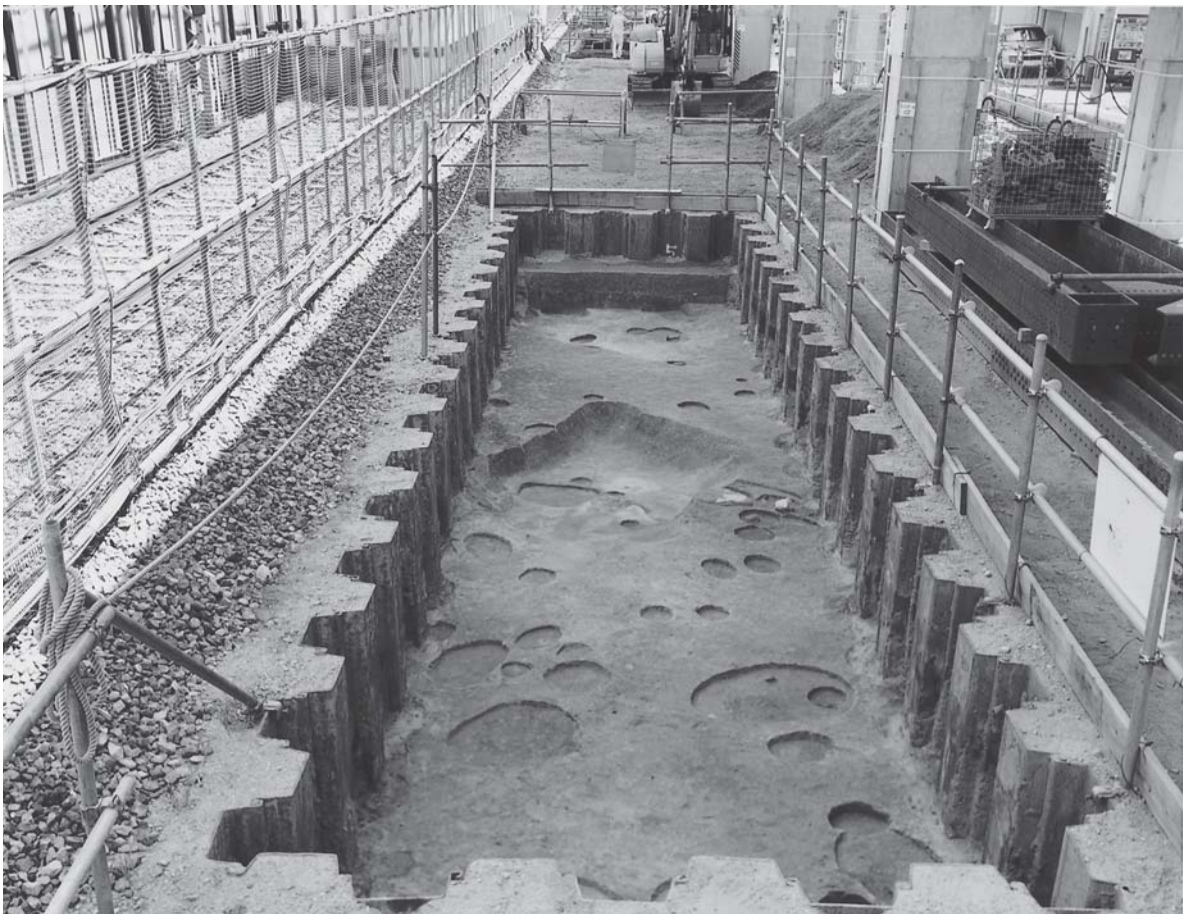
1. B78区　遺構面全景（東から）



2. B79区　第3遺構面全景（東から）

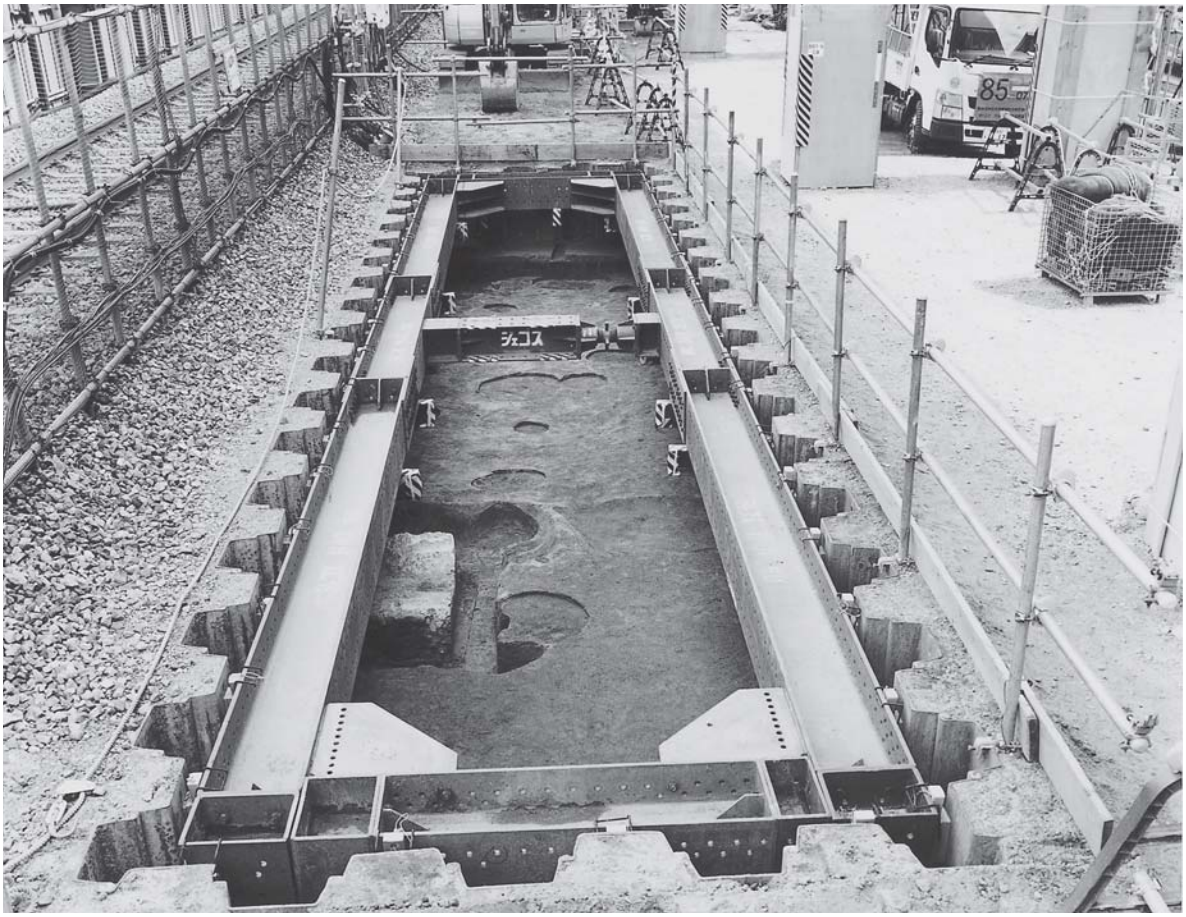


1. B80-B区　第1遺構面全景（西から）

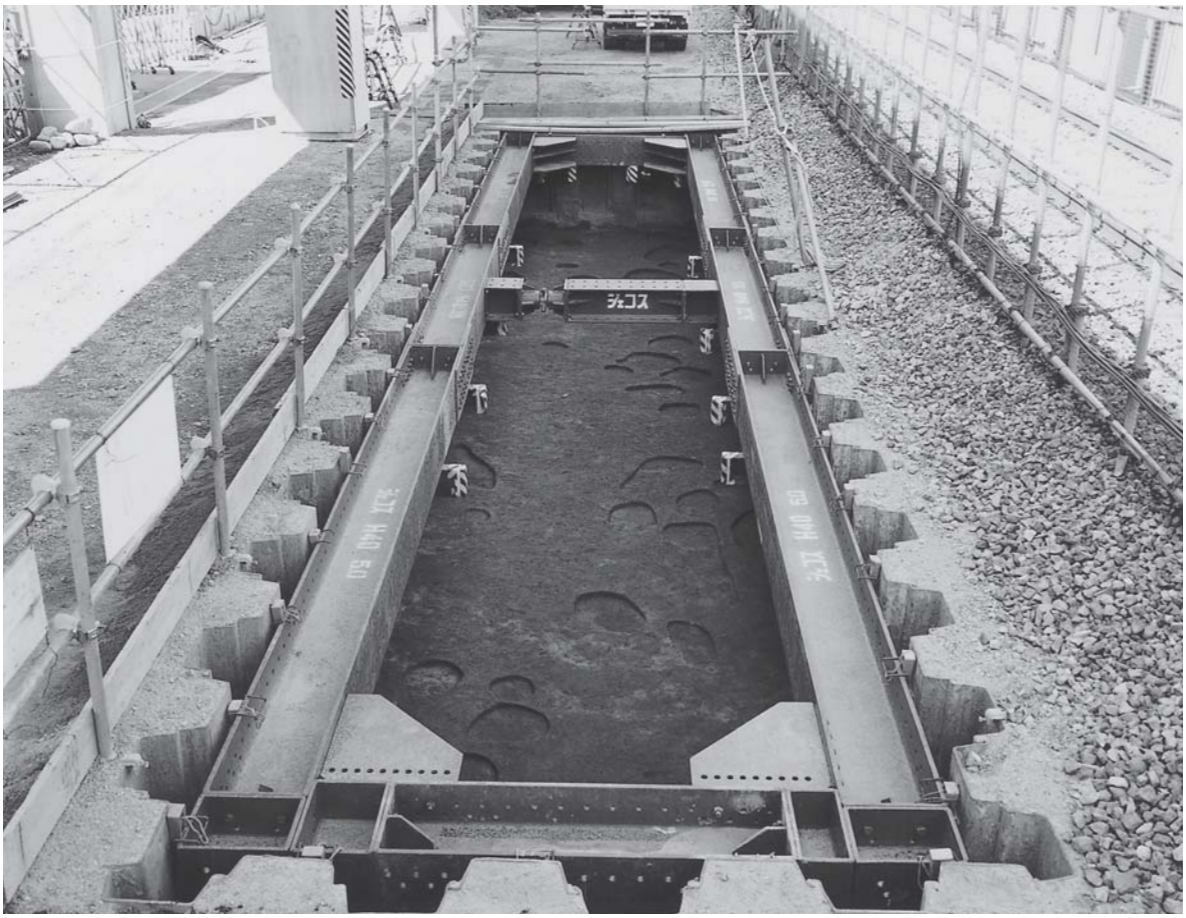


2. B81-A区　第2遺構面全景（西から）

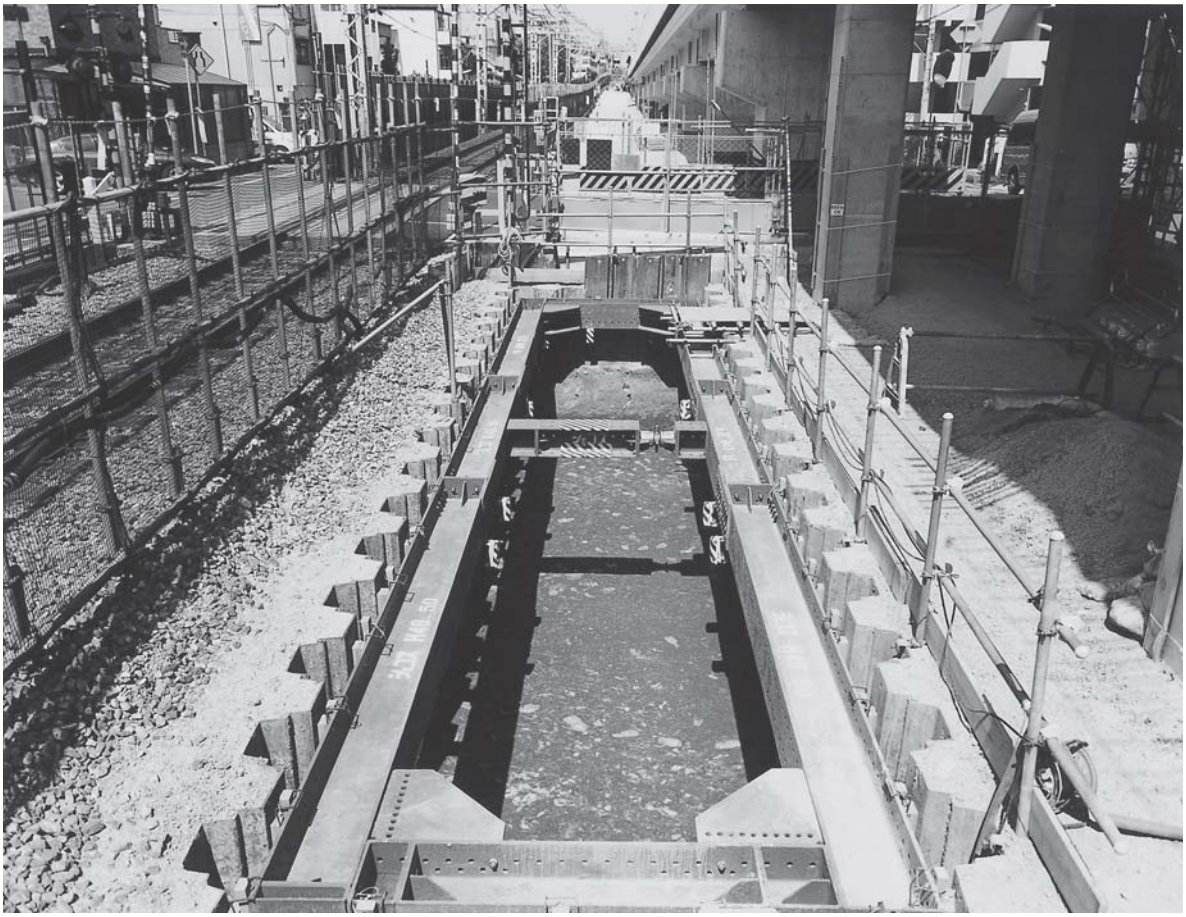
写真図版４



1. B81-B区　第2遺構面全景（西から）



2. B82-A区　第2遺構面全景（東から）

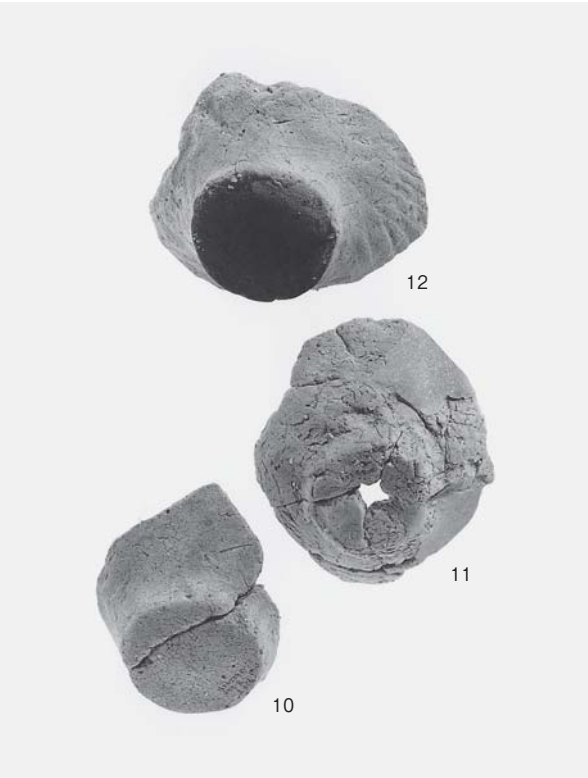


1. B83-B区　第2遺構面全景（西から）

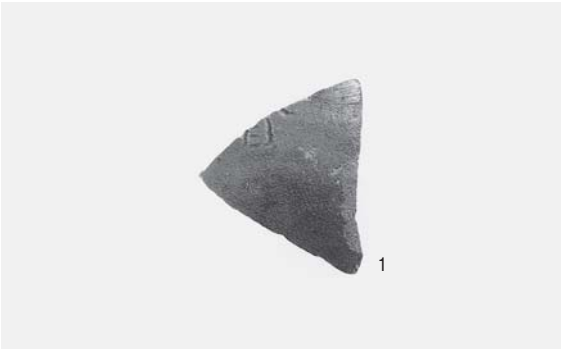
2. P7区　第2遺構面全景（西から）

写真図版６

B75-A区出土土器

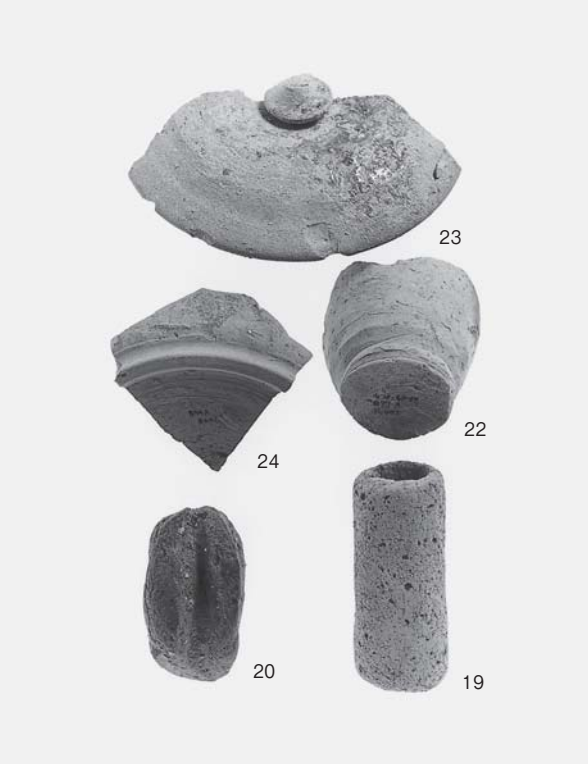


B75-B区出土土器



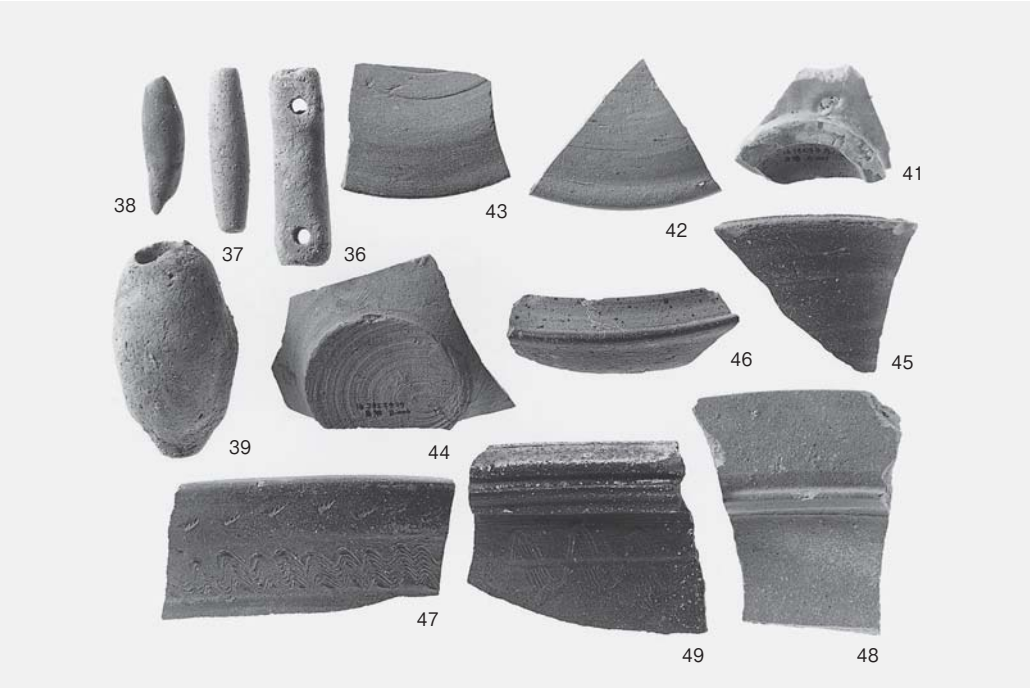
B74区出土緑釉陶器

B76-A区出土土器

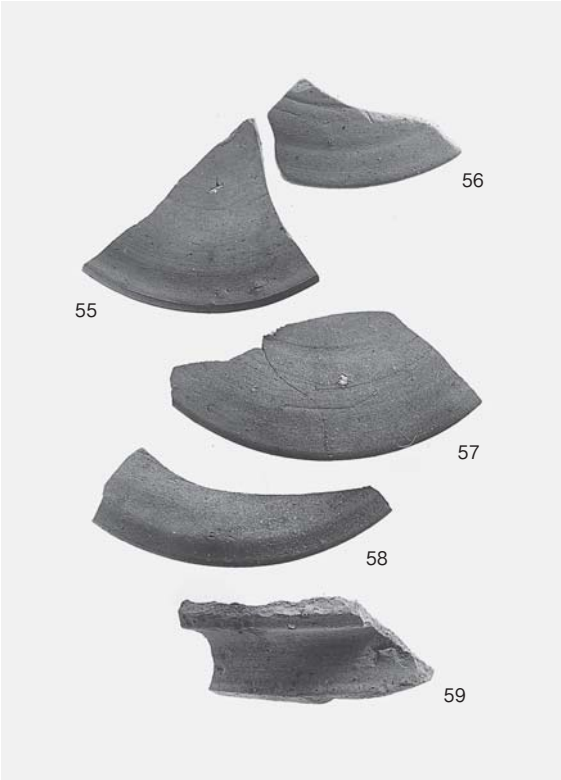


B77-A区出土土器・土錘

B74区～B77-A区出土土器・陶器・土錘



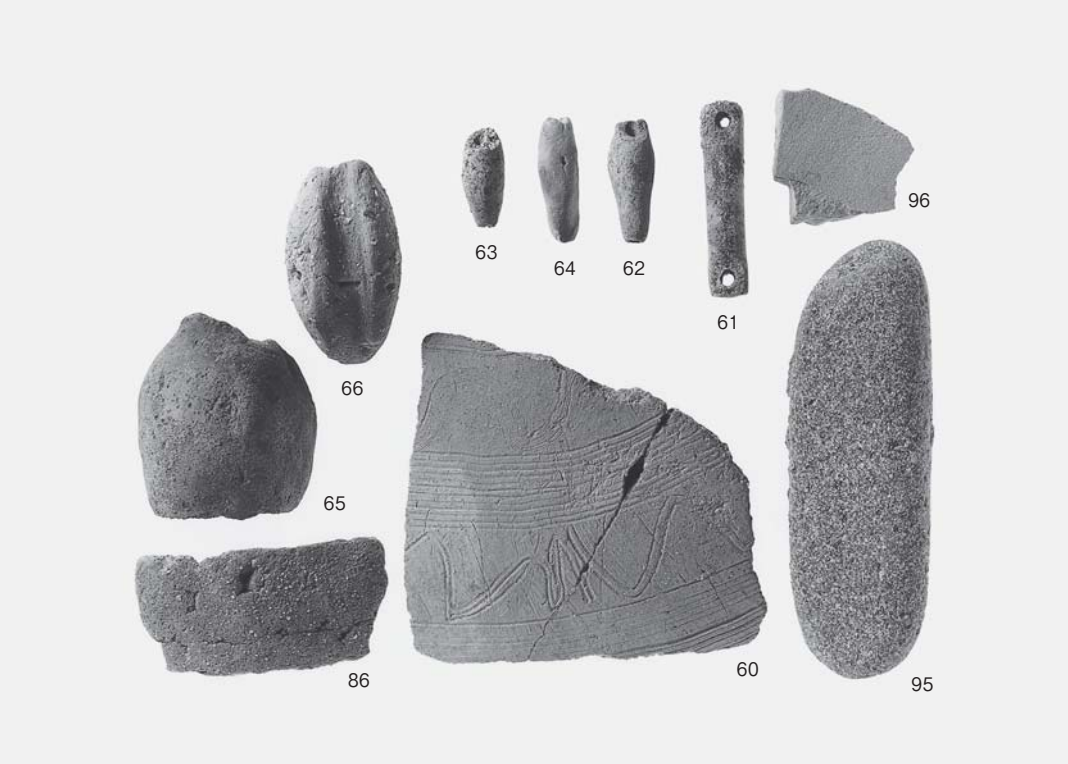
B78区出土土器・陶磁器・土錘



B79区出土土器

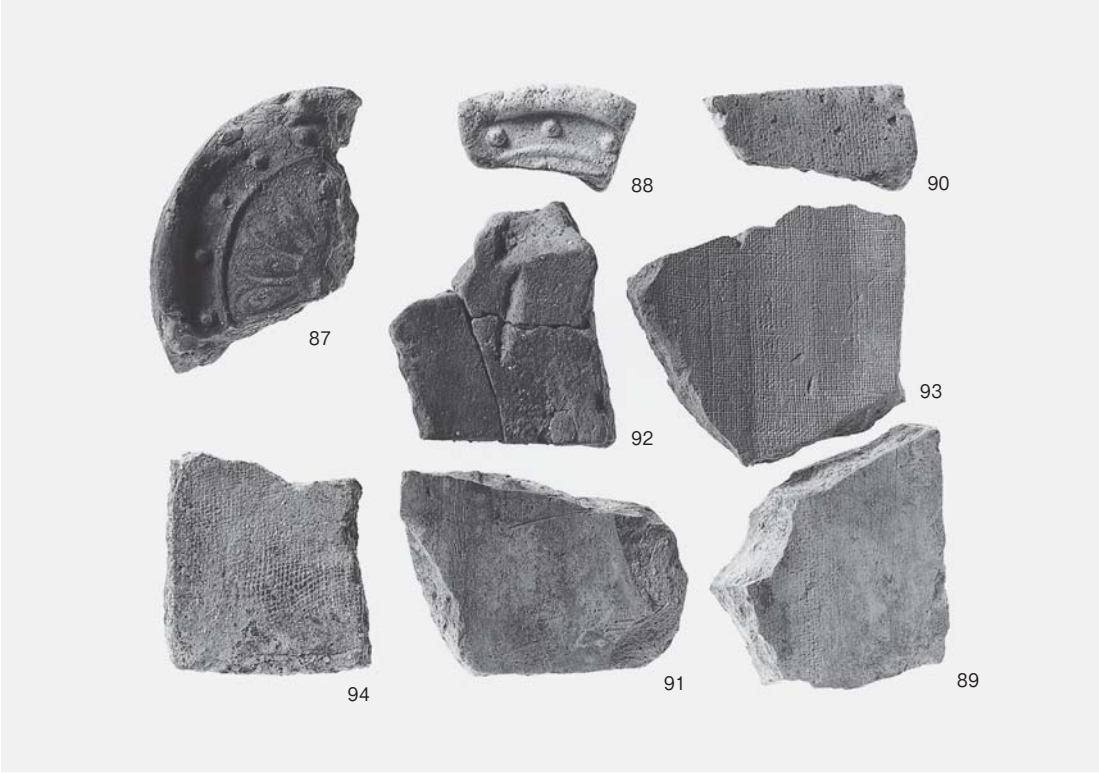
B80-A区出土土器

B80-A区出土土器

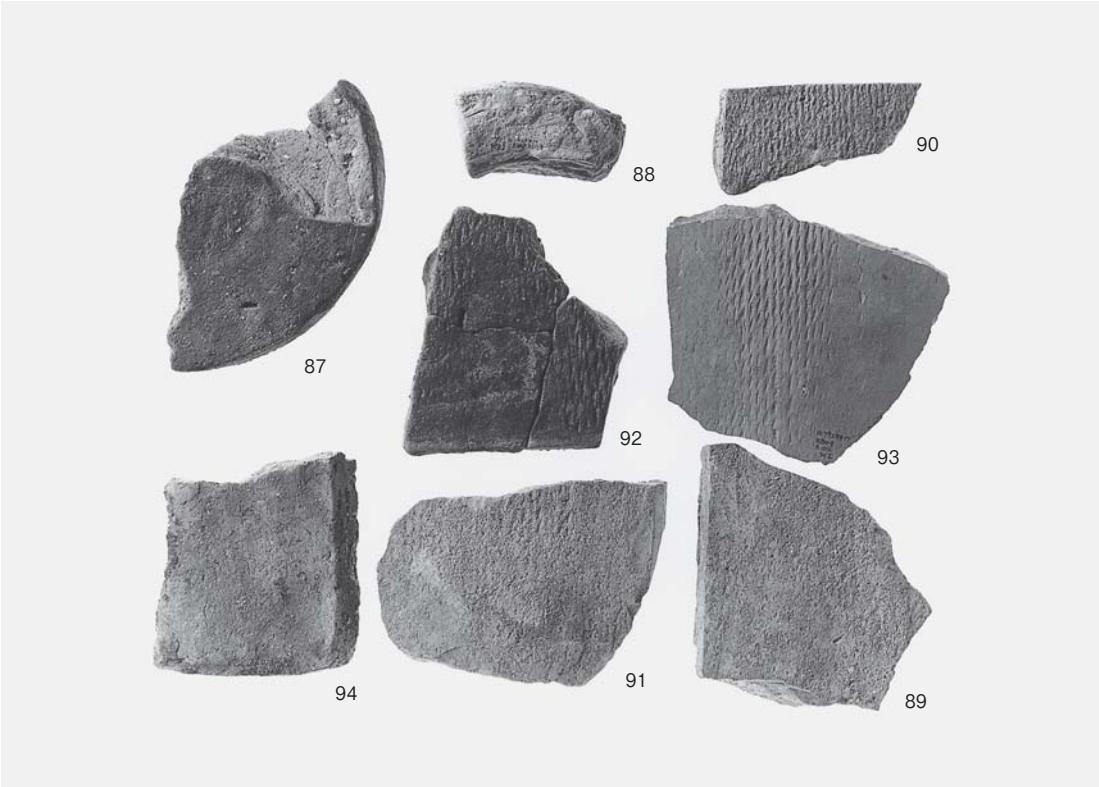


B80-A区出土土器・蛸壺・製塩土器・土錘・石製品

B79区・B80-A区出土土器・土錘・蛸壺・石製品



1. B80-A区出土瓦（表面）



2. B80-A区出土瓦（裏面）

B80-B区出土土器（1）

141

147

135

139

140

148

145

144

149

B80-B区出土土器（2）

293

293

161

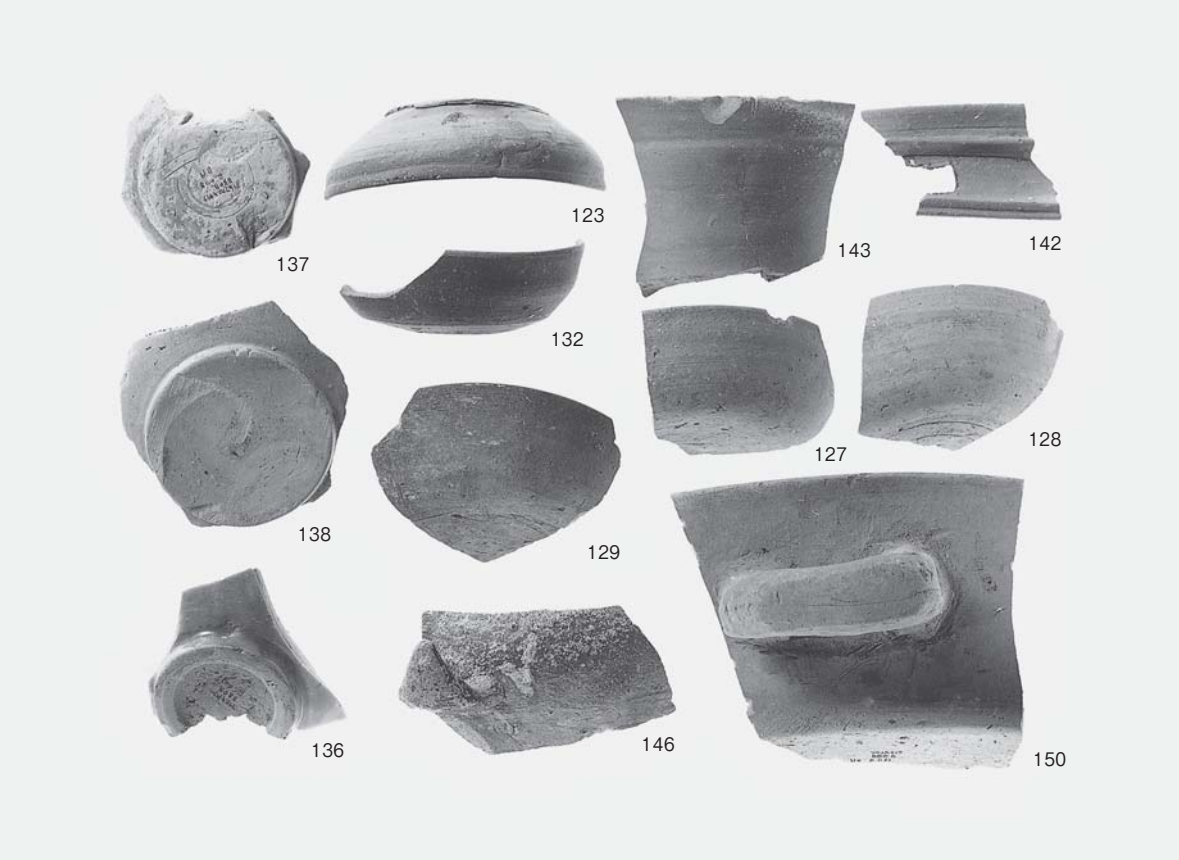
352
表

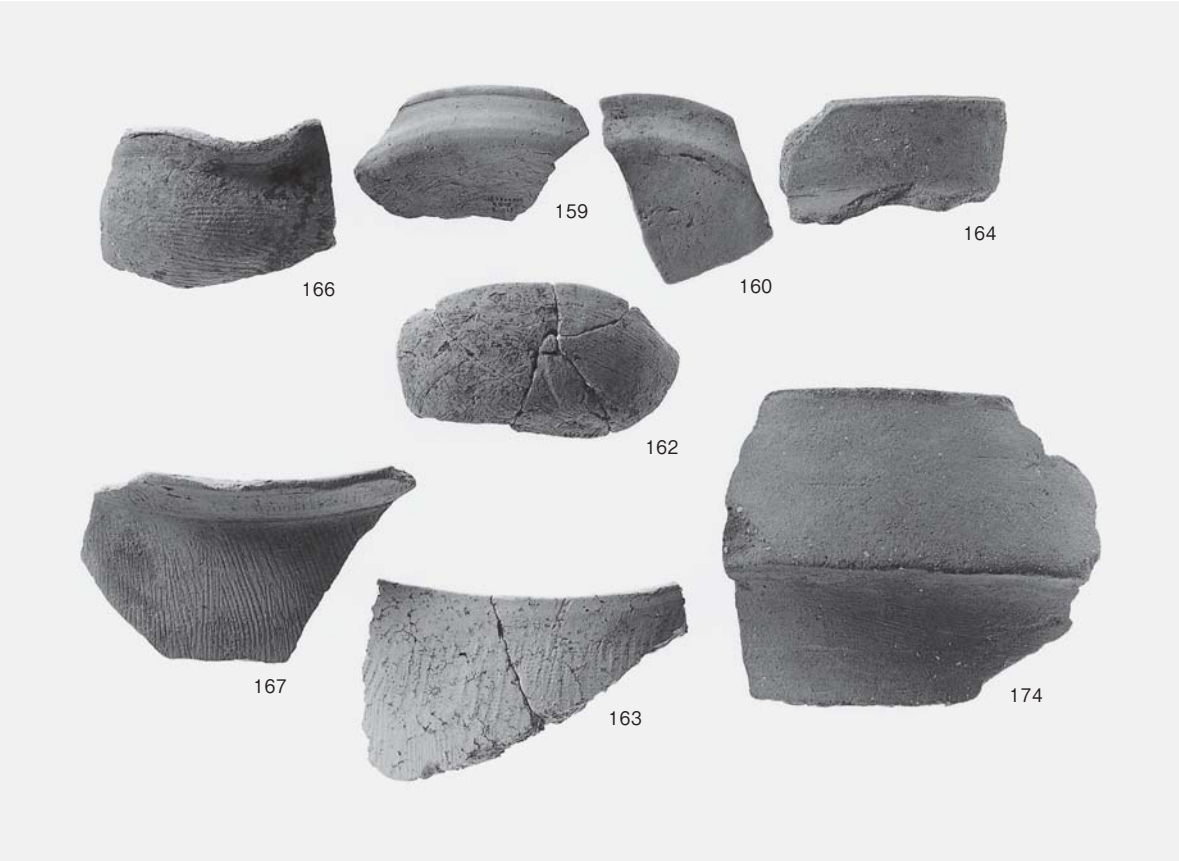
352
裏

170

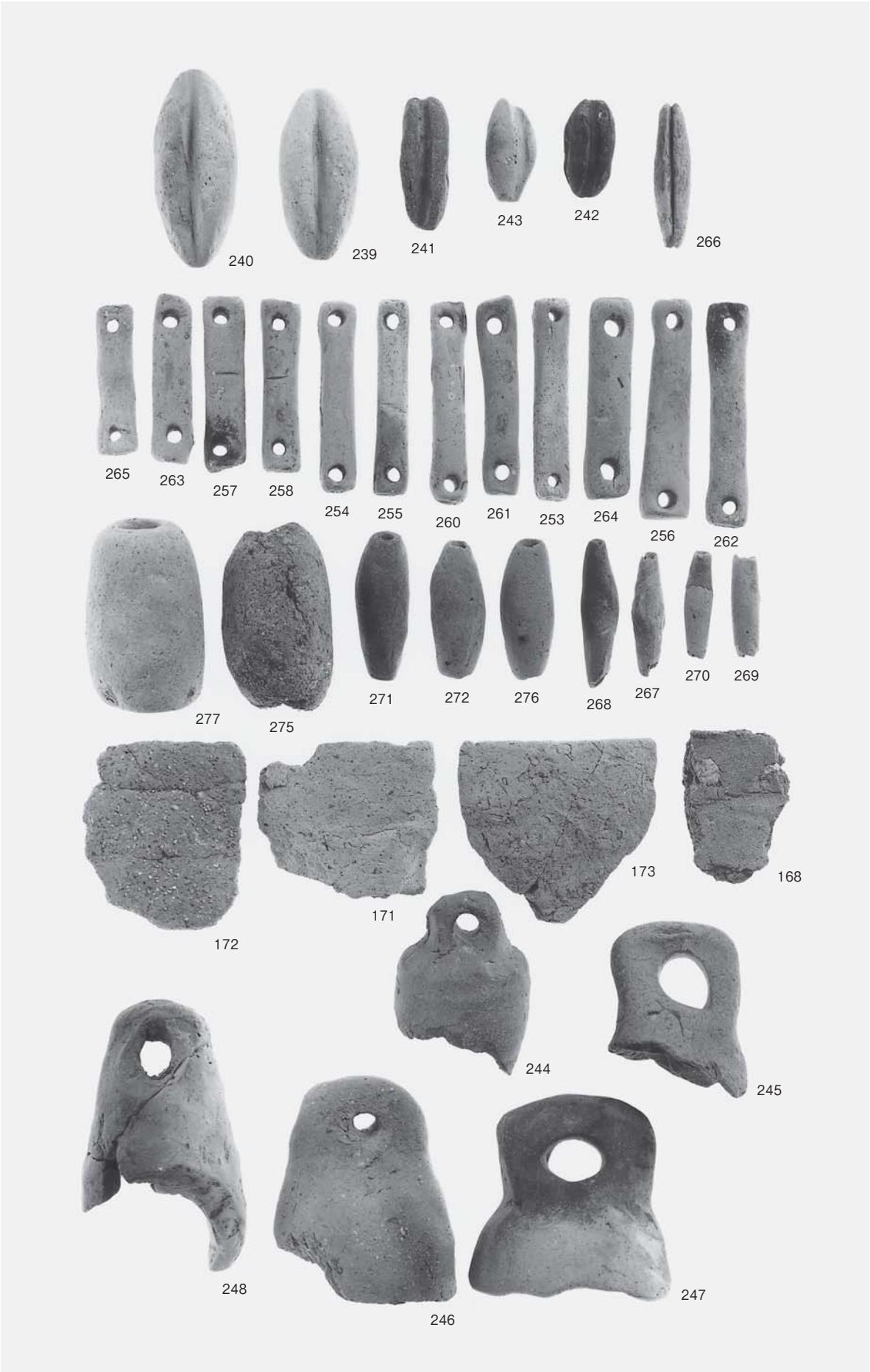
295
294
296

B80-B区出土土器・土馬・砥石・金属製品

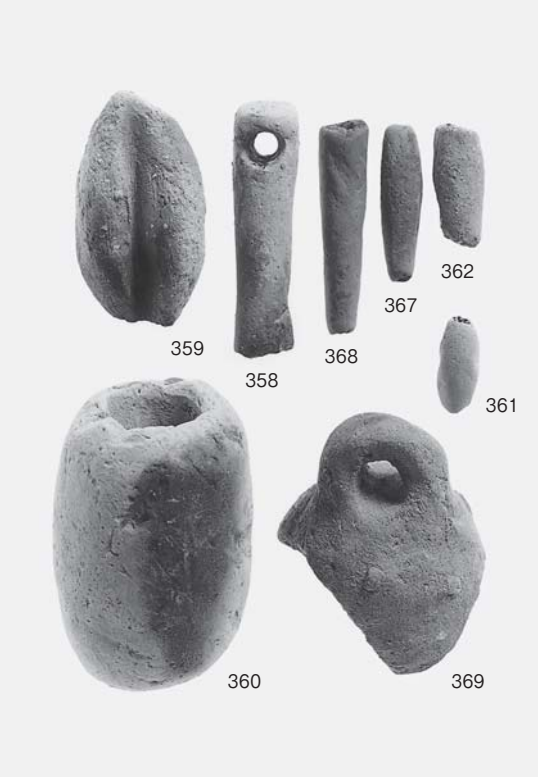




B80-B区出土土器・陶磁器・陶硯

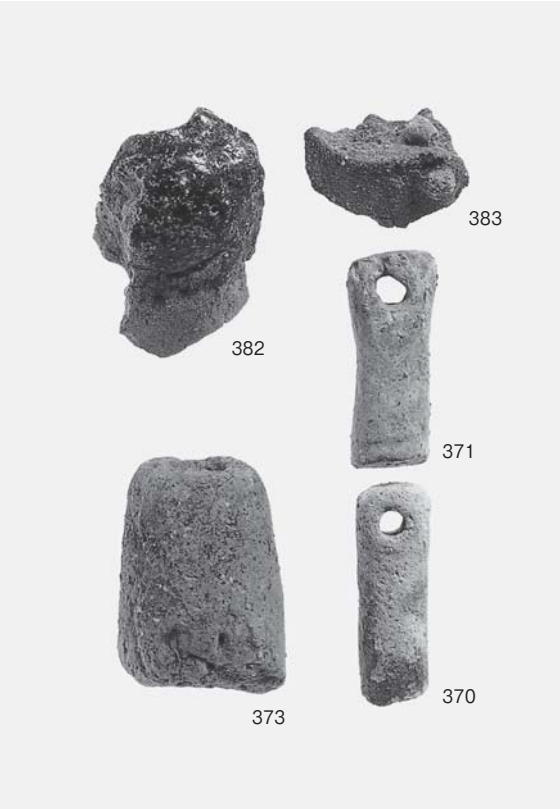


B80-B区出土土錘・蛸壺・製塩土器



B81-A区出土土錘

B81-A区出土土器



B81-B区出土土錘・鞴羽口

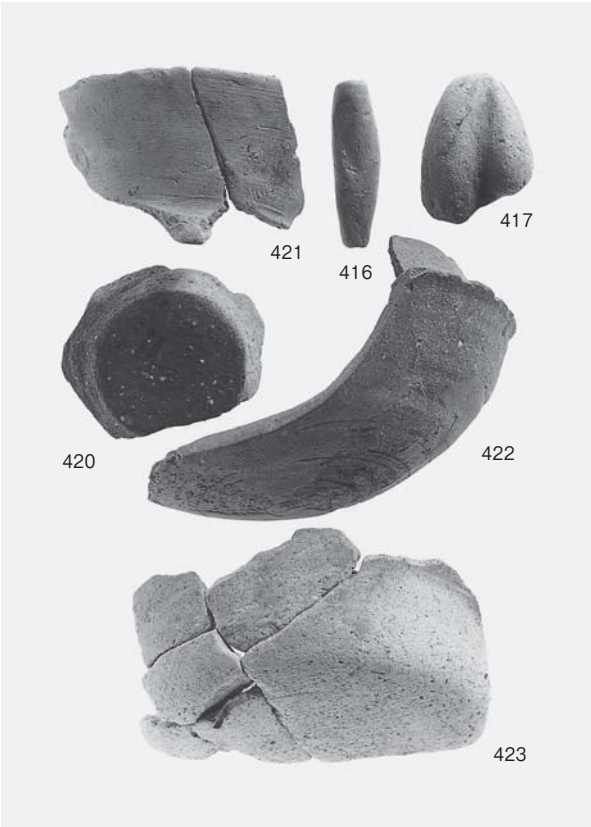
B81-B区出土土器

B81-A区・B81-B区出土土器・土錘・蛸壺・鞴羽口

B82-A区出土土器

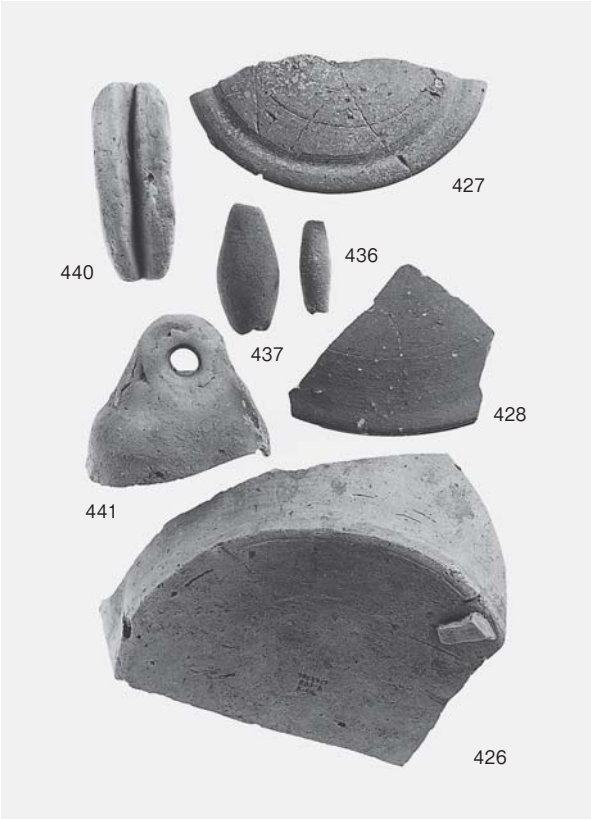
B82-B区出土土器

B82-A区・B82-B区出土土器

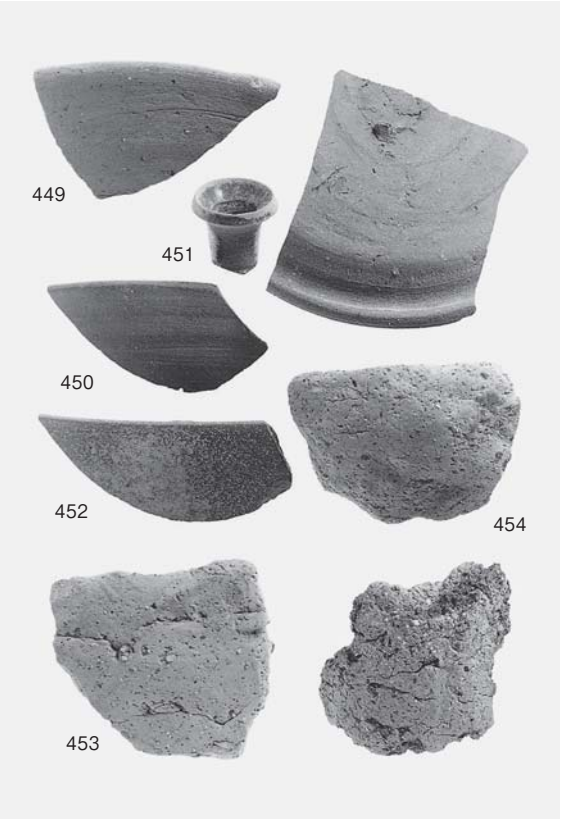


B82-B区出土土器・土錘

B82-B区出土土器



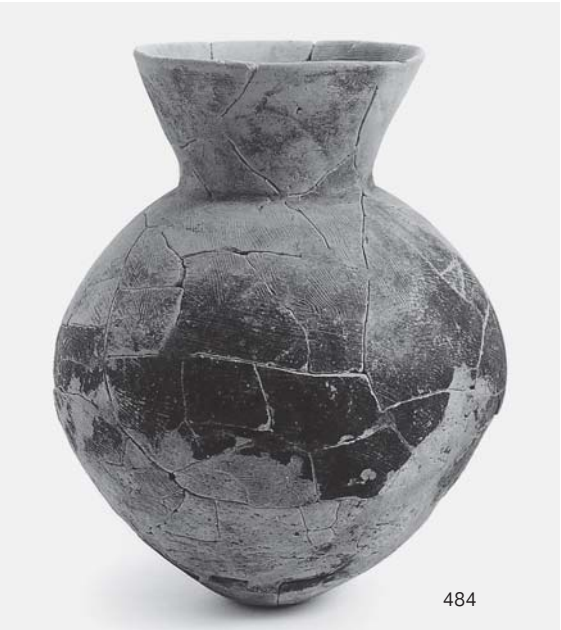
B83-A区出土土器・土錘・蛸壺



B83-B区出土土器・製塩土器・鞴羽口

B82-B区・B83-A区・B83-B区出土土器・土錘・蛸壺・製塩土器・鞴羽口

P4区出土土器



P6区出土土器

P6区出土土器

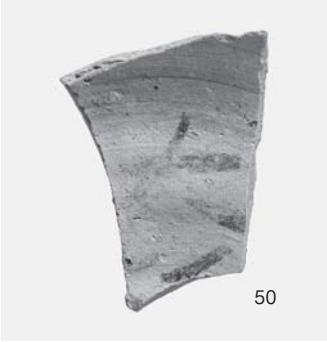
P6区出土土器

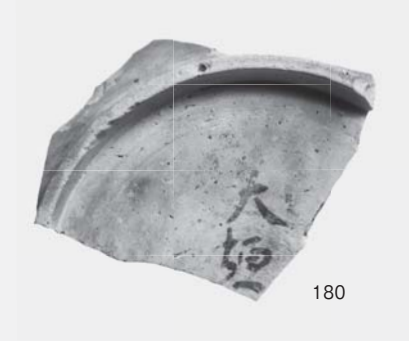
P6区出土土器

P7区出土土器

P4・P6・P7区出土土器

51

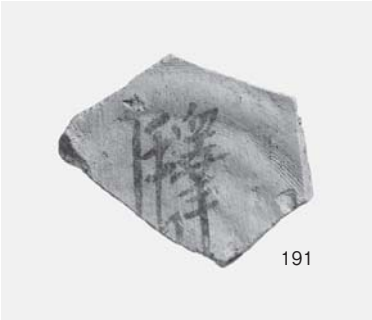

50


180

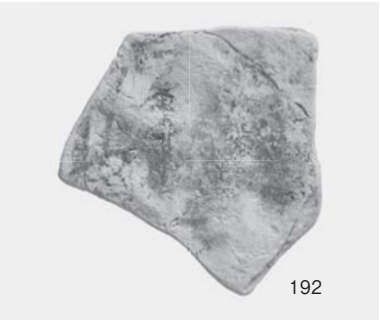
183

182

184


191

194


192

185

197

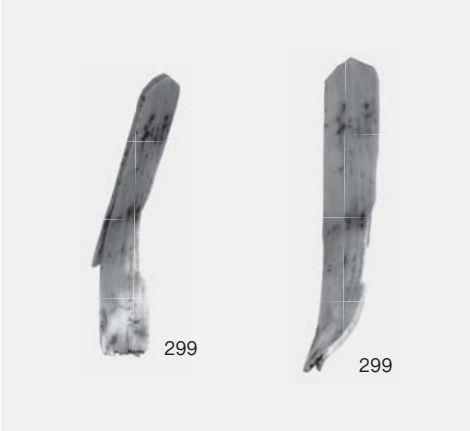
187

205

455

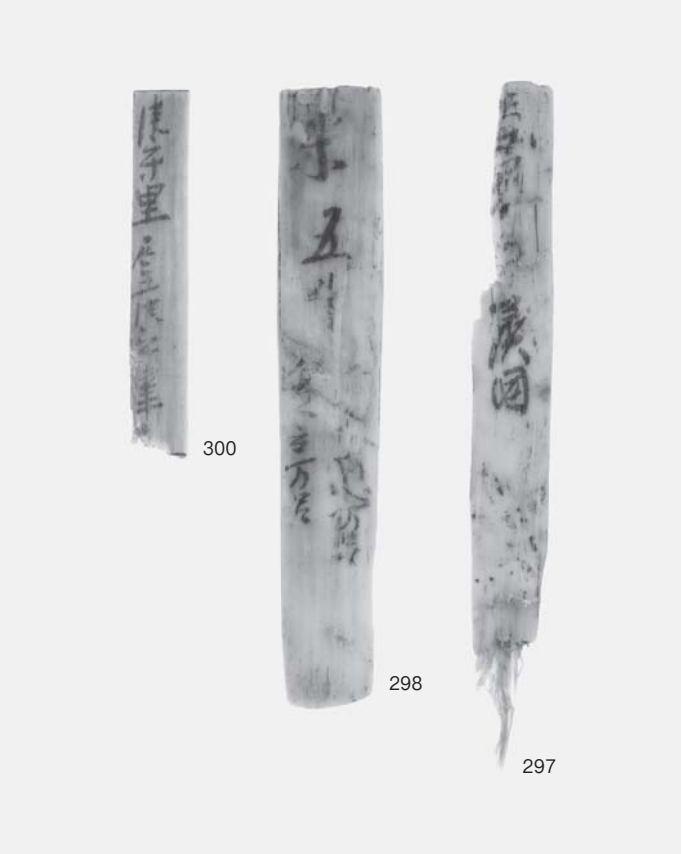
462

第17次調査出土墨書土器（赤外線写真）



斜め方向　　正面

B80-B区出土木簡（2）

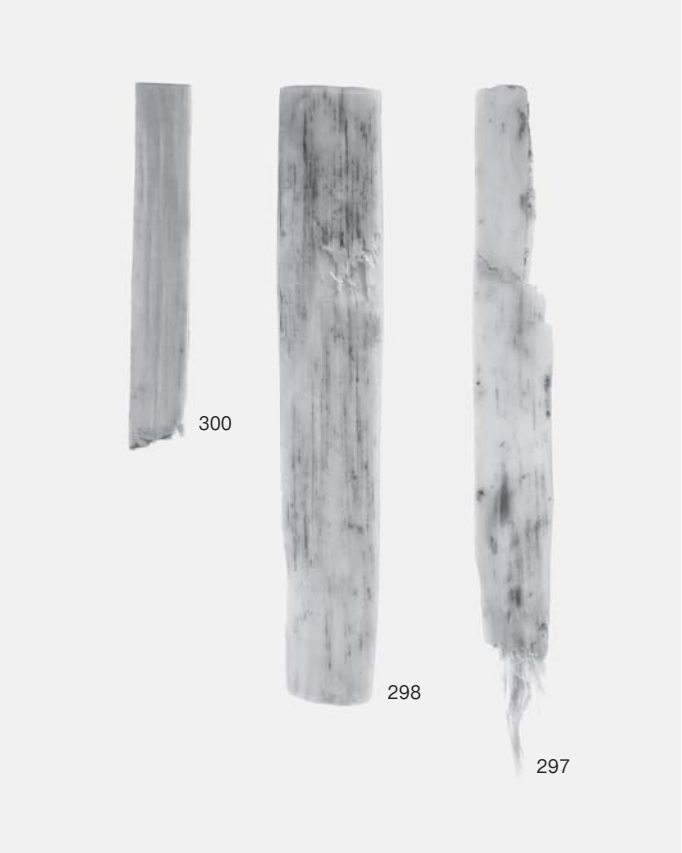


B80-B区出土木簡（1）　表

表

裏

第12次調査　B74区
出土墨書木札



B80-B区出土木簡（1）　裏

第12・17次調査出土木簡・木札（赤外線写真）

第17次調査出土木製品（1）

第17次調査出土木製品（2）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふかえきたまちいせき　だい17じちょうさ　まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	深江北町遺跡　第17次調査　埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	谷　正俊（編）・中村大介・荒田敬介・岡田健吾・中井菜加・（株）パレオ・ラボ
編者機関	神戸市教育委員会
所在地	神戸市中央区加納町６丁目５番１号　　TEL. 078-322-5799
発行年月日	西暦2018年（平成30年）３月30日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
深江北町遺跡	兵庫県神戸市東灘区深江北町１・２丁目地内	28100	10-038	34°43'26"～34"	135°17'40"～58"	20180411～20181014	943（延べ2333）	鉄道高架化工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落遺跡官衙関連遺跡（葦屋駅家関連）	古墳時代前期		布留式併行期の土器	
	飛鳥～平安時代前期	掘立柱建物	奈良時代後半～平安時代初めの須恵器・土師器・木製品・木簡・木製祭祀具 墨書土器、転用硯、円面硯 焼土塊、鉱滓、鞴の羽口	「津守里戸主津守筆□□」 「米五斗（人名併記）」 「□□□[　　]廣國」 「椋人石万呂」などと書かれた木簡 「驛」「大垣」等の墨書土器 多様な木製祭祀具
	鎌倉～江戸時代	犂溝		

要約

深江北町遺跡は神戸市域の東端に位置し、芦屋市と市境を跨いで遺跡が存在する。芦屋市側は津知遺跡と称しているが、本来同一の遺跡と考えられる。この遺跡は大阪湾を巡る沿岸流によって形成された浜堤（砂堆）上に立地し、現在の海岸線からは、約500-600m離れている。また、場所はまだ確定されていないが、この付近を古代山陽道が通過していたことはほぼ間違いなく、これまでの発掘調査成果により「葦屋驛家」が付近に奈良～平安時代前半頃まで存在していたことが出土資料等から窺える。今回の調査は、第12・14次調査の成果をほぼ追認する結果となっている。浜堤からは、第12次調査のものと連続する柱穴・ピット等の遺構が検出された。湿地からは、奈良時代前後の土器とともに祭祀具、生活用具、建築材などの木製品・大量の木端材・木材の削片が出土している。それと共に地名、人名、米の量などを記した木簡が出土しており、これまでの調査成果と併せて、地方官衙の性格を帯びた遺跡であることが明らかになりつつある。

深江北町遺跡
第17次調査
埋蔵文化財発掘調査報告書
2018. 3. 30
発　行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL　078－322－5799
印　刷　岡村印刷工業株式会社
奈良県高市郡高取町車木215
TEL　0745－62－2701

神戸市広報印刷物登録　平成29年度第645号（広報印刷物規格　Ａ－６類）